
萌えない神楽学校

独楽犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌えない神楽学校

【Nコード】

N0070F

【作者名】

独楽犬

【あらすじ】

「世紀末の帝國」の若き海軍士官、神楽美香と「日韓大戦」の影が薄い一般人、深海真が独楽犬執筆の各作品の世界観や設定について徹底解説。設定厨が趣味に走っているだけとは言わないで…不遇な陸軍、陸上自衛隊の地位向上を訴える！“陸軍地位向上委員会”。さらに「世紀末の帝國」の陸軍編制を紹介しつつ、陸軍部隊の編制を考える“神楽先生と編制を学ぼう”はじめました。

陸軍師団史 その1

神楽美香「かぐら みかというわけではじまり、はじまり！」

深海真「ふかみ まことなにが？」

神楽「いやあねえ。我らが作者、独楽犬は2008年9月初めの時点で、日韓大戦、世紀末の帝國、鷺は舞い降りた、の3作品を連載してるのよ」

深海「只でさえ遅筆なのに、無謀だな」

神楽「ついでに「小説家になろう」外部に2作品」

深海「マジで？」

神楽「マジ。しかも片方は一年ほど放置しておりました」

深海「ダメだな」

神楽「とにかく、そういった諸作品の設定などを解説していこうというのが、この「神楽学校」のテーマなのよ」

深海「なるほど。で第1回のテーマは？」

―世紀末の帝國 帝國陸軍師団編制史

深海「またマニアックなところを。こういう場合、まず兵器関係からいくものでは？「帝國」では空母とか原潜とか、「日韓大戦」では新戦車や新護衛艦も登場しているし…」

神楽「というわけで早速始めましょう。途中までは忠実に沿っているので、資料代わりにも」

深海「無視かよ…」

1. 創世記の日本陸軍 鎮台制から師団制へ

神楽「陸軍のはじまりは1871年（明治4年）に天皇陛下や政府を守るために薩摩、長州、土佐の各藩から献上された兵士から御親兵ごしんを組織したのが始まりです。この御親兵は各鎮台創設に伴って翌

年には任務を宮城警護に縮小して近衛このえになり、1891年（明治24年）には野戦部隊たる近衛師団になったわけ」

深海「なるほど」

神楽「そして同じく1871年4月に東山鎮台ちんだい（石巻）と西海鎮台（小倉）が設置され、日本陸軍師団の歴史が始まるの。8月には廃藩置県により全国が政府直轄になったのに合わせて、東山・西海の両鎮台は廃止されて、代わりに東北鎮台（石巻）、東京鎮台、大阪鎮台、鎮西鎮台ちんぜい（熊本）の4鎮台が新たに設置されたの」

深海「鎮西とは九州のことだ」

神楽「フォローありがとう。さらに1973年（明治6年）には新たに名古屋鎮台と広島鎮台が増設された。これに加え北海道を除く日本全土を6軍管区14師管区に分けられ、各軍管区をそれぞれ1個鎮台が配置され、各師管区には営所が設けられ、連隊が編制された。同年には徴兵制が始まり、かくして日本の近代軍制が始まったの。ちなみに北海道は徴兵制を施行するにはまだ人口が少なすぎたから、鎮台を置く代わりに警備と開拓団を兼ねる部隊を送り込んだの。それが有名な屯田兵とんでんへい」

東京鎮台 歩兵第1連隊（東京）、歩兵第2連隊（佐倉）、歩兵第3連隊（新潟）

仙台鎮台 歩兵第4連隊（仙台）、歩兵第5連隊（青森）

名古屋鎮台 歩兵第6連隊（名古屋）、歩兵第7連隊（金沢）

大阪鎮台 歩兵第8連隊（大阪）、歩兵第9連隊（大津）、歩

兵第10連隊（姫路）

広島鎮台 歩兵第11連隊（広島）、歩兵第12連隊（丸亀）

熊本鎮台 歩兵第13連隊（熊本）、歩兵第14連隊（小倉）

深海「おお。上から順番に並んで、清々しいなあ」

神楽「そうそう。これから連隊や師団がどんどん増えて、ぐちゃぐちゃになってくのよ。自衛隊師団の現状とか旧軍師団の終戦時にお

ける師団編制とか見てると、なんで数字がバラバラなのか？と思うところもあるけど、こうやってはじめてから連隊単位で追っていくと、増強・変遷の様子が分かっておもしろいのよね。まさに編制オタ冥利に尽きるという話」

深海「あんたは砲兵オタクじゃなかったのかい？だいたい「小説化になろう」を訪れる一般的な読者についていけないだろうに。需要あるのか？これ」

神楽「んじゃ続けるよ」

深海「また無視…」

神楽「その後、連隊はさらに増設され、1888年（明治21年）までに各鎮台に4個連隊、合計24個連隊までに拡大されたわ。そして同年、鎮台は師団に改編された。1891年には近衛師団も創設されたので、結果的に陸軍はこうなった。なお連隊はめんどくさいの数字だけで済みます」

深海「手抜き！」

近衛師団（東京） 近衛歩兵第1旅団（近衛1、近衛2）、近

衛歩兵第2旅団（近衛3、近衛4）

第一師団（東京） 歩兵第1旅団（1（東京）、15（高崎））、歩兵第2旅団（2（佐倉）、3（東京））

第二師団（仙台） 歩兵第3旅団（4（仙台）、16（新発田））、歩兵第4旅団（5（青森）、17（仙台））

第三師団（名古屋） 歩兵第5旅団（6（名古屋）、18（豊橋））、歩兵第6旅団（7（金沢）、19（名古屋））

第四師団（大阪） 歩兵第7旅団（8（大阪）、9（大津））、歩兵第8旅団（10（姫路）、20（大阪））

第五師団（広島） 歩兵第9旅団（11（広島）、21（広島））、歩兵第10旅団（12（丸亀）、22（松山））

第六師団（熊本） 歩兵第11旅団（13（熊本）、23（熊本））、歩兵第12旅団（14（小倉）、24（福岡））

神楽「この体制で日本は日清戦争へと突入するわけ。とりあえず、今日はこんな感じで。また来週！」
深海「え！？週刊連載？無理だろ！」

陸軍師団史 その1（後書き）

質問受け付け中

陸軍師団編制史 その2

神楽「さて、続き。続き」

深海「結局、週一は無理ですね」

神楽「無理だな」

深海「…」

神楽「というわけで、今回は日清戦争までいったね」

2. 日露戦争と軍備拡張

神楽「日清戦争に勝利した日本であったけど、下関条約締結の6日後にロシア、フランス、ドイツが遼東半島の返還を日本に要求する三国干渉が起こるわけ」

深海「そこらへんは中学の歴史の授業で習うことだね」

神楽「当時の日本の軍事力は欧州列強に対してはまだまだ劣勢だから、要求を受け入れたんわけだ。そして日本は臥薪嘗胆を誓い、軍備拡張に勤しむの。最初に北海道の屯田兵が師団に改編されたの」
深海「屯田兵は日清戦争に臨時第七師団として派遣されたけど、あくまで戦時特設部隊だからね」

神楽「1896年、旭川に第七師団が編制。さらに2年後の1998年に対露軍備としてさらに5個師団が増設された。その中には八甲田山の遭難事件で知られる第八師団も含まれている」

深海「ふむふむ」

神楽「というわけで、日露戦争勃発時にはこんな感じ」

近衛師団（東京）

近衛歩兵第1旅団（近衛1、近衛2）、

近衛歩兵第2旅団（近衛3、近衛4）

第一師団（東京）

歩兵第1旅団（1（東京）、15（高崎）

）、歩兵第2旅団（2（佐倉）、3（東京））

第二師団（仙台）

歩兵第3旅団（4（仙台）、29（仙台）

）、歩兵第15旅団（16（新発田）、30（新津））
第三師団（名古屋） 歩兵第5旅団（6（名古屋）、33（名古屋））、歩兵第17旅団（18（豊橋）、34（静岡））
第四師団（大阪） 歩兵第7旅団（8（大阪）、37（大阪））、歩兵第19旅団（9（大津）、38（京都））
第五師団（広島） 歩兵第9旅団（11（広島）、41（広島））、歩兵第21旅団（21（濱田）、22（山口））
第六師団（熊本） 歩兵第11旅団（13（熊本）、45（鹿児島））、歩兵第23旅団（23（熊本）、46（大村））
第七師団（旭川） 歩兵第13旅団（25（札幌）、26（旭川））、歩兵第14旅団（27（旭川）、28（旭川））
第八師団（弘前） 歩兵第4旅団（5（弘前）、31（弘前））、歩兵第16旅団（17（秋田）、32（秋田））
第九師団（金沢） 歩兵第6旅団（7（金沢）、35（金沢））、歩兵第18旅団（19（敦賀）、36（敦賀））
第十師団（福知山） 歩兵第8旅団（10（姫路）、40（姫路））、歩兵第20旅団（20（福知山）、39（福知山））
第十一師団（丸亀） 歩兵第10旅団（22（松山）、44（松山））、歩兵第22旅団（12（丸亀）、43（丸亀））
第十二師団（小倉） 歩兵第12旅団（14（小倉）、47（小倉））、歩兵第24旅団（24（久留米）、48（久留米））

深海「ふむふむ。これで日露戦争に突入したわけだ」
神楽「だけど、やっぱり大国ロシア相手だから苦戦してね、本土を守る師団が1つも無くなるという有様になってしまった。そこで新たに4個師団を増設することになった」

第一三師団 歩兵第25、26旅団 歩兵第49（東京）、50（仙台）、51（名古屋）、52（弘前）連隊
第一四師団 歩兵第27、28旅団 歩兵第53（大阪）、54

(善通寺)、55(広島)、56(熊本)連隊
第一五師団 歩兵第29、30旅団 歩兵第57(弘前)、58
(東京)、59(東京)、60(金沢)連隊
第一六師団 歩兵第31、32旅団 歩兵第61(大阪)、62
(善通寺)、63(広島)、64(熊本)連隊

深海「見事に編制地がバラバラだね」

神楽「まあ、戦時急造師団だからね」

深海「ところで、どうして歩兵と連隊が別々になっているんだい？」
神楽「筆者は主にネット上で資料を探しているらしいのだけど、当
時にどの連隊がどの旅団に属していたかを記述した資料が見つから
ないらしい」

深海「…」

神楽「じゃあ、今日はこれまで！」

登場兵器紹介 艦艇編 1

神楽「というわけで第3回なのだ」

深海「また編制史かい？」

神楽「いや。兵器解説だ」

深海「なぜに突然の方針転換！他の戦記作家がやってるから便乗かい？」

神楽「登場する兵器の解説は、神楽学校の開始時からの規定路線だよ。それに編制史の方が行き詰まってね。いろいろとややこしいというのもあるけど、資料が偏ってて、ある特定のWebサイトの丸写しになっている感じがあったもんでね。いったん停止ということになりました」

深海「なるほど」

神楽「では早速」

―「世紀末の帝国」登場軍艦解説

<大和>型戦艦

全長…263m

排水量…6万6000t（基準）／7万3000t（満載）

最高速度…32ノット（公称） 実際には老朽化のためこれより低い兵装

九四式45口径46センチ主砲×9（3連装砲塔×3）

三年式60口径15.5センチ副砲×6（3連装砲塔×2）

九八式60口径8センチ高角砲×12（連装砲塔×6）

20ミリCIWSファランクス×4

短距離対空誘導弾八連装発射機×2

RIM-7シースパロー×32（即応16発、予備16発）

装甲式四連装誘導弾発射機×10

<百合>対艦誘導弾

＜沈丁花＞対地誘導弾

ハーブーン対艦誘導弾 合計40発

搭載航空機

無人偵察機RQ-2パイオニア×4

帝国海軍が保有する戦艦で、海軍の戦闘艦艇の中では最大の排水量を誇る。

大和型戦艦はこれまで3度の大規模な近代化改修を受けている。1度目は第二次大戦中に行なわれた防空能力強化改修で、2基の副砲が外され対空砲及び対空機銃が増設された。2度目は60年代前半に行なわれ、機関換装などによって速力が32ノットまで向上した他に高角砲が八九式12.7センチ砲から九八式10センチ砲に換わり防空能力が向上した。3度目は80年代後半の中曽根軍拡の一環として行なわれ、対空砲及び対空機銃の大幅な削減とミサイル戦艦化、コンピューター制御式火器管制システムの導入などの近代化が施された。ただし老朽化が激しかった武蔵は3度目の大規模改修の予算が下りず退役した。

帝国海軍は2隻の大和型戦艦を洋上火力の中核として2000年代まで維持してきたが、老朽化が進み退役も近い。しかし後継艦計画は現在のところ存在しない。

艦名	就役	
大和	／1941年	／第一艦隊第一戦隊
武蔵	／1942年	／1982年退役、予備役
信濃	／1948年	／第一艦隊第一戦隊

深海「第1段は大和ですか。まあ妥当といえば妥当かな」

神楽「ちなみに帝國世界では、アメリカ、日本、ソ連がそれぞれ4隻、2隻、4隻、合計10隻の戦艦を維持している」

深海「砲填兵器の方は第二次世界大戦頃からほとんど変わってないんだね。高角砲は戦後に換装されたものだけど、砲そのものは戦時

中開発だし」

神楽「砲架や射撃管制装置の方はいろいろと弄られてるけど、砲そのものは変わってないの」

深海「しかし、副砲を残しているのか。両用砲を装備したりしないのか？」

神楽「使い勝手がいいらしい。ロケットアシスト式の長射程弾を使えば射程は主砲に匹敵するし、対地及び対空用途の各種誘導砲弾も使えるしね」

深海「主砲じゃ使えないの？」

神楽「主砲だと弾の質量がデカすぎるから、その手の制御が可能なのか疑問と作者は考えている。特に根拠はないけど」

深海「ないんかい！」

神楽「ちなみに誘導砲弾の誘導方式は対空がセミ・アクティブレーダー誘導。対地は主にレーザー誘導で、現在はGPS誘導方式を研究中。だけどGPS誘導弾は大和退役に間に合いそうに無いね」

深海「それでも研究されるってことは、他に15.5センチ砲装備の艦が存在するのかい？」

神楽「本編にもそのうち登場するだろうし、直にここでも紹介するでしょうね」

深海「艦載機は無人機か」

神楽「パイオニアは実在の無人偵察機よ。プレデターやグローバルホークに比べると陰が薄いけど、実績もちゃんとあって、湾岸戦争では戦艦ウィスコンシンから発進して着弾観測を行なっている」

深海「実際の韓国軍も装備しているから、そのうち日韓大戦にも登場するかもね」

＜翔雀＞型原子力正規空母

全長…299m

満載排水量…5万1000t

最高速度…31ノット

乗員…2000人

兵装

20ミリCIWSファランクス×4

RAM-CIWS二連装発射機×2（天雀のみ）

RIM-116×42

短距離対空誘導弾八連装発射機×2

RIM-7シースパロー×32（即応16発、予備16発）

スチームカタパルト
蒸気射出機×2

搭載航空機

A14M旋風×20（最大36機）

V1G（E-2C）ホークアイ×2

T6S-Q（SH-60）対潜ヘリ×4

帝国海軍が保有した初の原子力航空母艦である。機関として戦略原子力潜水艦用に開発された大型原子炉を2基と蒸気タービン2基を装備し、31ノットの速力と十数年間の燃料無補給航行を実現した。

艦載機としては通常は上記のように各種28機の航空機を搭載し、必要に応じて増強を受ける。増強部隊は任務に応じて様々であり、最大50強の航空機を運用可能である。また<翔雀>型よりV1Gホークアイ早期警戒機が運用可能になった。

艦の大きさや搭載機数、さらにカタパルト2基にエレベーター2基という数など、アメリカ海軍の大型空母の大体半分程度の艦で、フランス海軍の<シャルル・ド・ゴール>型空母より一回り大きい。また1番艦と2番艦との間に12年のブランクがあるため、電探^{レーダー}などの装備に差異がある。

艦名

就役

翔雀

／1984年

／第一航空艦隊

天雀

／1996年

／第一航空艦隊

深海「原子力空母か。しかし、なぜに“雀”^{すずめ}なんだ？」

神楽「艦名のことかね？確かに軍艦に相応しいとは言えないね」

深海「作者のことだ。どうせ碌でもない理由があるのだろう」

神楽「実はだね。作者は“孔雀”^{くじゃく}の“雀”という意味で命名したんだけど、後から“雀”単体だと“すずめ”になることに気づいたそうな」

深海「ダメだね。ダメついでに第3部その6だと、次のようになっている」

＜以下、「世紀末の帝國」本編より引用＞

そしてその隣に見える、更なる大型艦が海軍初の原子力航空母艦＜翔雀＞である。基準排水量では僅かに大和型戦艦を上回るこの大型空母は次世代の海軍の主力として建造され、最大で50機ほどの各種航空機を運用することが可能である。

＜引用終わり＞

深海「これだと、＜翔雀＞型空母の方が＜大和＞型戦艦よりデカイように読める。しかし、実際のデータを見ると＜大和＞の方がデカイじゃないか！」

神楽「ああ、それは作者の勘違い」

深海「え？」

神楽「だから、作者の勘違い」

深海「…」

神楽「詳しい事は次回に譲るとして、今日はここまで。あと本編は修正しておくからね」

誤解氷解（前書き）

独楽犬、やっちゃまったなあ！ってだけの話

誤解氷解

深海「というか、なんだい？この題名は？」

神楽「前回のことを覚えてるかい？」

深海「と、言うと」

＜深海「これだと、＜翔雀＞型空母の方が＜大和＞型戦艦よりデカイように読める。

＜　しかし、実際のデータを見ると＜大和＞の方がデカイじゃないか！」

＜神楽「ああ、それは作者の勘違い」

＜深海「え？」

＜神楽「だから、作者の勘違い」

＜深海「…」

＜神楽「詳しい事は次回に譲るとして、今日はここまで。あと本編は修正しておくからね」

1. 勘違いその1

神楽「というわけで詳しく語ろうじゃないか！」

深海「…」

深海「いいだろう。で、なにを勘違いしたんだい？」

神楽「では、早速、作者が登場！」

独楽犬「はい。作者です」

深海「で、なにを勘違いしたんだい？」

独楽犬「戦艦＜大和＞の排水量を4万6000とだと勘違いしてました」

深海・神楽「……」

深海「やっちゃったな」

神楽「やっちゃったね」

独楽犬「はい、やってしまいました」

深海「小沢一郎の“普及的速やかに”（注1）並にヤバイね」

神楽「鳩山由紀夫の“麻生首相が返り血を浴びた”（注2）並にヤバイよ」

深海「架空戦記書きが大和を間違っちゃ」

神楽「致命的ですね」

独楽犬「うう。けどウリは現代戦専門で、陸軍派ニダ。仕方が無いニダ。それに長門級から一気2万t以上も巨大化するなんておかしいニダ。日本海軍は謝罪シル！賠償シル！」

神楽「韓国面におちたか」

深海「なるほど。4万t級の戦艦だと思っていたらなら、5万t級空母の方がデカイ、と書いたのも頷ける。ところで、勘違いその1ってなんだい？」

神楽「決まっているでしょう？勘違いその2があるの」

2. 勘違いその2

神楽「さて次の勘違いはこれよ」

独楽犬「はい。ポーランドです。今はだいたい修正しましたが、それまでソ連構成国としてポーランド社会主義共和国があることになっていました」

深海「ボイツェフ・トゥルクは元々ポーランド第1書記だったね。

今はウクライナ第1書記になっているけど」

神楽「どういふことなのかしら？」

独楽犬「ドイツ、ソ連のポーランド侵攻後にソ連占領地域がウクライナ、ベラルーシに併合されたことを知りませんでした」

深海「やっちゃったな」

神楽「やっちゃったね」

独楽犬「はい。やってしまいました」

深海「平田健二の“海賊は漫画で見たことあるがイメージがわからない。日本の船舶が襲撃を受けて被害を受けた事があったのか”（注3）並にヤバイね」

神楽「鳩山由紀夫のインド首相に“仏教の基本を平和活動により活かしてほしいとも求め”た（注4）並にやばいよ」

独楽犬「なんか、独ソのポーランドの侵攻後に分割されたけど独ソ戦を経て戦後に元通りに復活、みたいなイメージでした」

神楽「ソ連が一度奪った領土を返すわけない（注5）でしょうに」

深海「オーデル・ナイセ線（注6）とかもよく分かってなかったわけだな」

独楽犬「お恥ずかしい話ですが、そういうことになります。しかし調べてみると、ソ連が奪った領土は元々はロシアからポーランドが奪った領土なんですよね」

神楽「まあポーランドⅡソビエト戦争（注7）の戦利品だもんね。でもそれ言い出したらポーランド分割によってロシアが奪った領土……」

深海「はい。それまで」

独楽犬「改めて調べてみるとポーランド領土の変遷って、いろいろと複雑なんですね」

神楽「まあヨーロッパだし」

深海「ヨーロッパだからしかたがない」

深海「というか、こんなことのために1部を費やすわけ？」

神楽「大丈夫。下におまけを用意しておいたから」

<Z91>型防空駆逐艦

全長…140m

排水量…5500t（基準）／7000t（満載）

最高速力…30kt

機関…ガスタービン×2 ディーゼル×2

武装

127ミリ単装速射砲×1

GSN-7＜スチレットヒール＞／HS401＜レーゲン
＞艦対艦ミサイル4連装発射機×2

8連装VLS×4（9M317＜イーゲル＞対空ミサイル32
発）

533ミリ連装短魚雷発射管×2

RBU-1000対潜ロケット6連装発射機×2

複合CIWS＜シュピルヴェルフェル＞（37ミリ機関砲・4
連GSA-22＜グース＞／＜プッペ＞対空ミサイル）×2

ヘリコプター×1

東独海軍が建造した最新鋭の防空艦で、ソ連の開発した＜ヨーシ
ユ＞対空ミサイルシステムを導入している。＜イーゲル＞は＜ヨー
シユ＞のロシア語読みである。射撃管制には東ドイツ国産の多目的
フェイズド・アレイ・レーダーが使われていて、同時に多目標に対
して攻撃を行なう事が可能である。西側では東独版イージスとも呼
ばれる。

今後、東独海軍の中核として数隻建造されられると思われる。

深海「東独版イージスですか」

神楽「第2部その1に登場した艦ね。本編では大活躍する予定よ」

深海「GSSとかGSAとかはやっぱりNATOコード？」

神楽「そう。DOD識別番号とNATOコードネームだね」

＜シェパード＞級フリゲート

全長…151m

排水量…3500t（基準）／5400t（満載）

最高速力…30kt／h

機関…ガスタービン×2 一軸推進

武装

OTOメララ76ミリ単装速射砲×1

＜ハーブーン＞対艦ミサイル4連装発射機×2

Mk41VLS32セル（＜シースパロー＞対空ミサイル・＜シーランス＞対潜ミサイル）

20ミリCIWS Mk15＜フアランクス＞×2

3連装短魚雷発射管×2

ヘリコプター×2

＜シェパード＞級はアメリカ海軍がノックス級フリゲートの後継として建造した対潜フリゲートである。排水量は5000tに達し、他国の駆逐艦並の船体を持つ。またステルス性を考慮した設計がなされ、マストの形状がそれまでのラティスマストから平面構成ステルス型に変わっている。

アメリカのフリゲートとしては初めてVLSを装備し、シースパロー短距離対空ミサイルおよびシーランス対潜ミサイルを合計で32発装備する。また1999年から発展型シースパローESSMの配備が始まり、同ミサイルはVLS1セルに4発を装填できる。

遠距離に潜む潜水艦を掃討するためにシーホーク対潜ヘリコプターを2機搭載しており、中距離用のシーランスミサイル、短距離用の短魚雷とあわせて三段構えの濃密な対潜能力を有す他、最大射程が50km程度になるESSMの搭載により防空能力についてもミサイルフリゲートであるO・H・ペリー級に比べても遜色ないものになっている。

＜シェパード＞級の艦名はある海軍士官曰く“海軍軍人が戦争しか能のないマヌケではないことを証明した者”から採られていて、

14番艦までは全て宇宙飛行士に由来している。特に1番艦から4番艦までがマーキュリー計画のパイロットから採られてる為に<マーキュリー>級とも呼ばれる。

艦番号	艦名	就役年
FF1098	シェパード	／1996
FF1099	ジョン・グレン	／1997
FF1100	カーペンター	／1997
FF1101	シラー	／1997
FF1102	コンラッド	／1998
FF1103	アームストロング	／1998
FF1104	ラヴェル	／1998
FF1105	リチャード・ゴードン	／1998
FF1106	サーナン	／1999
FF1107	アラン・ビーン	／1999
FF1108	ヘイズ	／1999
FF1109	エドガー・ミッチェル	／1999
FF1110	マッティングリー	／2000
FF1111	エヴァンス	／2000
FF1112	クロスフィールド	／2000年10
月就役予定		
FF1113	リチャード・E・バード	／2000年12
月就役予定		

深海「このデカさでフリゲートですか。自衛隊なら普通にDDクラスじゃん」

神楽「駆逐艦と言えば満載8000トクラスを言うんですよ。米軍的には。ちゃんと一軸推進だし」

注1―普及的速やかに―

2008年11月28日の党首討論時に民主党の小沢一郎民主党代表が発言したもの。可及的速やか、の間違いと思われる。麻生首相の言い間違いをメディアが騒いでいた時期であるが、これを報じたメディアは知らない。

ただし、ちゃんと「可及的速やかに」と言っている、という意見もある。

注2―返り血を浴びた―

2008年11月28日の党首討論を評した民主党の鳩山由紀夫議員の言葉。詳しくは以下の通り。

「自民党から首相に対して『自分で仕掛けて返り血を浴びた』と、散々な評価が聞こえてきている。相手が見ても首相が負けたというくらい、勝負はあった」

返り血を浴びるのは勝った方である。常識的に考えて。麻生首相の言い間違いをメディアが騒いでいた時期であるが、これを報じたメディアは知らない。

注3―海賊は漫画で見たことあるがイメージがわからない。日本の船舶が襲撃を受けて被害を受けた事があったのか―

民主党参院幹事長である平田健二議員が2009年1月20日に記者会見で発言したもの。

ソマリア周辺では海賊による襲撃が相次いでおり日本船舶にも被害が生じてる。各国も軍艦を派遣し、その対策を進めている中、民主党は自衛隊派遣の賛否に関して曖昧な態度を採っていて、民主党ホームページの談話では「海賊対策は一義的に海上保安庁の任務である。今般、海上保安庁は対応困難として、海上警備行動に基づき自衛隊が対応するとされたが、なぜ海上保安庁では対応できないのか、具体的な説明を求めたい。」「国民の審判を経た新しい政権の下、国連海洋法条約等に基づく国内法整備を行うのが筋である。」

としている。そもそも、ソマリアへの海上自衛隊派遣を主張したのは民主党の長島昭久議員なのだが：

注4―仏教の基本を平和活動により活かしてほしいとも求めた―
2008年10月23日に行なわれた鳩山由紀夫議員のインドのシン首相との会談について民主党ホームページに掲載されたもの。シン首相はシク教徒である。ちなみに後に訂正され“ 仏教の基本を” が削除されている。

ちなみに本当はシン首相は小沢一郎代表と会談をする予定であったが、小沢代表が病気を理由に欠席した。翌日に全国行脚の一環として青森入りしたのだが。

注5―ソ連が一度奪った領土を返すわけではない―

実は少し返ってきている。ヴァウイストク周辺が戦後はポーランド領に戻っている。

注6―オーデル・ナイセ線―

現在のドイツ・ポーランド国境の国境線。オーデル川とその支流ナイセ川に沿って引かれている。ソ連がポーランド侵攻によって得た領土の引き換えとしてオーデル・ナイセ線以东のドイツ領土をポーランドに編入した。1970年に西ドイツがポーランドと国交を結んだ際に西ドイツがオーデル・ナイセ線を承認したため確定した。

注7―ポーランド―ソビエト戦争―

1919年から1921年にかけてポーランドとソビエトが戦った戦争。戦局はポーランド優勢に進み、1921年3月18日にリガ条約が結ばれ、ポーランドはソビエトから多くの領土を獲得した。

反論文

私が“小説家になろう”に投稿しております作品“日韓大戦”について、あああ氏から以下のような意見が寄せられました。意見そのものは、“日韓大戦”の小説評価／感想欄を確認していただくとして、要点をまとめますとこのようになると考えます。

・奇襲効果があるとはいえ海軍力が劣勢な韓国海軍が上陸作戦を成功させるのはおかしい

・上陸を許したとしても韓国海軍にはまともな揚陸艦が1隻しかないので大兵力の上陸は難しい

・漁船等を使ったゲリラ戦なら韓国海軍でも可能であろう

・上陸をしたとしても補給切れで終わるであろう

・最終的には国力の差により日本が勝利するであろう

まず申し上げておきたいのは、私自身、私の書く小説が現実に即したものであるとは考えておりません。できる限りリアリティーのある作品にしようと心がけておりますが、知識・経験や調査、筆力の不足から実際と異なった描写をしている場合も多々あるでしょう。また物語の流れからあえて嘘をついている場合もございます。しかしながら、あああ氏が否定する周辺国の正規軍による日本への着上陸の可能性については私は十分にありえることだと考えておりますし、読者の皆様方にも考えていただきたい事柄でありますので、この場でこのように反論をさせていただきます。

・奇襲効果があるとはいえ海軍力が劣勢な韓国海軍が上陸作戦を成功させるのはおかしい

確かに海軍力では韓国、また小説内の高麗連邦と比べても日本が

優勢です。しかし、だからどちらかが必ず勝つ、ということでもありません。どこかの海域にそれぞれの海軍艦艇が全て集まってヨイ・ドンで海戦を始めたら海上自衛隊が確実に勝利するでしょうが、そのような状況で戦争が行なわれることはありません。

まず戦域と開戦時間の決定権は常に攻撃側にあり防御側がないということをご理解ください。防御側は常に受身なのです。攻撃側である高麗海軍は開戦日時と攻撃点を決定すれば、その時、その場所に戦力を集中することができますが、日本側は諜報活動で決定的な情報を入手でもしない限りはそれを特定することは不可能なのです。つまり日本側が敵国の攻撃に備えようとするには24時間、即応待機している必要があるのです。

そして軍隊は常に全部隊が即応状態にあるわけではありません。人間でしたら睡眠・休息が必要です。機械なら整備・点検も必要です。また錬度を維持するには十分な訓練が必要です。ですから海上自衛隊は主力部隊である護衛艦隊を4つに分けてローテーションを組んでいるのです。つまり日本の方が海軍力が上と言っても、奇襲攻撃を仕掛けてきた敵に対して対応可能なのは全兵力の3分の1か4分の1程度に過ぎないのです。つまり全兵力で相手を上回っているからと言っても、戦場で相手を上回る兵力を用意できるとは限らないのです。

おまけに政府レベルで先制攻撃を決断しない限りは、例えば現場指揮官に十分な権限を与えたとしても相手側の第一撃を許してしまう可能性は十分にあるでしょう。そして劇中でも第一撃を行ったのは高麗側でした。現代戦——というより古来からの戦闘の鉄則として——では第一撃を放った方が圧倒的に有利なのです。

さらに言えば制海権という概念は相手が大規模な揚陸船団を用意して行動を起こした場合において意味があるのです。詳しくは後述します。

・上陸を許したとしても韓国海軍にはまともな揚陸艦が1隻しかないので大兵力の上陸は難しい

まず現在の韓国海軍に揚陸艦が1隻しかないというのは事実誤認です。韓国海軍は独島型強襲揚陸艦1隻の他に高峻峯型戦車揚陸艦4隻を保有しています。また小説内の高麗海軍には独島艦の2番艦が配備されておりますので都合6隻となります。劇中で福岡に上陸をした連隊戦闘団規模の部隊であるならば十分に輸送可能です。

また陸上兵力を海を越えて敵国に送り込む場合、その手段を揚陸艦に限定する必要はまったくありません。港湾さえ奪取すれば、一般の貨物船、カーフェリーなどを使い陸軍部隊を上陸させることができます。劇中でも高麗軍は少数のコマンド部隊を用いて北九州港を確保して陸軍部隊主力をカーフェリーや一般の貨物船を使い上陸させました。

・漁船等を使ったゲリラ戦なら韓国海軍でも可能であろう

さて上述したように兵力輸送の手段を揚陸艦など軍用船舶に限定する必要はございません。では漁船ではなくカーフェリーや貨物船でゲリラ戦を試してみればどうでしょうか？劇中の高麗軍はそのパターンです。完全に無線を封鎖して徴用した貨物船やフェリーに陸軍部隊を乗せて独航で日本に送り込んだのです。そして残念なことに日本周辺は国際海域であり常に何十隻、下手をすると百をこえる様々な国籍の船舶が行き交っているのです。それら中立船の中から偽装した敵性の貨物船・フェリーを見つけるのは簡単なことではありません。最終的には1隻1隻を確認するしかありません。

・上陸をしたとしても補給切れで終わるであろう

現地調達をすれば良いのです。確かに日本陸軍は太平洋戦争でそれをしようとして失敗しました。しかし現在の日本は未開のジャン

グルではございません。

劇中でも述べていますが軍隊が必要とする補給品は大きく別ければ弾薬、燃料、食糧となるでしょう。そして流通システムが完備されている現在日本の一定規模の都市ならば後者2つは常に一定量備蓄され末端のガソリンスタンドや食料品店に過不足無く供給できるようになっております。つまり食糧、燃料の現地調達が十分に可能なのです。

そして弾薬は戦闘により消耗するものであり、陸上自衛隊との交戦により補給の必要性が発生するのです。そして近年の軍縮により陸上自衛隊の弱体化が急速に進んでいます。

では“日韓大戦”を振り返ってみましょう。高麗軍の目的は日本の一部を占領して、そこからの撤退と引き換えに日本から外交的経済的な譲歩を引き出すことです。つまり一定の地域を確保してしまえば後はそこに居座るだけで、高麗は自分から戦域を広げて自衛隊に戦闘を挑む必要はないのです。そして劇中の高麗軍は北九州と福岡という政令指定都市を2つも確保しました。そして上陸させた戦力は九州の陸上自衛隊の戦力を上回っていて、自衛隊がそれに立ち向かうには全国から戦力を集めなくてはなりません。とくに高麗軍の防衛線を突破して2つの都市を奪還するには十分に機甲化装甲化された機動打撃部隊である第7師団の投入は必要不可欠です。つまり高麗側にはそれらの部隊が集結するまでの猶予があるわけです。それをどのように勝利に結び付けるかは次の話です。

・最終的には国力の差により日本が勝利するであろう

実は現代戦において“国力の差”にどれだけの意味があるのか、私が疑問に思っています。近年は正規軍同士が戦争を行なう場合、長くても数ヶ月程度で決着がつく場合がほとんどですし、国家がその国力の全てをつぎ込むような総力戦は発生しておりません。例えば戦争中に新たな兵器を開発して投入したり、予備役ではなく新規

に大規模な部隊を編成して戦場に投入なんてことは起きないでしょう。つまり現在の戦争は、開戦時にある戦力で戦い通すものなのです。でありますから、まず準備段階で国力の差は影響するかもしれませんが、開戦時に十分な戦力を用意できれば“国力の差”というものは大きな意味をもたないのではないのでしょうか？

また、ああ氏は“最終的に日本が勝利する”とおっしゃっていますが、具体的になにをもって勝利とするのでしょうか？もし第二次世界大戦のように相手国の領土を完全に占領してしまうことを勝利とするなら、韓国が勝利するのは不可能でしょう。日本もですが、しかし劇中の高麗軍は日本全土を占領することを目指しているわけではありません。

戦争とは国家がある目的を達成するために武力を用いる行為だと私は理解しています。つまり目的さえ達成できれば、それが勝利なのです。では劇中の高麗軍はなにを目的にしているのでしょうか？それは前述したように日本の一部を占領して、そこからの撤退と引き換えに日本から外交的経済的な譲歩を引き出すことです。つまり前述したように陸上自衛隊が戦力を揃えるまでの猶予の中で日本側に譲歩を決断させれば高麗の勝利です。私は高麗側にも戦争を決意するだけの十分な勝算があると思います。逆に言えば日本が譲歩しないことを決意した時、つまり本編の33話＜獅子、目覚めるとき＞で烏丸首相が武力による解決を決断した瞬間に高麗の敗北が決定したと言えるかもしれません。

以上が私の意見です。ご意見があれば感想欄にお書きください。

登場兵器紹介 艦艇編2

神楽「というわけで、今回は“世紀末の帝國”第5部その4に登場した艦艇を紹介するよ」

深海「まあ、別に活躍したわけじゃないけどさ」

神楽「いいじゃない。これから活躍するんだから」

＜芙蓉＞型対潜巡洋艦

排水量…8700t（基準）／10750t（満載）

どちらもシステム化艦の数値

機関…蒸気タービン×4

兵装

六五口径九八式一〇糎連装高角砲×2

二六式連装誘導弾発射機×1（三三式艦対空誘導弾＜石楠花＞しゃくなげ40発）

三連装短魚雷発射管×2

八連装アスロクランチャー Mk16×1

20ミリCIWSフラックス×2

搭載航空機

艦載ヘリコプター×6

帝国海軍は旧式化した大戦型空母を対潜空母として活用していたが、1960年代後半になると二次大戦時の空母が次第に退役してゆき、1970年代後半には対潜空母は雲龍型3隻を残すのみとなったので代替艦の建造が必要になった。当初は対潜空母として計画されたが正規空母への予算集中のため「対潜空母」計画は中止され、同時期に進められていた「防空巡洋艦」計画と合体し「艦隊護衛巡

洋艦」計画へと発展した。

こうして誕生したのが芙蓉である。芙蓉は多数搭載する対潜ヘリと大型ソナーを駆使して潜水艦を駆り立てる一方で、帝国海軍の第2世代対空ミサイルシステムである〈石楠花〉を装備して防空駆逐艦と協同し艦隊防空の中核を担う万能艦となった。現在は各水雷戦隊の旗艦となっている。

3番艦からデジタルコンピューターを搭載してシステム艦化されたので1、2番艦に比べると350tほど排水量が増している。近代化改修により1、2番艦も同様の仕様になっている。

艦載機の最大搭載機数はSH-60を基準にして6機となっているが、通常は4機を搭載している。

艦名	就役年	備考
----	-----	----

芙蓉 から	／1975	／艦名は千島列島松輪島の芙蓉岳 ふよう
----------	-------	------------------------------------

韓国	／1977	／艦名は九州霧島山の韓国岳 からくに から
----	-------	--------------------------------------

青葉	／1978	／艦名は京都の青葉山から。帝國
----	-------	-----------------

海軍初のシステム化艦		
新高	／1980	／艦名は台湾の新高山 にいたか から

神楽「というわけで、第一弾はこの艦。言うならば日本版ヴィットリオ・ベネット（注1）かな？」

深海「もしくはモスクワ（注2）か。それにしても2番艦、韓国かんこくつて」

神楽「“かんこく”じゃない、“からくに”。ちゃんと実在する山なんだから。まあ作者自身も洒落のつもりでの命名だけど。厳密な意味では命名規則から外れているかもしれないけど」

深海「たしか対象は“山”だけで“岳”は対象外なんだっけ？」

神楽「作者がどこかで聞いたことあるかもしれないってだけのことだけど。詳しくは分からない」

深海「まあ、大和の排水量を間違えるアホだしね」

神楽・深海「というわけで詳しい人、教えてください」

深海「さて装備についてだが、＜石楠花＞というのは？」

神楽「後で詳しく解説するけど、一言で言えば日本版スタンダードSM-1」

＜冬月＞型防空駆逐艦

全長・154m

排水量・5500t（基準）／6600t（排水量）

機関・ガスタービン×4

兵装

127ミリ単装速射砲MK45mod2×1

Mk41VLS64セル（前部32セル・後部32セル／スタンダードSM-2対空ミサイル）

四連装誘導弾発射機（四九式艦対艦誘導弾＜百合＞）×2

三連装単魚雷発射管×2

20ミリCIWSファランクス×2

イージスシステム一式

冬月は帝国海軍が空母直衛艦として建造した防空艦であり、米国から導入したイージスシステムを搭載したので連合艦隊の防空能力が大幅に向上した。

1980年代後半になって＜舞風＞型に続く新型防空艦建造が計画された。当初は石楠花システムの改良型の搭載が考えられたが、その能力はオケアン演習で高いミサイル攻撃能力を西側に見せつけたソ連に対抗するには不十分であった。

折しも日本はアメリカとの貿易摩擦が発生しており、アメリカからは兵器輸入で巨大すぎる黒字を是正するようにアメリカに求められていたので帝国海軍は政府からの圧力もありイージスシステムの

導入を決定した。

船体はアメリカの＜アーレイバーク＞型駆逐艦を参考にしているが、建造費削減の為、小型化されている。しかしソフトウェアに関しては＜タイコンデロガ＞型巡洋艦とほぼ同一のものが搭載されていて、防空能力はもとより指揮・管制能力についても＜アーレイバーク＞型より高いとされる。

艦名 就役年

冬月	／1995
秋月	／1996
夏月	／1997
春月	／1998
涼月	／1999
霜月	／2000年3月
宵月	／2001（公試中）
初月	／2002（予定）

神楽「第二段はこちら。帝國版イージス艦。ちなみに劇中には3番艦＜夏月＞と5番艦＜涼月＞が登場しているね（2009年3月現在）」

深海「自衛隊の＜こんごう＞型に比べても小さいね」

神楽「スペックはスペインの＜アルバロ・デ・バザン＞型イージス艦（注3）と韓国のKD-2＜忠武公李舜臣＞型駆逐艦（注4）を参考にしていうそう。というわけで劇中の帝國海軍は3月を過ぎればイージス艦6隻態勢に突入するわけ」

深海「その6隻の他にも防空艦が10隻以上あるんでしょ？海上自衛隊とは比べ物にならない戦力だね」

＜舞風＞型ミサイル駆逐艦

排水量…4500t（基準）／5800t（満載）

機関…ガスタービン×4

兵装

六五口径九八式一〇糎連装高角砲×2

二六式連装SAM発射機×1（＜石楠花＞40発）

八連装アスロックランチャーMk16×1

20ミリCIWSフアランクス×2

三連装短魚雷発射筒×2

＜舞風＞は第一世代ミサイル防空艦である＜黒潮＞型に次ぐ空母直衛艦として開発され、1980～90年代にかけて艦隊防空の主力を担った。

帝國海軍は第二次大戦中に＜奮龍4型＞を開発し、さらにそれを発展させて二六式艦対空誘導弾＜雛菊＞を開発して＜黒潮＞型駆逐艦に装備していた。しかし、どちらも誘導にビームライディング方式を採用していた。これは目標に照射されたレーダー波ないしレーザーを感知してそれに沿ってミサイルがまっすぐ飛行するというものであったが、そのために高速で移動する物体に対する命中精度に問題があった。そこで敵にレーダーを照射してその反射を捉えるというセミ・アクティブレーダーホーミング形式を採用した新型ミサイルが開発されたのである。それが三三式艦対空誘導弾＜石楠花＞である。

＜舞風＞型は＜石楠花＞システムを搭載した新型防空艦であり、デジタルコンピュータを使用した戦術情報処理装置の採用によるシステム艦化、機関のオールガスタービン化など様々な新機軸を盛り込んだ意欲的な設計がなされたが、それ故に開発が難航したのでミサイルシステムを＜石楠花＞に換装した＜黒潮＞型の建造が継続され、1980年によりやく一番艦の＜舞風＞が就役した。

空母直衛艦として機動部隊に配備されたが、＜冬月＞型イージス駆逐艦の配備に伴い駆逐艦戦隊の防空部隊に配属された。

艦名	就役年
舞風	／1980
吹雪	／1981
天津風	／1982
河風	／1983
春一番	／1984
峯風	／1985
朝風	／1986
朝風	／1987
夕風	／1988

深海「これは。自衛隊で言うのならくはたかぜ型（注5）か。しかし、なんちゅう数だ」

神楽「空母を守るためにはこれだけ必要ってこと。“自衛隊も空母を持て持て”と言う人間はよく見かけるけど、ちゃんとトータルでどれほどコストがかかるか考えているのかしらね？それに、なにに使うつもりなのか？」

深海「インド洋でインド海軍と決戦をするんは必要なんじゃないかい？まったく」

神楽「そうそう。それよりTu-22Mを買おうよ！」

深海「…それが言いたかっただけなのかな…」

来週へ続く

深海「いや、来週とか絶対に無理だろ！学校も始まるし」

注1ーヴィットリオ・ベネットー

イタリア海軍のヘリコプター巡洋艦。満載排水量9550tで、ヘリコプター9機（UH-1クラスを基準とする）を搭載することができる。1969年就役、2003年退役。ヴィットリオ・ベネットの退役によりEU諸国から巡洋艦が姿を消した。現在はタラントで記念艦として保存されている。

注2―モスクワ―

旧ソ連海軍のヘリコプター巡洋艦。満載排水量17500tで、ヘリコプター14機を搭載することができる。1967年就役、1996年除籍。後のミンスク級、アドミラル・グツネツォフ級などに繋がるソ連航空巡洋艦の元祖的な存在である。同型艦は<レニングレード>。

注3―<アルバロ・デ・バザン>型イージス艦―

スペイン海軍のイージス艦。スペインは日米に次ぐ三番目のイージスシステム導入国であるが、特徴としては日米のそれに比べると小型化されていることである。満載排水量は劇中の<冬月>型より更に小さな5802tに過ぎない。スペイン海軍はイージス艦6隻の配備を計画している。

注4―KD-2<忠武公李舜臣>型駆逐艦―

エリブ・ディフェンス

韓国海軍の駆逐艦で、同海軍初の艦隊防空艦である。満載排水量は5500tでスタンダードSM2型ミサイルを搭載しているがイージスシステムは搭載されていない。6隻が建造、配備され韓国海軍の主力艦となっており、ソマリアの海賊対策にも派遣されている。対空搜索レーダーの探知距離がSM2ミサイルの最大射程より短いなどの弱点が指摘されている。

注5―<はたかぜ>型―

海上自衛隊のミサイル護衛艦。<あまつかぜ>、<たちかぜ>型

に次ぐ第3世代艦。満載排水量は5900t。ターターシステムとスタンダードSM1型ミサイルを搭載しているので新鋭の防空艦に比べれば劣るものと言わざるえないだろう。

登場兵器紹介 艦艇編3

神楽「来週更新の約束、果たしたぞー」

深海「やりとげましたね」

神楽「というわけで今回は前回に引き続き、第5部その4に登場した艦艇を紹介するよ」

＜五月雨＞型汎用駆逐艦

全長…152m

排水量…4500t（基準）／5000t以上（満載）

機関…ガスタービン×4

速力…30kt

乗員…147名

兵装

OTOメララ62口径76.2ミリ砲スーパークラピッド×1

Mk41VLS／32セル（前甲板に集中／RIM-7シーンスパ

ロー、RUM-125シーランス）

四連装誘導弾発射機（四九式艦対艦誘導弾＜百合＞）×2

三連装短魚雷発射管×2

20ミリCIWSフラックス×2

搭載航空機

ヘリコプター×2（通常は1機）

帝国海軍の現主力駆逐艦である。1970年代に建造された＜山雲＞型対潜駆逐艦の後継艦のための第二世代汎用駆逐艦として計画された。

＜五月雨＞型は様々な新機軸が採用された野心的な艦である。船

体は海軍では初めてステルス性を意識して設計され、外見は平明的で艦橋側面には傾斜がかけられている。しかしマストがレーダーに探知されやすいとされる従来型のラティスマストを採用するなど不徹底な点もある。

また武器システムには対空・対潜ミサイルの発射機として垂直発射システム（VLS）が装備された。従来は発射時に発射機を攻撃方向に向けなくてはならなかったが、VLSではミサイルが真上に射出されミサイル自身の姿勢制御で敵に向かっていくので発射までの時間を短縮することができる。また発射機が格納庫を兼ねているので装填作業を必要としない。

さらに対艦ミサイルは＜ハープーン＞に代って国産の＜百合＞ミサイルが搭載された。

艦載機として＜夕霧＞型に続く対潜ヘリコプターを搭載する。2機搭載可能であるが、通常は1機のみを搭載する。

艦名	就役年	
五月雨	／1993年	／第一駆逐隊 現役
春雨	／1993年	／第一駆逐隊 現役
霧雨	／1994年	／第一駆逐隊 現役
曙	／1994年	／第二駆逐隊 現役
夕立	／1995年	／第二駆逐隊 現役
秋雨	／1998年	／第二駆逐隊 現役
雷	／1998年	／第五駆逐隊 現役
稲妻	／1999年	／第五駆逐隊 現役
野分	／1999年	／第五駆逐隊 現役
時雨	／2001年	（ぎ装中）
有明	／2002年	（予定）
夕暮	／2002年	（予定）

深海「帝國版＜むらさめ＞（注1）すか」
神楽「まあそんなところ。さて次」

深海「ええ？もう？」

神楽「平凡すぎて特に言う事もないしね。＜むらさめ＞そのままだし」

深海「いや。そのままじゃないだろう。主砲は＜むらさめ＞と同型の76・2ミリだが、VLSの搭載のしかたは＜たかなみ＞型（注2）みたいだ」

神楽「別にいいじゃん、そんなこと」

＜夕霧＞型汎用駆逐艦

全長…137m

排水量…3500t（基準）／4900t（満載）

機関…ガスタービン×4

速力…30kt

兵装

OTOMメララ62口径76・2ミリスーパーラピッド砲×1

八連装＜RIM-7シースパロー＞艦対空ミサイル発射機Mk2
9×1

四連装誘導弾発射機（＜RGM-84ハープーン＞or＜百合＞
対艦ミサイル）×2

三連装短魚雷発射管×2

八連装アスロクランチャーMk16×1

20ミリCIWSファランクス×2

搭載航空機

ヘリコプター×2（通常は1機）

1960年代に導入された対潜駆逐艦の後継として就役した駆逐艦。1980年代の日本海軍を代表する駆逐艦であり、対潜、対空、対水上にバランスよく対応可能な汎用駆逐艦として16隻建造され

た。

ソ連海軍はキューバ危機における敗北以来、海軍力の増強・充実に努めていた。1970年代にはソ連海軍は外洋艦隊を志向し大型艦の充実を推し進める一方で、Tu-22M爆撃機を開発し空中から日本艦隊を脅かすようになった。こうして空中・水上・水中の三方向からの脅威に直面した帝國海軍の回答が＜夕霧＞であった。

＜夕霧＞は従来の対潜一辺倒だった駆逐艦計画を見直し、ソ連艦隊の強大化した水上艦隊に対抗する為の充実した対艦能力、ソ連海軍航空隊のミサイル攻撃から自艦を守る為の対空能力を与えられた。対艦攻撃能力としてアメリカから＜ハープーン＞ミサイルを導入し、その後に国産の＜百合＞ミサイルに換装している。

対空自衛能力として、それまでの駆逐艦は砲填兵器のみを頼りにしていたが＜夕霧＞は初めて自衛用の短距離対空誘導弾＜シースパロー＞を搭載した。

さらにヘリ運用能力を持ち、対潜ヘリコプターを搭載することで広い海域を哨戒し、自艦から遠距離にある敵潜水艦を攻撃することができる。アスロック対潜ミサイルや短魚雷と組み合わせ、縦深のある対潜攻撃能力を得た。またヘリコプターにより自艦のレーダー索敵圏外の敵水上艦を探知し、その情報を基に艦載対艦ミサイルで攻撃することが可能になった。

艦名	就役年
夕霧	／1982
山霧	／1983
朝霧	／1985
雨霧	／1986
不知火	／1986
響	／1987
沢霧	／1988
瀬戸霧	／1988

海霧	／1989
川霧	／1989
波雪	／1989
山雪	／1990
浜霧	／1990
狭霧	／1991
陽炎	／1991
暁	／1992

深海「今度は帝國版＜あさぎり＞型（注3）かあ」

神楽「史実の海上自衛隊はくも＞型（注4）から排水量が不足気味だったくはつゆき＞型（注5）を経てから＜あさぎり＞型に移行したのだけれども、帝國海軍の場合はいきなり満載5000t近い艦艇からはじめたのよ。だから＜夕霧＞型は帝國版＜はつゆき＞でもある」

＜足摺＞型補給艦

排水量…19500t（基準）／36000t（満載）

機関…ガスタービン×2

速力…25kt

兵装

20ミリCIWSファランクス×1

帝國海軍最新の補給艦である。従来の補給艦に比べ補給能力が大幅に向上した他、機関としてガスタービンを搭載して速力も上がった。

片舷3箇所ずつ、合計6箇所の補給ステーションがあり、うち中央の2つが弾薬・食糧などのドライカーゴ用で、残りの4箇所で燃

料（航空燃料含む）を供給する。

後部甲板には飛行甲板があり、ヘリコプター2機が着陸することができ、格納庫は無く通常は艦載機を搭載しない。

最新艦の＜能登呂＞は阪神・淡路大震災の教訓を踏まえて医療区画が拡張され、戦時・災害時には病院船として使用することも可能である。

艦名	就役年
足摺	／1991
塩屋	／1993
間宮	／1995
能登呂	／1999　／改＜足摺＞型。医療区画を拡張。

神楽「というわけで、今回の目玉よ」

深海「補助艦艇が目玉とは独楽犬らしいね。しかしデカイ。補給艦＜ましゅう＞（注6）は海上自衛隊最大の艦艇だけど、それでも基準13500t、満載25000tだからね。一回り大きいのかな？」

神楽「見た目はサプライ型AOE（注7）に近くて、艦橋の後ろに補給ステーションがある。まあサプライは満載49000tの化け物だけど」

深海「何かモデルにしたものはあるのかい？」

神楽「スペックデータはイギリス海軍の＜フォート・ヴィクトリア＞型（注8）を参考にしたそうよ」

深海「しかし、一週間のノルマを達成するとは思わなかった…」

神楽「まあ作者もやればできるってことね」

深海「それにしても肝心の小説の更新が…」

神楽「次回は戦闘機編をお送りします。さらにその次は陸軍歩兵の兵器編。お待ちくださいね！」

深海「無視かよ…」

注1―くむらさめ>型護衛艦―

海上自衛隊の第3世代汎用護衛艦。基準排水量は4550t。<こんごう>型に続くVLS搭載艦であり、前甲板にアスロック用のMk41VLSを16セル、艦中央にシースパロー用のMk48VLSを16セル装備する。9隻が建造され21世紀初めにおける海上自衛隊の主力となっている。

注2―くたかなみ>型護衛艦

海上自衛隊の第4世代汎用護衛艦。基準排水量4650t。<むらさめ>の発展型で、76・2ミリ主砲を127ミリ砲に換装し、VLSをMk41に統一して前甲板に集中した。5隻が建造され<むらさめ>とともに護衛艦隊の主力を担っている。

注3―くあさぎり>型護衛艦

海上自衛隊の第2世代汎用護衛艦。基準排水量3500t。排水量不足の問題があった<はつゆき>型護衛艦の拡大版である。8隻建造されて<はつゆき>とともに海上自衛隊八八艦隊の中核を担った。

注4―くくも>型護衛艦

1960年代から70年代にかけて就役した<やまぐも>型及び<みねぐも>型を指す。基準排水量は2100t前後のほぼ同型艦。対潜を重視した艦で<やまぐも>型は護衛艦として初めてアスロック対潜ミサイルを装備し、<みねぐも>型は無人対潜ヘリDASHを搭載した。しかしDASHは後にアスロックに換装されている。

注5―くはつゆき>型護衛艦

海上自衛隊初の汎用護衛艦である。基準排水量2950t。八八艦隊の中核として整備が開始されたが排水量不足の問題があり12

隻で建造を打ち切れ<あさぎり>型に移行した。現在では後継の<むらさめ><たかなみ>型護衛艦の配備によりかつての地方隊部隊である二桁護衛隊に配置されている。

注6―<ましゅう>型補給艦

海上自衛隊の補給艦。基準排水量13500t、満載排水量25000t。<しらせ>型砕氷船を抜き海上自衛隊最大の艦となったが、基準排水量では<ひゅうが>型護衛艦に抜かれてしまった。

前級の<とわだ>型補給艦が基準排水量8100tであることを考えると驚くべきほど大型化しているのが分かる。海上自衛隊の任務の変化を象徴するような艦である。同型艦に<おうみ>がある。

注7―<サプライ>型高速戦闘支援艦

アメリカ海軍の補給艦。満載排水量は49000t。空母戦闘群の必要な物資を一通り搭載して25ノットの高速で艦隊に随伴できる。11隻が計画されたが冷戦終結の影響により4隻に削減された。

注8―<フォート・ヴィクトリア>型補給艦

イギリス海軍の補給艦。満載排水量36580tで2隻建造された。高い航空機運用能力が付与されていて大型ヘリコプター5機を収容可能な格納庫と2機同時の離着艦が可能でシーハリアーの離着艦にも耐える飛行甲板を装備していて、ヘリコプター作戦の拠点としても活動可能である。

登場兵器紹介 艦艇編3 (後書き)

(追加) 2011/11/22

海軍の設定変更により駆逐艦の隻数、紹介文を改訂

登場兵器紹介 航空機編 1

神楽「というわけで今回は登場兵器紹介、戦闘機・爆撃機編よ」
深海「前の予告では戦闘機だけじゃなかった？」

神楽「いやあ、爆撃機って1機種しかないからさ。まとめたの」

J14N<白刃>

(データは32型甲)

全長…15m

全幅…9m

空虚重量…6600kg

速度…M1.4

航続距離…2800km

乗員…1名

エンジン…石川島播磨F23ターボファン(3500kg/AB使用時)×2

兵装…M61バルカン20ミリ機関砲×1 ハードポイント×6

積載量3400kg

帝國空軍初の実用超音速ジェット戦闘機である。

1949年に米国がベルX-1により超音速飛行に成功した。それを受けて陸軍と海軍は協同で超音速飛行を目指す試作機MXY9／キ209の開発を開始した。そして完成した機体は1953年12月に初飛行し、翌年1月に超音速突破に成功した。しかし実用機として生産されることはなかった。

折しも大陸では国共内戦が激化し、国民党政府を支援する為に国産のキ201<火龍>及び米国から導入した<セイバー>を投入し

た帝国陸軍航空隊はソ連から貸与された中共軍のミグ戦闘機と交戦し、多くの教訓を得た。それを基に陸軍は1953年に超音速戦闘機キ210の開発を中島飛行機に指示し、翌年に計画は新設の帝國空軍に引き継がれた。

中島飛行機は国産のネ60ターボジェットを2発搭載した試作小型戦闘機を完成させ、1958年には初飛行して同年中に超音速突破に成功した。優れた能力を示した本機は直ちに採用され<lt白刃>>11型として空軍に配備された。この時の<lt白刃>>は20ミリ機関砲2門と翼下にAIM9<ltサイドワインダー>>ミサイルを1発ずつ搭載可能なハードポイントを持つだけの純粋な戦闘機であった。

1962年初めに中国戦線に投入され短期間の活躍であったが数機のミグ撃墜に成功した。その後、順次改良が施されている。1967年より配備が開始された21型はハードポイントを増やして対地攻撃能力を付与された。

さらに1970年代に入って本格的な改修が行なわれている。エンジンをF23型ターボファンエンジンに換装して航続距離、積載能力を向上させ、それによる余力を利用して新型のアヴィオニクスシステムを搭載している。これによりレーダー誘導型空対空ミサイルの運用が可能になった。また20ミリ機関銃2門をM61バルカン型20ミリ機関砲1門に換えている。この機体は32型と呼称され1972年に初飛行し、翌年から実戦配備されている。通称は<lt白刃>>改である。

初飛行から40年以上経過して如何せん旧式化しているので順次<lt旋風>>戦闘機に更新されているが、2000年現在でも32型が100機ほど実戦配備されている。

派生型

キ210

試験機。超音速を突破

J14N1

11型甲 初期生産型。1961年より配備開始。

J14N-K

11型乙 11型の複座型。機種転換訓練に使用。

J14N2 21型 対地攻撃能力向上型。翼端及び翼下にハ
ードポイントを増設。

J14N3 32型甲 エンジンをF23に換装。＜白刃＞改
J14N-K2 32型乙 32型の複座型。

神楽「帝國日本で初めて超音速を突破した記念すべき軽戦闘機よ」

深海「最初の超音速戦闘機がそのまま現役ってどうよ」

神楽「別に良いじゃん。初飛行が同じ1958年のF-4ファント
ム2だって今だに現役なんだからさ」

深海「でも性能的には限界でしょ？」

神楽「うん。ルックダウン・シュートダウン能力も無いしね」

深海「で、ルックダウン・シュートダウン能力とは？」

神楽「…いや、あんた軍事関係の仕事してんだろ？」

深海「いや、読者にはあまり軍事に詳しくない人だって多いんだぞ。
第二次大戦中心の人もいるだろうし」

神楽「うん。そうだね。つまりだね。まずレーダーというのは電
波を発して、目標に当って返ってくるのを捉えて目標の位置を探る
メカだ」

深海「航空機の場合、問題なのは自分より低空の敵を搜索する場合
だ。下方向にレーダー波を放つと、まず敵機から返ってくる。そし
て地面からも返ってくる。つまり目標の反応が地面からの反応の中
に隠れてしまうんだ」

神楽「そこで考案されたのがドップラー効果を利用する方法よ。ド
ップラー効果というのは、まあ救急車のサイレンが近づいてくる時
と離れる時とは違って聞こえるってあれ」

深海「音波とか電波とか波と呼ばれるモノは相手との相対速度、つ
まり相手と自分の間の距離が縮まったり離れたたりすることのスピ
ードが変化すると

周波数も変化する特性がある」

神楽「それを利用したのがパルス・ドップラー・レーダー。地面は

動かないから、飛んでいる自分の速度と同じ。一方、目標機は自分で動いて接近したり離れていたりするから相対速度は地面とは異なる。つまりそれによって生じるレーダー波の周波数の違いを捉えて、地面の反応の中から目標を見つけ出すの」

深海「そうした能力をルックダウンという。そして、それで発見した敵を攻撃する能力がシュートダウンだ」

J15N <天雷>

(データは31型)

全長…21.9 m

全幅…11 m

重量…12000 kg

速度…M2.3

航続距離…3000 km (増槽なし)

乗員…2名

エンジン…ロールスロイス社製エイボン Mk301 (7421 kg
／AB使用時) ×2

兵装…30ミリリヴォルバーカノン×1 (弾数250) 誘導弾×6

日本空軍がソ連軍爆撃機迎撃のため開発したマッハ2級の迎撃機。60年代から80年代前半にかけての日本空軍の主力戦闘機。初飛行は1964年4月12日で、67年より実践配備された。配備後も改良が続けられ、現在でも現役である。

日本空軍は1950年代、アメリカからF-86D迎撃機(空軍ではJ12A2と呼称)を輸入して迎撃任務に使用していたが、不慣れた電子兵装から故障が頻発し、東側がM-4やTu-95などの新鋭爆撃機を完成させるとF-86Dの迎撃能力では不十分だと考えられるようになった。後継機として開発中の新鋭ジェット戦闘

機＜白刃＞や海軍の＜麗風＞を改造したものや英国のライトニング迎撃機の導入が検討されたが、広大な日本領海を守るには能力が不十分として新型迎撃機を開発することが決まった。なお、新型機がF-86Dの退役に間に合わない為、偵察機として導入したRF-101の一部を一時的に迎撃機に転用している。

完成した機体は東側に多い水平尾翼つきのデルタ翼機で、エンジンにはライトニングと同じエイボン Mk 301 が搭載され、最高速度マッハ2.3をマークした。しかしアヴィオニクスは同世代の機体に比べ劣っており、特にロックダウン能力の欠如は後のソ連空軍機亡命事件でミグ25の侵入を許す要因となる。

初期の＜天雷＞は赤外線追尾式の国産空対空ミサイルか無誘導ロケット弾を4発搭載するだけで機関砲を装備していなかったが、迎撃任務に支障があったのでレーダー誘導式ミサイル運用能力と30ミリ機関砲を装備した21型が開発配備された。

1970年代に後継機の開発が＜白刃＞後継と併せて開始されたが、石油危機により中止となった。代替として＜旋風＞が空軍に配備されたが、迎撃機としては能力不足として＜天雷＞を近代化改修した既存機の寿命延長及び新規生産が行われた。

近代化改修型は31型という形式番号が与えられ、上述の後継機用に開発されたパルス・ドップラー・レーダーを搭載してロックダウン・シュートダウン能力を獲得した。またソ連戦闘機の航続距離が伸びたことから、爆撃機迎撃用に開発された＜天雷＞を対戦闘機戦闘に投入できるように翼の形状をクリップデルタ翼に改良して機動力を向上させ、HOTASの概念を取りいれてコクピットを改善して操縦性を高めた。さらにハードポイントを2基増設して、そこに対戦闘機戦闘に最適な短距離赤外線追尾式ミサイルを搭載するようにした。

長距離飛行能力と加速性能からRF-101後継の偵察機としても使用されている。

J12N1 11型 初期生産型。

J12N2 21型 アヴィオニクスを改良。30ミリ機関砲を搭載。

J12N3 31型 新規生産仕様。ルックダウン能力を獲得。

J12N-R 偵察仕様。現役。

J12N-V ECM機。能力の不足から夜鷹改と交代して退役。

神楽「これは既に本編登場済みね。外見は旧ソ連のSu-15フラゴン（注2）か中国のJ-8二型（注3）のようなものを想像する
といいよ」

深海「どっちも東側だね。さて、次はアヴィオニクスとHOTASだ」

神楽「アヴィオニクスってのはあれだ。レーダーとか、通信機とか、コンピューターとか、飛行機に載っている電気で動くもの全般のことだ」

深海「なんか凄い簡単に済ましちゃってるな」

神楽「いいんだよ。簡単のが分かりやすい。でHOTASだけど。戦闘機はこうやって右手で操縦桿を握って…」

神楽は右手をお腹の前になにかを握っているような風に出した。

神楽「それで左手でスロットルを…どうした？」

深海「いやあ。その右手がナニを握っているみた…」

バキッ（深海がぶん殴られダウン）

神楽「ともかく操縦桿とスロットルを動かして操縦するわけだ。しかし、なにぶん戦闘機だから戦闘をしなくちゃいけない。昔なら機関銃の引き金を引くだけでいいが、今ならレーダーの操作とか、使

う武器の選択とか、ロックオンとかいろいろとやることがあるわけ。それをするために一々操縦桿やスロットルから手を離したら危ないでしょ？」

深海「まあ隙ができるわな」

神楽「もう復活したのか：というわけで、手をスロットルと（ハンド・オンステイックス）操縦桿から離さないで操縦できるコクピット、略してHOTASの概念が生まれた」

深海「つまり戦闘に必要なスイッチをみんな操縦桿とスロットルレバーに内蔵したってことだ」

A14DファントムII

日本海軍航空隊は国産の＜麗風＞＜南風＞戦闘機を主力艦載戦闘機として使用していたが、どちらも軽戦闘機であり将来のミサイル空中戦に対応できないものと考えられた。そこで米国より大型レーダーとレーダー誘導式ミサイル運用能力を持つF-4ファントムII戦闘機を導入することとなった。

1967年にアメリカからF-4Jを輸入して翌年より三菱重工でライセンス生産を開始し、1969年には海軍航空艦隊への配備が開始された。電子戦能力と積載能力が高く評価された。特にアヴィオニクスは当時最新のもので、帝國軍初のロックダウン・シュートダウン能力を持つ戦闘機となった。しかし大型のために当時はまだ現役であった大戦型空母には搭載できない短所があった。

それでも海軍主力戦闘機として地位を確立し1990年代まで配備され続けたが、後継の＜旋風＞戦闘機の配備が開始され、1991年の湾岸戦争に12機が派遣されたのを最後に海軍から退役した。しかし一部の機体は空軍に引き渡され、アメリカ海軍のF-4S相当の近代化改修を施して後継機開発が遅れていた防空部隊に配備

されている。特に独立二六一戦隊に配備された機体は敵防空網制圧のためにワイルドウィーゼル仕様に改造されている。

A14D1 米国のF-4J

A14D-J 近代化改修仕様。空軍に配備。

A14D-V ワイルドウィーゼル仕様。空軍に配備。

深海「帝國日本もファントムを導入したんだね」

神楽「まあね。ただし海軍仕様だから、機関砲は外付けのオプションのみ」

四六試陸戦

(数値は中島飛行機の機体)

全長…19m

全幅…13m

乗員…2名

空虚重量…12000kg

エンジン…ロールスロイス・スペイMk202(9305kg/A

B使用時)×2

1968年、帝國空軍は主力戦闘機であつた<白刃>と主力迎撃機であつた<天雷>の後継となる次期主力戦闘機計画を開始した。仕様要求は、強力なエンジンを搭載して高性能な火器管制システムを装備し十分な視程戦闘能力を保持しつつ、機動性能にも優れ格闘性能でミグ戦闘機を圧倒し、標準的な迎撃ミッション時の戦闘行動半径が1200km以上という過酷なものであつた。

特に問題になったのが搭載するエンジンである。当時はまだ高出力ターボファンエンジンを帝國は開発することができなかったのだ。

それにはイギリスからロールスロイス・スペイ・ターボファンエンジンを導入する事で解決した。スペイは英国仕様のファントム戦闘機に装備された実績があった。そして空軍は1970年に中島飛行機と川西飛行機にスペイを装備する戦闘機の設計案製作を命じた。

翌年、提出された設計案を検討したが甲乙つけ難く、競争試作を行なうことを決めて中島、川西両者に試作機が発注され、2年後にそれぞれ初飛行した。

中島案では可変翼を採用し、あらゆる状況に対応可能な複座の大型戦闘機を目指した。言うならば小型のF-14である。しかし整備性に疑問符がついた。一方、川西案では固定翼機で、任務に依じて複座の迎撃型と単座の戦闘攻撃型を使い分けるものであった。しかし、迎撃に必要な高性能レーダーシステムを搭載するために（同じ機体なら複座型の方がアヴィオニクス能力で不利になるため）複座型と単座型の機体構造が大きく異なるという問題があった。これはく白刃>とく天雷>の後継機を統一するという空軍の意向に反する。ただ、まったく異なる任務に投入する機体を完全に統一すれば無理が生じるものであるし、この程度の統一でも十分意義がある、という反論もあった。

しかし、どちらを採用するか決定する前に四六試陸戦のプロジェクトは中止されることになる。1973年から翌年にかけて発生した石油危機により政府は大幅な財政削減を迫られ、あわせて軍事予算も削減されたからである。当時、海軍も次期艦上戦闘機の開発を開始しており、同時に二つの戦闘機プロジェクトを推進は無理であるとして兵部省は単一のプロジェクトへの統一を決定した。そして検討した末で四八試艦戦を空軍でも採用することを決定したのである。その理由としては純粋な空軍機として設計された四六試陸戦を艦載機に転用するよりも、四八試艦戦を陸上戦闘機に転用するほうが容易であること、四八試艦戦は比較的安価であることが挙げられる。かくして四六試陸戦計画は中断され、川西飛行機は戦闘機製造から撤退することになる。

神楽「つーわけで、幻のF-Xでえす」

深海「なんか設定考えたら本編に出したくなったらしい。スぺイだから」

神楽「気持ちは分かるな。スぺイだもん」

深海「なかなか楽しそうだね。スぺイだし」

A15M<旋風>

(データは11型甲)

全長…14.1m

全幅…10m

空虚重量…8800kg

最高速度…M2

乗員…1名

エンジン…石川島播磨重工業F-50(6500kg)×2

兵装…M61バルカン20ミリ機関砲(弾数560)×1 ハー

ドポイント×9 積載量5400kg(A14M-2以降は6100kg)

日本海軍がA13M南風及びA14DフロントムII、B9Dス
カイホークの後継として開発した多機能戦闘機。A14Dはそれま
での日本の戦闘機には無かった高度なレーダーシステムを有し機動
艦隊の空の守りとして期待されたが、大型の機体は大鷲以降の満載
排水量4万トン級の航空母艦でなければ運用できず、第二次大戦型
の翔鶴、大鳳、翔鷹の3隻は旧式の南風に防空を託すしかなかった。
その反省から新型艦上戦闘機には小型化、軽量化が求めら、仕様要
求が纏められた。

1972年、海軍は次期艦載機計画を正式にスタートさせて三菱

と中島に戦闘機の設計案を発注した。中島は次期空軍戦闘機計画に力を注ぐために辞退し、翌年に三菱に四八試作艦上戦闘機の製作が発注された。試作機は1976年（昭和51年）完成し、同年初飛行した。そして海軍航空隊に採用されて1980年より配備が開始された。

一方、空軍も制空戦闘機＜白刃＞及び迎撃戦闘機＜天雷＞の後継となる次期主力戦闘機計画が第二次石油ショックの影響で中止となり、代わりに本機を改良して配備することを決定した。空軍型は海軍型から更なる軽量化が図られていて、ランディングギアなどはより華奢なものに換えられている。これは無謀なことに聞こえるかもしれないが、空軍にしてみれば“制御された墜落”とも称される空母への着艦を念頭に設計された＜旋風＞の頑丈さは過剰性能もいところであった。かくして空軍型は海軍型に比べ100kg程度の軽量化に成功している。

かくして1982年から空軍への配備も始まり、そのために生産数が想定以上に膨れ上がってしまった。三菱は夜鷹爆撃機の生産も同時に行なっていたこともあり生産能力がまったく追いつかず、四六試戦中止の救済の意味も込めて空軍向けの機体の生産は半数以上が中島に委託された。

A15DファントムIIに比べると4t近い軽量化に成功し、運動性能・格闘性能に優れている。各種空対空ミサイルや対艦ミサイル、レーザー誘導爆弾の運用能力を持ち、対空・対地・対水上戦などあらゆる場面に対応している。その反面、後続距離が短く加速性能は低い。空軍が迎撃機として本機ではなく天雷近代化改修型を選んだ背景にはそれがある。

1987年より配備が開始された32型ではF/A-18と同型のエンジンを装備し、推力が1.5tほど向上して搭載量が増えた。特に対艦ミサイルと増槽を同時に搭載できるようになった点が搭乗員からは喜ばれた。空軍も同様に改良した機体を1989年から配備している。

1997年生産分を最後に生産を終了したが、三菱はさらなる派生型を開発・提案している

A15M1	11型甲	海軍向け初期量産型。
A15M-K	11型乙	11型の複座型
A15M-J	21型甲	11型甲の空軍仕様。
A15M-K2	21型乙	11型乙の空軍仕様。
A15M2	32型甲	エンジンを換装。搭載量が増加。
A15M-K3	32型乙	32型の複座型
A15M-J2	42型甲	32型の空軍仕様。
A15M-K4	42型乙	42型の副座型。
A15M3	53型	三菱が海軍に提案した新型。エンジンを換装。

A15M-J3	63型	三菱が空軍に提案した迎撃仕様。
A15M-V		11型乙を改良した電子戦仕様。

神楽「というわけで現在の帝國日本の主力戦闘機よ」

深海「天城由梨絵大尉の愛機だね。これも軽戦闘機だね」

神楽「元はF/A-18ホーネット（注4）並の機体だったんだけど、スケールダウンしてこうなったの」

深海「換装するエンジンがF404なのはその名残すか」

J16N <鎮守>

全長…18m

全幅…10.5m

空虚重量…9550kg

最高速度…M2

航続距離…3000km（増槽なし）

乗員…1名

エンジン…石川島播磨重工業F-90 (8500kg/A B使用時)
×2

兵装…M61バルカン20ミリ機関砲 (弾数410) ×1 ハード
ポイント×11 積載量7000kg

帝国空軍が天雷の後継として採用した防空戦闘機。地上および艦艇への攻撃能力はほぼ失われているが、迎撃機としては高い性能を示す。

＜鎮守＞は次世代の主力戦闘機として様々な新機軸が採用されている。

レーダーは世界に先駆けてアクティブ・フェイズト・アレイレーダーを搭載している。数十の目標を同時に追尾し、8目標に対して同時に攻撃を行う事ができる。またコクピットはグラスコクピット化が進められ、従来のアナログ計器は最小限に押さえられて液晶ディスプレイがコンソールを覆っている。

さらに空軍が独自に開発した新型デジタルデータリンクシステムが装備されており、従来機よりも地上の迎撃誘導管制やAWACSとの交信できる情報量が格段に増加し、さらに僚機とも情報を共有し連携することができる。

またアフターバーナー無しでの超音速巡航が可能であり、遠距離まで迅速に展開することができる。機体には日本が得意とする炭素繊維複合材を使用し重量を抑えることに成功し、またステルス材によりRCSも低い。機体設計は迎撃機として航続距離と加速性を重視し、燃料搭載量は他国の同クラスの機体より多い。しかし、その為に運動性については妥協しており、天雷より向上しているが旋風には劣っている。特にSu-27クラス以上の機体に対しては近接戦では苦戦が予想されている。

初飛行は1990年で、1996年より量産が開始され、現在北海道に優先的に配備されている。1999年に北部方面軍の防空部

隊が実働態勢に入った。

発展型としてエンジンをより強力なものに換装し、対地攻撃能力を付加した副座型を＜白刃＞や＜ファントム・ワイルドウィーゼル＞の後継として配備することを計画している。さらに海軍には＜夜鷹＞後継の対艦攻撃機としても提案がなされている。

この機体は、土地の守護神を意味する＜鎮守＞と名づけられた。

J16N-1 11型甲 量産型。現行生産機。

11型乙 11型甲の複座型

J16N-2 21型 11型乙の改良型。対地攻撃能力を向上。

J16N-V 21型の電子戦型。

神楽「今度は再登場が何時になるか分からない八木桂一少佐の愛機よ」

深海「劇中じゃボロクソ言われてたけどね」

神楽「まあ主にエンジン推力の不足がくるところだけど。やっぱり強力なエンジンを搭載している方が単純に良いのよね。アヴィオニクス処理能力ならソ連機より格段に上だけど」

深海「なるほど」

神楽「まあエンジン推力って言っても大型戦闘機との比較だけどさ。あとは機体を軽量化して航続距離を伸ばしているよ」

深海「“機体を軽量化して航続距離を伸ばしている”ってどこかで聞いたことがあるようなフレーズだな」

神楽「まあ確かに（汗）。でも新素材使ってるから、そう脆くはないし。今日び、戦闘機に防弾板仕込む時代じゃないでしょ」

深海「まあね」

神楽「ちなみに“神楽学校”に出てくる数値は基本的にそれっぽく見せるためのデマカセだから真に受けても仕方がない」

深海「…そう言う事は言うなよ！」

G13M<夜鷹>

全長…23m

全幅…29m(最大時)

重量…21000kg

速度…M2

航続距離…4200km(増槽なし)

乗員…2名

エンジン…ブリストル・シドリ社製オリパス Mk 320 (13900kg/A B使用時) × 2

兵装…最大8000kg

軽爆撃機として空海軍で使われた英国製キャンベラ爆撃機の後継機として開発された爆撃機である。空軍は戦術任務の軽爆撃機と戦略任務の重爆撃機を並行開発したが、重爆撃機である四〇試陸爆は予算不足により中止された為、本機には能力不十分ながら戦略任務も付与されることになった。日本本土からは中国沿岸の都市しか攻撃できないが。

当機の開発は1950年代後半に始まる。この時、大陸で泥沼の国共内戦を戦っていた空軍部隊(正確に言えば陸軍航空隊)が直面した問題は十分な滑走路を備える飛行場があまりにも少ない事であった。ミサイルやジェット戦闘機が発達し、爆撃機にも高速化が求められる中で、不十分な滑走路からも離陸できる短距離離着陸能力を確保するのは困難なことであった。そこで空軍が注目したのは可変翼である。1950年代半ばに可変翼実験機を製造し実験を繰り返して十分な感触を得た空軍は実用機への採用を決断した。かくして新型戦術爆撃機G13Mは1966年に初飛行した。しかしながら国共内戦は4年前に終了し、夜鷹と命名された爆撃機が投入されることはなかった。

1969年より空軍に配備が開始され、翌年には海軍にも40機ほどが採用された。海軍は爆撃照準用レーダーの代わりに対水上捜索レーダーと赤外線探知装置IRSTを装備し、対艦攻撃能力を付与した。

しかしその頃、＜夜鷹＞は新たな危機に直面した。1960年にはゲイリー・パワーズの操縦するU-2偵察機がソ連軍の地对空ミサイルに迎撃された。さらにベトナム戦争が始まりアメリカ軍による北爆作戦が実行されたが、北ベトナム軍の防空網により多くの被害が出た。地对空ミサイルにいかに向かうかが爆撃機の新たな課題となったのである。

その回答はレーダーで探知がしにくい超低空侵入作戦であり、速度に応じて翼を動かし最適な飛行状態を保つ事ができる＜夜鷹＞はそれに適すると判断され、改良が開始された。新型の地形追跡レーダーが装備され低空侵攻能力を高め、さらにベトナム戦争で活躍したレーザー誘導爆弾に着目し、アメリカからペイブ・ナイフ型レーザー照準装置を導入して搭載して精密爆撃能力も得た。現在も空軍に配備されているのは、このタイプであり、ペイブ・ナイフに代わって爆弾倉内に搭載する赤外線暗視装置も兼ねる新型レーザー照準装置を搭載する。

一方、海軍ではソ連海軍の拡大にあわせて＜夜鷹＞増勢を決断し、アヴィオニクスを近代化した51型の配備を開始し、1989年に最終生産機が納入された。それが最後に生産された＜夜鷹＞である。空軍では戦術爆撃機として、海軍では対艦攻撃機として使われている。胴体内には爆弾倉があるが、31型を除いて当初の目的通りに使われることは珍しく燃料用増槽や各種センサーの搭載場所として利用される。

エンジンはターボジェットを使っているため、他国の同クラスの機体に比べると燃料効率が悪い。その為、三菱からはF110（F-16等で使用）またはF100（F-15等で使用）のターボファンエンジンへと換装した通称“スーパー改”仕様を提案している。

初飛行から35年近い歳月を経て旧式化が進んでいる<夜鷹>であるが、後継機としては前述のスーパー改の他、中島の<鎮守>改、アメリカのF-15E<ストライクイーグル>などが提案されている。空軍はストライクイーグルを採用し、海軍も2000年代初頭に三者のうちどちらかの配備を行なうと予測される。

G13M1 11型 初期生産型。全機退役済み。

G12M2 21型 1968年初飛行。海軍型。対水上搜索レーダーとIRSTを搭載。

G13M3 31型 1970年初飛行。戦略爆撃任務の為に航続距離延長を図る。全機退役、一部偵察機に転用。

G13M4 41型 1977年初飛行。低空侵攻作戦に最適化された使用。

G13M5 51型 1979年初飛行。海軍型。アヴィオニクスを近代化、対艦ミサイル運用能力を獲得。

G13M-R1 11型を改造した偵察仕様。

G13M-R2 31型を改造した偵察仕様。

G13M-V 11型を改造した電子戦機。エスコートジヤマー

神楽「最後は日本版F-111（注5）。まあエンジン的にはイギリスのアレだけど」

深海「アレねえ。しかし<天雷>といい、これといい、幻のF-Xといい。イギリス製エンジンばっかだな」

神楽「日英同盟のよしみってヤツかね」

深海「しかし本編に登場したときは2人乗りに見えなかったが」

神楽「それは作者が下手糞だから」

深海「だね。しかし“スーパー改”（注6）って…」

神楽「ちなみに異世界情景でF-2スーパー改とP-XのFHI案だったかMHI案だったかが活躍する短編を構想中だとか」

深海「マジすか」

G14B0 ストライクイーグル

帝國空軍が＜夜鷹＞の後継として導入した戦闘爆撃機である。元はアメリカ空軍が制空戦闘機であるF-15イーグルを改良した戦闘爆撃機であるF-15E ストライクイーグルである。改良と言っても実質的にはまったく別の航空機であるといってもいいほど改造が施されている。機体構造からして60%も再設計が行なわれている、過酷な低空侵入任務に耐えられるようになっている。制空型のイーグルとは区別しなくてはならない。

小型通常爆弾から各種誘導爆弾、核兵器、さらには5000ポンド（2t）特殊貫通爆弾ディープスロートなど多彩な兵器を搭載可能で、特にディープスロートはF-111アードヴァーグかF-15Eにしか搭載できないほどの兵器である。その最大搭載量は11tに及ぶ。第二次世界大戦時最大の爆撃機であるB-29の爆弾搭載量が9tに過ぎないことを思えば、その凄さがわかるであろう。

帝國空軍はこの機体を夜鷹後継機として導入を開始し、三菱がライセンス生産を行なうこととなった。2000年1月時点で4機が配備され、試験中である。帝國空軍はこの機体を200機程度配備する計画である。

神楽「というわけで最後の機体はストライクイーグル。本編でも活躍予定です」

深海「活躍ってたって4機しかないけど」

神楽「ちっちゃっ。ハイスペックな試作機が単独で大活躍、無双するのはロボットモノのお約束だろう」

深海「いや。これは架空戦記だし。作者はロボットモノなんて特に出していないし。そもそも、そんな大それた機体じゃないだろ

う」

・作者注 そんな大それた活躍はしません
神楽「というわけで今日はここまで。次回は陸軍兵器、歩兵編よ」
深海「無視かよ！」

注1―復活の日―

小松左京氏のSF小説で、彼の長編第二段。1964年に発表。
生物兵器による世界の破滅を描く。

1980年には映画化されている。英国原潜とソ連原潜の死闘な
ど軍オタ的にも見所のある映画である。

注2―Su-15フラゴン―

旧ソ連が開発した防空戦闘機。ソ連国外へ輸出されず実戦にも使
用されなかったので、その実態は謎に包まれていた。日本では19
83年に大韓航空機007便を撃墜した機体として知られる。

注3―J-8II型―

中国が開発した防空戦闘機。中ソ対立によりソ連からの技術協力が
絶えた中国は独自にミグ21戦闘機を双発化したJ-8戦闘機を開
発し、さらに改良したのがJ-8IIである。その開発にあたり
Su-15を参考にしたと言われる。

実は作者が割と好きな戦闘機の1つ。

注4―F/A-18ホーネット―

アメリカ海軍の主力戦闘機である。かつての主力であつた迎撃機
F-14を補佐し、対地・対艦攻撃機としても活用できる万能戦闘
機として開発された。

＜旋風＞との比較の為にその寸法、重量を記しておく。

全長…17・07m

全幅…11.43m

空虚重量…10810kg

注5―F―111―

可変翼の戦闘爆撃機。ニックネームはアードバーク。元々は空海軍の戦闘機を一本化するために開発された機体であるが、その目的は達成されなかった。しかし爆弾積載能力、長距離航行能力、低空侵入能力に優れるF―111は空軍の爆撃機として重用された。

湾岸戦争では特に活躍をし、ステルス戦闘機に注目が集まりがちであったが最も多くの地上目標を破壊したのが他でもないF―111である。

注6―スーパー改―

元ネタはロッキード・マーチン社が提案した航空自衛隊の支援戦闘機F―2のバリエーションであるF―2スーパー改。長距離飛行能力、対地攻撃能力を向上させたものであるが、多分ジョークとして提示したんだろう。

登場兵器紹介 航空機編1（後書き）

本当なら“鷺は舞い降りた”の次に更新するつもりでしたが、どうしても時事ネタを。まあ笑い事ではないのですが。

そんなこんなで調子に乗っていたら文字数9000字越えてた：普段は3000～4000字代なのになぁ・・・

しかし“復活の日”は良い作品です。映画の方を見て、今日は古本屋版で小説を買ってきました。皆さんも是非。

（追加・2011／7／30）

著作権的に問題があると思われる部分を削除しました。

（追加・2011／12／3）

＜旋風＞と＜鎮守＞の推量重量比を簡単に計算してみたらエライことになったので、現実的な値になるように修正。ついでに説明文を加筆。

登場兵器紹介 歩兵の兵器編 1

神楽「というわけで、今回は登場兵器紹介、歩兵の兵器編よ！」

深海「ところで彼女がなぜここに？」

荻原「はじめまして。荻原里美です…」

神楽「いやねえ。やっぱり前回の騒動もあるし、疑問を提示をする役の人が居た方がいいと思ってね」

深海「なるほど。つまりド素人を配置することで、軍事に詳しくない読者目線で進めていこうというわけだね」

荻原「よろしくおねがいます」

深海「しかし最初に歩兵の兵器か。こういう場合は戦車からいくもんじゃないの？」

神楽「チッチチッ。なにを言っているの？戦場を占領する能力を持つのは歩兵だけ。歩兵こそが陸戦の主体であり、全ての中心なの。戦車も大砲も戦闘機も爆撃機も軍艦も全て1人でも多くの歩兵を1メートルでも前進させるためにあるの。そこらへんのところをキッチリと理解していないと困るよ？」

深海・荻原「ハイ！」

―拳銃―

現在、軍隊において拳銃は補助火器として扱われ、将校や砲兵、戦車兵、飛行兵など小銃を携行しない兵種の下士官兵の自衛火器として用いられる。帝國陸海空軍の正式採用拳銃は中央工業により開発・生産されている国産の四〇式拳銃である。

しかしながら、世界第二位の経済大国に成長したにも関わらず貧乏くさいことに未だに将校の拳銃は私費調達ということになっている。将校は各人がそれぞれ自分の好みで銃を選び購入している有様で、それ故に陸海空軍ともに欧米各国の様々な拳銃が氾濫している状況である。

ただ国費で調達され支給される弾薬は9ミリパラペラム弾のみなので、それを使用する拳銃を購入する場合がほとんどである。

四〇式拳銃

全長…197mm

重量…950g

使用弾薬…9mmパラペラム弾（9mm×19）

装填数…8＋1

帝國軍の正式採用拳銃。中央工業が開発、製造を行なっている。日本人の体格に合わせて設計が成されているので銃把も握りやすく外国製のものに比べると扱いやすいと言われている。しかしながら軍採用型は弾倉はシングルカラムのみで、しかもシングルアクション仕様というのが嫌われて、わざわざ外国製の拳銃を購入する将兵も多い。

なお民間販売型にはダブルカラム仕様やダブルアクション仕様も用意されていて、それを購入する者も多い。

神楽「というわけで、最初は拳銃よ。まあ補助兵器だけだね」

深海「未だに自費調達なんだ（汗）」

神楽「うん。私は国産の32口径（注1）小型オートマチックを使ってる。兄貴はシグ・ザウアーP228。うちの相棒（小野寺くんの事）は四〇式使ってるかな？時々、マグナム弾使う大型リボルバーとか購入してるバカもいる」

深海「カオスだ…」

萩原「あの…？」

神楽「はいなんでしょう？」

萩原「シングルなのか、とか、ダブルなのか、とかよく分からないんですけど…」

深海「よし。これでこそ君を呼んだ甲斐があったってもんだ。早速、

解説しよう」

神楽「では、ここに兄貴のP228と相棒の四〇式がある。前者はダブルカラム、ダブルアクション、後者はシングルカラム、シングルアクション。では早速、撃ってみよう」

突如として3人の目の前に現われた：

深海「なに！なんで！」

いちいち、驚くなよ。とにかく目の前に現われたテーブルの上
に2丁の拳銃が置かれている。弾倉は外された状態で、弾も込められていない。

神楽は2つの弾倉を手にとった。

神楽「見て。こっちのP228の弾倉は四〇式の弾倉より太いことが分かるでしょう？」

萩原「はい」

神楽は四〇式の弾倉をテーブルに置くと、どこからともなく現われた弾薬を：

深海「またかよ！」

：弾薬を弾倉に込め始めた。

神楽「ダブルカラムの弾倉の場合、互い違いに弾丸を装填して、前から見た場合に二列に並んで装填されることになる」

5発、弾を込めると弾倉をP228のグリップに差し込んだ。そしてそれテーブルに置くと今度は四〇式の弾倉を手にして込め始め

た。

神楽「逆にシングルカラムの四〇式は縦に一列に装填する。この違いの意味、分かる？」

萩原「同じ長さの弾倉ならダブルカラムの方が倍、弾を込められます！」

神楽「その通り！これがダブルカラムとシングルカラムの違いね。確かに弾数が多い方が有利ってのもあるけど、でもダブルカラムだと必然的に太くなるから、細いシングルカラムの方が持ちやすい。特に手の小さい人にはね」

深海「だから自衛隊の九ミリ拳銃（注2）もシングルカラム形式だ。日本人にはそちらの方が握りやすい」

神楽「では、早速撃ってみようか」

例によってどこからともなく射撃の的が現われて：

深海「…」

どこからともなく：

深海「…」

どこからとも：

深海「もうつつこまねえよ！」

チッ。とにかく、どこからともなく射撃の的が現われた。

神楽「自動拳銃と撃つときは銃上部の遊底スライドを引く。こうすることに
よって弾倉から弾が1発、銃の薬室に装填されるとともに撃鉄ハンマーが起

きる。銃というのは、この撃鉄が銃弾のケツの雷管を叩く事で火薬に点火して、その爆発で弾を飛ばすんだ」

神楽は四〇式のスライドを手前に引いた。

神楽「これでこの銃は何時でも撃てる状態ってことになる。この状態をコッキングと言う。では早速」

神楽は銃口を的に向けて、引き金を引いた。銃弾は見事に的に命中した。

深海「お見事！」

神楽「銃を撃つと、その反動でスライドが自動的に引かれ、薬室から薬莢を排出するとともに弾倉から新たな銃弾を装填し、撃鉄をまた起こす。これで連続して射撃ができる」

再び引き金を引き、また的に命中。

神楽「さて、とりあえず射撃を終えよう。今も撃鉄が起きたままのコッキング状態だ。これでは危険なので撃鉄を戻さないといけない。この作業は昔は暴発の危険がある作業だったけど、今はデコッキングレバーによって安全に撃鉄を降ろすことができる。これで安全装置を掛ければ、この銃は安全だ」

撃鉄を降ろし、安全装置をかけた銃を神楽は深海と萩原に見せた。

神楽「では、射撃を再開しよう。まず安全装置を外す。さて、ここから注目。こいつはシングルアクション仕様だから、このままで撃鉄が降りてるから引き金を引いても撃てやしない。なので」

神楽は撃鉄に指をかけて、そのまま起こした。

神楽「こうして自分の手で起こさなくてはならない」

引き金を引いて1発撃つ。さらに連続して撃って弾倉の弾を撃ちおえると、弾倉を外して銃をテーブルの上に置いた。

神楽「これがシングルアクション。さて、今度はダブルアクションのP228だよ」

テーブルから今度はP228を手にとる。遊底を引き弾を装填すると、デコッキングレバーで起きた撃鉄を元に戻した。

神楽「さて。シングルアクション式の銃の場合、自分で撃鉄を起こさないと射撃はできない。ではダブルアクションだと」

神楽が引き金を引くと、それに連動して撃鉄が自動的に起き、最後には銃弾の信管を叩き、9ミリ弾を放った。これも見事に命中。

神楽「このようにダブルアクションでは引き金を引きだけでいいわけよ」

萩原「なるほど。で、なんでシングルアクションの銃を採用しているんですか？聞いているとダブルアクションの方がよさそうですけど」

神楽「まあ撃鉄起こす機構の分、引き金が重くなるから、シングルアクションの方が撃ちやすい、当てやすいってのはある」

深海「まあ、自衛隊の9ミリ拳銃みたいなダブル・シングル両方使えるようにすれば済む話だけだね。だから実際的な理由はお役所仕事だからかな」

萩原「というと？」

神楽・深海「「だってお役所的には薬室に銃弾込めたままの拳銃を持ち歩くんなんてありえない、からさ」」
萩原「・・・」

―小銃―

小銃は陸軍歩兵の主力兵器である。ライフルとも。歩兵1人に1丁程度の割合で配備がなされ、主に近距離における対人戦闘に利用される。

かつては手動で一発ずつ装填するボルトアクション式が主力であったが、第二次世界大戦以後には連射が可能な自動小銃が台頭し、現在では特に反動が小さく連射性能に優れる小口径弾を使用する軽量な型が各国で使用されている。そのような自動小銃は突撃銃とも呼ばれている。
アサルトライフル

大日本帝國陸軍及び海軍陸戦隊では国産の小銃を利用している。1988年に正式採用された国産の突撃銃四八式の配備が行なわれているが、旧式の二〇式も多く用いられている。

四式小銃

全長…1120 mm

重量…4 kg

使用弾薬…99式普通実包（7.7 mm×58）

装填数…10

発射形式…セミオート

陸軍はかつてより自動小銃に大きな関心を持っていた。昭和7年には各社に自動小銃の開発を命じた。南部銃製造所の試製小銃は問題点をいくつか抱えていたものの優れた基本設計が評価された。この時は自動小銃の採用は見送られたものの、南部は独自に改良を続

けた。そして昭和16年に再び自動小銃の開発が始まると南部も9式7・7ミリ実包を使用する試製小銃を軍に提出して優れた性能を示したので、昭和19年に正式採用された。

本銃は7・7ミリ実包を使用する半自動小銃で、箱型弾倉に10発装填することができた。日本陸海軍に配備され、大陸方面で使われた他、韓国やタイなどに輸出された。

後継の二〇式の採用によって主力小銃としては現役の前線部隊から引退したが、後方部隊や予備役・民兵部隊には主力として装備され、現代でも保管され続けている。また一部は民間や警察に払い下げられ、警察ではMP5が配備されるまで警官突撃隊の主力火器であった。

軍の現役部隊では、憲兵隊の儀杖隊ぎじょうのみが使用している。

神楽「帝國版M1ガーランドってところかな？」

深海「史実の四式はいまいち実情がわからない銃だけど、こちらの方はいい感じみたいね」

神楽「そりゃ、ガーランドの真似事は違うからね。有坂弾に最適化された銃なんだから」

荻原「で、民兵とか警官突撃隊とか…」

神楽「まず民兵とはね、各都道府県知事および庁長官の下に編制されている郷土防衛隊を指します。帝國では陸海空軍に加えて郷土防衛隊、国家憲兵、海上公安局とあわせて帝國六軍と呼んだり。詳しくは後に」

深海「で、警官突撃隊は？」

神楽「こっちは史実でも存在した警察の特殊部隊で、今のSATに相当するの。まあ2・26の時には叛乱軍にまっさきに制圧されちゃったけどさ」

二〇式小銃

全長…1020mm

重量…3.9kg

使用弾薬…16式普通実包（7.7mm×38）

装填数…20

発射形式…セミオート／フルオート

日本軍は四式小銃を配備していたが、1950年代にソ連が中共軍にSKSカービンやAK-47を供与すると歩兵同士の近接戦闘で圧倒されるようになった。陸軍は鹵獲したSKSやAKの徹底的に研究し、使用弾薬である7.62mm×39弾に着目した。帝國陸軍は7.7mm×38弾（通称、アリサカショート）を開発し、それを使用する国産SKSとも言える十六式小銃を完成させた。試験で良好な成績を記録したが、一部がシナ戦線に持ち込まれただけで正式採用はされなかった。だが研究は続行され、フルオート射撃機能の付与してクリップ式弾倉を箱型弾倉に改め、折畳式銃剣を廃止して日本軍標準の三十年式銃剣を装着できるようにし、さらにクロムメッキを施すことで銃身寿命を向上させた改良型が二〇式小銃として正式採用され、四式の後継として各部隊に配備された。

二〇式は7.7ミリ有坂弾に比べると装薬量が少なく射程が短くなったが、従来型の九九式や四式に比べると射撃時の反動が低下している為、現場の部隊では歓迎された。60年代後半以降の生産型には軽機関銃的な運用を想定して二脚の使用が可能になっている。

日本を代表する小銃として長年親しまれたが、後継の四九式小銃が採用され第一線部隊から姿を消しつつある。

深海「日本版SKSか。でもいいのかな？7.62ミリNATO弾を思いっきり否定して」

神楽「ええやん。フランスだって自前の7.5ミリ弾使ったんだし」

深海「アメリカとマジ喧嘩したイギリスさんはなにを思うかね」

荻原「あの？なんの話をしてるんですか？」

神楽「その昔ね。アメリカとその同盟国は同じ銃弾を使おうという

話があったわけよ。そうすればいろいろと融通が利いて便利だからってね」

深海「詳しい経緯を話す前に銃弾の大きさの表し方を教えておこう。例えば、上の二〇式の場合」

使用弾薬…16式普通実包(7・7mm×38)

深海「となっている。で、この7・7mm×38ってのは、弾の直径が7・7ミリで薬莢の長さが38ミリってことを意味するんだ。直径が太ければ太いほど威力が増すし、薬莢が長ければ長いほど火薬の量が多くなってやはり威力が増す。ただし火薬の量が多すぎると反動が強くなって撃ちにくくなるけどね」

神楽「で、アメ公は“やっぱ銃弾は威力があってなんぼだぜ!”って思ってた30口径(7・62mm×51)弾を開発したんだ。一方、イギリスは“自動銃の時代は反動をなんとかしなきゃな”と考えて威力は控えめだけど反動の小さい280口径(7・1mm×43)弾を開発したんだ。で、どっちをNATO標準にするかで揉めたんだけど、結局アメリカが30口径弾の採用を強行して、NATO標準弾になった。それで50年代以降に西側で開発された小銃は大抵、7・62ミリNATO弾を使っている」

深海「自衛隊の64式小銃もそうだね」

萩原「へえ」

深海「で、この話にはオチがあってね。その後、ベトナム戦争が起きたんだけど、その戦訓から“やっぱ時代は小口径弾だよな!”と考えたアメリカ軍は、威力は控えめだけど反動の小さくて使い勝手のいい5・56mm×45弾にとっとと移行。それでイギリス激怒(笑)」

萩原「あらー(苦笑)」

三二式騎兵銃

全長…750 m

重量…3.0 kg

使用弾薬…16式普通実包(7.7×38)

装填数…20/30

発射形式…セミオート／フルオート

大戦中に導入した各種の機関短銃の後継を探していた陸軍はアメリカがベトナム戦争中に導入したM16突撃銃の短銃身モデルであるCAR-15カービンに着目し、二〇式小銃の短銃身モデルの開発を決意した。

銃身を切り詰めるとともに、伝統的な曲銃床を折畳式の直銃床と銃把に改めてフルオート時の精度を向上させている。またフォアグリップを装着することもできる。

1972年に正式採用された本騎兵銃は主に空挺部隊や機械化部隊に配備されたが、四九式小銃によって更新されている。しかし5.56ミリNATO弾よりも威力が優れている7.7ミリ弾を使うことから、今でも特殊部隊などでは広く使用されている。また5.56ミリを上回る高威力に加えてカラシニコフ小銃よりも命中精度が高いのでPMCなどにも愛用する者が多い。その為、海外でも弾薬が入手しやすいようにカラシニコフ規格の7.62ミリ×39弾を使う仕様も生産されている。

深海「なんだこれ？こんなもんが何時の間にか追加されているぞ？」
神楽「唐突に思いついたらしい」

四八式小銃

全長…920 m

重量…3.5 kg

使用弾薬…48式普通実包(5.56mm×45)

装填数…30

発射形式…セミオート／3点バースト／フルオート

二〇式小銃の後継として開発されたNATO標準の5.56ミリ弾を使用する自動小銃。開発・製造はAR-18小銃のライセンス生産をしていた豊和工業が担当した。

射撃時の反動は同クラスの他国の小銃に比べても低く抑えられている。また従来の単射、連射に加え3点制限点射モードバーストも加わっていて、その機構は独立したユニットになっており、簡単に取り外して整備が可能であり、また外したままで単射および連射だけの小銃としてそのまま使用することもできる。

二〇式小銃に代わって歩兵部隊を中心に配備が進められているが、完全に更新するに至っていない。

派生型として折り畳み銃床型の四九式小銃と銃身を延長して照準眼鏡を取り付けた五〇式狙撃銃がある。

深海「まんま自衛隊の89式小銃だね」

神楽「うん。そうだね。取り外し可能な独立した3点バーストユニットは89式の優れた部分だからね」

深海「今度はさすがにNATO標準弾を採用すか」

萩原「ところで3点バーストって何ですか？」

神楽「それはね。それまでは自動小銃ってのは、引き金を引くごとに1発ずつ銃弾を発射する単射と、引き金を引いている間は弾が供給される限り何発でも撃ちつづける連射フルオートのどちらかを選択して使う場合がほとんどだったわけよ。やっぱり威力があるのはフルオートなんだけど、どうしても弾を無駄遣いしてしまう傾向がある」

深海「そこで、一定数の弾を撃つと銃撃が止まるようにしたのがバーストモードさ。3点バーストでは、3発撃つと引き金を引いても弾が出なくなる」

萩原「なるほど」

―機関銃―

機関銃は銃弾を連射する強力な自動火器である。突撃銃も銃弾を連射する機構を備えているが、持続射撃能力や安定性が機関銃とは段違いである。機関銃は他の火器に比べるとベルト給弾方式を利用するなど長時間連続して射撃できるような造りになっていて、しかもその反動に耐えられるように小銃に比べると頑丈に造られていて重いのが一般的である。また安定した射撃ができるように三脚や二脚を利用する事も多い。

日露戦争の頃から野戦部隊で一般的に利用されるようになった。主な役割は弾幕を張って敵が動けないように釘付けにして、味方小銃兵の攻撃を支援することである。第一次大戦では各分隊に1丁以上の機関銃を配属する戦鬪群が編み出された。友軍部隊の支援を受けなくても分隊が独立して敵に攻撃を行なえるようになり作戦の柔軟性が大きく向上した。この戦法・編制は現在の帝國陸軍にも受け継がれている。

二〇式軽機関銃

全長…1180mm

重量…11kg

使用弾薬…16式普通実包（7.7×38）

装弾数…30

発射形式…フルオート

16式普通実包を使う二〇式小銃の採用にあわせて弾薬を共有できるように九九式軽機関銃を改良して16式普通実包を使えるようにしたもの。

給弾は弾倉式でベルト給弾式に比べると持続射撃能力に劣るとい

う欠点があるが、原型である九六式及び九九式の高精度を受けついでおり、命中精度と機械的信頼性の高さから陸軍兵士に高い評価を受けている。また何故か銃剣装着機構も廃止されることなく継承されている。

陸軍は分隊支援火器として各分隊に一丁の割合で配備してきたが、新型のミニミ機関銃に更新され、退役しつつある。

神楽「というわけで機関銃だよ」

深海「九九式改かあ」

神楽「まあイギリスだってブレン機関銃を湾岸の頃まで使ってたんだし」

深海「劇中はもう世紀末だぞ！」

普式軽機関銃ミニミ

全長…1038mm

重量…6.9kg

仕様弾薬…48式普通実包(5.56mm×45)

発射形式…フルオート

ベルギーFN社が開発した分隊支援火器である。日本陸軍及び海軍陸戦隊が二二式軽機関銃の後継として採用、ライセンス生産をして、各分隊に1丁の割合で配備が行なわれている。

日本軍版では三脚や照準眼鏡を装着できるように改良が施されている。

深海「こちらも、そのままミニミ機関銃ですか」

神楽「後述のように四八式の軽機関銃バージョンと競争試作をして勝ったの」

二二式機関銃

全長…1200mm

重量…12kg

使用弾薬…99式普通実包(7.7mm×58)

発射形式…フルオート

陸軍が始めて開発した汎用機関銃。三脚を装着することで重機関銃、二脚を装着することで軽機関銃として運用が可能である。世界の機関銃の趨勢に併せてベルト給弾式を採用し、それまでの機関銃に比べると持続射撃能力が向上している。

二〇式機関銃の短射程、低威力を補う目的で各歩兵小隊に1丁の割合で配備され、小隊全体の支援を行なう。また戦車やヘリコプターの搭載機関銃としても利用されている。

二〇式機関銃の方はミニミ機関銃と交代しつつあるが、こちらの方は現在も生産が続けられ、引き続き配備される予定である。

また二二式機関銃を基に二八式車載重機関銃が開発された。生産は中央工業が担当した。

深海「これは現実の自衛隊には無いカテゴリーのものだね」

神楽「位置付けとしては旧ソ連のPK汎用機関銃(注4)に近いよ」

深海「それにしても採用年は1962年…まさか!」

神楽「大丈夫。こっちは信頼性の高い良い機関銃だよ。どっかの欠陥機関銃(注4)とは違って“言う事を機関銃”とか“無い方がマシガン”とかは言われない」

深海「ならいいけど」

萩原「?????」

12.7^{ミリ}重機関銃

全長…1560mm

重量…38.0kg

仕様弾薬…12.7mm×99 NATO弾

発射形式…フルオート

ブローニングM2重機関銃をライセンス生産したもの。原型は1933年にアメリカ陸軍に採用された対観測気球用機銃であったが、その威力と射程から対空・対地の各種目標に対して活躍した。

日本はそれまで航空機銃としてM2のコピー型を使用していたが、第二次世界大戦時におけるアメリカ陸軍での活躍に注目して陸戦火器としても導入を開始し、今では各種車輛の搭載火器として用いられている他、各歩兵中隊本部に対空火器として配属されている。

神楽「というわけで史上最高の機関銃キャリバー50ことM2重機関銃よ！」

荻原「80年前のものが現役なんですか？」

深海「優れた兵器は何十年も使われるものさ」

―狙撃銃―

狙撃銃とは、その名の通り狙撃に使用する銃の総称である。狙撃は遠距離から精密射撃で敵を倒す戦法であり、やり方によっては少数で多数の敵の進軍を阻止することも可能である。

九九式狙撃銃

全長…1120mm

重量…3.6 kg

仕様弾薬…99式普通実包（7.7 mm×58）

装填数…5

第二次世界大戦中に主力として使われた九九式小銃を狙撃銃に転用したものである。九九式小銃は大戦末期に濫造されたものを除けば、“キング・オブ・ボルトアクション”と称されるほどの精度の高いライフルで、狙撃銃としても十分な能力を備えている。

四式自動小銃や二〇式小銃の配備が行なわれ主力小銃として九九式小銃が引退してからも遠距離から精密射撃が可能な狙撃銃としては使われつづけ、現在でも配備・調達が継続されている。銃床を合成樹脂製のものに変更されているなど細部に改良が加えられているが、基本構造は60年前から変わっていない。

また軍向けの狙撃銃として以外にも、猟銃やスポーツライフルとして市販、さらに海外への輸出も行なわれている。

神楽「というわけで狙撃銃よ」

深海「君の恋人も狙撃手だったよね」

萩原「まあ（顔を赤らめて）」

二〇式狙撃銃

全長…1120 mm

重量…4.2 kg

使用弾薬…99式普通実包（7.7 mm×58）

装填数…10

発射形式…セミオート

四式小銃を狙撃銃として改修したもので、四式の中から精度が高いものを選んで2脚とスコープが追加された仕様である。名称は狙撃銃であるが、実態としては選抜射手ライフルとして運用されている。

て、二〇式小銃の短射程を補う為に各分隊に一丁の割合で配備されている。九九式狙撃銃とともに長く帝国の主力狙撃銃であったが、射程が比較的長い四九式小銃が主力小銃として配備されると分隊狙撃銃の必要性は薄れ、後継の五〇式狙撃銃の配備が始まったこともあり、次第に姿を消しつつある。

神楽「これは日韓大戦の桜井くんが使う64式改に近いタイプだね」
萩原「それで、選拔射手^{マークスマン}ってなんですか？」

深海「簡単に言えば狙撃手と普通の歩兵の中間ってところかな」

神楽「つまりね。普通の狙撃手ってのは単独で敵地に潜入して敵の重要目標を狙撃する、まあ暗殺者みたいな感じに対して、マークスマンは部隊と一緒に行動して普通の小銃じゃ届かない距離に居る敵や指揮官みたいな重要な敵を狙い撃ちする。機関銃と同じで歩兵を支援する役回りよ」

深海「桜井くんは狙撃手ということになっているけど、描写や武器を見る限り選拔射手に近いよね」

五〇式狙撃銃

全長…970mm

重量…3.9kg

仕様弾薬…48式普通実包(5.56mm×45)

装填数…30

発射形式…セミオート

二〇式狙撃銃の後継として配備されている狙撃銃である。四八式小銃の派生型の一つで、四八式の銃身が延長し、照準眼鏡^{スコープ}と2脚（固定・着脱不可）が装着したものである。

元々は二二式軽機関銃後継の分隊支援火器として開発が進められ、FNミニミに敗れて不採用となったものに照準眼鏡を装着して狙撃

銃に転用したものである。同様の例としてイギリスのL86がある。また99式普通実包ないし7.62ミリNATO弾を使う仕様も開発されていて少数が導入されている。

神楽「というわけで二〇式の後継。本文中にあるようにイギリスのL86のパロディ」

深海「あの糞小銃のパロディか」

荻原「糞…ですか…」

深海「まあ日本で言うなら62式機関銃みたいなものかな。もしくは戦前の拳銃…」

神楽「まあ世紀末の帝國で大活躍の予定ですぞ旦那。イヒヒヒヒヒ」
深海「そうかあ。そいつは楽しみだ（棒読み）」

荻原「…」

九七式自動砲

全長…2060mm

重量…59kg

仕様弾薬…20mm×124

装填数…7

発射形式…セミオート

元々は対戦車火器として戦前に開発された対物ライフルである。

結局、当初の目的である対戦車任務には第二次大戦中の戦車の急速な進歩により力不足になってしまったが、陸軍は20ミリ弾が安定した軌道で飛び、しかも相当距離が離れていても威力が衰えない点に着目し長距離狙撃銃に転用した。特に第二次世界大戦後半の朝鮮半島山岳部での攻防ではその威力を存分に発揮し、拠点防御に威力を発揮したと言われ、目標との距離が2120メートルという長距離狙撃記録も生まれた。余談ながらこの記録は、ベトナム戦争中に

アメリカ軍の著名な狙撃手が塗り替えてしまった。その時はM2重機関銃を狙撃銃に転用して使用したという。

大重量で効果的な運用に10名程度の兵士が必要など狙撃銃としては不便な点もあったが、長年歩兵の守護神として兵士たちに愛されてきた。生産は1960年代半ばまで続き、最終的な生産数は3000挺に達したと言われる。

その後も各大隊の独立狙撃班などで使われつづけたが、1980年代後半に後継の12.7耗対物狙撃銃の配備が開始され、次第に姿を消しつつある。

神楽「というわけで旧軍唯一の対戦車ライフルだ」

萩原「これで戦車と戦っていたんですか」

深海「第二次大戦前の戦車はまだまだ装甲が薄かったからね。まあノモンハンの段階で既に時代遅れな感じだったけどね。しかし、20ミリに撃たれたらどうなるんだろうな」

神楽「そりゃ、腹に当れば大穴が空き、手足に当れば千切れて飛んでいく感じだろうね」

萩原「ひええ」

深海「ところで著名な狙撃手って」

神楽「ホワイトフェザーこと、カルロス・ハスコックだろう」

12.7^{ミリ}耗対物狙撃銃

全長…1447.8mm

重量…12.9kg

仕様弾薬…12.7mm×99 NATO弾

装填数…10+1

発射形式…セミオート

バレット社のM82A1対物ライフルをライセンス生産したもの

である。1987年に輸入が始められ、各歩兵大隊の独立狙撃班や特殊部隊、工兵部隊に配備された。本来の用途は長距離・対物狙撃であるが、工兵部隊では地雷の処理に利用している。

運用に人手が必要であった九七式と異なり、1人で使用できるところで狙撃部隊の行動能力は大幅に向上したと言われる。

なお発売された当初はバレットM82シリーズはまったく売れず、日本陸軍の導入が各国の採用の皮切りになったとも言われる。

神楽「これが最後ね。長かったなあ」

深海「いわゆるバレットライフルか」

神楽「ちなみに史実で各国導入の皮切りになったのはスウェーデン」

深海「ところで萩原さんは？」

神楽「さっきの千切れる発言で参ってるみたい」

萩原「…」

注1―32口径弾―

7.65mm×17の小型実包。低威力だが使い勝手のいい弾丸として主に護身用や警察用拳銃に使用されてきたが、近年では欧米の警察はより強力な9mmパラペラム弾に移行している。しかしながら日本の警察―史実でも帝國世界でも―は32口径に拘りがあるらしく、より大型の銃弾を使う拳銃の32口径使用と特注して配備しているほどである。

注2―9ミリ拳銃―

自衛隊の正式採用拳銃。シグザウアーP220をライセンス生産したもの。

注3―欠陥機関銃―

自衛隊の62式機関銃のこと。部品の脱落や作動不良が多かったらしく、悪評ばかり聞こえてくる。真相は筆者の知るところではないが。

注4―PK汎用機関銃―

ソ連の機関銃。分隊支援火器として7.62mm×39弾と使うカラシニコフ小銃改造のPK軽機関銃を使用しているが、その低威力・短射程を補うために小隊直属の支援火器として配備されているのが7.62mm×54R弾を使うPK機関銃である。二二式重機関銃と同じような位置関係にあるのだ。

登場兵器紹介 歩兵の兵器編 1 (後書き)

航空機編を加筆修正しました。

平成22年度防衛省概算要求紹介

リュドミラ「さて。今回の萌えない神楽学校は特別編なのだ」

神楽「で、なにをするんだ？」

リュドミラ「8月31日、遂に防衛省の来年度予算概算要求が発表された。だが各省庁の概算要求について民主党は早速、要求を白紙化して再提出しろ、とほざいているがな。半年かけて用意した概算要求をやり直せだと。官僚たちはてんてこ舞いなのだ。ふっふっふっふ」

深海「まあ、民主党は予算成立の仕組みをそもそも理解していない可能性まであるしな」

荻原「まさかあ」

神楽「しかし国家戦略局担当大臣に就任することが決まった菅直人議員が概算要求の締め切りを衆院選挙の翌日の8月31日に行っていることについて“概算要求通りに予算を通そうと企んでいる。これが霞ケ関のやり方だ！”と厳しく批判していたのも事実だからな」

リュドミラ「締め切りは昭和22年にできた法令で決まっていたというのにだ。ふっふっふ」

荻原「もしかして閣僚達は例年通りにやっただけってことですか？」

神楽「無論」

荻原「…」

深海「ともかく、その概算要求を紹介しようというのだな？」

リュドミラ「その通りだ。作者的には防衛省関連のウェブページでは一番おもしろいところであるから、みんなにも是非見て欲しいのだ」

荻原「あの…貴女はどちらさま？」

リュドミラ「ワチキのことか？ワチキはリュドミラ。親しき者はリユダと呼ぶ。作者が無謀にも構想中の新小説の主人公なのだ」

荻原「すごいですねえ。リュドミラさん」

神楽「では、早速、本題にいつてみよう！」

2ちゃんねる軍事板 【4万t】海自 22DDH考察 一番艦

【空護?】より転載。

22年度概算要求で新たに加えられた主なもの

- ・PAC3を全国6高射群に配備
- ・F-2へのAAM-4搭載改修とレーダー改修
- ・F-15のECM能力向上
- ・満載2万5千トン級の新拡大ひゅうが型1隻の整備
- ・新音響測定艦の整備
- ・掃海用MCM-101の整備
- ・海賊対策用LRADの整備
- ・代替整備予定のない4隻の護衛艦の早期除籍化
- ・新戦車10式の整備
- ・新NBC偵察車の整備
- ・第1師団を即応近代化対処用に改編

- ・O3式中距離対空改の開発
- ・防空用高出力レーザーの開発
- ・戦闘機用先進センサシステムの開発
- ・電波・光波複合センサシステムの開発（巡航・弾道ミサイル・ステルス機探知用）
- ・統合通信衛星・宇宙監視衛星の研究
- ・サイバー防衛準備室の設置とサイバー防衛研究
- ・装軌車用ハイブリッド動力（原動機＋蓄電池）の研究

・防衛政策局、統幕監部の組織強化と（文武官の混在化と次官新設）

、整備計画局の新設

・中国軍への留学・招聘、ベトナム軍人の招聘などの交流拡大

深海「他にもいろいろとあるがね」

リュドミラ「しめて4兆8460億円なり。前年比プラス約1400億円増の3%増なのだ」

神楽「ふっかけたねえ。まあ、あくまでも概算要求だし」

深海「民主が政権とっちゃったからね。どれだけ減らされるか見ものだ。なにしろ、あそこは過去に防衛費5000億円減を掲げているんだ」

荻原「過去に、ですが。今は違うんですか？」

深海「いや。そもそもそういう予算をマニフェストに出さなくなっただ。だから5000億円減を撤回したわけではない」

リュドミラ「しかも社民党の辻本が防衛大臣の椅子を求めているというではないか。ふっふっふっふっ」

深海「注目はやはり22DDHか」

神楽「うむ。時事通信の報道によれば、22DDHは基準排水量1万9500tで、5機が同時離着艦可能。最大航空機搭載量はヘリ14機。ひゅうが型よりも格段に大型化している」

ちなみにひゅうが型は基準排水量1万3500t。同時離着艦3機、搭載量11機。

リュドミラ「注目すべきは単なるヘリ空母ではなく一種の多目的母艦として計画されている点なのだ。洋上補給能力を持ち、しかもトラック50台、人員4000人を輸送する能力があるという」

深海「人員4000人は兵員4000人の間違いか、災害時などに民

間人を運ぶ際の最大値であるらしい。兵員4000人なら明らかに多すぎだ」

神楽「満載4万トンのワスプ級強襲揚陸艦も精々2000人が限度だからね」

リュドミラ「イタリアの＜カヴール＞やスペインの＜フアン・カルロス1世＞のような空母兼揚陸艦というのは世界のトレンドになりつつあるからなあ。ニホンもその流れに乗ったというわけなのだ」

神楽「だが民主党政権では難しいのではないか？」

深海「予算削減圧力を引き受ける被害担当艦だ！という見方もあるね」

神楽「先頭に書かれているのは弾道弾防衛に関してね」

深海「これまで3個高射群（2個高射群に配備済み）に配備する、という方針から全高射群に拡大して、ほぼ全土に配備されるわけだ。まあ射程は短いから全土をカバーできるわけではないけど」

リュドミラ「迅速に機動展開、長期の任務遂行のための機動展開車輛、隊員の待機用テントの整備というのも興味深いのだ。これは北朝鮮のテポドンⅠⅠ発射の時の教訓かもしれん」

荻原「次に書かれているのは巡航ミサイル対策ですね。日韓大戦で早速高麗軍が日本に撃ちこんでいます」

神楽「中国、韓国は巡航ミサイル整備を進めている。弾道ミサイルとともに対策が急がれる分野ね」

深海「で、それでその対策が」

・03式中距離対空（改）の開発

・防空用高出力レーザーの開発

萩原「レ、レーザー？」

神楽「日本もレーザーに手を出す時代が来たか」

リュドミラ「レーザーが完成したら次はドリルなのだ。ふっふっふっふ」

深海「まああくまで巡航ミサイル防衛用だから射程は短いのだろう。まあ物理的にミサイルを破壊するならかなり高出力が必要だが」

神楽「アメリカとイスラエルの開発しているTHEL、つまり戦術高エネルギーレーザーは小型のロケット砲や迫撃砲弾あたりの迎撃がやっとなようであるが。どれだけの規模になるのやら」

深海「まあ、鳩山新総理への餌な感もなきにあらずだが」

萩原「と、言いますと？」

リュドミラ「小沢前代表が「第七艦隊だけでいい」発言で揺れている頃、鳩山新総理は「日本独自でレーザーミサイル防衛網をつくる」と息巻いていたのだ。ふっふっふっふ」

萩原「…」

神楽「で、それが日本の総理だよ！総理だよ！」

深海「それに03式中SAM改良か。能力向上とともに取得コスト低減…やっぱ高かったか」

深海「続いては航空優勢の確保。中国も韓国も空軍力を向上させているからね」

- ・F-2へのAAM-4搭載改修とレーダー改修
- ・F-15のECM能力向上

神楽「というわけで念願のF-2へのAAM-4搭載改修開始か。」

F-4EJ後継なし、純減が噂される中で不幸中の幸いかもしれないね」

萩原「AAM-4というのは？それが搭載されるとどうなるんですか？」

深海「AAM-4というのは航空自衛隊の空対空ミサイルだ。それまでのAIM-7スパローミサイルは発射したら敵に命中するまでレーダーで敵を照準し続けなければならなかった。だからその隙に攻撃を受ける危険性がある。しかしAAM-4であればミサイルに搭載するレーダーで自ら敵を照準して追尾するんだ」

神楽「それ故に隙を突かれる心配もないし、別の敵を攻撃することもできる。空対空戦闘能力は飛躍的に上昇するよ」

萩原「なるほど」

深海「それに加えF-15の改修。それまでの近代化改修に加え、新たに電子戦能力を向上させ防御力を高める。航空自衛隊は着実に質的向上を目指している」

神楽「しかし、やはり新しい戦闘機がないと苦しいな」

リュドミラ「レーザーにも驚かされたが、次もなかなか凄いことが書かれているのだ。ステルス機対処技術の研究とは。まあしかし何れは必要になる」

神楽「今でこそステルス機はアメリカが独占しているけど、将来的には各国も保有を開始するのは確実ね。ロシアはPAK-FA、中国はJ-XXというステルス機計画を進めているし。あとF-35は…大丈夫なのかな…」

・戦闘機用先進センサシステムの開発
・電波・光波複合センサシステムの開発（巡航・弾道ミサイル・ステルス機探知用）

深海「前者は戦闘機に搭載するもので、図説ではレーダーの性能をさらに高めるとともに赤外線センサーや電波傍受システムを組み合わせてステルス機への対処能力を高めるようだ」

神楽「問題は電波・光波複合センサシステムの方ね。図を見る限りでは、まさに日韓大戦劇中のXEP-1Cね」

リュドミラ「P-Xらしき機体の下部に板状の…フェイズド・アレイレーダーかな？…が備え付けられ、上部には赤外線センサーを装備しておる」

深海「作者は江畑謙介氏の著作の情報を元にXEP-1Cを描くつもりであったのだから、いよいよ現実世界でも動き出したか」

リュドミラ「次は島嶼侵攻対策なのだ」

深海「とりあえず海空自衛隊と協力しながら西部方面隊で演習するよってことと、あとはヘリコプターの整備だね」

リュドミラ「気になるのは最後の将来多用途ヘリコプターの研究なことだ。運動性向上のための研究とだけあるが、もしかして偵察ヘリに引き続きヘリの国産化を進めるつもりなのか？」

荻原「次はテロやら特殊部隊やらへの攻撃の対応、と」

深海「都市型戦闘訓練とか警察との連携強化とかお馴染の項目に加え、注目は次の二つ」

- ・新戦車10式の整備
- ・第1師団を即応近代化対処用に改編

神楽「いよいよ10式戦車調達開始かあ」

深海「予算節約のために4年分58輦一気に調達だってさ。日韓大戦の総数40輦程度はなんとか回避かな」

リュドミラ「まあ概算要求通りに通ればの話なのだ」

神楽「戦車師団解体を主張する民主党が戦車の量産なんて認めるかねえ。ポスト冷戦時代に新しい戦車なんていない！と戦車調達そのものをやめかねん」

深海「暗いこと言うなよなあ」

萩原「まあまあ」

深海「第1師団の改編ってのは具体的にどうなるのかよくわからないなあ」

深海「次は化学・生物兵器対策か」

リュドミラ「能力の充実というお決まりの文句が書かれているのだ。そして注目は…」

・新NBC偵察車の整備

深海「将来装輪戦闘車輛シリーズの第一弾の配備が開始か…」

萩原「将来装輪戦闘車輛とは？」

深海「つまりだね。同じ車体をベースに様々な用途の車輛を開発して、予算の節約をしようというお話だ。それで陸上自衛隊では車体を共通化した様々な装甲車輛を研究していたんだ」

神楽「この後に機動戦闘車と近接戦闘車が続くはず。どうなるかは知らんがね」

リュドミラ「さらに言及すべきことはNBC偵察車は名前の通りに様々な状況に対応できるということなのだ。Nは放射能汚染、Bは生物汚染、Cは化学汚染を示す。従来の化学防護車は放射能汚染と

化学汚染にしか対応しておらず、別に生物偵察車という生物兵器・災害用の専用車輛を必要としていたのが、これからはこれ1台で大丈夫なのだ」

荻原「便利ですね」

深海「それから災害対策、新型インフルエンザ対策と続く」

荻原「自衛隊も新型インフル対策をするんですね」

リュドミラ「ちなみに政府の対策は民主党によって止められるかもしれないぞ。民主党は補正予算の未執行分の執行凍結を主張しているのだ。そして新型インフル対策は補正予算に組み込まれているのだ。まだ決まったわけではないがな。ふっふっふっふっ」

神楽「そしてその後に平素からの監視活動拡大とある」

深海「P-1とかSH-60Kの取得とか、まあこれまでの調達の延長だね。あとAWACS、AEWの能力向上と」

リュドミラ「注目は次のところかな？上に書かれていないのも含まれるが」

- ・新音響測定艦の整備
- ・滞空型無人機に関する海外調査
- ・中距離型無人偵察機の実証研究

深海「中国や韓国が潜水艦を増強しているからね。音響測定艦は重要だ」

神楽「中距離型無人偵察機というのは概算要求の資料を見る限り、日韓大戦劇中にも登場したTACOMの偵察型のようなね」

荻原「では滞空型無人機というのは？」

リュドミラ「日韓大戦劇中でも説明されておるだろう？TACOM-Rは平時の監視任務用には適していないのだ。つまりそういう任

務のための偵察機ということだろう」

神楽「これはネット上で聞いた受け売りなので話半分で聞いて欲しいが、なんでも一般の航空路と重ならないように無人偵察機を飛ばそうとすると日本の場合、硫黄島あたりから飛ばさないといけないそう。そして、それではグローバルホークでも航続距離が足りない」

深海「そして技術研究本部のホームページなどを見ると、防衛省自衛隊はそれを自前で用意するつもりなのかもしれない」

神楽「それから国際貢献とか各国軍との交流とかそんな話が続いて……」

神楽「宇宙関連施策の推進とC4ISR能力の向上と。内容はこんな感じ」

- ・統合通信衛星・宇宙監視衛星の研究
- ・サイバー防衛準備室の設置とサイバー防衛研究

荻原「宇宙関連ってのはなんとなくわかりますけど、C4ISRとこののは？」

深海「C4ISRというのは指揮、管制、通信、コンピューター、コマンド コントロール コミュニケーション インテリジェンス ベイランズ コンナイス情報、監視、偵察の頭文字を示す。つまりだ。敵の様子を探る情報収集能力を高めたり、通信システムを改善して、これまで声だけでやり取りをしていたのを図説とか映像とかいろいろなデータをやり取りできるようにしたり、そういう風に単純に戦車を増やしたり大砲の威力を上げたりとかそういったことに頼らずに効率を高めて実質的な戦闘能力を高める、ということだ」

荻原「よく分かりません」

リュドミラ「まあ勘弁してやれ。作者も概念はなんとなく理解して

いるが、その程度なのだ。ふっふっふっふっ

神楽「まあ大規模な軍拡は難しいから、少数の戦力も最大限の効果を發揮できるように！ってことだよ。まあ戦争ってのは必ず被害が必ず生じるものだから最小限の戦力で最大限というのはどうも疑問を感じるのだけど」

深海「確かに。戦争をするには損害分を補充できる余分な戦力が必要なんだけどな。無駄扱いされているけど…」

神楽「それであらたに作られるのがサイバー防衛隊か。レーザーといい、何かSF染みてるな」

リュドミラ「しかし、コンピューターネットワークへの攻撃は絵空事ではないのだ。欧州や韓国でも既に大きな被害を出しているからな」

神楽「中国には“超限戦”という新しい戦略思想を構想しているし、北朝鮮もそれに倣ってサイバー攻撃能力を高めているというしね」
深海「そして…」

・装軌車用ハイブリッド動力（原動機＋蓄電池）の研究

荻原「自衛隊も地球温暖化対策をする時代なんですね」

深海「そりゃCO2排出については国際的な義務を背負っているしね。民主党は05年比30%削減なんて無茶な目標を掲げているが大丈夫か？」

リュドミラ「一世帯あたり36万円の負担なのだ。まあ“賢い有権者”の諸君は当然知ってて民主党に投票したのであろう？ふっふっふっふっ」

神楽「あとは防衛省の組織を改善しますよって話ね」

・防衛政策局、統幕監部の組織強化と（文武官の混在化と次官新設）、整備計画局の新設

深海「次官の新設ってのは結構大きいように思うがどうなんだろう」
荻原「と、言いますと？」

神楽「次官というのは大臣に次ぐ省庁のNO・2でね。通常は政務次官と事務次官がいる。政務次官というのは国会議員の中から選ばれる。そして事務次官は官僚のNO・1。つまりこの2人で議会と省庁のすり合わせをするわけだ」

深海「で、この概算要求では議員の政務次官と官僚の事務次官に自衛官の次官を加えることを提言している。内局の自衛隊支配とも言われる現状に風穴を開けることができるわけだ」

神楽「それに隊員の充足率向上と。しかし、また凄いことを」

・代替整備予定のない4隻の護衛艦の早期除籍化

リュドミラ「海自艦艇の乗組員の充足率は凄いことになっているのだ。まあしかたがない」

神楽「本当なら人を増やすべきなんだろうけどね。艦を減らしてその分、他艦の定員を充足かあ」

荻原「あれ？深海さん？」

深海「はっ。いよいよ海自も大軍縮開始か：どんどんやっちゃまえ！これまで陸自が受けた試練を海自も受けてみろてんだ！コピー自腹。装備も一部自腹。へっへっへっへっ」

荻原・神楽「：」

リュドミラ「暗黒面に侵されているな：」

神楽「まあ注目すべきところはこれくらいかな？」

深海「あとは“主要な研究開発”の欄に新規事業としてXASM-3の開発が書かれているくらいだね」

荻原「XASM-3とは？」

神楽「Xはまだ正式に採用されていないことを示し、ASMとは自衛隊では空対艦ミサイルを示す。つまり航空機に搭載し、空中から

敵の軍艦などを攻撃するミサイルのことなの」

リュドミラ「今、航空自衛隊ではASM-1とASM-2の二種類のミサイルを使っているのだ」

深海「で、実は自衛隊では過去にそれらの後継としてXASM-3の開発を進めていたんだ。なんでもロケットエンジンとラムジェットエンジンを組み合わせた推進機関で超音速飛行し、ステルス形状で、敵のレーダー波を追尾するモードもあるとか…」

萩原「なんか凄いですね」

深海「まあ開発中止になっちゃったんだけど」

神楽「これはその復活ということでもいいのかな？」

リュドミラ「やっと終わったのだ…」

深海「長かった…」

神楽「というわけで、皆さんも防衛省の概算要求をご覧になってはいかが？防衛省のサイトのトップページから“予算等の概要”を押すと見れますよ」

深海「あと“各種資料”から“評価結果”というのも見えてみるとおもしろい」

萩原「それではありがとうございました」

平成22年度防衛省概算要求紹介（後書き）

というわけで、今回は趣をかえて防衛省が財務省に提出した概算要求を紹介してみました。ま、盛大に削られるんでしょうけどね（涙）

登場兵器紹介 歩兵の兵器編2

神楽「前々回に引き続き帝國世界の歩兵の兵器を紹介するよ。今回は重火器編」

深海「また長くなりそうだな」

荻原「それでは早速…」

―携帯対戦車火器―

七式十糶^{センチ}半無反動砲

口径…105m

砲身長…3300m

重量…205kg

射程…7000m

帝國陸軍は枢軸国の戦車の恐竜的進化に直面し、それにあわせて対戦車火器の大型化も進む中でアメリカからもたらされた成形炸薬弾の技術を駆使して軽便かつ強力な対戦車火器の開発を開始した。大戦中にアメリカから貸与された各種携行対戦車火器、ロタ砲や試製五式七糶半無反動砲などを投入し、そして戦後に決定版として導入されたのが七式十糶半無反動砲である。

七式は口径105ミリで、その対戦車弾は当時のあらゆる戦車を破壊できた。そのうえ小型車輛に搭載できる程に小型であり、国共内戦時には対戦車戦はもとより対陣地・対人戦闘でも威力を発揮した。

長年、帝國陸軍の対戦車火器の主力を務め自走化もなされたが、戦車の装甲の発達と対戦車ミサイルの登場により旧式化して、現在は四七式対戦車誘導弾に更新が行なわれている。それでも多くの部

隊で配備が続いている。

地上で三脚に載せるか、小型自動貨車に載せて使われる。

深海「最初は無反動砲か」

神楽「対戦車兵器としては陳腐化して久しいけど、今でもこの小さな大砲は歩兵の友として頼られているのである。というわけで荻原さん、どうぞ」

荻原「無反動砲ってなんですか？」

深海「（お前ら：台本でもあるんかい：）」

神楽「銃にしろ大砲にしろ、火薬を爆発させて金属の塊を飛ばすわけだから、当然にその分の反動が砲の方に返ってくる。そしてそれは砲の威力が上がれば上がるほど大きくなる」

深海「反動に対抗するにはより頑丈でより重い大砲を使うしかない。というわけで大砲はどんどん巨大化していったんだ」

荻原「なるほど」

神楽「特に問題なのが対戦車火器だ。第一次世界大戦の頃は小火器の延長上の兵器でなんとかあったけど、第二次大戦の頃になると大型の大砲がなければ戦車に対抗できなくなった。歩兵がそんなもの持ち運べるわけないから、歩兵隊は戦車に対して無力になってしまふ…」

深海「そこで開発されたのが無反動砲さ。発射時の爆風を後ろに逃がして反動を相殺するんだよ」

神楽「なんつーか、大雑把過ぎる説明ね。軍オタとしてそれは有りなの？」

深海「いや：極力分かりやすく説明したつもりなんだけど…」

荻原「なるほど：でも爆風を逃がして威力は大丈夫なんですか？」

神楽「そこで使われているのが成形炸薬弾だ。では次」

八糎^{センチ}半対戦車無反動砲

口径…84mm

全長…1130mm

重量…14・2kg

帝國陸軍歩兵の主力対戦車火器で、各歩兵分隊に1門ずつ配備されている。

帝國陸軍は個人携帯式の対戦車火器として第二次大戦中にバズーカを参考にして四式七糎噴進砲、通称ロタ砲を開発し、戦後にはそれを拡大した九糎噴進砲ロタ改が開発され長く帝國陸軍歩兵の主力対戦車火器の地位を占めていた。しかし戦車の装甲技術が発達すると両ロタ砲は時代遅れとなり、さらなる新型対戦車火器が必要となった。

そこで帝國陸軍はスウェーデン製のカールグスタフ無反動砲を次世代対戦車火器として採用しライセンス生産した。装甲貫徹力はロタ改の1・5倍に達するとされる。

対戦車榴弾の他に対人用の榴弾や照明弾などを発射できる多目的火器である。しかしながら現在の主力戦車を相手には力不足であり、後継兵器の配備が始められている。ただ、それらの後継火器は多用途性に欠けるため、今後しばらくは現役でありつづけるであろう。

なお海軍陸戦隊はカールグスタフ無反動砲の派生型であり使い捨てながら軽量なAT-4を歩兵用対戦車火器として採用している。

深海「というわけで次はカールグスタフか。自衛隊でも使っていて、日韓大戦でもしょっちゅう出てるよね」

神楽「さて。威力についてだけど、徹甲弾は運動エネルギーを使って敵の装甲を貫く砲弾ね。威力を決めるのは弾の重さ、そして撃つた時の弾のスピード。重ければ重いほど、速ければ速いほど威力が高くなるわけ。だが戦車の装甲が厚くなるにつれて、対戦車砲もどんどん大きくなった。重い弾を高速で撃ちださないと戦車の装甲を

貫けないんだ」

深海「そして、その弱点を補うために開発されたのが化学エネルギー弾である成形炸薬弾だ」

荻原「科学エネルギー弾!？」

神楽「こう言うと、なんだか凄い兵器に聞こえちゃうけど、ぶっちゃけいえば火薬の爆発で相手にダメージを与える兵器よ。榴弾とか。被害を与えるのはあくまで爆発エネルギーだから、弾の速度には関係なく、弾に詰め込まれた火薬の量で威力が決まるの」

荻原「つまり爆風を逃がして、弾のスピードが落ちても大丈夫というわけですね」

深海「その通り。しかし、単に爆発させただけでは戦車を撃破することはできない」

荻原「なぜですか？」

深海「爆発しただけでは、そのエネルギーは四方八方に広がって、敵戦車に当るのは一部だけだからだ」

神楽「歩兵の大群の真ん中にぶちこむなら、それでもいいんだが、戦車を攻撃するとなるとエネルギーを一点に集中させなくてはならない。エネルギーを集中する事で厚い戦車の装甲を破ることができるの」

荻原「なるほど」

深海「そこでモノロー効果を利用した成形炸薬弾の登場となる。はい、次」

十一糎^{センチ}携帯対戦車弾

口径…110mm

全長…1400mm

重量…13.9kg

陸軍が八糎半対戦車無反動砲カールグスタフの後継として配備を開始した対戦車兵器で、西ドイツのパンツァーファウスト3をライセンス生産したもの。

実態としては推進ロケット付弾頭を発射する無反動砲で、主要部が使い捨てであるために陸軍及び海軍陸戦隊では火器ではなく弾薬として扱われている。

深海「今度はパンツァーファウストIIIか。帝國陸軍の装備は自衛隊とかなり被っていないか？」

神楽「基本的に任務は同じようなものだ。だから同じようなものをもって当たり前さ。さて、モンロー効果について解説しよう。アメリカのモンロー博士は1888年に火薬を円錐形の窪み、凹型がある形に加工して、後ろ側、つまり円錐の頂点側から爆破すると爆風が前進し、衝撃波が円錐の中でぶつかりあってエネルギーが前方に集中することを発見した。これがモンロー効果よ」

荻原「つまりエネルギーを集中する事で戦車の装甲を破る事ができるということですね」

深海「そして、それにノイマン効果を利用することで威力を上げることができる。詳しくは次」

試製軽対戦車誘導弾

直径…140mm

重量…11.4kg

十一糎携帯対戦車弾とともに八糎半対戦車無反動砲の後継となる小型対戦車ミサイルで、兵士1人で持ち運びし射撃をすることが可能なほど小型である、

第3世代対戦車ミサイルに分類され、誘導方式に赤外線画像追尾

方式が採用されており、照準をセットして発射すれば後は誘導が不要な撃ちっ放し型のミサイルである。

まだ正式採用はされていないが、試験的に一部部隊に配備が開始されている。

深海「今度は01式携帯対戦車誘導弾の帝國バージョンか」

神楽「さて、今度はノイマン効果の解説よ。1910年、今度はドイツのノイマン博士が円錐形の窪みの内側に金属を張ることで貫通力が一段と増すことを発見した」

萩原「なぜですか？」

深海「固体には強烈な圧力に晒されると流体、つまりドロドロとした液体のような状態になるという性質になる。火薬を爆発されると内張りした金属が強烈な圧力に晒されて流体化して、さらに超高速で噴出する。これがメタルジェットだ」

神楽「相手の装甲は超高速のメタルジェットが衝突すると、やはり強烈な圧力に晒される。内張りと同様に」

萩原「つまりドロドロになってしまう」と

神楽「そう。それでメタルジェットは装甲を貫通してしまうの」

深海「かくして成形炸薬弾は無反動砲だけでなく射速があまり期待できないロケットやミサイルの弾頭としても利用されている」

――歩兵砲――

三七式重擲弾筒

口径…50mm

全長…650mm

砲身長…400mm

重量…4.5kg

射程…最大700m 有効200m

第二次世界大戦中に主に森林戦で活躍した八九式重擲弾筒の後継兵器である小型迫撃砲である。歩兵小隊の重火器分隊に3門ずつ配備されている。

調整ネジで飛距離を調節し引き金を引いて射撃する仕組みで、必要に応じて水平射撃も可能である。1人の砲手と2人の弾薬手で運用する。

八九式に比べると砲身長が若干伸びており、そのために精度が向上して有効射程が大きく向上した。また発射音等が小さくなるように改良が施されている。

深海「今度は擲弾筒の現在版か」

神楽「陸軍を代表する重火器だからね。平成の世でも重宝するでしょう。現在でもフランスが似たような小型迫撃砲持ってるし」

深海「フランスはあまり信用しちゃいけないと思うんだ」

二四式八糎曲射歩兵砲

口径…81mm

砲身長…1294mm

重量…52kg

大戦中に主力迫撃砲として活躍した九七式曲射歩兵砲や大隊砲と九二式歩兵砲の後継として開発された軽迫撃砲である。九七式に比べると10kgほど軽量化され、また簡単に射撃する方向を転換することができる。

後継として五四式迫撃砲の配備が始まっているが、未だに多くの部隊が本砲を使用している。

神楽「今度は史実の64式迫撃砲の帝國バージョンだよ」

深海「基本的に64式そのものだね」

萩原「あのお。迫撃砲ってなんですか？」

神楽「つまりだねえ。簡単に言えば砲身を上に向けて撃つ大砲だね」

萩原「そうするととにかく良い事があるんですか？」

深海「それについては次に…」

五四式八糎迫撃砲

口径…81mm

砲身長…1280mm

重量…36.6kg

二四式八糎曲射歩兵砲の後継として採用した新型の軽量迫撃砲。イギリス製のL16をライセンス生産したもので、二四式に比べると16kgほど軽量化している。

各歩兵中隊の軽迫撃砲小隊に配属され、歩兵直協火器として使用されている。

深海「ここらへんは史実の自衛隊とはほとんど変わらんだね」

神楽「まあわざわざ独自設定に突っ走る必要もないしね」

萩原「で、さっきの続きですが？」

深海「そうだったね。まず良い事として、急角度に打ちあげた砲弾はやはり急角度で落ちてくるから、物陰に隠れた敵を攻撃に真上から攻撃を浴びせることができる。これが利点の一つだ」

神楽「そして、もう1つは次だ」

五式一〇糎曲射歩兵砲

口径…107mm

砲身長…1285mm

重量…161kg

アメリカの107ミリ迫撃砲M2を国産化したもの。

第二次大戦中に欧州へ派遣された陸軍部隊は主に現地で受領したアメリカからのレンドリースを装備して戦場に向かった。その時に連隊砲である四一式山砲の代替として供与されたのが本砲である。山砲よりずっと軽量で威力も十分だったので連隊砲の後継として正式に採用されることになり、五式曲射歩兵砲として国産化された。

戦後、射程・威力ともに五式を上回るソ連12センチ迫撃砲に対抗するために二〇式一二糎曲射歩兵砲が本砲の後継として開発されたが、重量が増し徒歩歩兵部隊での運用は困難として自走化されて機械化部隊にのみ限定して配備されたので、多くの部隊では五式を引き続き使用することになった。

1992年に後継の五二式迫撃砲が採用され、更新が勧められている。

神楽「さて、もう1つの利点。それは垂直に近い角度で砲弾を打ちあげることによって反動を地面に吸収させることができることよ」

深海「さっきも説明したように。大砲は口径が大きければ大きいほど反動が強くなり、それに備えるために頑丈な機構が必要になる。それに比べて迫撃砲はそういった機構を省略して軽く造れる。それ故に歩兵が簡単に持ち運ぶことができる」

神楽「つまり歩兵部隊に密着した支援が行なえるってこと。だから迫撃砲は各国が歩兵部隊の自前の火炮として配備をしているのよ」
萩原「なるほど」

五二式一二糎迫撃砲

口径…120mm

砲身長…2080mm

重量…582kg

五式一〇糎曲射歩兵砲の後継として採用された中迫撃砲。フランス製のMO120RTをライセンス生産したもので、タイヤが装備されているので移動・展開が容易に可能である。

各歩兵連隊の中迫撃砲中隊に配属され、五三式中型自動貨車に牽引されて運用される。

神楽「だけど弱点もある。それは射程が短いことと命中精度が低いこと。だからあまり長距離射撃には向かないのね」

深海「良くも悪くも密接した支援射撃用の兵器ということだね」

荻原「よく分かりました」

―対戦車ミサイル―

二四式対戦車誘導弾

直径…120mm

重量…16kg

射程…1.6km

日本初の対戦車ミサイルである。五七糎速射砲（英製オードナンスQF6）の後継対戦車兵器として各歩兵連隊の対戦車中隊に配備された。

第一世代に分類される対戦車ミサイルで、有線を通じて兵士が操作する方式である。その為にミサイルの速度が遅く敵の妨害を受け

やすい、操作に熟練を要する、などの欠点を持つ。

後継として三九式重対戦車誘導弾の配備が始まると、七式無反動砲との後継として四七式対戦車誘導弾とともに各歩兵中隊の対戦車小隊に配備されるようになり現在にいたる。

深海「これもまんま64式対戦車誘導弾……」

荻原「兵士が操作するって、ラジコンみたいですね」

神楽「ラジコンみたいなものだね。ちなみに第四次中東戦争でイスラエル戦車軍団に大打撃を与えたサガミミサイルもこの系統」

深海「当時のイスラエルの戦車兵の対処法はミサイルが飛んできたら、その方向に主砲をぶっ放すことだったそう。操作している兵士が驚いて、操作ミスをするのを狙うらしい」

三九式重対戦車誘導弾

直径…150 mm

重量…33 kg

射程…4 km

二四式対戦車誘導弾を配備したものの誘導方式や射程の短さが問題となり、配備と同時に後継ミサイルの開発が始まり、1979年に正式採用された。

三九式は第二世代に分類される対戦車ミサイルで、目標を照準するとその情報が有線を通じてミサイルに伝えられ自動追尾する方式を採用し、二四式の欠点を改善している。

“重”とつくことから分かるように威力も従来の対戦車ミサイルに比べると桁外れであり、戦車だけでなく小型船舶の攻撃にも使われ、そのための専用弾も用意されている。射程は4 kmと五七兆速射砲と同程度まで向上している。

二四式に代わって全国の連隊対戦車中隊に配備されている他、四八式歩兵戦闘車にも対戦車自衛火器として装備されている。

深海「まんま79式対舟艇対戦車誘導…」

神楽「レギオンを吹っ飛ばしたヤツだね」

四七式対戦車誘導弾

直径…110mm

重量…12kg

射程…2km

中隊対戦車小隊に配備されている無反動砲の後継として開発された対戦車ミサイル。第二世代と第三世代の中間に位置するミサイルで、射手が目標にレーザーを照射してミサイルは目標から反射するレーザーを追尾する仕組みになっている。そのためワイヤーを廃して飛翔速度が向上しており、また発射装置を射手から離して設置することができるので敵が発射地点を攻撃しても射手は安全である。

軽量化が進み、肩に担いで発射することもできる。

深海「まんま87式…」

神楽「でも恥ずかしい愛称はないよ」

五六式多目的誘導弾

直径…160mm

重量…60kg

射程…10km以上

三九式重対戦車誘導弾の後継として開発された新型のミサイル。多目的誘導弾という名称からも分かるように対戦車だけでなく舟艇などの様々な目標に対して使用される。

ミサイルの先端に備えたカメラが目標を捉え、その映像を見て射手が誘導を行なう方式で、誘導用の有線に軽量な光ファイバーを採用することで飛距離を延ばすことに成功し、野砲なみの射程を得た。そのため、対戦車ミサイルながら五六式を配備する部隊には専属の観測員が用意されている。

三九式重対戦車誘導弾が連隊ないし大隊の対戦車隊に配属されているのに対し、五六式配備部隊は師団の直轄とされ、現代は北部軍の部隊に対し優先的に配備が進められている。

深海「まんま96式多目的誘導弾ですね」

萩原「87式と並んで日韓大戦でも活躍してますね」

神楽「これでようやく重火器編終了ね。次回は歩兵の兵器、車輛編よ」

登場兵器紹介 歩兵の兵器編2（後書き）

【誤解氷解】と【登場兵器紹介 艦艇編3】と【登場兵器紹介 歩兵の兵器編1】を加筆修正。

登場兵器紹介 歩兵の兵器編3

神楽「というわけで前回に続いて歩兵の兵器。今回は車輛編」

一式小型自動貨車

大戦中に使用された九五式乗用車や四式小型自動貨車の後継車輛として導入された四輪機動車である。アメリカから貸与されたジープを元に四式小型自動貨車を開発製造したトヨタ自動車を受注し、1951年に三菱がライセンス生産していたジープを破り正式採用された。

ジープよりも強力なエンジンを搭載し、高い走破能力を持つ。民間市場にもランドクルーザーとして販売され、その民生型の現地で転用も含めて日本で最も輸出に成功した兵器に数えられる。

装甲や固有の武装は無いが、荷台のフレームに必要な応じて銃架を取り付けて機関銃や小銃を搭載可能である。

数度のマイナーチェンジを経て、現在でも陸軍の主力小型車輛として現役である。歩兵部隊の本部や斥候部隊に配備され、連絡や偵察に利用される。

萩原「ランクルですか」

深海「史実でもトヨタジープ（ランクルの原型）が保安隊に採用されていれば、こうなった可能性があったんだよな」

神楽「ちなみに最新型には史実の73式新型と同様にラジオと冷房がついているよ」

二六式装甲兵車テト

全長・6・1m

重量…14.2 t

乗員…4名

兵員…8名

最高速度…61 km/時（浮航5 km/時）

兵装 7.7ミリ車載機関銃×1／12.7ミリ機関砲×1

第二次世界大戦時にアメリカやドイツは装甲ハーフトラックを利用して機械化歩兵の威力を各国軍に見せつけた。同時期、日本軍も一式半装軌装甲兵車ホハや一式装甲兵車ホキなど歩兵の機械化に取り組んだものの、予算の不足もあって少数生産に終わり機械化はほとんど達成できなかった。

そして時が経ち大戦後、国共内戦に介入する日本陸軍は共産党軍のゲリラ攻撃に対して歩兵に装甲防護力を与える必要があると考えた。一式装甲兵車やアメリカから貸与されたM3ハーフトラックが投入されたが、天蓋が無く防御に難があり新型装甲車輛の必要性が痛感された。そこで1952年に新型の一二式装甲兵車が採用された。

この一二式装甲兵車は戦車並の装甲を持ち重量は30 tに達し、それ故に機動性が低かったが共産党軍のほとんどの武器を跳ね返し、対ゲリラ戦で威力を発揮した。

1962年に国共内戦が終結して陸軍は本国と朝鮮に撤退した。陸軍はこれを機に近代化を推し進めようとしたが、その時にネックになったのが一二式装甲兵車の存在であった。機動性が低すぎて戦車に追従できず、本格的な機動戦には投入できなかったのだ。そこで内戦終結の兆しが見えつつあった1959年より次世代装甲兵車の開発が始まった。そして1966年に採用されたのが二六式装甲兵車である。

二六式装甲兵車は戦車に追従可能な機動戦用の装甲車輛を目指し、装甲には重量を抑えるためにアルミニウムを利用して重量は半分以下にすることに成功した。反面、一二式に比べ防御力では大きく劣

ることになったが敵砲兵弾の破片から歩兵を守るには十分と考えられた。その代わりに狙われにくいように全高が低い。また核戦争に対応するため対NBC能力を完備し、放射能に汚染された戦場でも行動することができる。さらに必要に応じて追加装備を施し河川を自力で渡ることができるが、結果的にあまり重要な能力にはならなかった。

改型をあわせて4000輦ほど生産された。後継車輛の四八式の配備が始まり、退役が始まっているが、それでも多くの車輛が現役である。

深海「帝國版のAPCか。史実の73式装甲車に近いようだね」

萩原「APCってなんですか？」

神楽「装甲兵員輸送車の略よ。説明にもあるとおり、戦車と突入する部隊が敵の攻撃でやられないように防御力を提供するための車輛」
深海「まあ当時のAPCは歩兵の軽火器と大砲の弾の破片に耐えられればいいという程度の防御力しかないけど」

萩原「破片ですか？」

深海「そう破片。大砲の射撃には、目視できる目標を攻撃する直接射撃と、目視できない相手を友軍の指示を頼りに攻撃する間接射撃に分けられる。第二次大戦以後は大砲の射程が伸びたこともあって間接射撃が主流になった。ただ見えない相手を撃つわけだから直撃というのはあまり期待できない」

神楽「だから榴弾を使うわけ。火薬の爆発で相手にダメージを与える。爆風によって高速で飛ぶ鋭利な砲弾の破片をばら撒く事によってね。それなら一撃で広い範囲に被害を与えることができるから直撃は必要ない」

深海「生身の歩兵だったら一たまりもない」

萩原「だからAPCというわけですね。でも敵の戦車とか遭遇したらどうするんですか？」

神楽「いいところに気がついたじゃない」

二六式装甲兵車改

全長…6・1 m

重量…17 t

乗員…4名

兵員…8名

最高速度…60 km/時

兵装 20ミリ機関砲塔×1／7・7ミリ車載機銃×1

二六式装甲車に20ミリ機関砲装備の砲塔を搭載した歩兵戦闘車型である。

機関砲は国産の二五式二〇耗機関砲で、九七式自動砲と弾薬に互換性がある。砲塔を設けたことで3t近く重量が増加したが、エンジン換装により機動力は維持されている。しかし装甲はそのままで重機関砲などの火器に対する防御力は無きに等しい。その為、ソ連のBMPシリーズに対しては劣勢である。

決して高性能とは言えないものの、比較的安価に配備できる歩兵戦闘車として重用され、78年から従来型に替わって生産され、既存の車輛も改仕様に改造された。

深海「自衛隊が検討していたとされる73式装甲車の歩兵戦闘車バージョンか」

萩原「歩兵戦闘車ってなんですか？」

神楽「簡単に言えばAPCの重武装バージョン。さっき貴女はAPCが敵の戦車と遭遇したらどうするの？って聞いたでしょ？実はAPCってのは、そういう直接戦闘に関わる状況ってのはあまり考慮してないの」

萩原「なぜですか？」

深海「あくまで歩兵を運ぶ車輛だからさ。歩兵ってのは敵と戦うときには地面に降りて徒歩で戦うわけ。だから敵と相對しているってことは歩兵は車から降りているんだから、A P Cはその後ろに居ればいいという考えなわけだ」

萩原「なるほど」

神楽「でも実戦ではそう思い通りにはいかない。A P Cが敵部隊と遭遇することもあるだろうし。それにせっかくキャタピラーで動く重装車輛なんだから、歩兵が携帯できないような重火器を搭載して支援をさせれば便利じゃない？ って考える人がいた」

萩原「重火器ですか？」

深海「重機関銃とか。20ミリとか30ミリとかの機関砲を搭載すれば絶大な威力を発揮する。戦車は無理でも敵のA P Cと遭遇した場合に独力で撃破できる。A P Cの装甲は前にも言ったように、決して厚くはないからね」

神楽「そして1960年代、ソ連で革命が起こる」

四八式歩兵戦闘車ホセ

重量…27t

最高速度…70km/h

乗員…3名

兵員…7名

兵装

90口径35ミリ機関砲

7.7ミリ車載機銃

対戦車ミサイル発射筒×2

四四式戦車と協同する装甲兵車として開発された帝國陸軍初の本格的I F V。

1967年、ソ連はB M P－1という歩兵戦闘車を公開して西側各国陸軍に衝撃を与えた。帝國陸軍もI F Vの研究を開始して1978年には20ミリ機関砲を装備する二六式改の配備したが、装甲兵員輸送車を改造した応急措置的な車輛に過ぎず力不足は明らかであり防御も弱くソ連B M Pシリーズに対して劣勢であった。そのため、後に四四式と形式番号が与えられる新型戦車の配備も決まったこともあって、それに追従可能な新型装甲車輛が開発されることになった。それが四八式歩兵戦闘車である。

1988年に正式採用されて配備が始まった四八式は主砲にはイス・エリコン社の90口径35ミリ機関砲K D Eを装備してソ連のB M Pシリーズを撃破するに十分な攻撃力を得た。また対戦車装備として三九式対舟艇対戦車誘導弾を2発搭載して戦車に対しても独立して戦闘を行なえる。防御力も大幅に強化され、正面であればB M P－2の30ミリ機関砲に耐えられると言われている。

偵察型の四八式重装甲車ともあわせて1999年12月現在の生産量は1500輦強で、20個歩兵大隊への配備を完了した。

神楽「さて。説明文にもあるようにソ連が開発されてB M P－1は世界に衝撃を与えた。それは何故か?!」

荻原「なぜなんですか?」

深海「それはね。さっきも言ったように、A P Cに乗った機械化歩兵部隊といえども、敵と戦うときには装甲車を降りて徒歩歩兵として戦う。だけで、これは現代の電撃戦を戦う上で大きな足枷となっていた」

神楽「なぜなら電撃戦とは機械化部隊の機動力を武器として戦う戦術だから。徒歩歩兵より自動車や装甲車に乗った兵士や戦車の方がずっと速く戦場を動き回ることができる。電撃戦とはこの機動力を武器に敵の弱点を突き、混乱させ、対処をする暇もなく粉碎する作

戦」

深海「しかし、機械化歩兵部隊といえども装甲車を降りればただの徒歩歩兵。移動速度は大きく落ちる。戦車や他の機械化部隊もそれにあわせなくてはならないので部隊としても機動力が大きく損なわれる」

荻原「それは大問題ですね」

神楽「それに対してソ連が編み出したのが世界初の本格的歩兵戦闘車BMP-1。重武装した装甲車なら既に西側にもあったけど、BMP-1が優れていたのは歩兵が中から外を攻撃できるように銃眼ガンポートを設けた点。73ミリ主砲などの重火器と銃眼からの射撃を組み合わせて、歩兵が車輛が降りずに戦闘ができるようになったの」

荻原「ということは戦闘の度にスピードを緩める必要がないってことですね」

＊装甲車や戦車がずっとフルスピードのまままで戦うとかそういう意味じゃありません。部隊全体の機動力という意味です

深海「そんなところだ。機械化部隊の機動力を維持できるというのは実に画期的なんだ。BMP-1のコンセプトは西側でも取り入れられたのさ。史実の89式戦闘装甲車やこの四八式歩兵戦闘車のようにね」

神楽「ただ銃眼を使って中から外を撃っても命中率は低いし、装甲に穴を開けたら防御力が低下するという問題もある。最近では正規軍同士の機動戦、電撃戦なんてあまりやらなくなったこともあって銃眼を塞いで防御力向上に力を注ぐ傾向なの」

VAB装輪装甲車

兵装 12.7ミリ機関砲

帝国陸軍では後方の治安部隊向けを除き最前線では装軌車両が使われるのが通例だった。これは第二次大戦後に陸軍が外征から本土防衛に戦略を転換したことにより長距離の戦術機動は無く、また日本の地形の特性から装軌車両が必要であると考えられたからだ。しかし近年の目覚ましい道路網の発達と戦略機動力を必要とする第5師団の要望から本格的な装輪装甲車両の配備が考えられるようになった。

当初は国産化も考えられたが少数配備に留まると考えられたので、輸入及びライセンス生産した車両を配備することとなった。各国の装輪装甲車を調査した結果、フランスGIAT社のVAB装甲車がコスト面で有利であると判断され、選定された。

1990年から配備が開始され、第5師団と憲兵隊が合計300輦ほど導入予定である。さらに各師団搜索連隊の歩兵中隊や装甲化されていない全師団のうち1個連隊を本車装備の機動歩兵とする計画もある。また海軍陸戦隊では偵察用車輛としてVABの20ミリ機関砲装備型を導入している。というわけで当初の少数配備に留まるだろうという目論見は脆くも崩れ、国産開発を目指していた一部のグループは激怒したとか、しないとか。

深海「VABかよ。というか最初の計画の300輦って時点で96式装輪装甲車と生産数がほぼ同じじゃないか。なにが少数に留まるだ」

神楽「帝國的には4桁いかなきゃ少数だよ。まあ、コマツざまあつてことで」

荻原「これはタイヤで動くんですね」

深海「そう。一部の人々が大好きな装輪装甲車だ。装輪装甲車には幾つかキャタピラと違った利点がある」

神楽「まず道路上では速い。タイヤだからね。それにキャタピラ式に比べると安く造れるし、整備も楽」

深海「自衛隊の96式みたいに足回りを豪華にしちゃうと安さも整

備性も吹っ飛ぶけど」

神楽「その点、VABを選んだ陸助は冴えているな。あれは普通のトラックに装甲を被せたようなものだ」

萩原「それで欠点は？」

深海「まず道路以外の走行性能がキャタピラーに比べて極端に落ちる。障害物があってもキャタピラーならある程度は乗り越えられるが、タイヤだと難しい」

神楽「それに重く造れないから、装甲も薄くならざるをえない。まあ戦車と一緒に機動戦とかは間違っても無理」

深海「フランスはIFVまで装輪化するらしいが、大丈夫なのかねえ」

神楽「自衛隊だって他人事じゃないでしょう。89式装甲戦闘車の後継は将来装輪戦闘車輛を当てるようじゃないですか」

深海「言うなあ！」

五八式軽装甲車ケソ

五八式は陸軍が歩兵連隊向けのランクルの後継となる偵察用小型装甲車両を求めたことに始まる。それに警備用車両を求める憲兵隊と基地警備用の装甲車を求める空軍の要求も重なり、小型の装甲ジップ的車両の開発が始まった。

1998年に正式採用された五八式軽装甲乗用車は、フランスのVBLをモデルにして設計・製作がされた。4人乗り（短距離なら5人も可）で、1個分隊3両で構成する。

装甲は7・62ミリ弾に耐え、特に前面は12・7ミリも防ぐとされる。固有の武装はないが、車体上面のハッチに銃架を取り付けて各種機関銃を設置できる。

深海「帝國版の軽装甲機動車か」

神楽「まあ史実日本みたいにAPC代わりに大々的に配備しているわけじゃないけどね」

五三式中型自動貨車 全長…4.9 m

重量…2.5 t

最高速度…120 km/h

乗員…10名

元々は海軍陸戦隊がアメリカ軍のハンヴィーをモデルにした高い機動力を持つ輸送車輛としてトヨタ自動車に発注した4輪機動車である。その後、陸軍が開発中の地对空ミサイルの搭載車輛として注目し、採用を決定した。

1993年に正式採用されて海軍陸戦隊では主に人員輸送車輛として使われる。陸軍では同年採用された五三式近距離地对空誘導弾などの各種機器の搭載車輛や、120ミリ迫撃砲や105ミリ榴弾砲などの小型火砲の牽引車輛として使われて、人員輸送車輛としては山岳部隊や空挺部隊など一部の車輛として使われる程度である。

深海「今度は帝國版高機動車か」

神楽「中型自動貨車ってネーミングはなかなかだと筆者は自分で思っているらしい」

深海「痛いな」

五五式四輪自動貨車

全長…5・4 m

重量…3 t

積載量…2 t（人員16名）

五三式中型自動貨車のシャーシを使用した新型トラック。それまでの三三式四輪自動貨車に比べると機動力が向上している。三三式とともに主に軽歩兵部隊の移動に使用される。全国に配備が行なわれていて、歩兵にとって最も身近な車輛の1つとなっている。

荷台は剥き出しになっていて、幌を張って雨風は凌げるが銃砲に対する防御力は皆無に等しい。

派生型に荷台を改造した救急車仕様がある。

荻原「ところで自動貨車ってなんですか？」

神楽「読んで字の如く自動で動く貨車。つまりトラックだ」

深海「旧日本軍ではトラックのことをそう呼んでいた。で、今度は自衛隊の新型73式中型トラックの帝國版か」

一〇式十糎半自走無反動砲ムイ

重量…8 t

兵装…105ミリ無反動砲×2／12・7ミリ照準銃

七式十糎半無反動砲を自走化したものである。

1940年代後半に105ミリ対戦車砲装備の五式砲戦車ホリならびに六式対戦車砲カトを実用化したが、どちらも恐竜的進化をした第二次大戦後期の戦車に対抗するために巨大な車輛となってしまう、それらの車輛は内地や朝鮮のインフラでは運用に支障をきたす

と考えられた。そこで開発されたばかりの無反動砲に着目し、小型軽量の対戦車車輛を目指したのが本車である。

車体は少数のみ生産された五式軽戦車のものを流用し、待ち伏せを想定して低姿勢を重視された。車体右より七式無反動砲が連装して備えられており、必要に応じて砲手席とともにせり上がって、車体を隠したまま砲だけ出して敵を攻撃することができる。

機械化師団の対戦車部隊を中心に全国の歩兵連隊に配属された。後継の三〇式自走誘導弾の配備が開始されたが、今でも多くの部隊で使用されている。

なおムイ車からは多くの派生型が生まれている。

深海「今度は帝國版の60式自走無反動砲……って、さっきから自衛隊装備の帝國版ばかりじゃねえか」

神楽「オリジナル要素だってあるぞ。これだって史実にはない派生型がある」

三〇式自走対戦車誘導弾ユイ

兵装 二四式対戦車誘導弾×2 7・7ミリ機関銃

一〇式自走無反動砲の車体に二四式対戦車誘導弾を装備した仕様。機動歩兵中隊の対戦車小隊、空挺旅団、海軍陸戦隊の対戦車部隊に配備された。

自走無反動砲は砲手席が砲とともにせり上がる仕組みになっていたが、こちらはペリスコープが装備されていて、それを覗いてミサイルを誘導することになっている。

七九式対戦車誘導弾を装備する四八式歩兵戦闘車の配備により後継車輛も開発されず退役しつつある。

神楽「例えばこれ。自衛隊に装甲化された自走対戦車ミサイル車輛なんてねえだろ？」

深海「まあ確かに」

四〇式自走対戦車誘導弾ユロ

兵装 三九式対舟艇対戦車誘導弾連装ランチャー×1／7・7ミリ車載機銃

二六式装甲兵車を改良した対戦車車輛で、兵員室に代わり三九式対舟艇対戦車誘導弾を搭載したものである。照準用に高度な赤外線暗視装置を搭載しているので、対戦車攻撃だけではなく監視にも利用される。

おもに機械化師団や機甲師団の旅団対戦車中隊に配備されているが、七九式対戦車誘導弾を装備する四八式歩兵戦闘車の配備により後継車輛も開発されず退役しつつある。

深海「史実なら73式装甲車に79式重MATを載せたようなものか」

神楽「実在の車輛ならM901ITVが近いかな」

三〇式一二糎自走迫撃砲ハイI

兵装 120ミリ迫撃砲×1／7・7ミリ車載機関銃×1

二六式装甲兵車を改造した自走迫撃砲。おもに機械化師団や機甲師団の旅団重迫撃砲中隊に配備される。兵員室を改造し二〇式一二

糶曲射歩兵砲を搭載している。五〇式一六糶自走迫撃砲に更新され、消えつつある。

神楽「装甲車に迫撃砲を載せた車輛」

深海「そんだけかい」

神楽「それだけの車輛なもの」

荻原「なんで装甲車に載せるんですか？」

神楽「1つは歩兵を装甲車に乗せるのと同じ理由さ」

荻原「小火器や砲弾の破片から防御するためですか」

深海「そして、もう1つ」

三〇式八糶自走迫撃砲ハイII

兵装 81ミリ迫撃砲×1／7・7ミリ車載機銃

おもに機械化師団や機甲師団の歩兵中隊軽迫撃砲小隊に配備される自走迫撃砲。ハイIIと同様に二六式装甲兵車を改良したもの。

初期は二四式八糶迫撃砲を搭載していたが、後に歩兵部隊の迫撃砲が五四式81ミリ迫撃砲（イギリス製L16を国産化したもの）に転換したことから、同車に搭載されている迫撃砲も五四式に換装された。

神楽「砲兵の任務は敵の野戦部隊を攻撃するだけでなく、敵の砲兵を粉碎し友軍を守ることにある」

深海「敵の大砲が撃ってきたら、どこから撃ってきたかを計算して撃ちかえすんだ」

神楽「最近是对砲兵レーダーの発達で、瞬時に反撃できるようになったから、一度撃てば反撃を避ける為に素早く移動しなくてはならない」

萩原「それで装甲車に載せるのですね」

深海「その通り。自走式なら、撃ったらそのまま逃げられるからね」

萩原「だったらみんな自走式にすればいいのに…」

深海「…」

神楽「全ては貧乏が悪いのだよ」

五〇式一六糎自走迫撃砲ハロ

重量…32t

兵装…後装式160ミリ迫撃砲

三〇式一二糎自走迫撃砲の後継として配備された自走迫撃砲である。射程こそ短いが155ミリ榴弾砲並の破壊力を有する。

車体は二八式戦車のそれを流用し、砲塔部分に迫撃砲室が備えられている。五〇式一六糎迫撃砲は普段は水平に格納され、射撃時には屋根を開き砲身を上に向ける。射程は通常弾で9500メートルである。戦車の車体を流用しているので防御力は高く30ミリクラスの間砲にも耐えられ、また機甲部隊に随伴するのに十分な機動力を有している。

機械化師団の旅団重迫撃砲中隊に装備が行なわれつつある。

深海「160ミリってすげえなあ」

神楽「イスラエルとかが使っているクラスだよ」

平成23年度防衛省概算要求紹介（前書き）

というわけで前年に引き続き来年度の防衛費概算要求を紹介したいと思います

平成23年度防衛省概算要求紹介

神楽「というわけで、今年もこの季節になりました！」

深海「平成23年度防衛省予算概算要求が8月31日に発表されました！」

萩原「というわけで前年に引き続き概算要求の実態を紹介したいと思います！」

1. 実効的な抑止及び対処

萩原「まずは平素からの情報収集・警戒監視活動とあります」

深海「つまりは海上警備とレーダーシステムについてだね。海上警備については…」

神楽「延命措置ばかりだ」

- ・潜水艦の延命（調査研究）
- ・護衛艦の延命（はつゆき型、あさぎり型への実施）
- ・哨戒機の延命（P-13C、SH-60への実施）

深海「潜水艦については前に報道されていた定数増加を念頭においてのものだろう」

神楽「産経新聞が7月末に報じたんだっけな？現状では実戦部隊配備の16隻と練習艦2隻、合計18隻だっけか」

深海「それが20隻代まで引き上げられるんだね。ところで帝國海軍の方が何隻？」

神楽「うーん。確か攻撃型原潜12隻、戦略原潜5隻、通常動力潜水艦16隻、練習潜水艦2隻の35隻だ」

深海「うらやましい」

萩原「ようするに数を増やすってことですよね？それがどうして延

命に繋がるんですか？」

深海「潜水艦はだいたい毎年1隻ずつのペースで建造されているから、だいたい18年で退役する。今の防衛予算の状況では建造数を増やすのは難しいから」

配備数を増やすには寿命を延ばすしかない」

荻原「だから延命をするんですね」

神楽「今は研究段階のようだが。日本の潜水艦は他国に比べて早々と退役してしまうとはよく言われるが、潜水艦が水上艦より老朽化しやすいのは事実だからな。」

深く潜ればそれだけ高い水圧に晒されるのだから。だから研究が必要なのだ」

深海「それに比べて護衛艦と哨戒機は“実施”となっているね」

神楽「護衛艦と哨戒機は一刻の猶予もないということだろう。新型機や新型艦の導入ペースでは古いものの退役に間に合わず定数割れは確実だ」

荻原「後ろの表によればP-3Cを1機、SH-60を1機、はつゆき型及びあさぎり型を各1隻、延命措置を施した上であさぎり型延命に必要な装備を3隻分調達するようです」

深海「代わりに新型護衛艦の建造はストップのようだ」

神楽「延命措置に必要な費用を捻出するためか：噂によれば新護衛艦は低コストの小型護衛艦らしいと言われていたが：」

深海「しかし延命措置は結局のところ延命措置だ。いずれ新しい艦が必要になる。防衛力維持のためには巧くバランスを取っていかないと」

荻原「難しいですね」

荻原「次に弾道ミサイル防衛に関する項目があって、その次は島嶼部における各種事態への対応となっていますね」

神楽「注目ポイントはこちら」

- ・先島諸島への部隊配備について検討するための研究
- ・新型輸送機（C－2）の取得
- ・次期救難ヘリコプターの取得
- ・次世代護衛艦搭載システムの研究

深海「内容は前々から話題になっていた先島諸島への自衛隊配備か。今回の要求では研究費用を取得することになっている」

神楽「まあ、あんまり大部隊を置いてても有事の際には孤立化して遊兵になりかねないからな。象徴的に連絡部隊を置く程度になるだろうとは言われているが」

深海「それからP－1に引き続きC－2の配備開始か。国産機の配備は嬉しいね。それにUH－60Jに代わる次期救難ヘリコプターか。なにになるんだろう？」

荻原「新護衛艦は先送りですが、載せる物の研究は進めるんですね」

神楽「ソナーシステムとステルスアンテナの研究をするようだ」

深海「どちらも興味深いね。ソナーシステムはバイ／マルチスタティック戦術に対応したソナー開発を目指すらしい」

荻原「バイ／マルチスタティック戦術？」

深海「対ステルスレーダーとしてバイスタティックレーダーが有用であるという説は割と知られているが、ソナーバージョンはあまり聞かないな」

神楽「筆者も概算要求と政策評価を読んで初めて知ったそうだな。つまりだ。普通のソナーは自分で音波を発して、その反射を捉えて敵を見つけるわけだ」

深海「しかし新型ソナーでは自艦だけでなく他艦や哨戒機のセンサーが発した探信音波をも捉えて、それらを総合して静粛性が発達した最新の潜水艦を発見しようという構想らしい」

神楽「理屈は分かってても、いまいち理解が及ばないな」

深海「次は統合空中線システムだね」

萩原「空中戦？」

神楽「空中の線、つまりアンテナだね」

深海「こちらにも各種レーダーやESM、電子妨害などの電子戦用アンテナを一まとめにして、SPY-1みたいな平面レーダーにしてステルス性を上げようということだ」

神楽「相手のレーダー波を一番反射するのは、実は当方のレーダーアンテナだからね。欧州のステルス艦は、船体をステルス化してもレーダーが盛大にレーダー波を反射するので、レーダー映りは実是在来艦と大して変わらないという話も」

萩原「次の項目は航空優勢の確保となっています」

深海「これが注目ポイント」

- ・O4式空対空誘導弾AAM-5（改）の開発
- ・戦闘機的能力向上改修
- ・次期F-Xの調査

神楽「既存の機体の能力向上に重点を置いているようね」

深海「AAM-4に引き続いてAAM-5も改良か」

萩原「AAM-5ってなんですか？」

神楽「航空自衛隊の戦闘機に搭載するミサイルだよ。主に敵飛行機を攻撃する」

深海「空対空ミサイルにはレーダーで敵を追尾するタイプと赤外線センサーで敵を追尾するタイプがある」

神楽「AAM-5は後者のミサイルよ。単に熱源を追尾するだけでなく、赤外線画像認識を併用することで追尾能力を高めている」

深海「今回の改修は探知システムの能力向上が主な狙いのようだね」

荻原「そして次期F-Xの調査とありますが…」

神楽「一部で話題になってたF-35戦闘機のカタログ閲覧費用のようだね」

深海「資料見るだけで7億円か。吹っかけられたもんだね」

神楽「まあ開発側としては開発の延滞振りを思えば、どんな名目でも資金は欲しいだろう」

深海「まあロシアがPAK-FAを飛ばして、中国も第5世代機を研究している今において空自がステルス機欲しがるのも分かるけどさ」

荻原「PAK-FA？第5世代？」

深海「戦後開発されたジェット戦闘機は世代ごとに分類される。第5世代はステルス性能がその必須条件とされ、今のところ実用機ではF-22だけ」

神楽「航空自衛隊は最初にF-22の獲得を目指したのだけど、それが無理となったので、その次の候補がF-35」

深海「これはF-22について実用化される第5世代戦闘機と目されている」

神楽「PAK-FAというのはロシアが開発中の次世代主力戦闘機のことよ。第5世代相当でステルス性能を有するといわれているの」

荻原「つまり周辺国がステルス戦闘機を開発中だから、日本も対抗してステルス機であるF-35が欲しいということですか？」

神楽「だいたいそんなところ」

深海「ただF-35は開発そのものが遅滞している上に、国際共同開発機だから開発参加国優先で日本は後回しにされると言われている」

荻原「なるほど。それじゃあ間に合わない？」

神楽「そういうこと。F-XはF-4EJ改の後継機だけど、それでは退役に間に合わない可能性が高い」

深海「それで揉めているわけだ」

神楽「ネット上ではユーロファイター・タイフーンを推す声強い

ようだけど」

深海「なんか反米ありきで叫んでいる奴が多い気がするけど。作者はF-15FX派かな。さすがにサイレントイーグル仕様はないと思っっているけど」

荻原「なぜですか？」

深海「日本は国土面積に比して領海・経済水域がやたらと広い上に、国土も細長いから守るべき防衛線がとてつもなく長いんだ。だから機体規模がそれなりに必要だ」

神楽「タイフーンは小型戦闘機だからね。それにレーダーが未だにフェイズド・アレイ・レーダーじゃない在来型だし」

深海「日本でJ/APG-1に載せかえるにしても、載せる機体が違えばそれに合わせて改良しないといけないし、試験とかも一からやり直しだし」

神楽「その点、F-15FXならAN/APG-63(V)3あたりの搭載を見込めるからね」

荻原「次は特殊部隊攻撃、特殊武器による攻撃、災害等への対応となっています」

神楽「これが注目ポイント」

- ・新多用途ヘリコプターの開発
- ・戦闘ヘリコプター(AH-64D)の取得

深海「まずは新多用途ヘリコプターの開発か。UH-1Jの後継とあるね」

荻原「多用途ヘリコプターって何ですか？」

神楽「小規模の部隊や物資を輸送したり、連絡や負傷者の搬送などに使われる中型の多目的ヘリコプターのこと」

深海「敵地への空中からの殴りこみ作戦にも使われるから、強襲ヘリコプターとも」

神楽「自衛隊ではUH-1JとUH-60JAの二種類をハイローミックスで運用している」

深海「本当は高性能なUH-60JAを主力にしたいんだけど高価だから旧式のUH-1を改良して併用しているんだ」

神楽「でもUH-1Jには性能的に不満があるみたいね」

深海「新多用途ヘリコプターの政策評価を見ると、エンジンが単発である故の安全性への不安、航続距離の不足が指摘されているね」

神楽「島嶼戦では航続距離の不足は拙い」

荻原「それで新しいヘリコプターを開発しようというわけですか」

深海「既存機の改良でコストを節約するそう。OH-1の多用途ヘリ化（川崎重工案）とUH-1J（富士重工案）の更なる改良が選択肢にあがっていると聞く」

神楽「しかしOH-1改造になったら富士重工はどうするつもりかね？次期攻撃ヘリコプターは不透明だし」

深海「それで、その攻撃ヘリコプターだが…」

神楽「今回の概算要求では一番のサプライズだね」

荻原「AH-64Dは調達中止になったと聞きましたが…」

深海「調達の再開か？他になにか意味があるのか？富士重工へのお情けだの、在庫部品の一扫だのいろいろ言われているけど今後の動向に要注目だね」

荻原「次はサイバー攻撃等への対応となっておりますね」

神楽「注目ポイントは…」

・サイバー防護専門部隊の新編に向けた準備体制の整備

神楽「前年に引き続きネットワークへの攻撃対処を続けていくのね」
深海「サイバー空間防衛隊か。なんか漫画みたいだな」

2. 地域の安全保障環境の一層の安定化

深海「これは各国と防衛に関して協力していきましよう、というお話だね」

神楽「注目項目は」

- ・キャパシティ・ビルディング支援

萩原「キャパシティ・ビルディング？」

深海「つまり日本が東南アジア諸国の対災害対策、対テロ対策などの能力向上を支援しようという話さ」

神楽「ODAの防衛版ってところか」

深海「東南アジア諸国は我が国のシーレーンが通る重要地域だからね。こういう活動で地域の安定が増すなら良い事だ」

3. グローバルな安全保障環境の改善

萩原「次はグローバルな安全保障環境の改善とありますね」

深海「PKOとか国際貢献活動とかについてのことかな。注目点は」

- ・UH-60JAへの防弾板の装備
- ・航空後送器材の充足
- ・輸送機自己防御装備の整備

神楽「国際貢献と言いつつ、なにやら危なっかしい単語が並んでい

るじゃないか」

深海「海外派遣も次なるステップに向かっているということかな？」

4・宇宙・情報通信関連事業

荻原「宇宙関連とC4ISRですね。昨年やりました」

深海「この項目における注目点は…」

・火力戦闘指揮統制システム（FCCS）の整備

荻原「なんか凄そうですけど、よく分かりません」

深海「大丈夫だ。作者もよく分かっている」

神楽「政策評価の説明を読んで判断すると従来の陸自野戦特科のC4IシステムであるFADS及びFADACは師団以下の砲兵部隊にしか対応できない。各地へのコマンド部隊による同時多発的襲撃や空海との統合作戦が想定される島嶼戦など蓋然性が高いと考えられる事態に対しては力不足。そこで戦域全体を統制できる新たなシステムとして開発されたのがFCCSということらしい」

深海「C4IRはやっぱり難しいなあ」

5・将来戦闘機に関する研究や防衛省開発航空機の民間転用に向けた取組

荻原「まずは“将来戦闘機に関する研究ビジョン”ですね」

深海「内容はこれだ」

- ・先進統合センサーシステムの研究
- ・次世代エンジン技術に関する研究

・ウエポン内装化空力技術の研究

深海「F-2後継ということだが」

神楽「イメージ図には垂直尾翼のない、いかにもステルスという感じの機体が描かれているよ」

深海「先進センサーシステムについては昨年触れたよね」

荻原「ステルス機への対処能力を高めるって奴ですね」

神楽「一番下のは、F-22やF-35みたいに兵装をウエポンベ
イに内蔵することでステルス性を高めるってヤツね」

深海「ステルス時代に対応した機体を目指すわけだ」

神楽「そして次世代エンジン。F-2の時は高出力ターボファンエ
ンジンを作れなかったために日米共同開発になったけど、今度は純
国産機を目指すのかな？」

荻原「そして、次は防衛省開発航空機の民間転用ですが？」

深海「有力なのはUS-2とC-2だね。US-2は海自の救難用
大型飛行艇だ」

神楽「飛行艇は市場は小さいけど、競争相手も少ないからね」

深海「そしてC-2は空自のジェット輸送機。旅客機なみの高速性
能が売りだ」

神楽「既存の貨物ジェット機では運搬できない規格外貨物の輸送機
として市場を狙えるね」

荻原「どっちもニッチを目指すわけですか」

まとめ

荻原「その他にいろいろありますが省略して：以上が平成23年
度防衛予算概算要求の注目ポイントです」

神楽「しめて4兆7123億円なり。前年比298億円増だ」

深海「あくまでも防衛省の要求だからね。今後、予算折衝で減らされるだろうけど」

萩原「民主党政権は一律1割カットを各省庁に求めていますからね」

深海「去年が4兆8460億円要求に対して実際には4兆6826億円だからね」

神楽「というわけで平成23年度防衛費概算要求概要でした」

平成23年度防衛省概算要求紹介（後書き）

本当は9月中にアップする予定だったのですが、10月になっちゃいました。というか、前年の紹介との間が2つしかないorz

陸軍地位向上委員会1

荻原「? なにか新しい企画が始まるみたいですよ」

神楽「なにになに? 陸軍地位向上委員会?」

深海「そう。陸軍地位向上委員会だ」

― 1. 不遇な日本陸軍、陸上自衛隊

深海「この企画は架空戦記等で不遇な扱いを受けている陸軍、そして現実の防衛政策において不遇な扱いを受けている陸上自衛隊の立場を擁護し、地位向上を目指すというものだ」

荻原「はあ。陸軍って不遇なんですか?」

神楽「確かに。筆者は市販の架空戦記にはあまり手を出していないけど、ここ“小説家になろう”の諸作品を見ても、その傾向はあるよね」

荻原「どういう風にですか?」

深海「簡単に言えば“海軍善玉論”“陸軍悪玉論”だね。正義の海軍、悪党の陸軍。そんな構図」

深海「本来なら“開戦責任は陸軍にあり”という話なのだけど、なぜか“敗戦責任”まで含むように理解されるようになった」

深海「“先進的で新技術にも通じる海軍”“頑固で改革を拒絶する陸軍”とか、“合理的な作戦を進める海軍”“精神主義に毒された無謀な陸軍”とか、そういう対比がなぜか出来上がっている」

神楽「統計データがあるわけじゃないけど、歴史改変系架空戦記って大抵“改革を海軍が主導し、陸軍が抵抗勢力になる”ってパターンな気がする」

荻原「それじゃあ、陸上自衛隊の不遇というのは?」

深海「日本が島国なせいとか、“自衛隊は海空重視であるべき”と考える人が多い。事実、実際の防衛計画においても陸上自衛隊は優遇されているとはいえない」

神楽「海空自衛隊が一応は主力の近代化を達成しているのに対し、陸上自衛隊はお寒い状況だもんね」

深海「そして常に“日本は島国だから、海空自衛隊があれば十分”とか“ゲリゴマや島嶼侵攻への対処を重視した機動力のあるコンパクトな陸自を目指すべき”とか暴論が平然と語られる。そして、実行される」

神楽「挙句の果てに“戦車や大砲は冷戦型装備だ！それを手放さない陸自は抵抗勢力だ！”だからね」

深海「民主党政権が進める次期防衛大綱もその傾向が強まるようだ。西方重視の名のもとにまた本土師団が削られる。幸い陸自唯一の機動打撃部隊である第7師団は無事らしいが」

神楽「かつて機甲師団解体を主張していたのに比べればマシになったけど、やはり本土の戦力低下は悩ましいね。既に山陰地方の防衛は放棄されたとも言われるくらい危機的状况なのに」

荻原「放棄ですか…」

深海「朝鮮半島に面している割には戦力低すぎでしょ。第13旅団は」

―2. 不当な批判を是正しよう

神楽「そうでしょうか？」

深海「俺が言いたいのは次の2点だ。まず旧日本陸軍は言われるほど後進的な軍隊ではないし、海軍に比べてむしろ先進的、合理的な点もあったこと。そして現在の日本の防衛において海空自衛隊の防壁は決して鉄壁といえるものではなく、むしろ陸上自衛隊の存在によってはじめてその威力を発揮できる存在であること。これを立証したい」

神楽「なるほど」

深海「次期防衛大綱が近いので後者を優先しようと思う」

荻原「でも作者の執筆ペースだと、掲載した頃には防衛大綱問題は昔のことになってそうですね」

深海「∴」

神楽「あるある」

深海「とにかく∴次回を待て」

― 3. ― そして日本の陸上防衛力は崩壊した

荻原「∴あれ？次回を待つんじゃないんですか？」

神楽「その予定だったが∴」

深海「作者が掲載すべきかどうか悩んでいる間に、とんでもない報道が出てきたもんでな」

荻原「といいますと∴」

神楽「曰く“次期防衛大綱では戦車定数を現状の600輦から200輦削減し、定数400輦とする”」

荻原「それがとんでもないんですか？」

深海「とんでもないさ」

神楽「とんでもないね。必要量に比べて全然足りない」

荻原「どれだけ足りないんですか？」

深海「現在、陸上自衛隊の15個師団及び旅団中、機甲師団の第7師団を除くと、その配下の普通科連隊数は40個。それに1個ずつ14輦編製の戦車中隊を配属するとすれば戦車数は560輦。それに機動打撃力を担う第7師団に226輦。その他教育部隊を勘案すれば800輦から900輦が最低限必要だろうね」

神楽「そして現在の自衛隊は一部の地域を半ば見捨てる形で戦車定数600輦を呑んだんだ。これ以上、削る余地なんてなかったくない」
深海「もし戦車数が400輦となれば、第7師団と教育を抜けば残りは精々100輦。師団・旅団あたり1個中隊すら配備できない。これは由々しき事態だぞ」

神楽「詳しいことは次章に譲るが、地方張り付け部隊がここまでスカスカになるということは、例えば上陸してきた敵部隊が小規模であっても地方の師団や旅団が自前の戦力だけで解決することが難しくなる。そして初期消火に失敗すれば、敵部隊撃滅には全国からの部

隊転用を待つ必要がある」

深海「つまり相手が小規模であっても長期戦に持ち込まれるということだ。勿論、それでも純軍事的には十分に勝機はある。純軍事的にはな」

荻原「純軍事的じゃない場合とは？」

神楽「クラウゼヴィッツは言った。“戦争は政治の延長である”と」
深海「中東最強を誇るイスラエルが一番恐れたシナリオはアラブ軍がイスラエルの領土の一角でも占領し持ちこたえ、その間に国連で即時停戦が決議されることだ。そうなるとアラブ軍を領土から追出すには外交交渉で譲歩を重ねる必要がでる」

神楽「短期間での解決に失敗した場合、自衛隊側の攻勢準備が整うまでに敵国は外交で攻勢を仕掛けてくるだろう。長引く有事に国民の不満は積もる。その間に敵国が甘い言葉をかけてくる。“そっちが譲歩をすれば、こちらは兵を引くよ” 拳句の果てに国連で即時停戦決議でも出されたら自衛隊はなにができるだろうかね？」

荻原「それってかなりヤバくないですか？」

神楽「ヤバイよ。めっちゃヤバイよ」

深海「ということで、今度こそ次回を待て」

陸軍地位向上委員会1（後書き）

作者「登場兵器紹介の艦艇編2と3、歩兵の兵器編1を改訂」

深海「なんでまた」

作者「歩兵の兵器編は従来までの二二式軽重よりも九九式軽機関銃改と二二式汎用機関銃の組み合わせの方が“それっぽい”かなと思いまして」

深海「“それっぽい”かな、って」

神楽「まあ架空戦記なんてそんなもんさ」

深海「艦艇編の方は？」

神楽「夕霧型の隻数が増えて、舞風型が減ったなあ」

作者「第二次大戦後から現代までの海軍史をまとめたので、それにあわせて修正しました」

深海「：そういうのは本編執筆前にやるもんじゃないか？」

作者「てへ！」

深海「てへ！じゃねええ！」

作者「まあ本編の記述にはなんの影響もないし」

深海「本編の記述になんの影響もない設定を弄くる前に本編を進めろ！」

陸軍地位向上委員会2 なぜ陸上自衛隊が必要か? (前書き)

今回は前回に引き続き陸軍地位向上委員会です
陸上自衛隊の意義に迫ってみたいと思います第一弾です

陸軍地位向上委員会2 なぜ陸上自衛隊が必要か？

神楽「さて二回目だが。次期防衛大綱について続報が入ったぞ。大砲も400門に削減だとさ」

深海「陸上自衛隊が歩兵だけの軍隊になっちゃうな。しかも旧軍と違って兵の頭数が全然足りない…」

荻原「大変ですね」

深海「今回は国防における陸上戦力の意義について考えよう」

荻原「よろしく願います」

深海「さて。我が国の国防問題を語る上で、常に主張されるのが“陸上自衛隊不要論”ないし“陸上自衛隊軽視論”だ」

神楽「つまり、“海空自衛隊が洋上で敵部隊を撃滅してしまえば、陸上自衛隊に出番はない！”って意見ね。日本は島国で敵国が侵攻をしようとするれば海上か空中から部隊を派遣しなくてはならない。強力な海空戦力があれば、陸地に到達する前に全滅させることができる。そういう理屈よ」

荻原「それは間違っている？」

深海「作者はそう思っている。作者は島国である我が国において強力な陸上戦力が必要である理由として以下を挙げる」

- ・ 陸上戦力があってはじめて海空戦力が威力を発揮できる
- ・ 敵上陸部隊第1派の阻止は困難であり、その対処のために陸上戦力が必要である

- ・ 敵コマンド部隊対処に必要である

荻原「災害出動とかは？」

深海「あくまで敵の侵攻に対する戦力として必要な理由を挙げた」
神楽「今回は一番上の“陸上戦力があってはじめて海空戦力が威力を発揮できる”を説明したいと思います」

1. 敵国がまず考えるのは陸上自衛隊の戦力だ

深海「さて自衛隊の使命は2つある。まず平時よりその戦力をもって抑止力となり相手国の侵攻計画そのものを諦めさせること。そして有事の際には実力をもって侵攻部隊を排除することだ。まずは抑止力として陸上自衛隊の意義を考えてみよう」

神楽「じゃあ、まず思考実験をしてみよう。里美さん。もし貴方が敵国の司令官だったら日本を侵攻するとして、まずなにを考える？」

荻原「ええと。お財布の中身？」

深海「∴」

神楽「∴観光じゃないんだから」

深海「敵国はなにかしらの目的があって軍を送り込んでくるんだ。だからまず目的達成の為にどれだけ陸軍部隊を上陸させればいいかを考える」

神楽「離島占領なり、コマンドによる破壊工作なり、日本征服なり目的はその時々によって様々だけど、敵国側が送り込む戦力を目算する上で最も重要な要素はなにか、それは陸上自衛隊の戦力よ」

深海「敵国はまず陸上自衛隊の抵抗を排除しつつ目的を達するにはどれだけの兵力を送り込まなくてはならないか考える。そしてその兵力を海空自衛隊の防衛網を突破して送り込めるかを考える。つまり敵国が日本侵攻を企てるとしたら、真っ先に考えるのは陸上自衛隊の戦力なんだ」

神楽「つまり海空自衛隊の抑止力も陸上自衛隊の存在が前提となるわけ」

深海「陸自を“海空自衛隊を万が一にも突破された時の用心”とか“海空の撃ち漏らし掃討役”くらいにしか思っていない人も居るだろうけど、抑止力という観点から見ると陸上自衛隊こそが第一関門なんだ」

荻原「ええと、つまりどういうことですか？」

神楽「簡単にまとめるとこういうことだ。陸上自衛隊軽視論では自

衛隊の抑止力をこのように考える」

1. 海空自衛隊は強力だ
2. それを突破するのは難しい
3. だから日本侵攻は諦めよう

深海「これなら確かに陸上自衛隊の必要性は薄いように思える。しかし実際はこうだ」

1. 陸上自衛隊の抵抗を排除しつつ目的を達するにはこれだけの陸軍戦力を送り込まなくてはならない
2. それだけの戦力を送り込むには海空自衛隊を突破しなくてはならない

3. 海空自衛隊は強力だ

4. それだけの戦力を送り込むのは難しい

5. だから日本侵攻は諦めよう

神楽「陸上自衛隊のウェイトがさつきよりずっと大きいことが分かるでしょ？」

2. 陸上自衛隊の存在が洋上阻止を可能にする

荻原「でも、結局は海上で阻止しちやえば陸上自衛隊の出番はないんですよね？」

神楽「それでは質問だ。どうすれば航空自衛隊ならびに海上自衛隊は敵部隊を海上で阻止できる？」

荻原「ええと。自衛隊が強ければ阻止できるんじゃないですか？」

深海「それも重要だが。それだけでは十分とはいえない」

神楽「当らなければどうということもない。重要なのは敵を発見できること。そして十分な戦力を集中できること」

深海「さて。もし日本に陸上自衛隊が無かったら。その場合には1000人くらいの軽歩兵部隊に迫撃砲でもつけて送り込むだけでも大きな打撃を与えることができるだろう」

神楽「そして、その程度の戦力であれば偽装漁船を100隻くらい

用意すれば簡単に上陸させられる。海空自衛隊がこれを阻止するのは難しいだろう」

深海「偽装してるんだから護衛はいらん。むしろ有害。ほぼ同時に出発してバラバラに行動し、上陸地点で集結する。発見、捕捉、そして戦力の集中は難しい」

神楽「あまつさえ日本周辺は国際航路で数多くの様々な国籍の船が航行しているから、そこに紛れれば、多くの敵船が防衛線をすり抜けるでしょう」

荻原「つまり洋上阻止は困難ってことですか？」

深海「そういうことだ。敵部隊は小さいから、見つけづらい」

神楽「敵輸送船団が大規模であればあるほど海空自衛隊による捕捉、攻撃は容易になる。そして敵輸送船団を大規模化させる要因はなにかな？」

荻原「陸上自衛隊ですね！」

神楽「その通り。陸上自衛隊が存在し、戦車や大砲のような重装備を持つことによって、敵国はそれに対抗できるだけの兵力、重装備を送り込まざるをえなくなる。そして、その分だけ洋上輸送の負担が大きくなる」

深海「そして敵の洋上輸送が大規模であるばあるほど、海空自衛隊が洋上阻止できる可能性が高まる」

神楽「簡単にまとめるとこうなるね」

1. 強力な陸上自衛隊が存在する

2. 陸上自衛隊を排除するために敵国は大兵力、重装備を送りこまなくてはならない

3. 大兵力、重装備を送り込むには大規模な輸送船団が必要

4. 船団が大規模であればあるほど洋上阻止の可能性が高まる

深海「海空自衛隊が海上で敵部隊を撃退すれば陸上自衛隊はいらない！という意見もあるが、まったく逆だ。陸上自衛隊があるからこそ海上で撃退できる可能性がうまれるんだ！」

3. 空自基地は誰が守るか？

深海「では別の観点から空海自衛隊の威力発揮に陸上自衛隊の必要性を考えてみよう」

神楽「陸上自衛隊と空海自衛隊には徹底的な違いがある。それはなんだろうか？」

荻原「ええと。名前が違う！」

深海「…」

神楽「…」

深海「基地への依存度だ」

荻原「依存度ですか？」

神楽「陸上自衛隊の基地は、基地と呼ばず駐屯地と呼ぶ。それは陸上自衛隊にとって駐屯地はあくまでも駐屯する場所、つまり“とりあえずそこに居る場所”に過ぎないの。必要なら別の場所へいつでも移動できる」

深海「一方、海上自衛隊や航空自衛隊にとって基地は文字通り“基”となる土“地”、あらゆる作戦行動の拠点となる場所だ」

荻原「なにが違うんですか？」

深海「陸上自衛隊にとって駐屯地は必ずしも必要な場所じゃないってことさ。作戦行動をする場合には駐屯地から完全に離れて行動できる。それが陸上自衛隊の、いや陸軍の利点だ」

神楽「一方、海上自衛隊や航空自衛隊は作戦行動中も常に基地に依存している。船内に必要な物資をたくさん搭載して長期間行動できる海上船舶はまだマシだけど、航空機は発進してから数時間後には必ずどこかの基地に着陸しなくてはならない」

荻原「つまり海上自衛隊や航空自衛隊にとって基地は大切ってことですか？」

深海「その通り。陸自駐屯地は幾つか破壊されても、その地域の陸上自衛隊部隊が作戦能力を失うことはない。だけど航空自衛隊や海上自衛隊の基地が破壊された場合、戦場から離れた場所にある基地

に拠点を移さなくてはならない」

神楽「そうなれば空海自衛隊の行動の幅は大きく制限されることになる。だから港湾や航空自衛隊の基地は敵軍にとって最優先目標よ」
深海「基地への攻撃は様々な手段が考えられる。ミサイル攻撃？空爆？しかし一番やっかいなのは敵工作員による攻撃だろう」

神楽「航空自衛隊は自前の警備部隊を整備しているが、それでも限度はあろう。近頃の迫撃砲は小型のものでも射程が5キロもある。守るべき範囲は広大ね」

荻原「つまり空海自衛隊の基地を守るためにも陸上自衛隊が必要と
いうことですか？」

深海「そういうことだ」

神楽「というわけで今回の作者の主張をまとめるよ」

・ 敵が日本侵攻を企てる場合に真っ先に考えるのは陸上自衛隊の戦力である

・ 強力な陸上自衛隊の存在が敵輸送船団の大規模化をもたらし海空自衛隊の阻止を容易にする

・ 海空自衛隊の作戦行動に必要な不可欠な基地防衛のために陸上自衛隊が必要である

深海「次回は“敵上陸部隊第1派への対処”を考えてみよう」

陸軍地位向上委員会3　それでも敵は上陸する（前書き）

陸上自衛隊の意義に迫る第二弾

陸軍地位向上委員会3 それでも敵は上陸する

深海「さて。陸軍地位向上委員会の第3段。今回も前回に引き続き陸上自衛隊の存在意義を考えてみよう」

神楽「今回は“敵上陸部隊第1派の阻止は困難であり、その対処のために陸上戦力が必要である”を考察するよ」

荻原「第1派は防げないとは、どういう意味ですか？」

神楽「最初に日本へと上陸してくる連中を防ぐことは難しいということさ」

深海「増援や補給を阻止できる可能性は十分にあるが、第1派阻止はかなり難しいだろうさ」

神楽「具体的に迫ってみよう」

1. 制空権は本当に奪われないの？

深海「まず、この手の話だと“空海自衛隊相手に周辺国が制海権を獲得できるわけがない。故に周辺国陸軍が日本に上陸できるわけがない”という主張がされがちだ」

神楽「あと“陸上自衛隊が敵と戦う時には海空自衛隊が壊滅という絶望的な状態だから陸自なんて無意味”とか」

荻原「間違っている？」

神楽「端的に言えばそうなる」

深海「要はいかにして陸軍部隊を敵地に送り込むかだ。制海権、制空権の確保はその手段に過ぎない」

神楽「まあ制空権、制海権という概念自体が近年は無意味なものになりつつあるけどね」

深海「近年の戦場においては絶対的制空権、制海権の確保というのは難しい。特に航空機は空に留まることができず必ず数時間後には基地に戻らなくてはならない。また軍用航空機の数量そのものも縮

小傾向にあり、戦場に常時航空機を飛ばすのは難しい。現在では空中の戦いにおける優劣は流動的だ」

神楽「だから最近では制空権に代わって航空優勢という言葉が使われるの」

荻原「なるほど」

深海「まあアメリカ並に圧倒的な空軍力があれば話は別だけど、自衛隊と周辺諸国にそれほどの格差はない。逆に言えば周辺諸国にも航空自衛隊を圧倒できる能力は無いけどね」

神楽「それでもう1つ考慮にいれなくてはならないことがある。それじゃあ問題。敵の戦闘機部隊を撃破するのにもっとも効率的な方法は？」

荻原「うーん。戦闘機を撃墜すること？」

深海「正解は飛び立つ前に破壊することだ。第三次中東戦争の時にはアラブ連合空軍部隊は開戦と同時にほぼ全滅している。だけど別にイスラエル空軍に撃墜されたわけじゃない」

神楽「イスラエル空軍は奇襲攻撃をしかけて敵機が飛び立つ前に空爆で破壊してしまったの。地上にあれば、どんな戦闘機も無力だからね」

深海「それに前にも言ったように空軍部隊は航空基地に対する依存度が高い。戦闘機が飛び立つことができても、基地を破壊されてしまえば行動は大きく制限されることになる」

荻原「つまり敵の基地を攻撃するのが手っ取り早いと？」

深海「そういうことだ。そして自衛隊にはその能力が無い」

荻原「それは憲法9条があるからですか？」

深海「うーん。そういう面もあるけど、ただ決定的な要素じゃないね。かつて1956年に当時の鳩山一郎首相が答弁したように憲法9条下でも敵の基地を攻撃することを合法とする見解もあるしね」
神楽「問題はそもそも自衛隊にその能力がないこと。航空自衛隊は防空と洋上阻止攻撃に特化した組織だから。敵の防空網を突破して、敵基地を攻撃する能力はないの」

深海「だから、その点においても自衛隊が空海の戦いで決定的な勝利を得ることは難しいわけだ」

神楽「そして海軍は航空優勢の下でなければともに活動することはできない」

荻原「つまりどういうことでしょうか？」

深海「簡単にまとめるところなる」

- ・航空自衛隊には敵の基地を攻撃する能力がない
- ・航空自衛隊には制空権を確保できるだけの圧倒的なアドバンテージは周辺国に対して持っていない
- ・それ故に現在の空中の戦いは流動的である、絶対的な制空権の確保は難しい

神楽「おそらく、今の日本とどこかの国が戦争になった場合、空の戦いでは時には日本が有利になったり、時には相手国に有利になったりと変化を繰り返して、陸海は敵空軍の隙を突いて行動するような感じになるのだと思う」

深海「だから“空海自衛隊相手に周辺国が制海権を獲得できるわけがない。故に周辺国陸軍が日本に上陸できるわけじゃない”というのは成り立たないわけだ」

神楽「それに“陸上自衛隊が敵と戦う時には海空自衛隊が壊滅という絶望的な状態だから陸自なんて無意味”というのも否定できる。敵は上陸するのに航空自衛隊や海上自衛隊を壊滅させる必要は無いんだ」

深海「沖縄に上陸するのに北海道の航空自衛隊を攻撃する必要は無いからね。緒戦で戦場周辺の航空優先が敵に奪われたとしても、航空自衛隊には多くの戦力が残っている。残った戦力を集めて反撃を試みる。海上自衛隊も陸上自衛隊もそれに呼応して攻撃を行なうだろうさ」

荻原「では、日本の周辺国を圧倒できる航空自衛隊があれば大丈夫なんですか？」

深海「そうかもしれない。だけど圧倒的な航空自衛隊を用意するよ

り陸海空をバランス良く取り揃えた方が得だし、効率的だろう」

神楽「それに世の中に絶対というものはないからね。わざわざ負ける敵はいないんだから、どんなに厳重な防備を用意しても隙や弱点を見つけ出して攻撃してくるでしょう」

深海「だからこそ十分な陸上戦力をもって二重三重の防壁を築く必要があるんだ。まあ、やっぱり敵基地攻撃能力は欲しいけど」

2. 開戦は奇襲に始まる

深海「そして“空海自衛隊相手に周辺国が制海権を獲得できるわけがない。故に周辺国陸軍が日本に上陸できるわけがない”という主張には別の問題がある。この主張は“敵は制空権、制海権を奪取した後に上陸部隊を差向けて来る”ということが前提になっていることだ」

神楽「確かに太平洋戦争における主要な上陸作戦を見ると、まず制海権を巡る攻防があって、それから上陸部隊が出てくるのが通例ね。だけどこれらの作戦は大戦争の最中に行なわれた作戦であることを忘れてはいけない」

深海「しかし俺達が今想定しているのは、そういった既に開戦して交戦状態にある相手国による上陸作戦じゃない。上陸作戦が始まるまでは平時であって、上陸によって戦争が始まる。そういう想定だ」

神楽「その場合、相手は奇襲効果に頼ることになる。だから航空作戦と上陸作戦はほぼ同時に行なわれるだろうね。日本側が全貌を把握して組織だって反撃を始める前に橋頭堡を確保したいからね」

深海「実際、制海権や制空権の獲得を待たずに開戦と同時に上陸作戦を結構した例はないわけじゃない。太平洋戦争緒戦のコタバル上陸や欧州戦線におけるノルウェー侵攻が挙げられるかな？」

荻原「“敵は制空権、制海権を奪取した後に上陸部隊を差向けて来る”という前提は成り立たない？」

神楽「そういうことね」

3. まとめ

萩原「それでは今回の話をまとめてみましょう」

神楽「次の2点から“空海自衛隊相手に周辺国が制海権を獲得できるわけではない。故に周辺国陸軍が日本に上陸できるわけではない”に反論する」

深海「まず第1に現代の空中戦闘は流動的であり、双方ともに絶対的な制空権の獲得は難しい」

神楽「第2に相手国は奇襲効果を重視して開戦と同時に上陸作戦をし掛けてくるだろう。故に“敵は制空権、制海権を奪取した後に上陸部隊を差向けて来る”という前提が条件となる“空海自衛隊相手に周辺国が制海権を獲得できるわけではない。故に周辺国陸軍が日本に上陸できるわけではない”は成立しない」

萩原「だから敵の上陸部隊第1派を防ぐことは難しく、それに対抗するために陸上自衛隊が必要ということですね！」

陸軍地位向上委員会4 攻撃側の有利

神楽「さて。前回に引き続き今回も陸上自衛隊の意義について考察をするよ」

深海「前回、奇襲攻撃について言及したが、今回はその点について追究してみよう」

荻原「はい。よろしく願います」

1. 自衛隊の対応は常に後手にまわる

神楽「こんな副題をつけると、憲法9条であるとか、有事法制がどうかという話だと勘違いする者がいると思うが、残念ながらそんな話ではないのだよ」

深海「厳密に言えば関係ないとは言えないけど。憲法9条で交戦権を放棄している我が国は専守防衛を掲げている。つまり相手が攻撃してきた時だけ反撃する。故に先制攻撃はできない」

荻原「それじゃあ憲法9条の問題じゃないんですか？」

神楽「第4次中東戦争のイスラエルの例もある。別に専守防衛を掲げていなくても、攻撃を受ける時には受けるものさ。だから憲法9条に由来する問題とは言えない」

荻原「結局、どういうことなんですか？」

深海「つまり自衛隊が実戦を戦う場合は、敵が攻撃をしてきてそれに対処するという形になる。主導権というのは先手を仕掛けてきた方が持つものだ。その点、自衛隊は不利だ」

荻原「分かるような分からないような。主導権が相手にあるというのはどういう状況なんでしょうか？」

神楽「筆者は次の4つが敵側にあることであると考える」

1. 攻撃目標・目的設定の自由

2. 攻撃場所選択の自由

3. 攻撃時間選択の自由

4. 最終決断の自由

深海「1つ1つ考えてみよう」

2. 攻撃目標・目的設定の自由

深海「侵攻作戦を行なう目的はその時によって様々だ。そして目的によって攻撃の手段、規模も変わる」

神楽「例えば日本を自国に併合しようと考えたら、自衛隊を撃滅して日本全土を占領するに十分な大兵力を送り込む必要があるでしょうね。だけど例えばどこぞの国が韓国なり台湾なりを攻撃しようとして、その時にアメリカ軍の介入を阻止したいと考えたとする。その場合なら少数の特殊部隊による攻撃で日本の米軍基地を麻痺させようとするんじゃないかな？」

深海「しかも少数の特殊部隊の攻撃はそれ自体が目的とは限らない。もしかしたら相手国は本格的な上陸作戦を計画していて、特殊部隊の攻撃はそれを容易にするための陽動かもしれない」

神楽「もしくは日韓大戦のように日本の領土を一部占拠して、そこからの撤退と引き換えに外交で譲歩を得ようとするかもしれない」

荻原「なるほど」

深海「そして日本側の勝利条件は相手に目的によって変化する。相手の目的が日本の占領であれば最終的に相手の軍隊を追払えば任務達成だ。だけど陽動や牽制が目的なら、最終的に敵軍を殲滅したとしても、それまでの間に自分達の目的を達成することもありうる」

神楽「自衛隊は相手の目的を早期に特定して適切な行動をとらなくてはならない」

荻原「どんな風にですか？」

深海「例えば日本に少数の特殊部隊が潜入したでしょう。特殊部隊

による工作活動が敵の目的であるならば、出来る限り戦力を集中して早期に対処しなくてはならない。でも、特殊部隊はあくまで囹で本格的な上陸部隊が控えているとすれば、そちらへの対処のために兵力を割り当てる必要がある」

荻原「難しい判断をしなくてはならないわけですね」

深海「その通り。しかも判断が遅れば、それだけ相手は自分の計画をうまく進めることが出来る。日本が判断を間違えても然りだ」

3. 攻撃場所選択の自由

深海「さて荻原君。ここで問題だ。兵力5の敵が攻めこんできた。我が方の戦力は10。勝つのはどっち？」

荻原「そりゃ、こちら側が勝つんじゃないんですか？兵力は2倍なんですから」

神楽「普通に考えればそうですね。じゃあ、ここで1つ条件を加えるよ」

深海「敵が攻めてくる可能性のある場所は10箇所。どこに攻めてくるか分からない」

荻原「ええ。全部守ろうとすると1箇所あたりの兵力は1になりますね。そうなると敵は5だから」

神楽「勝利はおぼつかない」

深海「これが攻撃場所選択の自由が敵方にあるということさ。敵側は自分達が決めたポイントに戦力を集中させることができるが、日本側はよほど事前情報に恵まれない限り敵の上陸地点を特定できず戦力を分散せざるをえない」

神楽「勿論、韓国軍が仙台に上陸！なんて事態はあまり考えられないから、まったく絞り込めないわけじゃないけど。でも、これが相手が本格的な上陸作戦を仕掛けてきた場合の話」

深海「特殊部隊による攻撃ならば輸送すべき兵力、物資は最小限で

済むし、偽装も簡単だからね。日本全土が攻撃範囲に含まれることになるだろうさ」

荻原「大変ですね」

4・攻撃時間選択の自由

深海「そして攻撃側の最後の利点は攻撃時間選択の自由だ」

神楽「攻撃側は攻撃時間を決定すれば訓練や整備、休養をそれにあわせて計画的に行なうことができる。故に実際に動員可能な兵力を最大限に高めることができる」

深海「だけど防衛側は相手が何時攻撃してくるか知る術がない」

神楽「諜報活動の成果として敵の侵攻計画の兆候を掴み警戒態勢をとれたとしても、それを敵の攻撃が始まるか、安全が確認されるまで継続しなくちゃならないの」

深海「何時来るのか分からない攻撃を警戒して連日24時間警戒を続けるのはキツイ」

荻原「それは大変ですね」

神楽「おまけに警戒が続いていれば訓練が行き届かなくなって練度が下がるし、緊張も永遠に続けられない。いずれ緊張の意図が途切れて機が抜ける瞬間ができる」

深海「朝鮮戦争や第4次中東戦争はまさにその瞬間を狙われて奇襲が成功した事例だ」

神楽「しかも敵の攻撃を受けた時、対応できるのは一部の部隊にならざるをえない」

荻原「それはなぜですか？」

深海「兵士は人間だからね。食事や睡眠が必要だし、訓練や平時の業務を遂行する必要もある。だから交代制ローテーションを敷いて対応するんだ。

常に警戒態勢にあるのは部隊の一部だけで、残りは休養や整備、訓練に励む。それを交代でするんだ」

神楽「海上自衛隊には4つの護衛隊群があるけど、それもローテーションをするためよ。だから4つの護衛隊群のうち常時戦闘可能なのは1つか2つだけ」

荻原「それに対して相手側はほぼ全力をぶつけることができる」

深海「その通り。だから自衛隊は不利なんだ」

5. 最終決断の自由

深海「そして最後は“最終決断の自由”だ」

荻原「それはどういう意味ですか？」

神楽「簡単な話。開戦するか否かの決定権は相手側にあるという意味」

深海「戦記ものの小説やウォーゲームでは当然ながら進行上必ず開戦するから、この問題はどうしても忘れられがちだけどさ。実際の場合は何かしらの兆候があったとしても必ず開戦するわけじゃないんだ」

神楽「むしろ開戦しないケースの方が多いかもしれない」

深海「当然、相手側は攻め込む立場なんだから決断を下せば後は突っ走るだけだが、日本側は本当に来るかどうか分からないものに対応しなくちゃならない」

神楽「例えば自衛隊員に外出禁止・休暇取消令を出して駐屯地、基地に待機させるくらいなら比較的簡単にできるけど、攻撃に備えてし私有地を接収して陣地を造ったり避難警報を出したりといった思い切った行動はなかなかできないよね」

深海「それで敵が攻めてこなかったら間違はなく内閣総辞職モノだからね」

神楽「それに人間はどうしても自分の都合の良いように考えちゃうもの」

深海「まさか本当に攻めてくるわけがない」「ただのこけおどし

だ”」

萩原「そんなところに敵が攻めてきたら大変ですね」

深海「そして、そんな事例は歴史上に多々あるんだ」

6. まとめ

神楽「というわけで簡単にまとめるとこうなるかな？」

深海「敵は攻撃目標、時期を自由に決めて戦力を集中することができる。対して日本はあらゆる事態に対応する為に十分な準備をして迎え撃つことが難しい」

萩原「大変な問題ですね」

神楽「その通り。それに確実に対応する為の手段は1つしかない」

深海「後手にまわっても盛り返せるだけの兵力を日本全土の各地に厚く配分する。これだけだ」

萩原「よく分かりました」

深海「それじゃあ、次回は奇襲攻撃について考えてみよう」

日本空海軍機種記号

荻原「ええと。陸軍地位向上委員会が続いていますが、ここで少しコーヒープレイクです」

深海「今回は“世紀末の帝國”に登場する空軍及び海軍の航空機の機種記号について解説するよ」

神楽「史実の日本海軍式を採用しているのね」

例…A15M-K2旋風

荻原「例と言われても、よく分かりません」

神楽「実はこれだけでいろいろなことが分かるの」

深海「まずは先頭の“A”だ。これはその航空機の用途を示している」

機種記号

A 艦上戦闘機

B 艦上攻撃機

C 艦上偵察機

D 艦上爆撃機

E 水上偵察機

F 水上観測機

G 陸上攻撃機

H 飛行艇

J 陸上戦闘機

K 練習機

L 輸送機

M 特殊機

N 水上戦闘機

P 陸上爆撃機

Q 哨戒機

R 陸上偵察機

S 救難機

T 回転翼機

U 給油機

V 電子戦機

荻原「つまりA15M旋風は艦上戦闘機ということですね」

深海「その通り」

神楽「ちなみにRまでは史実通りで、S以降は独楽犬のオリジナル。史実ではSは夜間戦闘機だけど、B-29による本土空襲なんて経験していない帝國世界では記号は割り振られなかった」

深海「そして、次の“15”は開発された順番だ。旋風は15番目に開発された艦上戦闘機であることを示している」

神楽「歴史的に有名な機体を挙げれば零戦はA6だね」

荻原「その後の“M”は？」

深海「それは開発した会社を示している」

会社記号

A 愛知

B ビーチクラフト、ホーカー・ビーチクラフト

B e ベル

B o ボーイング

D ダグラス、マクダネル・ダグラス

G グラマン

H u ヒューイ

J 日本航空機産業

K 川西

K a 川崎

L ロッキード

M 三菱

N 中島

S シコルスキー

V a バートル

V i ヴィッカーズ

深海 「劇中に登場、ないし登場予定の機体だとこんな感じだ」

荻原 「つまり旋風は三菱が開発したということですね。じゃあ、その後のK2は？」

神楽 「兵器というのは常に改良が行なわれたり、バリエーションができたりする」

深海 「例えば旋風が改良されて性能の向上に成功したとしよう。その場合、その発展型は原型と区別をしなければならない。だから原型機はA15M1。発展型はA15M2と記号が付与される」

荻原 「つまり後の数字は改良の回数を示すわけですね」

神楽 「そう。だから例えばA14M2とあったら、その前にA14M1があつて、それを改良した機体ということになる」

荻原 「なるほど。でも例だとK2となってますが」

深海 「それは派生型を現す」

荻原 「派生型？」

神楽 「そう。ある特定の目的のために開発された機体でも、別の目的に使うために改造型が開発されることがあるのよ」

深海 「自衛隊を例にすると、元々対潜哨戒用に開発されたPS-1飛行艇を改造して救難機US-1を開発したり、輸送機であるC-1に電子妨害用の装備を搭載して電子戦訓練機EC-1を造ったりしたのが具体例だ」

荻原 「つまりA14M-K2は艦上戦闘機を基に別の目的の為に開発された機体ということですね」

神楽 「その通り。そして“別の目的”は機種記号と同一だから、上

の表を見れば分かるよ」

萩原「ええと。Kですから練習機ですね」

深海「自衛隊だとF-15Jに対するF-15DJやF-2Aに対するF-2Bのような存在だと思えばいいのかな？」

神楽「ええ。教官が乗るための後部座席がある複座型よ」

深海「それじゃあ、最後に劇中に登場した、もしくは登場予定の航空機を表にまとめておくよ」

戦闘機

A14D/F-4ファントムII

A15M/旋風

J15N/天雷

J16N/鎮守

攻撃機

G13M/夜鷹

G14D/F-15Eストライクイーグル

対潜哨戒機

Q8L/P-3Cオライオン

T6S-Q/SH-60シーホーク

輸送機

L11J/夕空（史実のYS-11相当）

L13Vi/ヴィッカーズVC10輸送機

L14J/大空（史実のC-1相当）

L15L/C-130ハーキュリーズ

L16J/夏空（大型ジェット旅客機）

L17J/青空（中型ターボプロップ、夕空後継）

S5B-L/ホーカー1800

練習機

K25N/大鷲（高等練習機、史実のT-2相当）

K26N/駒鳥（初等練習機、史実のT-3相当）

K27B／ビーチクラフトTC－90（大型練習機）
 K28Ka／天燕（中等練習機、史実のT－4相当）
 K29D／T－45ゴスホーク（艦上練習機）
 K30N／真鶴（初等練習機、史実のT－7相当）
 L16M－K／冬空（大型練習機、史実のT－400相当）
 ヘリコプター
 L12Va／バートルV－107
 T2Hu／OH－6カイユース
 T3Be／UH－1イロコイ
 T4Be／AH－1コブラ
 T5Bo／CH－47チヌーク
 T6S／UH－60ブラックホーク
 T7S／CH－53シースタリオン
 T7S－M／MH－53シードラゴン
 救難機
 S4M／韋駄天（史実のMU－2相当）
 S5B／ホーカー800
 T6S－S／HH－60ペイブホーク
 電子戦機
 V1G／E－2Cホークアイ
 V2Bo／E－3Cセントリー
 Q6G－V／E－1トレイサー（哨戒機として導入したS－2トラ
 ッカーを改造）
 飛行艇
 H8K／二式飛行艇

日本空海軍機種記号（後書き）

紹介というより自分のための資料です（笑）

登場兵器紹介 艦艇編4

神楽「さあて。今回は大連上陸作戦に登場する艦艇の紹介よ」

大鷲級

全長…284m

満載排水量…4万9800t

乗員…2600人

兵装

20ミリCIWSフラックス×4

短距離対空誘導弾八連装発射機×2

RIM-7シースパロー×32（即応16発、予備16発）

スチームカタバルト
蒸気射出機×2

搭載航空機（2000年時）

A14M旋風×20（最大36）

T6S-Q（SH-60シーホーク）×4

Q5G-U（E-1トレイサー）×2

帝国海軍最後の通常動力空母である。

1960年代、日本海軍空母機動部隊の主力は大戦期に建造された大鳳と戦後に建造された改大鳳型の3万トン級空母であった。しかし艦載機の大形化が進み3万トン級空母では手狭になりつつあった。次世代艦上戦闘機としてA14D^{F-4ファントム}戦闘機の採用を決定した帝国海軍は同機を運用可能な大型空母の建造を決定した。それが大鷲級である。同艦は最大で30機のA14DとQ5G^{S-2トラッカー}哨戒機4機が運用可能であった。

一番艦の大鷲は1969年に、二番艦の天鷲の天鷲は1975年に就役し、1980年頃には三番艦が就役を予定していたが、オイルショックにより建造中止となった。

プターの離着艦が可能であるが、整備能力には限界がある。

25メートル浮航運貨艇^{LCA}を2隻、もしくは40メートル特運貨艇^{LCU}―陸軍の超大発動艇―を1隻搭載することができる。

同艦は三隻建造され、第42戦隊は編成された。揚陸母艦は帝國海軍における狭義の軍艦に含まれ、艦長は大佐であり艦首には菊の御紋が備えられている。

大隈 ／1993

下北 ／1997

国東 ／1997

深海「揚陸艦か」

神楽「いわゆるドック型揚陸艦ね」

荻原「ドック型揚陸艦？」

深海「簡単に言えば艦内にウェルドックがある揚陸艦のことだ」

荻原「ドックですか？」

神楽「ドックとは簡単に言えば船を造ったり、修理をしたりするところ。船が入ると外とは隔離されて水を抜くことができる」

深海「ウェルドックも同様に普段は普通の格納庫だけど、作戦時には水を入れてそこから船を発進させることができるんだ」

荻原「船を発進させるというと？」

神楽「揚陸艇ね。陸地に取り上げて兵士や車輛を上陸させるための船よ」

深海「陸地に取り上げるための船だから小型で船底は平らで喫水も浅い。だから航行能力が低く、外洋を長期間航海するには向いていない」

荻原「だから揚陸艦に載せて運ぶんですね！ところで帝國海軍における狭義の軍艦ってどういう意味ですか？」

神楽「それは後述」

栗駒型打撃巡洋艦

兵装

三年式15・5糎連装砲×2

八連装アスロクランチャー×1

四連装誘導弾発射管（百合or沈丁花）×4

二六式連装SAM発射機（石楠花）×1

三連装短魚雷発射管×2

二〇糎高性能機関砲×2

艦載機×2

栗駒型は帝國海軍が大戦型巡洋艦の後継艦として建造した巡洋艦である。ソ連水上艦隊の強化に対抗するため、火砲のみならず多数の誘導弾を装備して対艦攻撃能力を強化したのが特徴である。

帝國海軍は欧米列国海軍と異なり大戦後も大型砲装備の巡洋艦の配備を継続した。日本は島国であるものの大陸に近く、しかも対岸を仮想敵国が占めているという状況である故に多数の小型艦による着上陸戦が想定され、それに対しては高価な誘導弾や航空攻撃よりも艦砲射撃が効果的であり、また陸戦隊の支援にも有用であると考えられたからである。

その巡洋艦の後継として建造された栗駒型も現代の水上艦としては破格の15・5センチ連装砲を2基装備して、大和型戦艦とともに水上火力の根幹を担う。

また帝國海軍の第二世代艦隊防空ミサイルである石楠花を装備し、防空艦としての能力も備えている。

建艦当初はソ連軍の戦艦に対抗する為、8発の戦術核ミサイルが装備された。当時は通常炸薬の対艦ミサイルでは戦艦の装甲を貫けないと考えられていた他、極東ソ連海軍基地への強襲作戦が想定されたと言われている。1990年代になってから撤去され代わりに国産対艦ミサイルもしくは対地ミサイルが装備された。

本来なら1980年までに4艦揃う予定であったが、石油危機の為に遅れ、最終艦<妙高>の就役は1984年になってからだった。

栗駒	／1976	／第1艦隊第2戦隊
穂高	／1979	／第1艦隊第2戦隊
阿蘇	／1981	／第1艦隊第3戦隊
妙高	／1984	／第1艦隊第3戦隊

神楽「またの名を“大艦巨砲主義者最後の悪あがき”」

深海「わお。言い切った（笑）」

荻原「でも、ちゃんとした理由があって配備されているんですよね」
神楽「作者が必死こいて考えた設定よ。口だけでも褒めてあげましょう」

深海「戦後海軍の在り方について設定が二転三転したこともあって苦労したらしい」

荻原「そう言えば兵器紹介艦艇編1で言っていた15.5センチ砲搭載艦ってこれですか？」

神楽「ええ、その通り」

淡路級海防艦

全長…110m

乗員…120人

基準排水量…2300t

機関…ディーゼル×2 ガスタービン×2
兵装

76ミリ単装速射砲×1

八連装アスロクランチャー×1

八連装シースパローランチャー×1

20ミリCIWS×1

三連装短魚雷発射筒×2

1980年代に建造された対潜艦艇。海防艦としては初めて自衛用に対空ミサイルを装備した。また格納庫は無いものの、後部甲板にヘリコプターの着艦スペースを有する。淡路級が大量建造されるまで鎮守府艦隊は旧式化した駆逐艦や第二次大戦型の海防艦が主力になっており、本級の登場により鎮守府艦隊の近代化がようやく為された。

対潜戦闘を重視しており、対潜ミサイルであるアスロックを主要装備としている。ソナーとしては浅瀬での探知能力が高い中周波ソナーを艦首に装備し、さらに艦尾に遠距離探知能力が高い曳航式ソナーを搭載して相互補完して対潜戦闘を行なう。淡路級は曳航式ソナーを最初に装備した帝國海軍艦艇で、1985年就役の天売、三宅に初めて装備され、以降の艦に標準搭載され、またそれ以前の艦にも後日搭載された。

淡路	/1980	呉防備戦隊
宮古	/1980	佐世保防備戦隊
御蔵	/1982	佐世保防備戦隊
奥尻	/1982	舞鶴防備戦隊
礼文	/1983	大湊防備戦隊
占守	/1984	大湊防備戦隊
天売	/1985	舞鶴防備戦隊
三宅	/1985	呉防備戦隊
利尻	/1986	舞鶴防備戦隊
佐渡	/1987	舞鶴防備戦隊
沖永良部	/1986	佐世保防備戦隊
対馬	/1988	佐世保防備戦隊
海豹	/1989	大湊防備戦隊
択捉	/1989	大湊防備戦隊

国後	／1990	大湊防備戦隊
渡島	／1991	大湊防備戦隊
奄美	／1992	呉防備戦隊
魚釣	／1992	呉防備戦隊

荻原「海防艦ってなんですか？」

深海「元々は旧式化した主力艦を転用した沿岸防衛用の艦艇だ。日本海海戦に参加した殊勲艦も多くが海防艦になった」

神楽「その後、第二次大戦を経て商船護衛や警備任務を担う小型艦として認識されるようになった。他国で言うフリゲートに相当する艦ね」

荻原「難しいですね」

深海「駆逐艦の1つ下の艦として覚えればいいよ」

神楽「現代だと諸外国でもそこらへんの定義は難しいからね」

深海「イギリスの場合は長射程対空ミサイルを搭載した艦が駆逐艦で、それ以外がフリゲートとして扱われている」

神楽「アメリカだとスクリューの数で区別してるのかな？一軸ならフリゲートで、二軸なら駆逐艦。まあフリゲートが駆逐艦の上位艦種だった時代もあるけど」

与那国型

全長…135m

乗員…142人

基準／満載排水量…2900t／4200t

機関…ディーゼル×2 ガスタービン×2

兵装

76ミリ単装速射砲×1

VLS(16セル／シーランス・ESSM)×1

Mk 49 RAM-CIWS×1
 Mk 15 フランクス20ミリCIWS×1
 ボフォースL70単装40ミリ機関砲×2
 三連装短魚雷発射筒×2
 艦載ヘリコプター×1

中曽根首相のシーレーン防衛構想が背景となって建造された艦である。それまでの海防艦は沿岸防衛に重きを置かれていたが、与那国型海防艦は必要に応じて主力艦隊駆逐艦の補助戦力として洋上作戦にも投入することを念頭に設計されている。

その為、船体は大幅に大型化され、燃料タンクを増設して航続距離を底上げしている。また外洋における遠距離探知及び攻撃のために海防艦としては初めてヘリコプターの搭載能力が付与され対潜能力は向上している。艦首ソナー及び曳航式ソナーとデータリンクで結ばれ、対潜システムの一体化・自動化が進められている。ただし艦首ソナーは淡路型と同様の中周波ソナーなので沿岸戦、浅海域での作戦にも対応可能である。

また40ミリ機関砲が装備されているが、これは中国の高速ミサイル艇に対抗するための措置である。FCSと連動していて艦内から遠隔操作をすることができる。

与那国	／1993	呉防備戦隊
四季	／1993	高雄防備戦隊
七曜	／1995	高雄防備戦隊
白沙	／1997	高雄防備戦隊
沙弥	／1999	高雄防備戦隊
大東	／2000	横須賀防備戦隊
沖縄	／2000	横須賀防備戦隊
久場	／2002	(建造中) 横須賀防備戦隊

萩原「作中の日本海軍だとうろく区別しているんですか？」

神楽「連合艦隊に配備されて外洋で戦うのが駆逐艦、鎮守府に配備されて沿岸防衛を担うのが海防艦ということになっていたけれど、この与那国型の登場で曖昧になっちゃったかな」

深海「まあ、どこの海軍もそれは同じだよ。昔みたいに大砲の口径が違ったり、装備に大きな違いがあるわけじゃないから類別を区別する意味がなくなっている。アメリカ海軍ではタイコンデロガ級巡洋艦が唯一の巡洋艦だけど、巡洋艦となっている理由は“大佐が艦長の艦”の数を維持するためと言われている位だしね」

神楽「後、第二次大戦中の海防艦が艦隊決戦用の魚雷を積んでいないように、現代の海防艦には対艦ミサイルを載せていない」

首里型砲艦

全長…90 m

全幅…10 m

乗員…90人

基準／満載排水量…1150 t／1400 t

兵装

76ミリ単装速射砲×1

ボフォースL70単装40ミリ機関砲×2

ボフォース四連対潜ロケット×1

三連短魚雷発射管×2

ハープーン連装発射機×2

九一式対空誘導弾連装発射機×1

爆雷投下軌条×2

日本海軍が台湾海峡警備のために建造した哨戒艦艇である。主に中国の小型潜水艦や高速ミサイル艇に台湾沿岸で対処する事を想定していて、砲填兵装や浅瀬における対潜能力を重視としている。

一方、対空兵装は貧弱で携帯式対空ミサイル―建造当初はアメリカ製のステインガーを装備し、後に国産の九一式に換装された―用の発射機を備えているのみで、後は主砲の対空射撃に頼っている。

対艦兵装としてハーブーン対艦ミサイルを搭載しているが、バランスが悪くなるために搭載していない場合が多い。

首里	／1989
識名	／1989
厳島	／1990
宇治	／1990
太魯閣	／1991
阿里山	／1991

深海「これは自衛隊にはない艦艇だね」

神楽「一般的な分類で言えば対潜コルベットになるのかな？モデルはフランス海軍の植民地通報艦らしいけど」

荻原「またいろいろと混乱してますね」

神楽「現代の艦種類別は“言ったもん勝ち”だから、カオスだからね」

深海「その点、1万トン級のヘリ空母だろうが、1000トン強のコルベットだろうが“みんな護衛艦です”で通す自衛隊はある意味合理的だ。ともかく、台湾海峡を警備するための小型艦と憶えておけばよさそうだ」

神楽「ちなみに上述の与那国型とこれは40ミリ機関砲を装備していますが、これは台湾海軍に倣ってみました」

注…台湾海軍の主要艦艇には中国の高速艇対策として40ミリ機関砲を装備している

排水量…4000t

兵装

76・2ミリ単装速射砲×1

20ミリ機関砲×2

3連装短魚雷発射管×2

機雷敷設装備一式

帝国海軍の最新の敷設艦である。日本は長大な海岸線とソ連太平洋艦隊の太平洋への進出路を三海峡が領内に存在するため、その防衛・封鎖に適する機雷戦を重視しており列強海軍では特に機雷戦艦艇の整備に力を入れている。千歳型掃海母艦の準同型艦であり、こちらは日本海軍における狭義の軍艦に含まれる。

1993年に2隻が就役した金華山型敷設艦は最新鋭の機雷戦設備を装備しており、宗谷及び津軽の両海峡封鎖の任に就いている。またある程度の武装も持っており医療設備も充実しているので、哨戒や護衛任務への投入も想定され、臨時の病院船としても利用可能である。格納庫は無いものの後部甲板にはヘリコプターの着艦スペースがあり、SH-60クラスなら2機、MH-53クラスなら1機が着陸可能である。

金華山

／1993

海馬

／1993

萩原「機雷敷設艦ですか」

神楽「その通り。文字通り機雷を設置するための船よ」

深海「自衛隊は掃海母艦に機雷敷設機能も付与して対応しているよ」

神楽「そして狭義の軍艦。ちなみに本編未登場だけど、準同型艦が登場するのでついでに紹介」

千歳型掃海母艦

排水量…4000t

兵装…

76・2ミリ単装速射砲×2

20ミリ機関砲×2

3連装短魚雷発射管×2

補給設備一式

訓練機雷敷設装備一式

艦載機…掃海ヘリコプター×1

帝國海軍が小型掃海艇支援の為に建造した掃海母艦。主要な任務は掃海艇、掃海艦に対する補給や乗員への休養の提供、さらに訓練支援など。また掃海用ヘリコプターと航空掃海具を搭載しており航空掃海作戦の中核として活用される。

ある程度の武装も持っており医療設備も充実しているので、哨戒や護衛任務への投入も想定され、臨時の病院船としても利用可能である。特に機雷探知用高周波ソナーを備えているので浅瀬での対潜活動では駆逐艦以上に威力を発揮すると言われる。

なお金華山型敷設艦とは準同型艦であるが、こちらは狭義の軍艦には含まれない。平時には鎮守府艦隊の旗艦を務める。

千歳
／1990

千代田
／1990

深海「そして、こちらが準同型艦か」

萩原「掃海ですか？」

神楽「敷設艦とは逆に、海に設置された機雷を除去するのが任務」

深海「自衛隊の掃海能力の高さは有名だね」

萩原「ところで狭義の軍艦には含まれないとありますが、どういう意味ですか？」

神楽「軍艦とは一般的には軍隊の保有する艦艇全般を指すけど、日

本海軍の用語ではより狭い意味に使われるの」

深海「日本海軍は海軍の艦艇の中で特に格式のある主力艦について軍艦と称した。具体的に言えば戦艦、航空母艦、巡洋艦といったものかな」

神楽「ちなみに敷設艦も軍艦に含まれた。駆逐艦のような小型艦は軍艦には含まれない」

荻原「つまり“狭義の軍艦”というのは“日本海軍における区分”という意味ですか？」

深海「そういうこと」

荻原「それで掃海母艦は軍艦にならないんですか」

深海「うん、設定では。だけど史実の日本海軍にはなかった艦種だからな」

神楽「作者も迷ったらしいよ。母艦だから軍艦にすべきかと思ったそうだけど」

深海「史実だと母艦とつくものは原則として軍艦なんだ。潜水母艦とか水上機母艦とか」

神楽「だけど潜水艦も水上機も攻撃的な任務に主に投入される兵器だから、その母艦も軍艦扱いが適当だけど、受け身な掃海の母艦を攻撃重視の帝國海軍が軍艦扱いするだろうか？ いやない！ という判断で軍艦から除外されたそうな」

納沙布型掃海艦

排水量…1200t

1970年代、ソ連が対潜水艦用の深々度機雷を開発していたことが判明した。当時の日本にはそれに対応できる掃海艇が無く、外洋で作戦行動可能な掃海艦艇を取得する必要が迫られた。

一方、中東でイラン・イラク戦争が勃発すると、両陣営とも相手の経済活動を封鎖するために海上阻止作戦を開始し、互いのタンカ

ーを攻撃して機雷敷設を行なうなどしたためペルシャ湾の海上交通は麻痺状態に陥った。俗に言うタンカー戦争の始まりである。80年代後半になるとさらに激化し、アメリカ海軍が本格的に介入した他、各国も掃海と護衛のために海軍艦艇を派遣した。日本もタンカー戦争への介入を決意して駆逐艦と掃海部隊を派遣したが排水量500トン程度の掃海艇による遠征は困難を極めた。政府は同様の事態が発生した場合に対応できる外洋型掃海艇の装備を海軍に要求した。

かくして外洋航行可能な大型掃海艇として建造されたのが納沙布型である。その任務は外洋における深々度機雷の掃海、遠征部隊の前衛として遠征地沿岸での掃海の2つが想定されており、両者に対応できるように掃海具も装備されている。また磁気感知機雷対策として船体は木造であり、納沙布型は木造船舶としては世界最大級の大きさとなった。

湾岸戦争時には1番艦の納沙布と2番艦の御前崎が就役しており、ペルシャ湾沿岸での掃海活動において大きな成果を収めた。

納沙布	／1989
御前崎	／1989
鞍崎	／1991
塩屋	／1991
早崎	／1992
白崎	／1992

深海「史実の自衛隊の＜やまやえ＞型掃海艦に相当するのかな？」
神楽「そうなるね」

掃海艇122号型

全長…55m

排水量…570t

兵装…20ミリ機関砲×1 掃海器具一式

帝國海軍の標準的な掃海艇で、1980年から10隻が建造された。機雷掃討用の自走型処分具を初めて搭載した。

湾岸戦争時にはペルシャ湾に派遣されたが、当時の最新機雷に対して装備の旧式化が問題となり90年代後半に近代化が行なわれた。

122号	／1980
123号	／1981
124号	／1982
125号	／1983
126号	／1984
127号	／1985
128号	／1986
129号	／1987
130号	／1988
131号	／1989

深海「そして、こっちが主力の掃海艇」

萩原「納沙布型に比べると半分くらいの大きさなんです」

神楽「納沙布型みたいなのが例外的に大きい。本来はこれくらいが普通」

深海「機雷は基本的に浅瀬に設置されるものだからね。浅瀬で活動するなら小型の方が小回りが効く。それに機雷は水圧や騒音に反応して爆発するから、船を小型化することでそれらを減らす効果も期待できる」

萩原「でも、小さい船で本当に大丈夫なんですか？」

神楽「だからこそ、掃海活動を下から支えるために掃海母艦が必要なんだよ」

深海「それじゃあ、今回は陸軍の兵器、機甲兵科の兵器編だ」

登場兵器紹介 艦艇編4 (後書き)

(追加)

海防艦の隻数、記述を改訂

2011/11/22

陸軍地位向上委員会5 奇襲の可能性(前書き)

リーダーの水平線限界って実はあまり知られていないのでしょうか？
？って思うときがあります

陸軍地位向上委員会5 奇襲の可能性

深海「さて、陸軍地位向上委員会も今回で5回目。前回に引き続き奇襲攻撃について考えよう」

神楽「“自衛隊は奇襲を受けた場合、対応は後手にまわる。故に不利である”というのが前回の話だけど、こう書くところという反論がくるところの」

深海「“自衛隊もアメリカも常に周辺諸国を監視している。衛星技術が発達している現代ならば、必ず攻撃の兆候を掴める。奇襲はありえない”」

神楽「もしくは“戦争が勃発すると言うことは、両国の関係が極度に悪化している筈。そんな状況で自衛隊が警戒を強めていない筈がない。奇襲はありえない”」

荻原「どっちも間違っていないと思いますけど」

深海「だけど話はそんな簡単じゃないんだ」

1. “兆候を掴むⅡ奇襲失敗”ではない

深海「まず1つ。確かに周辺国が日本への侵攻を企てたとしたら、その兆候を捉えることは決して難しくないだろう。大規模な遠征軍を組織するのを隠しとおすのは難しい」

荻原「では奇襲は難しいのですか？」

神楽「いや。実は敵の攻撃の兆候を掴んでいながら奇襲を許した事例は多々あるのだよ」

深海「湾岸戦争が好例かな。この時、アメリカはイラクの攻撃準備を衛星で捉えていたが、湾岸諸国もアメリカ自身も“まさか本当に攻めてくるわけがない”と思って見過ごした」

神楽「兆候を掴んでも、それがどういう結果に至るのか正しく導け

るとは限らないというわけ」

深海「諜報活動でよほどの成果をあげられない限り、兆候を掴んでも内容は精々“○○国軍の軍事活動が活発になっている”くらいのものだ。具体的になにを企んでいるかは推定するしかない」

荻原「それで前回の“攻撃側の有利”に繋がるわけですね」

神楽「その通り。兆候があったとしても、それが必ずしも攻撃の前兆とは限らない。それに攻撃の前兆と判断できたとしても、何時、どこに、どのくらいの規模の攻撃が加えられるか分かなければ戦力を適切に集中することは難しい」

荻原「だから兆候を掴めたとしても安心できないということですね」

2. 衛星の限界

深海「それに偵察衛星に過大な期待を抱いている人が多いと思う」

荻原「映画とかだと、よく衛星を通じてリアルタイムで目標を追跡！とありますよね」

神楽「そういうのは大変難しい。まず基礎知識として偵察衛星ってのは宇宙の軌道上を常にまわっているということを押さえて欲しい。偵察ができるのは、目標上空を通りかかったときだけで、すぐに通り過ぎてしまう」

深海「一箇所を常時見張ることさえできない。移動する部隊をリアルタイムで追跡なんてのも無理だ」

荻原「でも静止衛星とかありますよね」

神楽「あれは高度36000kmという地球から相当離れた軌道を飛んでいるの。その高度まで上がらないと静止はできない」

深海「厳密に言えば地球の自転と同じ速さで移動しているんだけどね。ちなみに偵察衛星が飛ぶ軌道は主に高度1000km以下の低軌道だ」

荻原「なんで低軌道を飛ばすんですか？」

深海「簡単なことだよ。何かを見る時は、遠くからよりも近くからの方がよく見えるだろ？」

神楽「そして衛星にはもう1つ弱点がある。遮るものがない宇宙空間で一定の速度、軌道をまわっているのだから、その動きは読みやすい」

深海「偵察衛星にできるのは上から覗き込むだけだからね。誤魔化すのは決して難しくない」

神楽「それにGoogle Mapなんかを使えば分かると思うけど、船とか建物とかを識別するには十分に拡大をしなくてはならないでしょ？」

深海「そして拡大すればするほど視野は狭くなり、1度に狭い範囲しか調べることができない」

荻原「広い範囲を搜索しようとする大変な苦勞が必要ですね。そういう弱点を克服する手段はないんですか？」

深海「あるよ。とにかく数を投入することだ。衛星が監視目標を飛び越したら、矢継ぎ早に次の衛星を送り込む。こうすればリアルタイムは無理でも、それに近い監視をすることができるし、移動する目標を捉えられる可能性も高まる」

神楽「衛星以外の監視、偵察手段を使って補う手もある。無線傍受や航空機による偵察とかね」

深海「だけど、そうした情報収集手段を一箇所に集中するには重大な決断が必要だろう。1つに集めれば他所の監視網が薄くなるし、人工衛星は軌道変更を頻繁に行なえば寿命が短くなる」

荻原「かくして前回の“攻撃側の有利”に繋がるわけですか」

深海「その通り。そして人工衛星による偵察と言うのは決して万能ではない。それを知っておいて欲しい」

3. レーダーの限界

深海「そして太平洋戦争はレーダーで負けたって戦訓の為か、レーダーに対しても過剰な期待があるような気もする」
神楽「衛星と同じようにレーダーも決して万能ではないのだけど」

・地平線、水平線による限界

深海「レーダーは電波を発して、その反射を捉えて目標を探る器具だ。そして電波は直進する」

神楽「ここから導かれる問題は？」

荻原「ええと。電波が届かないところには意味がないってことですか？」

深海「まあそうだね。問題は電波はどこまで届くかだ」

神楽「直進しかしないわけだから障害物の後ろは探知できない。山とか、建物とか、地平線とか」

荻原「地平線ですか？」

深海「当然ながら地球は丸い。平らに見える地面の湾曲していて、ある一定の距離より遠くは地球そのものの丸みに隠れてしまっていることはできない。電波もそれと同じだ」

荻原「つまりレーダーの探知範囲は地平線より内側に限定されるってことですか？」

神楽「もしくは水平線もね。地平線の範囲は高度によって変わる。高いところのほうが遠くまで見渡せる。わざわざ大型機に大型レーダーを積んで早期警戒機に仕立てるのはこれが理由」

深海「空中のレーダーから空中の目標を探す場合は相当遠くまで探知できる。だけど地上や海上から、やはり地上か海上の目標を探すとなると精々30キロ程度が限界だ。それは強力なレーダーを載せたイージス艦でも同じ」

荻原「つまり船や地上のレーダーは監視距離に大きな制限があるということですか？」

深海「そのとおりだ。日本の周辺海域の広さを考えれば、心細いものだよ」

神楽「航空機は制約が比較的少ないが、それでも限度はある。それに艦船や地上のレーダーに比べると稼働できる時間が短い。燃料が無くなったら飛行場に戻らないといけないからね」

・逆探の危険性

深海「かつてある海軍士官はレーダーを“闇夜の提灯”に例えた。敵を探すつもりで使うことにより、逆に敵に発見されてしまう。その危険性を指摘したものだ」

神楽「この発言はよく批判に晒される」

萩原「なぜですか？」

深海「旧日本軍は第二次世界大戦においてレーダー技術で連合軍に大きく劣り、敗戦の大きな原因となった。で、遅れた原因の一つとしてあげられるのが件の発言だ」

神楽「“闇夜に提灯”発言は日本軍のレーダーに対する無理解の象徴として扱われて、発言者は無能呼ばわりされる」

深海「だけど“闇夜に提灯”論はレーダーを使う上で決して無視できない問題なんだ」

逆探知装置

神楽「E S Mは相手の発した電波を捉えるだけだけど、レーダーは自ら発した電波が反射してくるのを捉えなくてはならないからね。アンテナの感度が同じなら単純計算でE S Mはレーダーより探知距離が2倍になる」

萩原「位置が知られてしまいますね」

深海「それだけじゃない。レーダーは使用用途や種類によって放射する電波が異なるから、それを調べることで、こちらがどんな兵器を投入しているか、編成や陣形はどうなっているかといったことまで分かってしまう危険性がある」

神楽「だから、どこの国でも相手国のレーダー電波を常に調べようとしている。わざと領空に侵入して挑発したりしてレーダーを使わせるの。電波のパターンが分かれば妨害も容易になるからね」

深海「それにレーダーの発する電波はそれ自体が敵の攻撃を誘導し

てしまうこともある。対レーダーミサイルという兵器があつてね。それはレーダー波を逆に辿ってレーダーを攻撃することができるんだ」

萩原「レーダーを使うにも、いろいろと危険が伴うんですね」

・レーダーで分かるのは“そこになにかがある”だけだ

深海「そして一番肝心なのは、レーダーで分かるのは“そこになにかがある”ということだけ、ということだ」

神楽「なにぶん電波を発して、その反射を捉えるだけの機械だからね。相手の所属や目的なんて、レーダーを見ただけじゃわからない」
深海「太平洋戦争の始まりである真珠湾攻撃においても、レーダーが日本の攻撃隊を捉えていたが友軍部隊と誤認した結果に奇襲が成功したんだ」

萩原「敵味方も区別できないんですか？」

神楽「敵味方識別装置、通称IFFというものも導入されたけど、それでも可能なのは敵味方の識別じゃなくて味方とそれ以外の識別までだから」

萩原「味方以外は敵じゃないんですか？」

深海「そりゃ第二次世界大戦みたいに世界が二つに分かれて大戦争をして、それで“味方じゃない大編隊を発見した”とかいった状況なら間違いない敵だろうけど、自衛隊が直面するであろう戦争はもっと複雑だ」

神楽「例えば沖縄のあたりで日本が中国と開戦したとしましょう。

アメリカは日本の同盟国として参戦するかもしれないけど、韓国やロシアは中立の立場を守るでしょうね」

深海「それに日本の周辺は国際海域だ。毎日、多くの国の船が航行している。そういった第三国の艦船や航空機が戦闘区域近辺にも多く存在している可能性が高い」

神楽「さてIFFでは“味方とそれ以外”しか区別できません。敵と中立の第三者をどうやって見分けましょう？」

萩原「難しいですね」

萩原「リーダーって便利に見えて、いろいろと欠点があるんですね」
神楽「まあ世の中には完璧、万能というものはないからね。そこで複数の手段を講じて短所を互い補うようにする必要があるね」

4. 狼少年のジレンマ

深海「最後に“戦争が勃発する”と言うことは、両国の関係が極度に悪化している筈。そんな状況で自衛隊が警戒を強めていない筈がない。奇襲はありえない”について考えてみよう」

萩原「これは間違っていないように思うんですけど」

深海「だけど作者は“両国の関係が極度に悪化している”時ほど逆に奇襲を受ける可能性が高まると考えている」

萩原「それはなぜですか？」

神楽「それでは考えてみましょう。例えば特に外交関係が悪化したわけでもないのに相手国が日本国への侵攻を決意して準備をはじめましょう。その活動は凄く目立つはず」

深海「なにぶん平和な筈なのに戦争の準備をしているんだ。日本側も注目する筈だ」

萩原「確かに目立ちそうです」

深海「逆に外交関係が悪化した場合、相手国はなにをするだろうか？ 外交で譲歩を勝ち取るために軍部隊を動員して国境付近で挑発行為を繰り返したりすることが考えられる。実際に侵攻をするつもりがなくてもだ」

神楽「つまり外交関係が悪化している時の方が、普通は相手国軍が活発に動くわけ。その状態で侵攻の準備をはじめても、逆に他の軍事活動に紛れて実態がわかり難くなるはず」

萩原「つまり関係が悪化した方が攻撃の兆候を掴み難いということ

ですか？」

深海「その通り。前にも言ったけど、戦記やウォーゲームだと外交関係が悪化すると確実に開戦するけど、現実には開戦するところまでいく方がむしろ少ないんだ」

神楽「そして、その一方で国境線に恒常的に相手国の軍部隊が現れるようになる。それが日常になってしまう」

深海「そうなる人間はこう考えてしまうものだ。“また敵部隊が来たって？ どうせこけおどしだ。本当に攻めてくるわけがない”ってね」

荻原「狼少年みたいな話ですね」

深海「その通り。実際に対峙する2つの国家の外交関係が悪化し一瞬触発の状態に成っているにも関わらず狼少年状態になって奇襲を許した事例はあるんだ」

神楽「有名なところだと朝鮮戦争や第4次中東戦争があげられるかしら」

荻原「有事に備えるって難しいんですね」

陸軍地位向上委員会6 コマンド攻撃に備えよう

深海「陸軍地位向上委員会自衛隊編は今回で最後だ」

神楽「今回は陸上自衛隊が必要な理由の最後の一つ、“敵コマンド部隊対処に必要な”について考えてみよう」

萩原「よろしくおねがいします」

1. 特殊部隊がなぜ脅威なのか？

深海「さて、そもそなんで特殊部隊は脅威なんだと思う？」

萩原「滅茶苦茶強いからですか？」

神楽「そんな理由で脅威になるのはケイシー・ライ○ックか、ジョン・メイトリ○スクらいだ」

深海「映画などのために特殊部隊をスーパーマンかなにかの集団だと勘違いする人は多いが、実態は軽歩兵部隊に過ぎない。まあ厳しい訓練を受けているのは事実だけだね」

神楽「問題は個々の兵士の戦闘力というより技術だね。普通の部隊は歩兵とか、砲兵とか、戦車とかそれぞれ固有の役割が与えられている。そして同じ部隊の中でも指揮官であるとか、通信手とか、衛生兵とか、各兵士にそれぞれの役割が与えられている」

深海「そして戦車や砲兵は単独では活動できない。衛生兵や通信手が単独で居るだけでは役に立たない。普通の部隊は個別の役割を与えられた部隊や兵士を組み合わせて、はじめて活動が行なえるようになる。自然と必要な人員、物資も巨大化する」

神楽「それに対して特殊部隊は、その部隊の中で自己完結していて、他の部隊の支援を受けなくても単独で活動できる。個々の兵士も通信や衛生などの様々な技能を修得していて少人数で、さらにメンバーの何人かを失っても作戦を継続できるの」

深海「元防衛庁長官の石破茂氏の著書『国防』にも書かれていることだ。“八人ほどで一個師団分の機能がある”と記述してあるね」

荻原「それで、どうして特殊部隊が脅威になるんですか？」

深海「まず第1で単独、少人数で活動できるから身軽なこと。補給物資も最小限で済むし、他国の警戒網に捕まる可能性が低くなる」

神楽「そして第2に単独、少人数で活動できることそのものよ。普通の部隊であれば損失が重なれば、いずれ組織として活動が不可能になり、いくら残兵がいても作戦を継続することができなくなる。

だけど特殊部隊ならば最悪、1人になっても作戦を継続できる可能性がある」

深海「つまり全員を倒さないと危険が去らないわけだ。しかも、前に言ったように部隊規模が小さくて済むから見つけるのが難しい」

荻原「なるほど。それは対処しづらいですね」

2. 特殊部隊に対抗するためには

荻原「言っていることをまとめますと、特殊部隊はただの軽歩兵で、特殊な訓練を受けているから特殊部隊ってことですね。じゃあ倒すのは案外難しくない？」

深海「そうだね。正面きって戦えば特殊部隊は通常部隊に対して勝ち目がない。問題は特殊部隊は正面きって戦わないということだ」

神楽「特殊部隊は身軽なのが利点だからね。敵部隊との接触、戦闘は避けつつ任務を遂行しようとする」

荻原「任務とは？」

深海「レーダーサイトや飛行場、発電施設といった重要施設の破壊とか、暗殺とか」

神楽「とにかく暴れて主力部隊から目を逸らすための陽動という可能性もあるわね」

深海「そして、対抗するにはこちらから出て行って狩り出す必要が

ある。大兵力で包囲して虱潰しに探すんだ」

神楽「一例として江陵浸透事件カンヌンが上げられる」

荻原「かんぬん浸透事件？」

深海「1996年に北朝鮮の工作用小型潜水艦が韓国の江陵に座礁して、乗っていた北朝鮮の工作員26名が韓国国内に逃亡した事件だ。韓国軍はたった26名の工作員を掃討するのに49日間の時間と延べ150万人の人員を必要とした」

神楽「まあ人員はあくまでも延べ人数だけど、それでも1日あたり3万人を投入した計算になる」

荻原「凄い人数ですね」

深海「ちなみに陸上自衛隊の兵力は約15万人くらいだ」

荻原「じゃあ、どっかの国の特殊部隊が上陸したら…」

神楽「下手すると数人の工作員のために1個師団以上の兵力が対処に迫られる可能性がある」

深海「複数箇所と同時に攻撃を受けたら自衛隊の対処能力が飽和しかねない」

荻原「でも自衛隊にも特殊部隊なんかがあるんでしょ？」

深海「確かに自衛隊にも特殊部隊がある。特殊作戦群ってヤツだね」
神楽「でも、そういう相手に対して正面きって戦うような使い方はしないよ。少数の特殊部隊に対して少数の特殊部隊を送り込んだって、簡単に敵を捉えられるわけがない」

荻原「それじゃあ、何のために？」

深海「石破茂氏の『国防』によると、特殊部隊の戦術を研究して相手がどんな風に行動するかを分析し、実際に討伐する通常部隊を指導するんだそうだ」

3. 恐怖の北朝鮮コマンド部隊

神楽「さて。今までは“少数の特殊部隊”という表現を用いてきた

けど、実は“少数”とは限らないのよね」

萩原「どういうことですか？」

深海「いわゆる旧東側の国というのは特殊部隊を大変重視していて、兵力も多いからね。ロシアなんて各部門にいろいろな特殊部隊スペシャルが編制されている」

神楽「極めつけは北朝鮮。特殊部隊の総数は9万人に達すると言われている」

萩原「きゅ、9万！」

深海「北朝鮮陸軍の総兵力は約100万だから、比率は9%。これはすごい比率だ。日本に当てはめれば総兵力約15万の陸上自衛隊が1万3000人の特殊部隊を保有するようなものだ」

神楽「そして、その膨大な特殊部隊が一部でも日本に投入されたら？」

深海「海空の哨戒網を突破するのは決して難しいことではない。なにしろ特殊部隊は物資が最小限で済むからね。その分、見つかり難い」

萩原「恐ろしい話ですね」

4. 動的防衛力の危うさ、必要なのはマンパワー

萩原「それでは最後にまとめに入りましょう」

深海「結局、数は重要ってことさ。どんな事態に対処するにもさ」

神楽「この度の東日本大震災でも明らかでしょう。菅首相は“政治主導”と称して自衛隊災害出動10万人体制―うち陸上自衛隊は7万―をぎり押ししたそうだけど、全兵力の半数近くを現場に投入する意味を理解していたのか」

深海「平常任務、周辺国への警戒態勢維持、そして災害出動する隊員の休養や交替を考えると、かなりギリギリな運用だろうな。現場で働く隊員の皆さんには頭が下がるよ」

神楽「さて、今現在、日本の防衛政策は大きな転換期を迎えようとしているわね」

萩原「“動的防衛力” ってヤツですか？」

神楽「そのとおり」

深海「簡単に言えば、これまでは全国に部隊を分散配置して、初期対応は現地の部隊が行なうという構想だった。それが動的防衛力では全国に部隊を分散する代わりに機動力の高い少数の部隊を使って、非常時にはその都度に部隊を現地に派遣して対応するという形になる」

神楽「理論上では部隊を数を従来よりも少なくても済む。当然ながら兵員数も予算もね」

深海「だけど、この構想には重大な問題がある」

萩原「なんですか？」

神楽「まず危機の発生と対応部隊の到着までにどうしてもタイムラグが生じるということ。どんなに機動力が高くなっても瞬間移動ができるわけじゃないからね」

萩原「なるほど。到着まで現場の人たちはやられ放題ですね」

深海「そして同時多発的な危機に対処できなくなること。どんなに強力で機動力のある部隊だって沖縄と北海道を同時に攻めこまれたら、同時に両方で戦うというわけじゃないからね。今回の地震のように広範囲にわたって大規模災害が発生した時も十分な対応ができない可能性が高い」

神楽「アメリカみたいの世界展開をしている軍隊であれば、初期対応は現地政府、現地軍任せにして割り切れるかもしれないけど、専守防衛を掲げる国の国土防衛を第1の任務とする自衛隊が採用すべき戦略なのか疑問ね」

深海「日本の防衛環境は決して良いとは言えない。周辺国とは幾つもの国境紛争を抱えている。中国、ロシアは軍拡が著しい。北朝鮮は弾道ミサイルや特殊部隊など対応が難しい分野を増強している。そして日本自身が多く の災害に遭遇しやすいという状態だ」

神楽「物事に完璧というものはない。どんなに対策をしても破られるということは十分にありえること。そして万が一の時に失敗を取り返す方法は少ない」

深海「だからこそバックアップのためにも陸上自衛隊に十分な兵力を与える必要がある。どれだけ技術が進歩しても、マンパワー、兵の頭数というものには大きな意味があるんだ」

萩原「大変、良く分かりました」

深海「次回からは帝国陸軍編に突入だよ」

陸軍地位向上委員会6 コマンド攻撃に備えよう（後書き）

最後ははしょった感もありますが、次回より陸軍地位向上委員会は帝國陸軍編に突入です

登場兵器紹介 機甲兵の兵器編

深海「さて登場兵器紹介。今日は“機甲兵の兵器”だ」

荻原「機甲兵ってなんですか？」

神楽「ここでは戦闘装甲車輛を主力として戦う部隊として位置付けているよ」

深海「自衛隊の機甲科は戦車部隊と偵察部隊を指す。ここではそれに倣う」

荻原「つまり戦車部隊と偵察部隊の装備を紹介するのですね」

―戦車―

神楽「さて、本題に入る前に第二次世界大戦からの帝國日本の戦車史について解説しよう」

深海「今までにない試みだな」

神楽「作者の趣味だ。それに今までの陸軍の兵器体系について、紹介されている兵器の解説文を読めば、ある程度は前史を理解できるからな」

荻原「海軍艦艇や航空機はどうなるんですか？」

神楽「いづれどこかで…」

深海「怪しいな」

神楽「コホン。それじゃ始めるよ」

―第二次大戦終了まで―

神楽「ともかく第二次世界大戦までの陸軍戦車史は史実と大きく違いは無い」

深海「つまり日本陸軍の主力戦車はチハたんか。しかし日中戦争が

無いなら戦車はチニになるんじゃないか？チハよりも弱い、あのチニに」

神楽「細かいことは気にするな。まあソ連側も開戦当初の主力はT-26やBTだったので、チハ改で対抗可能だったけどね。だけどT-34に対抗する術がない。というわけで主力戦車は次第にアメリカからのレンドリースに置き換えられていく」

深海「どうでもいいが、荻原さんがついていけなくなって目を回しているぞ」

荻原「あわわわ」

神楽「ごめんごめん。第二次大戦当時の日本軍の主力戦車は九七式中戦車チハだった」

深海「この戦車は敵の陣地や機関銃、砲を攻撃して歩兵部隊を支援するために開発されたもので対戦車攻撃能力が低く、また装甲も第二次大戦中に各国が投入した戦車に比べると薄かった」

神楽「ちなみにチニはチハと主力戦車としての採用を競った試作戦車で、量産性と価格を重視して性能はチハより低かった。貧乏だった当時の陸軍はチニを採用しようとしたが、日中戦争が勃発して予算が増えたのでチハを採用したという経緯がある」

荻原「性能重視でこの様ですか」

深海「そこらへんの事情は陸軍地位向上委員会に譲るとして、ノモンハン事件の教訓もあって戦車の対戦車能力を改善する必要性を迫られた。そこで主砲を47ミリ対戦車砲に換装したチハ改、さらにエンジンと装甲を強化して総合的な性能向上を図った一式中戦車が開発された」

荻原「それでそれからどうなったんですか？」

神楽「おそらくソ連のT-26やBT、アメリカのM3軽戦車あたりまではチハ改や一式中戦車で対抗可能だったでしょうね。だけど史実は、アメリカ軍はより強力で装甲も厚いM4中戦車を投入し、帝國世界ではソ連軍がT-34を投入した」

深海「史実では一式中戦車の車体に75ミリ砲を載せた三式中戦車

を急造するとともに、四式中戦車や五式中戦車といった完全新規の新型戦車の開発を急いだものの、それらは戦場に投入されることは無く、チハや対戦車砲、肉弾攻撃で凌いだわけだけでも帝國世界ではアメリカに頼ったわけだな」

神楽「その通り。1942年末より史実ではソ連に送られたM4A2を中心にシャーマン戦車の貸与が始まった」

荻原「シャーマン戦車って強いんですか？」

深海「他の列強の戦車に比べて秀でた点は特に無かったが、機械的な信頼性や量産性といったスペックデータに現れない点で優れていて、大量生産されて連合軍の勝利に貢献した。まあ太平洋戦線じゃ無敵だったがね。だけど时期的に考えて主砲は75ミリ砲搭載型だろ？大丈夫か？」

神楽「75ミリ砲搭載型は朝鮮戦争ではT-34に苦戦した記録があるけど、それは新型で重装甲の85ミリ搭載型が相手の話で、1942年末当時なら比較的装甲の薄い76ミリ砲搭載型だから十分に對抗できると思う」

深海「ふむふむ」

神楽「かくして日本陸軍の主力戦車は事実上、M4シャーマンになる。三式中戦車は開発されず、四式中戦車は少数生産で終わる」

深海「性能的にはM4以下で、機械的信頼性も劣るなら量産する意味は特に無さそうだからね」

神楽「五式中戦車は量産されたが、結局前線には投入されないうちに終わった。ただ戦後も量産が継続された」

深海「レンドリースされたのはM4シャーマンだけかい？」

神楽「90ミリ砲搭載のM26戦車パーシング、76ミリ砲搭載のM10駆逐戦車、90ミリ砲搭載のM36駆逐戦車ジャクソン、75ミリ砲搭載のM24軽戦車チャーフィー。ただしM26は欧州方面の日本軍部隊に供給されて極東に配備されたのは戦後になってから。M24とM36も同様だね」

深海「駆逐戦車と言えば、史実の日本は大戦末期に対戦車車輛を幾

つか計画していたようだけど帝國世界ではどうなんだい？」

神楽「軒並みボツか少数生産だね。ただ戦後になってホリやカトは量産されている」

萩原「ホリとカトってなんですか？」

深海「ホリは試製五式砲戦車、カトは試製十糧対戦車自走砲を指す。どちらも105ミリ砲装備の対戦車車輛だ。史実では完成前に終戦になったけど」

神楽「帝國世界ではカトは割と少数生産で終わったけど、ホリは主砲を120ミリ砲に換装したタイプも造られて長く量産された」
深海「なるほど。それで戦争が終わるわけだ」

神楽「その通り。第二次大戦直後の帝國陸軍はこんな感じだった」

重戦車

M26 パーシング (50口径90ミリ砲装備、42t)

中戦車

五式中戦車 (44口径75ミリ砲 or 52口径76.2ミリ砲、35t)

M4 シャーマン (37.5口径75ミリ砲 or 52口径76.2ミリ砲、32t)

四式中戦車 (44口径75ミリ砲、30t)

M24 チャーフィー (40口径75ミリ砲、18t)

一式中戦車 (48口径47ミリ砲、17t)

九七式中戦車 (18口径57ミリ砲 or 48口径47ミリ砲、15t)

軽戦車

五式軽戦車 (48口径47ミリ砲、10t)

二式軽戦車 (46口径37ミリ砲、7.2t)

九八式軽戦車 (37口径37ミリ砲、7.2t)

九五式軽戦車 (37口径37ミリ砲、7.4t)

戦車駆逐車

五式砲戦車（54口径105ミリ砲、40t）

五式対戦車自走砲（105ミリ砲、30t）

M36ジャクソン（50口径90ミリ砲、29t）

M10（50口径76・2ミリ砲、29t）

三式砲戦車（38口径75ミリ砲、17t）

深海「ちょっと待て！なぜチャーフィーが中戦車の欄にある！」

神楽「だってチハや一式よりデカくて強力だもん。事実上中戦車扱いだよ」

荻原「あのお。重戦車とか中戦車とか軽戦車とか、どういう違いがあるんですか？」

神楽「かつては戦車を重量で区分していたんだよ。戦後に廃れたけど」

荻原「廃れたんですか」

深海「詳しくは戦後編で。あと五式中戦車と四式中戦車の主砲って50口径以上あったと思うが」

神楽「史実では碌に量産ができなかった四式高射砲を主砲に転用したけど、帝國世界では堅実に八八式75ミリ高射砲を転用したんだ。その分、口径長も威力も下がったけど」

深海「史実と違ってB-29による本土大空襲なんて受けていないからな。高射砲の生産を戦車砲に換えることができたわけか」

荻原「口径長ってなんですか？」

神楽「簡単に言えば砲身の長さ。44口径というのは、ようするに砲口の太さの44倍の長さという意味」

深海「44口径75ミリ戦車砲の場合、砲口の太さは75ミリ。その44倍だから砲身の長さは約3300ミリ、約3メートルということだね」

神楽「ちなみに砲口の太さも口径と言うから混同しないように注意してね」

―戦後第1世代登場―

荻原「戦後第1世代ってどういう意味ですか？」

深海「第二次世界大戦後に開発された戦車は概ね3つの世代に分類される。その第一陣が戦後第1世代と呼ばれる戦車群だ」

神楽「アメリカのM46、M47、M48といった所謂パットンシリーズ、ロシアのT-55などがこの世代に分類される」
いわゆる

深海「特徴は基本的に大戦中の戦車の発展系であること。アメリカのパットンシリーズはM26パーシングの発展型だし、イギリスのセンチリオンも第二次大戦中に開発された戦車で改良を続けて使用された。T-54も大戦中に開発されたT-44の改良型だ」

神楽「史実の日本が開発した61式中戦車も戦中の影響が色濃く残る戦車ね」

深海「戦後第1世代にはもう1つ重要な点がある。それは主力戦車という概念の登場だ。さっきも言ったように戦前は重、中、軽と重量で区別されていた」

神楽「イギリスだけは巡航戦車と歩兵戦車という独自の分類法を使ってたけど」

深海「軽戦車はその名のとおり軽い戦車。軽い分、速く走れて機動力も高かった。代わりに装甲が薄く防御力が低い。それに対して重戦車は装甲が厚く火力も抜群。だけど重い分だけ鈍かった。中戦車はその中間だ」

荻原「つまり違った特性の戦車を状況に応じて使い分けようとしたということですか」

神楽「その通り。だけど実戦で使ってみると特定の性能だけが突出した戦車は使い勝手悪かった。結局は攻撃力、防御力、機動力のどれもバランス良く兼ね備えた戦車が良いということになったの」

荻原「それが主力戦車ですか」

深海「その通り。最初にそのコンセプトで開発された主力戦車がイギリスのセンチリオンだ。以降、軽戦車や重戦車は次第に姿を消

し、中戦車が主力戦車として陸戦の主役になっていく」

荻原「それで肝心の日本陸軍の戦後第1世代戦車は？」

神楽「五式中戦車改よ。50口径90ミリ戦車砲を装備する新型砲塔を搭載しているの。重量は39トン。量産開始は1952年」

深海「史実の戦後最初の戦車が61式だったことを考えると、早いな。敗戦の空白はそれだけ大きいということか」

神楽「戦車師団にはM26戦車、五式戦車改。満州の歩兵師団戦車隊にはM4シャーマン。そして内地にはチハ改と一式中戦車というのが1960年くらいまでの状況かな」

深海「内地が淋しいなあ」

神楽「ちなみに同時期に五式軽戦車の後継としてM41ウォーカーブルドック軽戦車を導入している」

深海「ようやくアメリカ規格での軽戦車を日本でも軽戦車として扱えるようになったか」

荻原「でも軽戦車って廃れたんじゃない」

神楽「まあ主力戦車が一般化するまでの過渡期だからね。これ以降、純粋な軽戦車というのは姿を消す。あとは水陸両用とか空挺部隊用とかの特殊戦車や途上国向けの廉価版戦車として軽戦車は生き残る」
深海「ちなみにM41軽戦車は史実の自衛隊にも配備された。現代でも台湾やタイなどで現役だ」

神楽「そして帝國世界でも2000年現在、予備役部隊向けの保管装備として配備されている」

深海「：ちよっと待て！なんで20世紀末まで配備されているんだ！」

神楽「あくまでも保管装備だし。タイでも現役だし」

深海「タイだから現役なんだとは考えないのか？」

荻原「それでは次の世代に入ります」

――戦後第2世代戦車――

神楽「さて時が進んで戦後第2世代戦車の時代になりました」

深海「戦後第2世代戦車はアメリカのM60シリーズ。ソ連のT-62、T-64、T-72。イギリスのチーフテン。ドイツのレオパルドI。フランスのAMX-30。日本の74式戦車などを指す」

荻原「特徴はなんですか？」

神楽「一概には言えない」

深海「一般的には“対戦車ミサイルの発達への対処として装甲による防御よりも回避に重点を置いた機動力の高い戦車”と説明されることが多いけど、当てはまるのはドイツ、フランス、日本だけだ。アメリカやイギリスは引き続き重装甲戦車路線だし、ソ連はT-64に複合装甲や自動装填装置などの新機軸を突っ込んで失敗したりと、第2世代を通じた特徴と言えるような定まったものがあつたわけじゃない」

神楽「まあ次世代戦車の有様について各国が試行錯誤をしていた時期だと覚えればよろしい」

荻原「それで日本陸軍の戦後第2世代戦車はどうなりましたか？」

神楽「二八式戦車と三四式戦車の2種類がある」

二八式戦車チヲ

全長…9.41m（車体6.7m）

全高…2.25m

全幅…3.18

重量…36t

最高速度…時速52km

乗員…4名

兵装…51口径105ミリライフル砲×1／12.7ミリ機関砲
×1／主砲同軸7.7ミリ機銃

1950年代に配備された五式中戦車改やM41軽戦車の後継車両として開発されて1960～70年代前半の主力を担った主力戦車である。

主砲には世界標準となりつつあったイギリスのロイヤル・オードナンス製105ミリライフル砲L7をライセンス生産した二八式十糎半戦車砲を装備し、戦後第二世代戦車に相応しい火力を手に入れた。

照準装置にはアメリカ製のM47戦車とM48戦車を参考に開発したステレオ式照準機が採用され、遠距離射撃の命中精度が大きく向上している。

砲塔は小型に設計され理想的な避弾経始を実現した。車高は第二世代戦車の中でも群を抜いて低く、防御力や低視認性は高いと考えられる。一方で主砲の俯角が制限されることとなった。また砲塔が小さいため居住性も優れているとは言いがたい。

僅か6年後に改良型の三四式が完成し、陸軍向けの生産数は500輦に留まる。しかしながら姿勢制御機構による整備の複雑化、信頼性の低下を嫌う海軍陸戦隊は二八式の調達の継続を希望し、海軍工廠で陸軍の三四式と同じ照準装置を搭載した二八式改を独自に200輦程度量産した。海軍陸戦隊戦車大隊の主力を長年務め、湾岸戦争にも参加したが、現在では教育部隊、予備役部隊以外では四四式に代替されている。

また陸軍でも後継戦車である四四式の配備が進められ順次退役して予備役に編入されているが、2000年現在でも400輦程度が現役部隊に配属されていて、暗視装置の搭載のような小規模な改修が加えられている。

さらに二八式のシャーシを利用して自走迫撃砲や自走高射機関砲といった派生型が開発された。

神楽「まずは二八式戦車。史実の74式戦車の低性能版だと思えばいいわ」

深海「ステレオ式照準装置とか、戦後第1世代から抜けきれていない感じだね」

萩原「ステレオ式照準装置とはどんなものですか？」

神楽「まず基礎として地球には重量があるから、大砲から撃ちだされた砲弾は前進しながら徐々に下の方に落ちていく」

深海「だから遠くの目標を狙い撃つ場合は、重力の影響を考慮にいられて若干目標より上を狙って撃つ。目標まで砲弾が飛ぶまでの間に落ちて丁度命中するように調整するんだ」

神楽「こうした射撃に必要なのはなんだと思う？」

萩原「相手との距離ですか？」

深海「その通り。目標との正確な距離を測る必要がある。そこで考え出されたのはステレオ式照準装置だ」

神楽「外見は長い鉄の筒かな。その両端にレンズがあつて、それを通じて中心の接眼部から目標を見るわけ。左右の対物レンズは離れているから、捉えている画像はずれている。だから同じ目標を捉えるために角度を調整する」

深海「そして同じ目標を捉えた時、左右のレンズと目標との間に三角形が形作られる。だから三角測量の原理を応用して目標との距離を測れるわけだ」

萩原「なるほど。それと避弾経始ってなんですか？」

深海「装甲を斜めにして相手の砲弾を弾き飛ばしてしまおうという防御方法だ。最新の高速で飛ぶ徹甲弾に対しては高価が薄いけど」

神楽「あと装甲を斜めにする事で見かけの厚みが増す効果がある。まず正方形を想像してみよう」

萩原「はい」

神楽「それを装甲板に見立ててみよう。もし弾が装甲板に対して垂直に命中した場合、装甲の厚さは辺の長さの分だけだ」

深海「それじゃあ、対角線を引いてみよう。対角線の長さは辺に比べてどうかね？」

萩原「長いですね」

神楽「つまり装甲板に対して斜め45度から弾が命中した場合、装甲の厚さはその分だけ増すことになるのだ」

三四式戦車チワ

全長…9.41m（車体6.7m）

全高…2.25m

全幅…3.18

重量…38t

最高速度…時速…52km

乗員…4名

兵装…51口径105ミリライフル砲×1／12.7ミリ機関砲
×1／主砲同軸7.7ミリ機銃

二八式戦車を改良した主力戦車である。

主力戦車として世界標準の105ミリライフル砲装備の二八式を採用したものの、砲塔が小さく主砲の俯角が制限されるという欠点を持っていた。そこでサスペンションをトーションバー式から油圧式に改め、車体そのものを油圧で前後左右に傾けさせる姿勢制御機構を取り入れて実質的に主砲俯角の制限を打破する事に成功した。

また射撃統制装置も一新され、それまでのステレオ式照準機からレーザー測距機と弾道コンピュータを組み合わせたものに換えられ射撃精度が大きく向上している。またアクティブ式暗視装置を備え夜間戦闘能力も獲得した。

こうして三四式戦車として1974年に正式採用され、陸軍の主力戦車として配備が行なわれた。生産数は1000輦を超え、そのほとんどが現役である。

1990年代には列国が第3世代戦車を開発し性能面で遅れをとるようになると現代戦に対応できるように射撃統制装置の改良、パ

ツシブ式暗視装置・レーザー検知器の装備、爆発反応装甲の装着などの近代化改修が実施された。現在でも歩兵師団の戦車連隊を中心に多数配備されている。

神楽「そして、これが二八式戦車の改良型の三四式戦車だ」

深海「まんま74式戦車じゃないすか！」

神楽「そうだね。二八式からの改良点は油圧式の姿勢制御装置を取り入れたこと。これで車体を前後左右に傾けられるようになった」

荻原「そうすると、どんな良い事が？」

深海「起伏の激しい土地での戦闘がやりやすくなった。傾斜している場所だと照準が取りにくいから車体そのものを傾かせることで水平を保とうとするんだよ」

神楽「それに前後に車体を傾かせると、その分だけ砲も上下に動くからね。その分だけより多くの範囲に向けて射撃ができるの。そして射撃統制装置も採用されている」

深海「レーザー測距装置と弾道コンピューターの組み合わせは戦後第2世代としてはポピュラーだね」

神楽「ちなみに前述の海軍陸戦隊仕様二八式改は二八式の砲塔を三四式のものに交換したものだ。照準は三四式と同様にレーザー測距装置と弾道コンピューターの組み合わせで行なう」

荻原「どうして海軍は三四式をそのまま採用しなかったのでしょうか」

深海「二八式の解説文には油圧式姿勢制御機能について整備の複雑化、信頼性の低下を嫌ったとあるが」

神楽「それぞれのドクトリンの違いが反映されているの。陸軍は1962年の大陸大撤退から戦略を大転換して“攻めてくるソ連軍を朝鮮、北海道で迎え撃つ”という防衛的な軍隊に変わった。一方で海軍陸戦隊は第二次大戦における海兵隊の活躍を目の当たりにして、基地防備部隊から水陸両用戦部隊への発展を遂げた。攻撃的な部隊になったわけ」

深海「なるほど。陸軍は信頼性の低下をホームグラウンドで戦うこと

で補って、待ち伏せに有利な姿勢制御機能を選んだ。海軍は敵地への上陸作戦という十分な後方支援を得られにくい戦場で戦う故に信頼性を重視した。ということか」

神楽「そういうこと」

―戦後第3世代戦車―

深海「そして、いよいよ戦後第3世代か」

神楽「アメリカのM1エイブラムス。イギリスのチャレンジャーI及びII。ソ連のT-80、T-90。ドイツのレオパルドII。フランスのルクレール。日本の90式などが挙げられるわ」

荻原「特徴はなんですか？」

深海「戦後第2世代と違って、ある程度方向性は一致している。複合装甲と滑腔砲の装備。それにデジタル化ってところかな」

神楽「詳しくは帝國シリーズ登場戦車の解説を通じて」

四四式戦車チカ甲

全長…9.8m（車体6.7m）

全長…2.34m

全幅…3.4m

重量…50t

最高速度…時速72km

乗員…3名

装甲…中空装甲

兵装…44口径120ミリ滑腔砲×1／12.7ミリ機関砲×1

／主砲同軸7.7ミリ機銃

四四式は旧式の二八式戦車及び三四式戦車の後継車両として1970年代に開発が開始され、1980年代初頭に完成して1984年に四四式戦車として正式採用された。翌年より戦車第一師団から配備が開始されている。

戦場として山岳が多い朝鮮半島や内地を想定している為、他国の同世代主力戦車より小型・軽量に設計されている。その為に自動装填装置を搭載して乗員を3名とすることで砲塔の小型化に成功し、重量も50tに抑えられている。

主砲にはドイツ製の120ミリ滑腔砲をライセンス生産したものを装備して三四式以上の攻撃力を実現しているが、射撃統制装置は当時の技術力の限界もあり信頼性を重視して三四式戦車のものを改良して装備している。

それでも暗視装置を従来のアクティブ式赤外線暗視装置をパッシブ式のものに変更するなど様々な点で改善がなされている。アクティブ式は自ら赤外線を発してその反射を捉えるもので逆探知される可能性があったが、パッシブ式は相手が発する赤外線を捉えるものなので相手に悟られずに使用できる。そのため夜間戦闘能力は大きく向上し、さらに昼間においても煙や霧に隠れた目標も探知することができる。

装甲は成形炸薬弾による攻撃に備える為に中空装甲を装備した。中空装甲は装甲中に空間を設けて成形炸薬弾のエネルギーを拡散させるものである。脱着が容易な内装式モジュラー装甲を採用しているので新型装甲への換装も容易であり、多くの車両が既に乙型と同様の複合装甲に換装していると思われる。

四四式戦車は湾岸戦争に派遣され、その能力を遺憾なく発揮してアメリカのエイブラムスやイギリスのチャレンジャーに匹敵する戦車であると認識されている。ただ上述のように一部問題のある点もあり、真の第三世代戦車となるには乙型の登場を待たなくてはならない。なお乙型登場後、それまでのタイプは甲型と呼称される。

深海「今度は90式の低性能版か。次の世代に進むまでにワンステップを踏むのが帝國日本のやり方なわけだ」

神楽「まあね。さて、戦後第3世代兵器を語る上で無視できないのが、以前に歩兵の兵器編で紹介した成形炸薬弾の発達よ。これが第3世代戦車の装甲と主砲を決定づけることになる」

深海「1970年代、成形炸薬弾を搭載する対戦車ミサイルの脅威は俄然高まってきた」

荻原「でも、対戦車ミサイル対策は戦後第2世代戦車ですでに取り入れられていた筈では？」

神楽「その通り。ドイツやフランスなどは対戦車ミサイルを機動力で避けるというコンセプトに基づいて軽量高機動戦車を開発したというのは前述した通り。問題はそれが想定していた対戦車ミサイルの形よ」

深海「歩兵の兵器編を思い出してごらん。初期の対戦車ミサイルはどうやって誘導していたんだっけ？」

荻原「ええっと。ラジコンみたいに兵士が操縦するんですよ」

神楽「その通り。だからスピードも所詮は目で追えるようなレベルで避けるのも決して難しくは無かった」

深海「しかし1970年代には第2世代対戦車ミサイルが登場した。射手が指示する目標に自動的に飛んでいく第2世代はスピードも第1世代より段違いで避けるのは難しい」

神楽「かといって通常の装甲では心許ない。従来の装甲が携帯対戦車兵器に対して十分な防御力を提供できないのは第四次中東戦争でイスラエル戦車隊が負った損害からも明らかだ」

荻原「つまり成形炸薬弾に耐えられる装甲が必要ということですね」
深海「その通り。そしてその回答としてまず開発されたのが四四式戦車甲の説明文にも出ている中空装甲だ。スペースドアーモアこれは装甲板を2重にして間が空間になっている」

神楽「成形炸薬弾は爆発エネルギーを一点に集中して装甲板を突破しようというコンセプトの砲弾。それで弾の先端が目標に当たると起

爆するのだけど、その時に丁度エネルギーが弾の先端部で集中するように設計されている。それで装甲の表面にエネルギーが集中する」
深海「だけど中空装甲の場合、最初の装甲板を貫通しても、その先に別の装甲板がある。だけど成形炸薬弾のエネルギーはそこに到達する前に拡散してしまう」

荻原「それで貫通できないというわけですね」

神楽「でも中空装甲には問題があった。それは徹甲弾に対しての防御力は通常装甲と変わらないということ」

深海「さらに成形炸薬弾の方も改良されて威力が増し、中空装甲での防御も限界が達した」

荻原「つまり徹甲弾や成形炸薬弾の双方に対して効き目が薄れてきたと？」

神楽「その通り。その問題の解決は後に譲るよ」

深海「さて。成形炸薬弾の発達は戦車の攻撃の部分でも大きな変化をもたらした。それは滑腔砲の採用だ」

神楽「従来の戦車は砲身の中に溝をいれて砲弾を回転させていた。ライフルینگ

それで砲弾の安定性が高まり、遠距離での命中精度が上がるのよ」

深海「だが第3世代戦車はイギリスを除いて溝のない、つまり砲弾を回転させない滑腔砲を採用した」

荻原「それはなぜですか？」

神楽「成形炸薬弾だと回転によってエネルギーが拡散して威力が下がってしまうから。フランスなんて砲弾の中にベアリングを仕込んで逆回転させて相殺するG弾なんて特殊兵器を開発したくらい」

深海「結局、炸薬量そのものが減って逆に威力が下がったというオチはフランスらしいけど。さらに徹甲弾も威力を高めるために高速化が進んだ。しかし極めて高速で飛ぶ徹甲弾の場合、回転を加えると捻じれて威力が下がるという問題が生じた」

荻原「それで砲弾を回転させない滑腔砲が採用されたんですか？」

深海「その通り。さらに滑腔砲には利点があった。ライフル砲の場合、砲弾を回転させるための溝から火薬のエネルギーが漏れてしま

う。だけど溝の無い滑腔砲だとエネルギーが漏れない、つまり威力がその分上がるんだ」
神楽「そして四四式改が登場する」

四四式戦車チカ乙

全長…9.8 m (車体6.7 m)

全高…2.34 m

全幅…3.4 m

重量…52 t

最高速度…72 km

乗員…3名

装甲…拘束セラミック式複合装甲

兵装…44口径120ミリ滑腔砲×1／12.7ミリ機関砲×1

／主砲同軸7.7ミリ機銃

四四式を採用した陸軍であったが、その性能には決して満足していなかった。攻撃力、防御力などあらゆる面で三四式を上回ったものの諸外国列強の新型戦車に比べれば劣っている面も目立った。幸い開発陣は技術の進歩を見越して将来の改良が容易なように設計をしていたので、四四式制式採用直後より改良型の開発に着手して1992年には四四式乙型として正式採用され、翌年より生産が開始された。

乙型は新砲塔チカとも称されるように、四四式甲型の砲塔を新設計の砲塔に換装したものである。新砲塔は従来のものより若干大型化して内部容積が拡大し、そこへ最新の車載電子装置ヴァエロニクスを詰めこんでいる。

射撃統制装置は最新鋭のデジタルコンピューターを装備して、より高精度の射撃が可能になった。自動装填装置との組み合わせによ

り連続した高精度な行進間射撃が可能である。また特定の目標を自動追尾する機能や脅威度を自動で評価する機能が付加されている。

さらに新たに車長用照準潜望鏡を搭載した。これは従来のキューポラとは異なり暗視装置を備えるとともに射撃統制装置と連動しているのが特徴である。それまでの戦車では車長が新たな目標を発見した場合にはそれを口頭で伝達して砲手が改めて照準をする必要があったが、四四式乙は照準潜望鏡で自ら照準をすることができる。砲手が照準・射撃中でも車長は新たな目標を探索・照準するハンター・キラ―戦法を使うことができるので効率的な連続攻撃が可能である。

さらに中空装甲に代わってより防御力が高い複合装甲を装備し、防御力が大きく向上した。近年、我が国で発展著しい素材技術によって完成された拘束セラミック式複合装甲であり他国よりも軽量ながら高い防御力を実現した。

これらの改良により四四式は世界最高水準の性能を持つ戦車の1つとなった。

陸軍は乙型の配備を続ける一方で既存の車輛の乙型への改修も順次行なっている。2000年現在、甲乙あわせて1300輦程度が配備されている。

神楽「これが帝國陸軍現主力戦車、四四式戦車乙よ！」

深海「車長用潜望鏡が暗視装置付きとか、自衛隊の90式より若干高性能だな。90式の場合、潜望鏡には暗視装置がなくて、夜戦では車長が砲手用暗視装置の映像をモニターに映して見るんだが」

荻原「それで中空装甲の弱点を解決したのが複合装甲なんですね」

神楽「その通り。さて成形炸薬弾や近年の徹甲弾、つまりAPDS弾やAPFSDS弾の威力を語るにはユゴニオ弾性限界について語らなくてはならない」

荻原「ユゴニ：オ？」

神楽「ユゴニオ弾性限界。固体の物質はある一定以上の圧力が加え

られると流体のように振舞う、つまりゼリーのようにドロドロになってしまふという性質があるの。その時の圧力の値がユゴニオ弾性限界」

深海「成形炸薬弾や最近の徹甲弾は装甲板にユゴニオ弾性限界を超える圧力を与えて、それで流体上にさせて貫通する。まあ、弾の方も同様にユゴニオ弾性限界を超えた圧力に晒されて液状化してしまうのだけど、装甲の方も結局同じようになっているので貫通してしまふわけだ」

荻原「なるほど。それに対抗するために開発されたのが複合装甲なのですね」

深海「複合装甲の素材としてよく使われるのがセラミックや劣化ウランだ。特にセラミックは軽い上にユゴニオ弾性限界が鋼鉄の10倍以上だから装甲材としてよく利用される」

神楽「セラミックは脆いがユゴニオ弾性限界が高い。だから弾の方だけ流体化してしまふ。装甲の方は固体のまま」

荻原「だから貫通できない！」

深海「その通り。これを鋼鉄の装甲で挟んで脆さを補うのさ」

神楽「さらにセラミックのプレートをチタン製の箱で圧縮して押し込めたものを並べた拘束セラミック装甲が開発された。それが四四式戦車の複合装甲よ」

深海「圧縮することで強度が増し、さらに弾が命中した時の損傷が広がるのを防ぐ効果がある」

荻原「なるほど」

深海「なお劣化ウラン装甲の方はどうやら違う原理で弾を防ぐらしいが、情報不足のため割愛する」

荻原「ところでずっと気になっていたのですけど。チハとかチカとかってなんですか？」

神楽「試作時につけられる隠匿名称だよ。最初のチハは中戦車を意味して、後の文字は開発順にイロハ…とつけられる。チハは3番目に開発された中戦車を意味する」

深海「チカは12番目に開発された中戦車ということだね」

神楽「軽戦車はケ、砲戦車はホから始まる同様の隠匿名称を持つが、この命名法則が必ずしも当てはまるわけではない。九七式軽戦車テケや試作の対空戦車キト、タセ、ソキ、タハのようにね」

荻原「結構、いいかげんですね」

―偵察用装甲車輛―

神楽「次に紹介するのは師団搜索連隊に配備される偵察用装甲車輛だよ」

深海「偵察部隊は主力に先立って敵の勢力圏に入る部隊だからね。身を守るために一定の防御力と自衛の為の武装を必要とする。だから各国ともこの手の装甲車を偵察部隊に配備している」

荻原「なるほど」

神楽「さらに迅速な情報収集のために機動力も必要。かつて、この手の任務を担っていたのは軽戦車だった」

深海「それを今は装甲車が担っているわけだ」

神楽「さて。偵察作戦には2つの種類がある。隠密偵察と強行偵察ね」

深海「隠密偵察はその名のように見つからないように行動しながら相手を探る方法だ。対して強行偵察は敵に攻撃を加えて、それに対する反応から敵の様子を探る方法だ」

荻原「強行偵察の方は危なそうですね」

神楽「ええ。強行偵察を担う部隊は装甲車だけでなく戦車も配備する場合があるね」

深海「自衛隊でも第7師団偵察隊には74式戦車が配備されている」

神楽「帝國日本陸軍の偵察部隊は各師団の搜索連隊。装甲車中隊2個と歩兵中隊2個の4個中隊から成り、戦車師団及び機械化歩兵師団にはそれに戦車中隊が加わる」

深海「今回は装甲車中隊に配備される装甲車の紹介だね」

二八式軽装甲車ムテ

全長…4・6 m

重量…8 t

乗員…3名

最高速度…50 km/h

兵装…二五式20ミリ機関砲／7・7ミリ同軸機関銃

搜索連隊に配備された偵察用装軌式装甲車である。

戦前に開発された九二式重装甲車、九四式及び九七式軽装甲車、さらに戦時中はアメリカからレンドリースされたM3及びM8装甲車の後継として歩兵師団の搜索連隊に配備するために開発された。

歩兵部隊向けの対戦車車輛である一〇式自走無反動砲の派生型で、車体を大型化して無反動のかわりに二五式二〇耗機関砲を砲塔形式で装備した。なお二五式機関砲は本車のために開発され、後に二六式装甲車改にも装備された。

小型で内地でも使い勝手がいいことから全国の師団搜索連隊に配備された他、軽量で輸送機にも搭載できることから空挺部隊にも貴重な装甲兵力として重用されている。80年代後半からはエンジンの換装と装甲の強化が行なわれた。

現在、後継の四八式装甲偵察車が配備されているが、まだまだしばらくは現役でありつづけるだろう。

深海「これも帝國版60式自走無反動砲の派生型。ムテはなにを意味する？」

神楽「自走無反動砲の偵察バージョンということらしい」

深海「ドイツのヴィーゼルあたりがモチーフかな？」

四八式重装甲車テセ

兵装…35ミリ機関砲／7.7ミリ機関銃／対戦車ミサイル発射筒×2

四八式歩兵戦闘車の偵察部隊仕様であり、二八式軽装甲車の後継として配備が進められている。

改良点としては車内の兵員用スペースを潰してセンサーや通信システムが強化されている。乗員は車長、操縦手、砲手の3名に加え、兵員室に偵察要員2名や偵察用機器、偵察用オートバイ、追加の弾薬を積載可能。

現在は戦車師団並びに機械化歩兵師団へ優先的に配備が進められていて、戦車第一師団及び近衛、第二、第七、第二〇の各機械化歩兵師団に配備済みである。

深海「これは歩兵の兵器編3で紹介した歩兵戦闘車の偵察ヴァージョンか」

神楽「その通り。こちらは偵察戦闘車の略でテセさ。モチーフはアメリカのM3騎兵戦闘車がモチーフらしい」

荻原「というわけで次回は原潜の紹介をいたします」

登場兵器紹介 機甲兵の兵器編（後書き）

登場兵器紹介 歩兵の兵器編2を加筆修正。ノイマン効果の解説を加えるとともに幾つか手直し

機甲兵の兵器編は気がついたら1万5000字近くになっていました。

登場兵器紹介 原子力潜水艦編

―原子力潜水艦とは―

深海「今回は世紀末の帝國に登場する日本海軍の原子力潜水艦の紹介だ」

荻原「原子力潜水艦ですか」

深海「荻原さん、潜水艦って分かる？」

荻原「それくらい分かりますよ。海に沈んだりできる船ですよね」

神楽「“潜る”ね。本職の前では“沈む”は禁句だから言うなよ」

深海「さて。今回は原子力潜水艦の解説だ。原子力潜水艦とはつまり原子力で動く潜水艦だ」

荻原「そのままですね…」

神楽「従来の潜水艦は水上ないし浅瀬でディーゼルエンジンをまわして発電し、水中では発電した電気でモーターをまわして動いていた。水中でエンジンをまわしたらすぐに酸素がなくなっちゃうからね」

深海「だけど、そんな状況ではどうしても水中での活動が制限されてしまう。第二次世界大戦の頃の潜水艦は、潜水艦とはいいつつ実際には戦闘時に潜航できるだけでほとんどを水上で過ごす可潜艦に過ぎなかった」

神楽「そこへ革新をもたらしたのは1958年に完成したアメリカ海軍の潜水艦ノーチラスにはじめて搭載された原子力機関だった」

荻原「どう革新的だったんですか？」

深海「原子力機関は稼動するのに酸素を必要とせず、しかも従来の機関に比べると圧倒的に多くのエネルギーを生み出すことができたからだ」

神楽「酸素を消費しないので水中でも動かすことができた。さらに生み出した余剰エネルギーで海水を電気分解することで自ら酸素をつくることさえもできた」

深海「その為、原子力潜水艦はほとんど浮上する必要が無い。作戦行動中、ずっと水中に潜んで活動できるようになったんだ」

神楽「さらに電池に頼るモーターに比べると推進力も大きく向上した。従来型潜水艦なら水中での最高速度は20ノット前後が限界だが、原子力潜水艦なら30ノット近くまで出せる。これは水上艦とほぼ同じだ」

深海「つまり原子力潜水艦は水上部隊とともに航行し、協同作戦をすることができるとだ」

荻原「すごい進歩ですね」

神楽「ただ、もちろんいいことばかりではない。まず建造から廃棄までにかかるコストがでかくなった」

深海「原子炉の処理は面倒だからな。しかも船体がどうしても大型になりがちだから浅瀬では活動が制限される」

神楽「さらに潜水艦として致命的なのは静粛性に劣ることだ」

荻原「静粛性？静かじゃないってことですか？」

深海「その通り。深い海の底では光も届かず、周りの状況を探るには専らソナーに頼る。だからうるさいと簡単に見つかってしまうんだ」

神楽「原子力潜水艦には通常動力潜水艦にはない様々な騒音源がある。例えば減速ギア。原子力機関は言うならば、巨大な蒸気機関。原子炉で水を熱して発生した蒸気でタービンを回すの」

深海「タービンの回転はめちゃくちゃ速いんだけど、そのままスクリュウをまわしても船が壊れてしまう。だからギアを介することで回転数を下げるんだけど、そこから騒音が発生する。他には原子炉冷却用のポンプも問題だ」

神楽「福島原発の事故を見ても分かるように原子炉は常に冷却を行なう必要があって、完全に停止されることが難しい。だから静粛性については原子炉を搭載していない従来型潜水艦に劣ると言われている」

荻原「なるほど」

深海「ただ注意が必要なのは、原潜が静粛性で劣るとされているのは停止して潜んでいる時にも機関を完全に停止することができないからだ。航行をしている時には原子炉を載せていようが、載せていまいが騒音を発するのは同じだ」

神楽「それどころか余力がある分、原子力潜水艦の方が騒音対策が施しやすく航行時の静粛性では勝っているという指摘もある」

荻原「原潜の騒音が問題になるのは立ち止まっている時だけってことですか」

深海「その通り」

―攻撃型原子力潜水艦―

神楽「では引き続きいて帝國海軍の保有する原子力潜水艦の紹介だよ。まずは攻撃型原潜から」

深海「攻撃型原潜とは主に敵の潜水艦や水上艦との戦闘に用いられる潜水艦のことだ。最近じゃ巡航ミサイルを載せて対地攻撃までやっつてるが」

神楽「というか敵艦との交戦の方がむしろ少数例。原潜の場合、フオークランド紛争の時にイギリス艦コンカラー^{HMS}がアルゼンチン巡洋艦ヘネラル・ベルグラノを撃沈したのが唯一の事例」

海龍（原巡1型）

全長…80m 排水量…3500t（水中）

速力…17kt（水中）

機関…S3W加圧水型原子炉×1／蒸気タービン×2 2軸推進

兵装…前部533ミリ魚雷管×4／後部533ミリ魚雷管×2（

魚雷×20）

帝國海軍初の原子力潜水艦。原子力巡洋潜水艦1型とも呼ばれる。

船体は新型イ号通常動力潜水艦をほぼそのまま大型化したもので、水中高速性能を意識して流線形を多く取り入れたデザインをしていたものの、大局的に見れば戦前からの船型船体の発展系に過ぎなかった。当時、アメリカなどは水中運動能力に優れる涙滴型潜水艦に移行しつつあったが、日本海軍は経験不足から原子力潜水艦への採用を見送った。

就役当初はアメリカ製のS3W型原子炉を搭載していたが、出力不足のため速力が17ノット程度しか出ず、1970年代後半に海軍原子力本部が開発した国産原子炉であるロ号原本式原子炉に換装されて速力は22ノットまで向上している。

日本初の原子力艦艇として内外からの注目度が高く、進水時は天皇陛下をはじめとする各界の要人が出席し、海龍の唄と呼ばれる唱歌もうまれた。

技術的には旧来の船体に低出力な原子炉を組み合わせた海龍は失敗作として捉えられている。しかしながら帝國海軍初の原子力潜水艦として運用実績をつくり、後の原子力潜水艦建造計画に大きな影響を与えた。

次世代艦である利根型、四万十型が出揃う1980年代後半には退役を予定していたが、中曽根軍拡の一環として原子力潜水艦の定数増強が決定し、海龍も旧式ながら90年代まで寿命を延長することになった。1986年から1年かけて寿命延長改修が行なわれ、武器管制システムなどが近代化された。

1996年には現役を引退し、帝國海軍は海龍の原子炉処理後に記念艦化する計画である。

海龍 / 1965 / 1996退役、1998除籍。

原子炉処理計画進行中

神楽「そして、こちらが国産第一号原子力潜水艦の海龍です」
深海「ちよつと待て。既に退役しているじゃないか」

神楽「そだね」

萩原「これって登場兵器紹介ですよ」

神楽「まあ、細かいことは気にせずに」

萩原・深海「…」

神楽「特徴は船型船体をしているところかな」

萩原「船型船体とは？」

深海「文字通り水上を航行する船のような形をしている船体って意味さ。現在の潜水艦の写真を見れば分かると思うけど、単に水中を航行するためなら砲弾のような形をしている方が有利だ」

神楽「だけど昔の潜水艦は水上艦のように水面を切って進むのに適した船体をしていた」

萩原「なぜですか？」

深海「さっきも言ったけど原子力潜水艦の登場まで潜水艦はあくまでも可潜艦に過ぎなかった。潜るのは戦闘の時だけで実際には水上を航行する時がほとんどだ」

萩原「だから水上航行するのに適した形をしていたと？」

神楽「その通り。だけど第二次世界大戦時にはリーダーが発達して、潜水艦の水上行動は自殺行為になった。そこで各国ともそれまでの水上行動主体から水中行動主体に切り替えるようになった。船体もそれに適するように改められた」

深海「だけど初期の改善は角張った部分を滑らかにして水を流れやすくするくらいで、全体的なフォルムは水上行動主体の時代と大きく変わなかった。それは初期の原子力潜水艦も同じだ」

神楽「アメリカのノーチラス、シーウルフ、スケート型やソ連のノベンバー級、エコー級、ホテル級といった初期の原潜がその代表例」
萩原「なるほど」

深海「しかし、それは50年代までの話だぞ。初めて涙滴型船体を取り入れた原潜であるスキップジャックは1959年に就役している。1963年に就役したイギリス初の新原潜ドレッドノートも船型船体を脱している。ソ連の涙滴型潜水艦であるヴィクターI級も1

967年に迫っている。1965年就役でこれは遅すぎないか？」
神楽「史実の自衛隊で初めて涙滴型が就役したのは1971年だよ？
そんなもんだよ」

萩原「涙滴型？」

深海「詳しくは次で」

迅龍（原巡2型a）

全長…72m

排水量…4000t（水中）

速力…30kt

機関…イ号原本式原子炉×1／蒸気タービン×1 1軸推進

兵装…533ミリ魚雷管×6（魚雷×24）

海龍に続く帝國海軍第二の原子力潜水艦である。

帝國海軍は1960年代初めにアメリカからバーベル級潜水艦の設計資料を提供されて、それを基に1964年に涙滴型船体を採用したイ号第17潜水艦を就役させた。その運用実績に満足すると海軍は原子力潜水艦の船体への採用を決定した。

原子炉には国産の加圧水型が搭載された。海軍原子力本部が開発したイ号原本式で海龍と違い十分な出力があり低速にも悩まされる事がなかったが、初の艦載型原子炉であることから信頼性が低く、しばしばトラブルに悩まされたという。まだ当時のソ連艦ほどではないものの静粛性が低かった。

それでも初の涙滴型原子力潜水艦であり、本格的な水中戦用艦艇として原子力潜水艦隊の基礎を創りあげた。後継艦の登場により迅龍は1998年に退役した。

迅鯨

／1971

／1998退役、予備役保管中

深海「さて1953年、アメリカ海軍で実験潜水艦アルバコアが就

役した。涙滴型潜水艦の先駆けだ」

萩原「涙滴型ですか。涙の滴。なんかロマンチックですね」

神楽「涙滴型はその名の通り、水滴のような形をした船体ね。前は水滴の底のように丸くなっている。側面は丸みを帯びた流線形で、後ろにいくに従って絞られていく」

萩原「どうしてそんな形に？」

深海「水中で航行する時に抵抗が少ないんだ。だから同じパワーでも船形船体に比べてより速く水中を進むことができる。まさに潜水艦のための船体だ」

神楽「アルバコアで有効性を実証された涙滴型船体はすぐに実戦用潜水艦に取り入れられた。1959年就役開始のバーベル級通常動力潜水艦とスキップジャック級原子力潜水艦がその始まり。そして涙滴型は世界各国の潜水艦に採用されていくの」

萩原「それで日本ではこの迅龍ですか」

神楽「そういうこと」

蛟龍（原巡2型b）

全長…85m

排水量…5000t

速力…24kt

機関…イ号原本式原子炉×1／電動機×1 1軸推進

兵装…533ミリ魚雷管×6（魚雷×24）

迅鯨の準同型艦であるが、静粛性向上のために実験的にターボ・エレクトリック方式を採用して船体が大型化した。

1965年に海龍型原子力潜水艦が導入されると、その騒音が問題となった。白鯨は高速回転する蒸気タービンの動力を減速ギアによって回転数を調整してスクリュウを回しているのであるが、その減速ギアが騒音の主要な発生源となっていた。

そこで帝國海軍はアメリカ海軍が原潜タリビーに採用したターボ・エレクトリック方式に注目した。蒸気タービンの動力で直接スクリューをまわすのではなく、発電機によって電力をつくって電動モーターをまわして推進する方式である。それによって騒音の発生源となる減速ギアを省略できるのである。そのため静粛性はロサンゼルス級と同程度と言われ、後の四万十型原潜よりも高く球磨型原潜登場までは日本で最も静かな原潜であった。

しかしながらターボ・エレクトリック方式は機構が複雑で効率が悪く大きさに比して出力が低い欠点があった。また迅龍と同様に原子炉そのものの信頼性の不足にも悩まされた。

蛟龍建艦の予算が帝國議會で承認された直後の1968年にソ連の旧式原潜であるノヴェンバー級がベトナム沖で空母エンタープライスを26ノットの高速で追撃する事件が起こると、海軍は静粛性にくいくらか目を瞑っても高速な潜水艦を整備する方針を固めたので、蛟龍の同型艦は建造されなかった。

ソ連原潜に対しての積極的な攻撃は難しいものの、静粛性を利用して平時には情報収集任務に利用され、戦時には機雷敷設任務に投入することが予定された。その為に帝國海軍は蛟龍の近代化改修には消極的だったが、航海支援装備や情報収集装置は常に最新のものに更新されていた。また球磨型の就役までは日本で唯一機雷敷設能力のある原潜であった。

蛟龍は多くの問題を抱えているものの原潜の不足から現役に留まりつづけたが、新型潜水艦の就役により2000年に退役を予定している。

蛟龍

／1972

／2000年退役予定

深海「さて、前に原子力潜水艦の騒音の話をしたね」

萩原「減速ギアと原子炉冷却用のポンプが問題なんでしたよね」

神楽「その通り。蛟龍はそのうち減速ギアの問題を改善しようという試み」

深海「ようするにタービンから直接スクリューをまわすのではなく、発電機を介して発生させた電気でモーターを動かしてスクリューをまわすのさ。電線は音を出さないから、騒音を大幅に減らすことができる」

神楽「ただ説明にもある通り、それまで直接スクリューを回していたのを発電機とモーターを介するようにしたわけだから、従来の艦に比べてもシステムが大掛かりになる。どうしても航行能力で劣ることになるの」

深海「実際、アメリカでは試験的にターボ・エレクトリック方式の原潜が2隻建造されたけど結果は思わしくなかったように量産はされなかった」

神楽「例外として中国とフランスがターボ・エレクトリック方式を本格的に用いているけど、主流とはいいい難い状況よ」

萩原「なるほど」

深海「ただし通常動力艦ではディーゼルエンジンで発電機をまわし、その電力を使いモーターで航行するディーゼル・エレクトリック式が主流になっている」

神楽「まあ通常動力潜の場合は、水中じゃ機関は回せないからね」

利根型（原巡3型）

全長…75 m

排水量…4200 t

速力…32 kt

機関…口号原本式原子炉×1／蒸気タービン×1 1軸推進

兵装…533ミリ魚雷管×6（魚雷×24）

帝國海軍初の量産型攻撃型原子力潜水艦。迅龍のほぼ同型艦で、より大型の高出力原子炉を搭載して速力が向上している。

騒音問題についても一定の対策がなされたが、航行時の雑音はア

メリカ海軍の2世代前の潜水艦であるパーミット級と1世代前のスタージョン級の間程度と言われている。就役を開始した頃にはアメリカがスタージョン級よりも静粛性の高いロサンゼルス級を投入し、ソ連でもスタージョン級レベルまで静粛性が改善されたヴィクターIIII級の就役し始めており利根型の静粛性の問題は深刻に受け止められた。

センサースステムについては遠距離探知能力を高めるために大型ソナードームを艦首に設置し、ソナーとの干渉を避ける為に迅龍、蛟龍では艦首に備えられていた魚雷管と潜航舵が、前者は艦中央部に、後者は艦橋に移された。この形態は次代の四万十級にも受け継がれた。

後期の2艦は対艦ミサイルを発射できるようになった。また1990年代に近代化改修が施されて四万十級後期型と同程度の火器管制システム、ソナースステムに換装されて索敵・攻撃能力が向上し、有線誘導魚雷が使用可能になった。

なお1973年には原子力潜水艦が帝國海軍の狭義の軍艦に類別されるようになり、それに伴ない命名規則が変更された。それ以降はかつての軽巡洋艦に与えられた河川名に基づく命名が行なわれるようになった。

利根	／1976
筑摩	／1978
矢作	／1981
多摩	／1982

神楽「続きましては日本初の量産型原潜であります」

深海「騒音が問題か。戦前の潜水艦とあまり変わらないのな」

神楽「史実の自衛隊潜水艦だってくうずしお>型あたりまで酷かったじゃん」

荻原「他に特徴は？」

神楽「潜航舵の位置かな。それまでの潜水艦は欧州艦みたいに艦首

にあったのを、海上自衛隊潜水艦みたいに艦橋に移したの。だから前から見ると、艦橋が十字架みたいになってる」

四万十型（原巡四型）

全長…89 m

排水量…4900 t

最大速力…28 k t

最大潜航深度（安全深度）…600 m

機関…ロ号原本式原子炉×1／蒸気タービン×1 1軸推進

兵装…533ミリ魚雷管×6（魚雷・ミサイルなど24発）

海龍、迅龍、蛟龍に続き帝国海軍は初の量産型原潜である利根型を建造した。同艦は速力32 k tをマークしたが静粛性の低さは相変わらずであった。その為にアメリカ軍との演習ではそれが原因で常に撃沈判定を受けることとなり、事態を重く見た帝国海軍は静粛性の優れる新型潜水艦を計画した。それが四万十型である。

四万十型には騒音低減のために7枚翼のハイスキュードスクリーパーが採用された。また騒音の主な発生源である駆動装置を船体に直接固定せず隔離し、二重の防音機構で介することで静粛性は初期型のロサンゼルス級よりも若干低い程度まで改善した。反面、防音機構によって船体が大型化したにも関わらず利根と同型の原子炉を搭載しているため、速力は低下している。

また四万十型は水上艦に続きシステム艦化が行われた最初の原潜となった。まず新開発された四四式戦闘指揮装置を搭載した。デジタル化により自動化が進み複数の目標の動向を同時に解析できるようになり、複数艦相手に対する同時攻撃が可能になった。

魚雷発射管及び管制装置も新型を装備して有線誘導魚雷と対艦ミサイルに対応している。

さらに3番艦の九頭竜からは日本海軍原潜としてはじめて曳航式

ソナーを搭載した。それにあわせて艦首ソナーも曳航ソナーと制御部分を一体化したデジタル式統合ソナーシステムに換装されて索敵の効率が上がった。さらにデジタル化により射撃指揮装置と魚雷管制装置ともデータによる直接の遣り取りができるようになりシステム艦化は完成された。

四万十、阿賀野も九頭竜と同様のシステムに換装され、また利根型も九頭竜を手本に近代化改修が施されている。

四万十	／1984
阿賀野	／1986
九頭竜	／1988
阿武隈	／1990

深海「＜利根＞型に対して騒音対策を施した艦というわけか」

神楽「史実の自衛隊の＜はるしお＞型に相当する艦ね。静粛化とシステム化が肝」

荻原「システム化とは？効率が上がったとありますが」

神楽「コンピューター化と云えばいいかな？もしくはオートメーション化」

深海「例えばソナーシステムはね。昔は単純にマイクの拾った音をそのまま聞くだけ、音の波形を映すだけで、あとの分析はソナーマンが自分の経験と勘が頼りだった。しかもひとつの機械ではひとつのソナーしか使えない。あるコンソールで艦首ソナーを聞いていて、それから曳航ソナーを聞きたくなったら、いちいち別のコンソールへと移動しなきゃならなかった」

荻原「面倒くさいですね」

神楽「だけどデジタル化、コンピューター化により特定の音だけ抽出したり、過去のデータと照合したりといったさまざまな分析機能を付加され、さらに別のソナーにスイッチ一つで切り替えができるようになった」

荻原「便利ですね」

深海「その通り。そして、それまでソナー、情報処理システム、武器管制システムは別個の独立した機械で間に人の手を介する必要があった。だけどシステム艦化によって全体を一つのシステムとして使えるようになった」

荻原「それはどういう意味ですか？」

神楽「従来の艦だと、ソナーが敵を見つけたらソナーマンがその位置を分析するのだけど、その分析結果は口頭で発令所に伝える必要があった」

深海「そして発令所では、その分析結果をもとに何時、どの方向に魚雷を発射すれば命中するのか計算するのだけど、その計算結果に基づいて魚雷を発射するには、やはり口頭で伝達して手動で魚雷管を操作する必要があった」

荻原「いちいち人の手を経る必要があったと」

神楽「その通り。その分、時間もかかる。だけどデジタル化、システム化した艦はデジタルデータとして回線を通じて直接情報を送ることがができる」

深海「素早く正確な情報のやりとりができる。当然、敵探知から攻撃までの時間も大幅に短縮できるってわけだ。しかも、より複雑に」
荻原「説明文にある“複数の目標の動向を同時に解析できる”ってヤツですか」

神楽「そうだよ。すごいだろ」

球磨型（原巡五型）

全長…108 m

排水量…7200 t（水中）

最大速度…35 k t

最大潜航深度（安全深度）…600 m

機関…ハ号原本式原子炉×1／蒸気タービン×1 1軸推進

兵装…533ミリ魚雷管×6 （魚雷・対艦ミサイルなど36発）

帝国海軍の第5世代攻撃型原潜。空母機動艦隊の護衛を任務とし、空母に随伴可能な航行能力を有している新世代艦。

1980年代に従来艦と比べて静粛性の高い四万十型攻撃型原子力潜水艦を次々と就役させたが、静粛性の代償として速力が低下した。その為に1980年代にソ連がシエラ級やアクラ級のような高性能原子力潜水艦を投入すると、帝国海軍は四万十型の能力を不十分であると考えて建造計画を4隻で打ち切り新型潜水艦の開発を開始した。

新型艦は静粛性と航行能力の両立が図られていて、石狩型戦略原潜で採用されて実証された静粛化対策を取り入れている。船体表面は吸音タイルに覆われており、内部の雑音が外部に漏れるのを防ぐとともに相手のアクティブソナーにも探知され難くなっている。また石狩型に続き自然循環式原子炉を導入しており、そのため騒音の原因となる冷却水ポンプを作動させないままで原子炉を最大で約50%の出力にして航行することができる。

船体はそれまでの涙滴型から直線的魚雷型に転換された。また運動性能向上のために従来の艦が艦橋に備えて潜航舵を艦首に移した。艦首ソナーへの干渉を抑えるために必要に応じて船内に引き込めるようになっている。

戦闘指揮システムは四万十型の四四式より更にオートメーション化が進んだ五四式戦闘指揮装置が装備されていて、発射された6本の魚雷を同時に管制して別々の目標を攻撃することが可能である他、蛟龍の後継艦として機雷敷設機能が付与されている。また従来の艦首ソナードームと曳航式ソナーに加えて、艦側面にパッシブ式のコンフォーマル・アレイ・ソナーを備えて索敵の精度が向上している。このように様々な新機軸を投入して索敵システムの能力も大幅に強化され、米ソの最新鋭原潜に匹敵する能力を得た。

さらに2000年就役予定の最新艦＜十勝＞はそれまでのスクリ

ユーに代わって静粛性に優れるポンプジェット推進を導入した改＜球磨＞と呼べる艦で、20ノットまでならほぼ無音で航行可能とされる。

球磨 / 1994

由良 / 1996 <海龍＞代替艦

久慈 / 1998 <迅龍＞代替艦

十勝 / 2000 / 改＜球磨＞型。 <蛟龍＞代替艦

神楽「そして、これが最新鋭の攻撃型原潜。静粛性と運動性の両立がコンセプト」

深海「新しい要素は吸音タイルと自然循環式原子炉だな」

萩原「なんですか、それ？」

深海「まずは吸音タイルだが、ようするにゴムの板だ。音は振動だから、ゴムで振動を吸収して漏れる音を小さくするって発想だな」

神楽「むかしからエンジンやモーターを取り付けるときに、船体との間にゴムを挟んで騒音を低減するって工夫はされていたけど、吸音タイルはそれを船体全体でやろうという試み」

深海「船体全体をゴムで覆って、中から漏れる音を減らすんだよ。

そして、これにはもう一つ利点がある」

萩原「アクティブソナーうんぬんってヤツですか？」

神楽「その通り。アクティブソナーは自ら音波を敵に向けて発して、その反射を捉えて正確な距離を測ろうってソナー」

萩原「つまり相手の発した音波をゴムで吸収しちゃおうってことですか。それから自然循環式原子炉というのは？」

深海「最初に原潜の騒音問題について説明したけど、そのときに原潜の主な騒音源を二つ挙げただろ？」

萩原「ええと。減速ギアと原子炉冷却用ポンプでしたっけ？」

神楽「自然循環式原子炉は後者の問題を解決するために考案されたものよ。対流を利用するの」

萩原「お湯を沸かすときに、鍋の中を水がグルグルまわるアレです

か？」

深海「そう、アレ。熱源に近くて温かい部分の水は膨張して密度が下がる、つまり軽くなるから上昇する。熱源から離れた冷たい水は温かい水に比べると重いから、下に沈む。これを繰り返すことで流れが生まれるんだ」

萩原「つまりコンロの代わりに原子炉でそれをやろうっていうんですか？」

神楽「その通り。対流の作用で水が自然と循環するんだから、モーターを使う必要がない。つまり騒音が発生しない」

萩原「すごいですね」

深海「まあ原子炉の出力を上げたら、自然対流じゃ処理しきれなくなるからモーターを使わざるを得ないのだけど」

――戦略ミサイル原子力潜水艦――

神楽「さて、さっき“主に敵の潜水艦や水上艦との戦闘に用いられる潜水艦”は攻撃型に分類されると書いたけど、わざわざ分類する以上は当然ながらそれ以外の任務に使われる原潜も存在する」

萩原「それが戦略ミサイル原潜」

深海「戦略ミサイル原潜は核弾頭を搭載した弾道ミサイルを装備して敵の本土への核攻撃を行う任務を与えられた原子力潜水艦だ」

萩原「怖いですね。でも、なんでわざわざ核ミサイルを潜水艦に載せるんですか？」

神楽「それは確実な報復を行うため」

深海「冷戦時代には東西両陣営が相手の核攻撃を抑止するために膨大な数の核兵器を開発、配備してきた。しかし、それには常に1つの懸念があった」

神楽「核兵器は強力な破壊力を持っているからね。どんなに報復のための核兵器を配備しても、敵の先制攻撃で全滅してしまう可能性

があった。こちらが報復する手段を失ったら、相手は好きなだけ核攻撃を行えるわけ」

深海「冷戦時代の核戦略は、敵に核攻撃された時に確実に相手に報復の核攻撃を行える能力を保持する、ことを目指していた。そうすることで敵は報復が怖くて手出しができない。これが核抑止力理論さ。そしてそれを実現するためには敵の核攻撃を受けても確実に生き残り報復攻撃ができる核戦力が必要だった」

萩原「それで潜水艦ですか」

神楽「世界の7割は海だからね。海中にじっと潜む潜水艦を見つけることも撃沈することも大変難しい」

深海「地上のサイロやトラック搭載型だったら核攻撃で周りごと吹き飛ばせばいいけど、海中じゃ直撃させなきゃ効果が薄いからね」
神楽「“敵の核攻撃を受けても確実に生き残り報復攻撃ができる核戦力” それこそが戦略ミサイル原潜なわけ。だから核戦略ではもつとも重視される」

深海「イギリスやフランスは地上の核戦力は捨てて潜水艦に集約しちゃったくらいだしね」

萩原「すごい重要なんですね」

木曾型（海弾二型）

全長…130m

排水量…8000t（水中）

最大速力…20kt

機関…口号艦本式原子炉×1（揖斐、長良）／蒸気タービン×1
1軸推進

兵装…533ミリ魚雷管×6（魚雷12）／SLBM発射筒（ポラリスA3orトライデントC4×16）

日本海軍初の戦略ミサイル原潜であり、また日本初の量産型原子

力潜水艦でもある。

1954年の核実験成功から核戦力の拡張を進めていた日本軍は核爆弾搭載爆撃機、地上発射型弾道ミサイルに続き潜水艦発射型弾道ミサイルの整備を目指した。まず1960年代末にアメリカから提供されたポラリス弾道ミサイルを搭載した通常動力艦であるイ400型―もしくは海軍弾道弾搭載潜水艦一型―を就役させたが、定期的に潜望鏡深度まで浮上して空気を取り入れディーゼル推進で充電する必要があった通常動力艦では生存性に欠け、確実な報復戦力とはなりえなかった。しかしながら、イ400型から得た様々な教訓は木曽型の開発に大きな影響を与えた。

そして1965年に初の原子力潜水艦＜海龍＞が就役し、その成果に満足した海軍は弾道弾搭載型原潜の開発を開始した。

船体は迅龍の船体設計を流用し、艦橋後部にミサイル区画を設けている。迅龍は静粛性に問題を抱えていたが、戦略原潜である木曽型は速度性能を求められず大型化した船体には十分な対策が盛り込まれ、雑音レベルは低く抑えられている。

原子炉は一番艦木曽については迅龍型と同じイ号原本式であったがトラブルが続発し、二番艦以降は信頼性の高まった新型の口号を搭載するようになった。

搭載するミサイルはアメリカとの協定により提供されたポラリス弾道ミサイルであったが射程不足により、80年代初めにトライデントC4に換装されている。

搭載兵器の射程不足に悩まされたものの、当艦の就役により“敵の先制攻撃に対する生存性の高い報復核戦力”を日本は手にすることができ、核戦略の発展に大いに貢献した。その為が一番艦である木曽が就役した1973年より原子力潜水艦は帝國海軍における狭義の軍艦に分類されるようになり、命名規則もかつての軽巡洋艦を受け継いで河川名から名付けられるようになった。木曽型は木曽三川から採られている。

2000年代初頭に新型原潜へ更新されて退役予定。

木曾	／1973
損斐	／1975
長良	／1977

神楽「“世紀末の帝國”の一番最初に登場した海軍艦艇<木曾>です」

深海「そういえばそうだったな。随分、古い艦なんだな」

神楽「だから後継艦計画が進行中」

萩原「劇中で海軍大臣が“予算が通らなかった”と嘆いていたアレですか？」

神楽「そうそれ」

深海「ミサイルはイギリスと一緒にアメリカに相乗りか」

萩原「北極星ですか」

神楽「UGM-27ポラリス。アメリカ海軍が最初に開発した潜水艦^{SLBM}発射型弾道ミサイルね。固体燃料で水中発射も可能。SLBMの基本形をまとめた革新的なミサイルだね」

深海「ソ連も潜水艦発射型ミサイルを配備していたけど、液体燃料式で取り扱いが面倒な上に浮上しなきゃ発射できなかった。ポラリスの配備でアメリカはソ連に対して優位を確立したんだ」

神楽「ポラリスはアメリカ海軍が使用した他にイギリス海軍にも供給された。“世紀末の帝國”の日本海軍もアメリカから供給されたという設定。余談だけどポラリスはイタリアの巡洋艦ジョゼッペ・ガリバルディに搭載する計画もあったよ」

深海「大戦型巡洋艦なのに弾道ミサイル発射機が搭載されたんだぜ」
神楽「帝國海軍が導入したのはイギリスと同じで一番最後に開発されたポラリスA3型。射程が延びて精度も向上。さらにMIRV^{マープ}化されているのが特徴よ」

萩原「マープ？」

深海「複数個別誘導再突入体の略称だ。つまり、それまでのミサイルは1発のミサイルに1つの弾頭しか載せていなくて、1つの目標

しか攻撃できなかった。だけどMIRVだと1発のミサイルに複数の弾頭を載せていて、1発のミサイルで複数の目標を攻撃できるんだ」

萩原「すごいですね」

神楽「確かにすごいミサイルだけど、海軍は不満があった。それは射程」

深海「なるほど。ポラリスはA3型でも射程は4600キロ。モスクワまで約8000キロだから届かない」

神楽「だから中国に対してはともかくとしてソ連に対しては抑止力は限定的にしか生じない。そこで1980年代にトライデントミサイルに換装されたわけ」

深海「トライデントC4は射程7500キロ。日本海や東シナ海から発射すればモスクワにギリギリ届く」

神楽「まあ撃てる海域が限られている時点で考え物だけどね。確実な抑止力としては」

石狩型（海弾三型）

全長…150m

排水量…15000t（水中）

機関…ハ号原本式原子炉×1／蒸気タービン×1 1軸推進

兵装…533ミリ魚雷管×4（魚雷16本）／SLBM発射筒（トライデントC4 or トライデントD5×16）

日本の核戦略の中核を成す存在であり、前級の本曽型とともに抑止警戒任務に就き常時1隻が日本近海に出撃している。

1980年代の軍拡期に入ると3隻でローテーションをギリギリの状態で組んでいる戦略潜水艦部隊の増強が最優先に行なわれることになった。

戦略原潜として静粛性を第一に開発が進められ、機関には騒音の

源となるポンプでは無く自然対流を利用した冷却機構を備えた自然循環型原子炉を搭載している。またイギリスから取り入れた吸音タイルで船体を覆うことでアクティブソナーによる探知可能性を低減させている。これらの新機軸は球磨型攻撃型原潜にも取り入れられた。

搭載するミサイルは米海軍が開発を進めていたトライデントD5を念頭に設計されたが、一番艦＜石狩＞の就役までにトライデントD5の配備は間に合わなかったので、＜石狩＞木曾型用に輸入されたトライデントC4を搭載し、二番艦＜夕張＞よりトライデントD5の搭載が始まった。

一番艦＜石狩＞も近く搭載しているミサイルのトライデントD5への換装を予定している。トライデントC4では射程の問題から東シナ海から攻撃を実施せざるをえなかったがトライデントD5の登場により比較的安全な太平洋から直接モスクワを攻撃できるようになった。

石狩 ／ 1989

夕張 ／ 1991

神楽「そして、これが帝國海軍最新の戦略原潜。後に＜球磨＞型に取り入れられる様々な静粛化対策が先んじて採用されている上に、搭載するミサイルはトライデントD5！」

深海「トライデントD5はトライデントC4の改良型、といっても別物みたいなものだけだね」

萩原「なにが違うんですか？」

神楽「まず射程が延びた。搭載できる弾頭の数が増え、かつ威力も上がった。命中精度も上がった」

萩原「なにもかも進歩したんですね」

深海「特に重要なのは射程と命中精度だ。潜水艦に載せるという制約故にSLBMはどうしても性能面で地上の大陸間弾道ミサイル^{ICBM}に劣っていた。それを覆したのがトライデントD5なんだ」

神楽「今までは潜水艦発射型弾道ミサイルは報復戦力だと書いてきたでしょ？」

荻原「はい。確実に発射できるからと」

深海「実はそれだけが理由じゃない。精度の劣るSLBMでは自国に対する核攻撃の報復として敵国の都市を吹き飛ばすには十分でも先制攻撃に向かないんだ」

神楽「報復攻撃なら相手はミサイルを発射した後だから無視すればいいのだけど、先制攻撃をする場合は報復攻撃を防ぐために敵の核戦力も同時に叩きたいわけ。だから大陸間弾道ミサイルの発射基地も攻撃するのだけど、発射サイロの大部分は地下に埋まっているから撃破するには直撃させなくてはならないわけ」

荻原「だけどSLBMの場合は精度が低いから、そうした攻撃には向かない。ということですか？」

深海「その通り。だからアメリカやソ連はSLBMが発達しても地上発射型のICBMの配備を続ける理由はそこにある」

神楽「そしてトライデントD5はICBMの代替となりうる最初のSLBMなのだ」

荻原「やっと終わりましたね」

深海「次回は何の予定だい？」

神楽「砲兵の装備編かな？」

世紀末の帝國 軍中央機構組織図（前書き）

自分の資料用

世紀末の帝國 軍中央機構組織図

兵部省

└兵部大臣

└政務次官（議員）

└兵部次官（現役ないし予備役軍人）

└内部部局

└大臣官房

└人事教育局

└軍務局

└兵備局

└経理局

└医務局

└「その他の諸機関

└外局

└国防技術研究所

└電波通信本部

└誘導弾本部

└航空本部

└運輸兵站本部

└原子力本部

└「その他の諸機関

└陸軍省

└人事局

└法務局

└外局

└兵器行政本部

└陸軍技術研究所

└陸軍兵器学校

―	陸軍兵站補給本部
―	機甲本部
―	―「陸軍戦車学校
―	陸軍航空部
―	「その他の諸機関
―	海軍省
―	人事局
―	教育局
―	法務局
―	「外局
―	艦政本部
―	海軍航空部
―	潜水艦部
―	海軍原子力部
―	電波本部
―	水路部
―	海軍大学校
―	海軍兵学校
―	「その他の諸機関
―	空軍省
―	人事局
―	教育局
―	法務局
―	「外局
―	航空技術研究所
―	航空審査部
―	空軍電波通信本部
―	空軍弾薬部
―	宇宙本部
―	「その他の諸機関

- ― 統合常設参謀部（戦時には大本営）
 - ― 統合常設参謀部総長（戦時には大本営総長）
 - ― 内部部局
 - ― 総務部
 - ― 第一部（作戦運用）
 - ― 第一課（作戦）
 - ― 第二課（防衛）
 - ― 第三課（教育・訓練）
 - ― 第二部（情報）
 - ― 第四課（ソ連情報）
 - ― 第五課（中国情報）
 - ― 第六課（欧州情報）
 - ― 第七課（北米アメリカ情報）
 - ― 第十一課（東南アジア情報）
 - ― 第十二課（中東アフリカ情報）
 - ― 第三部（兵站）
 - ― 第八課（国内）
 - ― 第九課（国外）
 - ― 第四部（C4I）
 - ― 第十課（通信）
 - ― 第十三課（宇宙利用）
 - ― 第十四課（システム開発）
 - ― 第五部（統合運用）
 - ― 報道部
 - ― 外局
 - ― 中央特種情報部（通信情報）
 - ― 統合軍大学校
 - ― 気象部
 - ― 戦史部
 - ― 「その他の諸機関

- ―陸軍参謀本部
- ―陸軍参謀総長
- ―総務部
- ―総務課
- ―「第一課（教育）」
- ―第一部（作戰）
- ―第二課（作戰）
- ―第三課（編制・動員）
- ―「第四課（防衛）」
- ―第二部（情報）
- ―第五課（ソ連情報）
- ―第六課（欧州情報）
- ―第七課（中国情報）
- ―第八課（南北アメリカ情報）
- ―第九課（東南アジア・印度情報）
- ―第十四課（中東アフリカ情報）
- ―第三部（兵站・通信）
- ―第十課（兵站）
- ―「第十一課（通信）」
- ―第四部（戦史）
- ―第十二課（戦史）
- ―第十三課（戦略戦術課）
- ―外局
- ―陸軍大学校
- ―「陸地測量部」
- ―海軍軍令部
- ―海軍軍令部総長
- ―第一部（作戦）
- ―第一課（作戦）
- ―第二課（防衛）

- ― 一 第八課（東南アジア・印度情報）
- ― 一 「第十四課（中東アフリカ情報）」
- ― 一 第三部（兵站）
- ― 一 第九課（兵站）
- ― 一 第十課（装備）
- ― 一 「第十一課（技術開発）」
- ― 一 第四部（通信）
- ― 一 第十二課（通信）
- ― 一 「第十三課（防空システム）」
- ― 一 戦史部
- ― 一 外局
- ― 一 航空士官学校
- ― 一 空軍大学校
- ― 一 「偵察局」
- ― 一 陸軍教育總監部
- ― 一 陸軍士官学校
- ― 一 陸軍予科士官学校
- ― 一 陸軍予備士官学校
- ― 一 陸軍幼年学校
- ― 一 陸軍科学学校
- ― 一 陸軍歩兵学校
- ― 一 陸軍戸山学校
- ― 一 陸軍砲兵学校
- ― 一 陸軍防空学校
- ― 一 陸軍挺進学校
- ― 一 陸軍工兵学校
- ― 一 陸軍通信学校
- ― 一 陸軍輜重兵学校
- ― 一 「陸軍習志野学校」
- ― 一 陸軍防衛総司令部―陸軍実働部隊

「海軍総隊司令部―海軍実働部隊

「空軍実働部隊

「憲兵隊

神楽「ちなみに私が所属していたのは統常参謀部第二部五課です！」

深海「…」

荻原「…」

神楽「…」

深海「誰得？」

登場兵器紹介 砲兵の兵器編 1

神楽「歩兵、機甲兵と続いてお次は砲兵の兵器でえす」

深海「順当だな」

荻原「砲兵ですか」

深海「文字通り大砲を主武装とする部隊のことだ」

神楽「大砲！大砲！」

深海「そういえば大砲マニアだった、こいつ」

―日本陸軍砲兵史―

―史実編―

深海「で、また歴史解説すか」

神楽「そゆこと。日本陸軍の砲兵史をおさらいしてみよう。陸軍が入手した最初の近代野砲はフランス製の四斤砲だそうだ」

深海「もともとは幕府陸軍が導入したものを新政府が引き継いだんだ。明治期にはライセンス生産もされた。先込め式でかつ青銅製という旧式な設計だったが、明治の頃の日本にしてみれば頑丈だが加工が難しい鋼鉄を使う大砲より加工のし易く国内に豊富にある青銅製の方がとっつき易かった」

神楽「野砲と山砲が導入され、西南戦争あたりまで陸軍砲兵の主力を勤めた」

荻原「野砲と山砲はなにが違うんですか？」

深海「大砲はできるだけ強力な弾をできるだけ遠くまで飛ばしたい。その為に大砲はより大きな弾をより強力な火薬で飛ばすという方向に進化する。そうなれば大砲の方はそれに耐えうるためにより大きく重くなっていく」

荻原「はい」

神楽「しかし山中など交通の便の悪い場所では大きく巨大な砲は使いにくい。そこで威力や射程の低下には目を瞑って、小型軽量であ

り、必要に応じて簡単に分解できる使い勝手の良い大砲が野砲とは別に用意されるようになったの。それが山砲」

萩原「なるほど」

深海「そして、維新が進みいよいよ大砲も新しくなる。七糎野砲及び山砲だ。口径は7・5センチで、四斤砲と同じく旧式な青銅製だが、砲口から砲弾を装填する先込め式から砲尾から装填する元込め式に進歩している」

神楽「先込め式の場合、砲口から砲尾まで砲弾を押し込めなくてはならない。その点、直接砲尾に弾を装填する元込め式は装填スピードが圧倒的に早い」

深海「日清戦争時の主力野砲だ。さて、師団に配備される野砲が整備されるとともに、より上位の部隊で使われる重砲の配備も始まった」

萩原「重砲ですか。重い砲ってことですか？」

神楽「野砲より大型で威力の大きい大砲と覚えておけばいいよ。ただ野砲のように使い勝手は良くないし、数も多くないので上位部隊に配置して必要に応じて前線に出すって使い方が普通」

深海「日清戦争の頃には九糎臼砲、一五糎臼砲、一二糎加農砲などが配備されていたらしい」

神楽「臼砲というのは砲口に比して砲身が短く高い角度で砲弾を発射する大砲。射程が短く精度も低いけど、威力に比べて大砲そのものの大きさは小柄なのが特徴」

深海「加農砲ってのは野砲の大型ヴァージョンだと思えばいい」

神楽「さらに、この時に各地に要塞が設けられ、要塞砲が設置された」

萩原「要塞砲というのは、これまでの砲ととにかく違うんですか？」
深海「野戦砲というのは部隊とともに移動するから、威力だけじゃなくて使い勝手や動きやすさも求められる。それとは違って要塞砲というのは基本的に要塞に据えつけられていて動かさないから、動きやすさを考えずに巨大に造ることが出来る」

神楽「野戦砲だと口径は100センチ台以下が普通で、大きくても200センチ前後。しかし要塞砲だと200センチ以上が普通」

深海「日露戦争で活躍した二八糶榴弾砲はこの時期に要塞砲として導入されたものだね」

神楽「そして、日清戦争の後、日本陸軍兵器開発者のスーパースタ

ー！ありさか　なりあきら有坂成章閣下が登場する！」

荻原「有坂さん？」

深海「有坂氏は当時の陸軍における銃砲の権威で、三十年式歩兵銃の開発者として知られる。これから後の日本陸軍の制式小銃はどれも三十年式の設計が基礎になっている」

神楽「それ故に日本の小銃は欧米ではアリサカ・ライフルと呼ばれている」

荻原「凄い人なんですな」

深海「そして三十年式歩兵銃と並ぶ有坂氏の功績が口径75ミリの三十一年式速射野砲及び山砲の開発だ」

荻原「速射…ですか」

神楽「その通り。三十一年式は無煙火薬を使用することで装填スピードを大幅に向上させることに成功したの。それまでの黒色火薬だと大量の煤が砲身の中に残るので撃つたびに砲身の中を清掃しなくちゃいけなかった。その点、三十一年式は清掃を省略してすばやく装填できる」

深海「日露戦争はまさに有坂成章の成果で戦った戦争だった。彼の開発した新兵器が日本を勝利に導いたんだ」

神楽「同時に重砲の更新も行われたわ。ドイツのクルップ社から10・5センチ加農砲、12センチ榴弾砲、15センチ榴弾砲が導入された」

荻原「榴弾砲ってなんですか？」

深海「簡単に言えば爆発による破壊力を重視した大砲かな。特に見えない相手を味方部隊の誘導に基づいて攻撃する間接照準射撃を重視している」

神楽「それに対して加農砲は初速や射程を重視している。砲手から直接見える目標を射撃するの。砲弾をより速く撃ちだす砲だから装薬が強力で、同じ口径の榴弾砲に比べて重くなる傾向がある」

深海「まあ、次第に大きな違いはなくなっちゃうんだけどね」

神楽「そして日露戦争が始まると、戦力アップのために様々な新兵器を導入する。それらの兵器は結局、戦争には間に合わなかったけど、その後の陸軍を支える重要な柱になる」

深海「採用された明治38（1905）年にちなんで三八式と呼ばれる各種兵器だね。三八式小銃は特に有名だよな」

神楽「大砲の世界では75ミリ口径の三八式野砲、三八式十糎加農砲、三八式十二糎榴弾砲、三八式十五糎榴弾砲が導入された。これらの兵器の特徴は駐退機を装備していることだ」

荻原「それはどういう仕組みなんですか？」

深海「簡単に言えばバネだね」

神楽「大砲を撃つと反動が大砲自身に返ってくる。三十一年式速射野砲の場合、一発撃つたびに反動で大砲が後ろに下がってしまっただけで再度砲撃するためには元の位置に戻して照準をやりなおさなくてはならないの」

荻原「大変ですね」

深海「そこでだ。砲身と台をがっちり固定せずに砲身が前後に動くようにして、間にバネを仕込むことにした。一発撃つと反動で砲身が後ろに動くが、バネが反動を吸収して台の方は動かない。そしてバネの反発で砲身が元に戻る」

荻原「そのまま続けて撃てるってことですか？」

神楽「そゆこと」

荻原「凄い進歩ですね。ところで三八式のレパトリーの中に山砲がないようですが？」

深海「山砲は少し遅れて明治41（1908）年に採用されている。野砲と同じ75ミリ口径の四一式山砲だ。これは傑作だね」

神楽「後に後継の九四式山砲が導入されたんだけど、用済みになっ

た四一式山砲を歩兵部隊にまわして使わせることにしたんだ。そして好評だね！」

深海「自分の都合で使える大砲があると前線部隊には便利だからね。かくして四一式山砲は各歩兵連隊の歩兵砲隊に配備されて終戦まで活躍することになる。将兵から連隊砲と呼ばれて親しまれた」

神楽「まあ、ここらへんの兵器は大抵、終戦まで現役に残ることになったけど」

深海「さらに旅順戦の教訓から巨大な攻城砲も導入される。四五式二十四糎榴弾砲と四五式十五糎加農砲だ。ちなみに二次大戦最後の激戦地、虎頭要塞にはこの二種の大砲が配備されていたと言われている」

神楽「さて、時代は明治から大正に代わります！」

萩原「時代が変わって新しい大砲が配備されるんですか？」

深海「その通り！と言いたいところだけれど……」

神楽「大正は軍縮の時代だからね。新型兵器の配備は下火になる」

深海「大正期には重砲を中心に近代化がされた。まず大正4（1915）年に四年式十五糎榴弾砲が採用された。これは三八式十五糎榴弾砲が重く巨大で移動が不便だったことを反省して、砲身と放架の2つに分解して輸送できるようにしたものだ」

神楽「ただ丁度、第一次世界大戦の途中で採用してしまったもので、大戦の戦訓を反映することができず全体的に性能不足になってしまった。特に射程の不足が問題」

深海「続いて配備されたのが七年式三十糎榴弾砲だ。これは日露戦争で活躍した二十八糎榴弾砲の後継だね」

神楽「試製四十一糎榴弾砲が虎頭要塞に配備されるまで、陸軍最大の大砲だった」

深海「そして大正期の火砲の最後を飾るのが十四年式十糎加農砲だ。この砲の最大の特徴は日本で始めて自動車牽引に対応した大砲ってことだ」

神楽「それまでは全て馬で牽引する砲だった。日本にも機械化の波

が押し寄せてきたってことだね。まあ十四年式は馬による牽引も考慮して性能は抑えられていたけど」

荻原「凄い進歩ですね。ところで大正期の大砲はこれで終わりですか？」

深海「うん、終わり。一番多い師団野砲の方は手が回らず、射程を伸ばす改良をしてお茶を濁している」

神楽「そして改造三八式野砲は第二次大戦時にも事実上日本の主力野砲として活躍するのであった」

深海「そして、いよいよ昭和期。グンクツの足音が聞こえてくるぜ！」

神楽「昭和期の第一号は八九式十五糎加農砲ね。香港、シンガポール、フィリピンと太平洋戦争の緒戦で各地の戦場に投入され、日本の快進撃を支えた兵器よ。沖縄戦でも活躍した」

荻原「突然、数字がぐっと増えましたね」

深海「昭和期になって命名規則が変わったんだ。それまでは年号の数字を使ってたんだけど、大正が15年で終わってしまった為に番号が重複する可能性が生じたんだ」

神楽「大正3年に採用された兵器と昭和3年に採用された兵器はどちらも三年式になるからね」

深海「そこで重複を避ける為に皇紀を使うことにした」

荻原「皇紀ですか？」

神楽「日本独特の暦法で、初代天皇である神武天皇が即位した年を起源とする暦で、西暦に660年足したものと覚えればいいわ」

深海「ちなみに有名なゼロ戦は正式には零式艦上戦闘機というが、これは西暦1940年、皇紀では2600年に正式採用されたのに由来して命名された」

神楽「つまり八九式十五加は皇紀2589年、つまり1929年に採用された兵器なんだ」

深海「そして大正期に放置された野砲の更新も始まった。昭和になって続々と新野砲が就役するが、日本陸軍の次世代師団野砲につい

て試行錯誤をしているようで、その方針は二転三転する」

神楽「最初に採用されたのが1930年に制式化された九〇式野砲。これはフランスのシュナイダー社は開発した75ミリ野砲M1897を改良したものだ」

荻原「原型が随分古くありませんか？三八式より古いじゃないですか」

深海「それを突かれると辛いが、傑作砲であることは間違いない。日本軍を苦しめたアメリカ軍のM4戦車の主砲だって、実はM1897の改良型なのだ」

荻原「敵味方と同じ大砲を原型とする砲で戦っていたと言うことですか」

神楽「そういうことだね。九〇式野砲は射程、初速ともに三八式を大きく上回っていた。特に初速は日本軍の大砲の中で高初速で、対戦車砲としてもそれなりの威力があったことが特徴だね」

深海「それ故に三式中戦車や一式砲戦車といった戦闘車両の主砲としても使われた。また自動車牽引に対応したゴムタイヤ装備のものもあった」

荻原「ものもあったということは、そうじゃないものもあったんですか？」

神楽「当時の日本の工業力は全てを機械化することはできなかったからね。重砲優先で、数の多い野砲は後回しにされてた。自動車牽引に対応した砲は機動九〇式野砲として区別されていた」

深海「まあ21世紀になるまで自動車化を達成できなかった陸上自衛隊も旧軍のことを笑えないがね」

神楽「そっちの場合は国のやる気の問題でしょ。さて、優れた性能の九〇式野砲だが、1つ不満があった。それは重量だ」

深海「機械化が進んでおらず、馬に頼る場面が多かった陸軍としては重量過多は無視できない問題だった。だから参謀本部を中心に性能を妥協しても軽量な砲を配備すべきだと主張する一派が出てきた」
神楽「一方、現場の砲兵は射程を中心に性能重視の砲を求めている」

深海「軽量砲一派の主張を元に九〇式を軽量化した砲が開発された。それが九五式野砲だ」

神楽「九〇式に比べると射程、初速など性能は全体的に落ちたけど、300キログラム以上の軽量化に成功して改造三八式よりも軽くなった。また砲身の寿命も九〇式に比べ長くなった。使い勝手の良い大砲になったのね」

深海「ただ、結局は射程の方が重要ってことであまり量産されなかった。まあ実際に使用した前線部隊からの評判は悪くなかったみたいだけど」

神楽「その頃、師団野砲について別のアプローチが試みられた。第一次世界大戦で欧州諸国は師団砲兵部隊に野砲だけじゃなくて小型の榴弾砲も配備して、大きな戦果をあげた」

荻原「榴弾砲って破壊力を重視した大砲ですよ」

深海「その通り。榴弾砲を配備して師団砲兵の火力を底上げしようというわけだ。そして師団に配備する為の小型榴弾砲として開発されたのが九一式十糎榴弾砲だ。重量は九〇式野砲より100キログラムほど重い程度だけど、口径は105ミリで野砲より大きく破壊力は2倍近い」

神楽「開発したと言ってもフランスのシュナイダー製のものを基にしたんだけどね。ちなみに九一式榴弾砲は基本的に輓馬牽引砲だけど、九〇式野砲と同じように自動車牽引に対応した機動九一式榴弾砲も並行して開発・配備された」

荻原「九〇式と同じですね」

深海「また山砲も更新された。新型の口径75ミリの九四式山砲が開発されたんだ。これは全体的に性能は四一式を上回っている上に、四一式以上に細かく、つまり小さく軽くまで分解できるという優れたものだ」

神楽「さらに、これまでの山砲はどれも75ミリだけど威力増強を狙って105ミリ口径の山砲が開発された。例によってフランスのシュナイダー製の大型砲を基にした九九式十糎山砲ね」

深海「中国軍から鹵獲したものを参考にして開発した。まあそれほど造られなかったけど」

神楽「そして重砲も次々と新型が導入された。いろいろな変り種もね」

深海「前述の八九式に続いて導入されたのが九〇式二十四糎列車加農だ。これは日本で唯一の列車砲で、最大射程は50キロ。戦艦＜大和＞の主砲をも上回っている旧軍の中で最も射程の長い大砲だ」

荻原「列車砲ってことは列車に載ってるんですか？」

神楽「その通り。鉄道なら馬や自動車だと運べないような大きな大砲を載せることができるからね」

深海「次に導入されたのが陸軍野戦重砲の主力の1つ、九二式十糎加農砲だ。前任の十四年式は自動車牽引に対応していたものの輓馬牽引も考慮していた為に重量を抑えなくてはならなかったのに対して、九二式は自動車牽引専用砲として開発され性能は大きく向上した。例えば射程は3キロ伸びた18キロメートルだ」

神楽「そして九二式の4年後に導入されたのが陸軍野戦重砲のもう1つの主力、九六式十五糎榴弾砲よ。こちらも自動車牽引専用砲として開発され性能は高かった。日中戦争から南方作戦、沖縄戦に至るまで活躍して、九二式加農砲と九六式榴弾砲はアメリカ軍から“ピストル・ピート”と呼ばれて恐れられたの」

荻原「凄いですね」

深海「さて、これらの大型砲は野戦重砲に分類され、師団には属さない独立部隊に配備されていた。しかしながら陸軍は火力強化の為に組織改編を構想していた」

荻原「と、言いますと？」

神楽「当時のドイツ軍やアメリカ軍の師団砲兵は100ミリ級の小型榴弾砲と150ミリ級の中型榴弾砲を混成配備した編制になっていた。日本もそれに倣おうとしたのよ」

深海「具体的に言えば75ミリ級野砲と九一式榴弾砲の混成だったのと、九一式榴弾砲と九六式十五糎榴弾砲の混成に変えようとした

のさ。実際、昭和10年代後半になると生産の重点が野砲から榴弾砲に移されている」

荻原「75ミリと105ミリが105ミリと150ミリになるんですから、凄い強化ですね」

神楽「まあ実現しなかったけどね…」

荻原「なぜですか？」

深海「日中戦争の真っ最中だからね。どんどん師団を増やしていたから、砲兵の改編に手が回らなかった。日中戦争が陸軍の近代化に与えた悪影響は本当に大きいと思う。日中戦争がなければ自動車化だってもっと進んでいたと思うし」

神楽「まあ自業自得だけどね」

深海「ともかく陸軍は決して火力を軽視していたわけでも近代化を怠っていたわけでもないんだ」

神楽「問題は旧式火砲を終戦まで使い続けなくちゃいけなかったことだよ。アメリカは大型砲を何千門って作っているのに、日本は九一式榴弾砲がやっと1200門だもん」

深海「全ては貧乏が悪いんや」

荻原「まあまあ」

神楽「次へ進みましょう。1936年には十五糎榴弾砲以外にも重砲が導入されているわ。まずは九六式十五糎加農砲！」

深海「これは要塞砲、もしくは八九式十五糎加農砲を後方から支援する重砲として開発された。最大射程は26キロメートルで、列車加農には及ばないものの陸軍随一の長射程砲だ」

神楽「そして同じ年、四五式二四糎榴弾砲の後継として九六式二四糎榴弾砲。四五式が射撃の際に地面を掘って埋め込んで大砲を固定しなくてはいけなかったのに対して、九六式はその必要がないので射撃の準備に必要な時間は四五式の半分以下になったのが特徴」

深海「この2つの巨砲はコレヒドール要塞攻略戦に投入された」

神楽「さらに2年後の1938年には九八式臼砲が採用された」

荻原「臼砲って短い砲身から大きな弾を発射する大砲でしたっけ？」

深海「臼砲の定義はその通りだけど、この九八式臼砲は特殊だ。この砲の最大の特徴は砲身がないこと」

神楽「砲弾を発射台に被せて、それで火薬を爆発させて砲弾を飛ばすの。射程は短く、命中精度も低いけど、大威力の割には移動が簡単」

深海「硫黄島の戦いで使用されたことで有名だね。『硫黄島からの手紙』にも登場したね」

神楽「とりあえず噴進砲を除いて史実の陸軍火砲は紹介できたね」

深海「次からは帝國世界の設定の紹介だ」

―帝國世界編―

神楽「史実と違って連合国側に立って参戦し、枢軸国側のソ連と主に戦った日本。その日本の火砲は史実とはなにが違うか？最大の違いはアメリカからレンドリースにより多数の兵器を入手したことだろうね」

深海「帝國世界の歴史を見ると、ソ連が極東侵攻を開始したときに日本はボロ負けしているけど、このときに多くの火砲を失ってそうだね」

神楽「退却するときには重くて運びづらい重装備は取り残されがちだからね。その穴埋めをレンドリースでしたわけ。また欧州派遣部隊も当初は日本から直接、装備を持って行ったけど、兵站の維持が難しくなってるね。大戦中盤から人員だけ派遣して現地でレンドリース兵器を受け取りという形になってる」

荻原「それでどんな兵器を受け取ったんですか？」

神楽「まず九四式山砲の代替として75ミリ榴弾砲M1A1ね。ジープで牽引することが出来る小型火砲よ」

深海「九四式に比べ100キログラムほど重い650キログラムで、射程は400メートル長い8700メートルか」

神楽「まあ師団砲兵というよりも歩兵連隊の連隊砲隊に配備されて、

107ミリ重迫撃砲とともに連隊砲の代替として使われることの方が多かったみたいだけど」

荻原「なるほど」

神楽「次は105ミリ榴弾砲M2A1ね。これは九一式榴弾砲及び野砲の代替。スペック的には九一式に近いけど、500キログラムほど重い2300キログラム、代わりに射程は1キロメートルほど長い11160メートル」

荻原「日本の砲より高性能だけど、重いんですね」

深海「機械化が進んでいない日本軍だと移動の利便性の為にどうしても軽量化を優先するからね。その点、アメリカは完全に自動車化しているから。これらの砲も全て自動車牽引前提だ」

神楽「ちゃんと牽引用自動車込みのレンドリースだから日本軍大助かりだね」

深海「ちなみにM2A1は史実でも大戦後に自衛隊に貸与され、FH-70が配備される80年代まで主力野砲だった。58式榴弾砲として国産化までしてる」

神楽「次からは野戦重砲よ。155ミリ榴弾砲M1は九六式一五糎榴弾砲や九二式十糎加農砲の代替。性能は九六式榴弾砲に近いけど例によって…」

荻原「重量がかさむ代わりに射程が長いんですね」

深海「うん。重量は1t近く重い5700キログラムだけど、射程は2キロ以上長い14キロだ。ちなみに自衛隊にも配備されM2A1と同じように58式榴弾砲として国産化もされている」

神楽「さらに日本軍の重砲クラスの大砲も貸与された。まず155ミリ加農砲M2。最大射程23キロに達するカノン砲」

荻原「日本の九六式と比較すると…珍しく射程で勝っていますね」

深海「まあ九六式の方は機動性なんて捨ててるからな。ちなみに自衛隊にも配備され、長きに渡って陸自火砲中最大射程を誇っていた」
神楽「そして203ミリ榴弾砲M1。それにしてもことあたりの口径の砲は当時の日本だとともに動かせないようなのばかりだけ

ど、アメリカはしっかり車両牽引しているんだね…」

深海「すべて貧乏が悪いんや…ちなみにこの203ミリ榴弾砲の末裔は自衛隊で今でも現役だ」

神楽「203ミリ自走榴弾砲だね。日韓大戦でも登場した」

荻原「自走砲ですか」

深海「そう。これまでの大砲は全て馬や牽引車両で引っ張る牽引砲だ。それに対して第二次大戦の頃になると戦車のようなキャタピラの車体到大砲を載せて、自走する大砲が本格的に投入されはじめたんだ」

神楽「そして日本陸軍も本格的な自走砲の開発に乗り出した。最初に開発が始まったのがホイ車こと二式砲戦車。これは一式中戦車の車体に四一式山砲を改良した主砲を載せたもので、戦車部隊に随伴して敵の対戦車砲陣地を制圧することを目的としていた。だから自走砲とは少し趣旨が違う兵器と言えるかもしれない」

深海「まあ対戦車能力が低くて、史実では一式砲戦車にとって替わられたわけだが」

荻原「砲戦車ですか？」

神楽「同じ大砲を載せた車でも、使う兵科によって呼称が変わるんだよ。砲兵部隊なら自走砲、戦車部隊なら砲戦車。ホイは戦車の支援用だから砲戦車」

深海「そして砲兵部隊向けの自走砲の開発も始まる。ホニ車がそれで、九七式中戦車の車体に九〇式75ミリ野砲を載せたものと、九一式十糎榴弾砲を載せたものが開発されて、両者が一式自走砲として採用された。最初に開発された二式砲戦車より制式化はこちらが早く、日本初の自走砲となった」

神楽「史実では九〇式野砲が日本陸軍の大砲の中では比較的对戦車攻撃に適していた点を買われて、75ミリ砲型の一式自走砲も戦車駆逐車的な使われ方をした。戦車部隊にも一式砲戦車として配備された」

深海「史実では他にもいろいろと作っているけど、後は割愛」

神楽「史実では連合軍の優勢な戦車に対抗する為に、対戦車能力に主眼を置いた自走砲の開発が進められるんだけど、そこらへんは帝國世界ではアメリカから戦車駆逐車を導入して埋め合わせしているからね。普通の自走砲も貸与されてる」

深海「M7プリーストだね。M3中戦車の車体に105ミリ榴弾砲M2を装備した自走砲だ」

荻原「日本の一式自走砲と同じなんですネ」

深海「ただ同じ中戦車の車体でも、アメリカの軽戦車以下の大きさの九七式中戦車とM3中戦車じゃ大きさがだいぶ違うからね。搭載できる砲弾の数も作業効率も段違いだ」

神楽「こうした貸与兵器で対ソ戦緒戦で失った戦力の回復を図るとともに、急造兵器の開発を始めた」

深海「噴進砲だね」

荻原「なんですか？それは」

深海「簡単に言えばロケット砲だ。あまり高度な技術を使わず、簡単に量産できる上に、ロケットで自ら飛んでいくから、大砲のような大掛かりな発射装置がいらず威力の割には移動が簡単。そういう長所がある」

神楽「その代わり、射程が短く命中精度も低い。大戦中に導入されたロケット砲はソ連のカチューシャが有名ね」

深海「日本軍も四式二〇糎噴進砲及び四〇糎噴進砲が開発されて、硫黄島の戦いなどで活躍した」

神楽「帝國世界においても重砲の不足を補う火砲として重用されたよ」

荻原「なるほど」

神楽「かくして大日本帝國は第二次世界大戦を切り抜けたわけだけど、大戦後の話は次回にまわすとして、これから劇中の陸軍に配備された大砲を紹介するとうしよろかしら」

―牽引砲―

神楽「まずは牽引砲よ」

荻原「馬や自動車で引っ張る砲ですよ」

深海「その通り。現在は専用の牽引車両で引っ張るのが普通だ」

神楽「自走砲に比べて能力は劣るけど、安価なのが特徴かな」

一六式一〇糶半山砲

口径…14口径105mm

重量…1100kg

射程…9500m

九四式七糶半山砲や九九式一〇糶半山砲の後継として開発された小型榴弾砲で、自動車牽引に対応した最初の山砲である。また自動車による牽引を前提としているが分解しての駄載や輓馬による牽引も可能であり自動車化していない部隊にも対応している。

山岳地帯で活動する部隊や空挺部隊、海軍陸戦隊などで使用され、『空挺砲』として親しまれた。ただ駄載や輓馬牽引に対応しているとはいえ従来までの山砲に比べると重量がある為、大陸で活動する多くの部隊では旧式の山砲が継続して使用された。一六式に完全に更新されるのは1962年の大陸大撤退以降である。

軽量なためにヘリコプターやジープクラスの車輛での輸送が可能である。現在では後継の三六式と置き換えられているが、一部の丙師団（戦時特設師団）では野砲として配備され、平時は保管状態にある。

神楽「モデルはオート・メラーラMod56榴弾砲ね」

深海「他に特に言うことはないかな」

三六式一〇糶榴弾砲

最大射程…17 km（通常弾）／22 km（長射程弾）

口径…30口径105ミリ

重量…2000 kg

1960年代、ソ連はD30型122ミリ榴弾砲を開発した。その射程は西側の同クラスの榴弾砲を凌駕する15 kmであった。

当時の日本陸軍の主力野砲は射程11 kmのア式一〇糶榴弾砲（アメリカ製のM101榴弾砲）や射程10 kmの機動九一式一〇糶榴弾砲でD30には対抗できず、新型榴弾砲の開発が迫られた。そして完成したのが三六式一〇糶榴弾砲である。

しかしながら陸軍は師団野砲を155ミリ榴弾砲に統一することを決定した。その為、本砲は新鋭主力野砲として日の目を見ることはなくなってしまった。だが155ミリ榴弾砲に比べ軽量で小型トラックや中型ヘリコプターで輸送可能なことが評価され、『空挺砲』の後継として海軍陸戦隊や空挺部隊に配備されている。

萩原「これは劇中にも登場した大砲ですね」

神楽「大連に上陸した105ミリ榴弾砲ってのがコレだね」

深海「モデルはイギリスの105ミリ榴弾砲L118だね。九一式の後継として師団野砲にするつもりだったと」

萩原「旧軍は師団砲兵を九一式榴弾砲と九六式榴弾砲の混成編制にするつもりだったんですね」

神楽「戦後にそれが実現したわけだけど、さらに15センチ榴弾砲に師団砲兵を統一した」

深海「史実の自衛隊と同じだね」

三九式一五糎榴弾砲

最大射程…22 km (通常弾) 30 km (長射程弾)

口径…42口径155ミリ

重量…7200 kg

陸軍が第二次大戦前後に採用した各種師団野砲の後継として配備した牽引式榴弾砲である。1960年に開発が始まり1979年に正式採用された。

陸軍の標準的火砲であり、乙師団砲兵連隊に配備されている。三式大型六輪自動車貨車を改造した牽引車によって移動し、砲兵陣地を構築して射撃を行なう。また大型ヘリコプターで空中輸送することもあり、自走砲に比べると戦略機動能力は高い。

しかし近年の対砲兵レーダーシステムの進歩や射程の長大化により旧式化しつつあり、52口径に砲身を伸ばした長砲身型やトラックに車載化した試製特殊機動砲など後継の砲が模索されている。

神楽「そして、現陸軍主力火砲です」

深海「陸自のFH-70とは違うみたいだね」

神楽「いいところに気がついたね。三九式はFH-70よりもアメリカ軍のM198榴弾砲に近い」

荻原「なにが違うんですか？」

深海「FH-70は近距離移動用の小型エンジンがついていて、ある程度自走できる上に、装填補助装置が備えられていて素早い再装填が可能なのが特徴だ」

神楽「三九式はそうした装備がない。代わりに軽量かつ頑丈だ」

―自走砲―

深海「次は自走砲か」

萩原「ようするに車の上に乗ってて自分で動ける大砲ってことですよね」

神楽「その通り。最大の長所は素早い陣地転換ができること。牽引砲だと牽引車から外して陣地を作らなくちゃいけないけど、自走砲なら射撃位置にそのままつけるだけ」

深海「撤収する時にも同じことが言えるね。特に対砲兵レーダーが発達した近年では自走できるってことは圧倒的なアドバンテージになれるんだよ」

試製特殊機動砲TK-X／トキ

兵装…52口径155ミリ榴弾砲

牽引砲は自走砲に比べ安価かつ軽量ながら、陣地転換に時間を要するという欠点があった。対砲兵レーダーや通信システムの発達した現代の戦場において、それは致命的なものであった。

そこで三九式榴弾砲を長砲身化して新型八輪自動貨車に搭載して簡易な自走砲を開発した。射撃時には反動を抑えるために脚を出して地面に固定せねばならず自走砲のように迅速な陣地転換はできないが、牽引砲に比べれば格段に早い。また装甲が施されておらず防御力は低い。

現在、第五師団で試験的に運用中である

萩原「これは美香さんが劇中で言及していた奴ですね」

神楽「ええ。今のところ本編未登場ね」

深海「カエサル自走砲もどきか。これからのトレンドになるかもしれないタイプの自走砲だ」

萩原「牽引砲と自走砲の中間的な感じですか」

三一式一五糶自走砲ホタ

重量…26 t

射程…19 km

兵装…30口径155ミリ榴弾砲／12.7ミリ機関銃

帝国陸軍が七式一〇糶榴弾砲並びに一〇式一五糶榴弾砲の後継として開発された自走榴弾砲である。開発は1950年代中ごろに開発が始まったが、支那内戦の影響もあって開発が長期化し、1971年によりやく制式化された。

三一式一五糶自走砲は、当時は珍しかった自動装填装置を有し毎分6発射撃することができするなど採用当時は十分な能力を持っていたが、19 kmという射程距離は現在で完全に時代遅れなものとなっていた。

本来は一〇式の後継として開発されたが、陸軍は師団砲兵の野砲を155ミリで統一する方針にした為、七式も更新して機械化師団や戦車師団の砲兵部隊の主力として配備されているが、今後、五七式に更新されてゆくだろう。

神楽「そして現主力自走砲」

深海「自衛隊の75式自走りゅう弾砲の帝國バージョンか」

萩原「史実より早く生まれたってことですか」

五七式一五糶自走砲ホレ

全長…11.3 m

重量…45 t

最大射程…30 km（通常弾）／40 km（長射程弾）
兵装…52口径155ミリ榴弾砲／12.7ミリ機関銃

帝国陸軍の次世代自走砲。三一式一五糧自走砲の後継車両として機械化師団や機甲師団の砲兵部隊に配備される。

車体は四八式歩兵戦闘車の車体を延長したものを使用し、その上に主砲の長砲身52口径155ミリ榴弾砲を装備している。同砲は通常弾で最大射程30 kmを誇り、長射程弾では40 kmに達する。射撃統制装置は高度に自動化されていて、データリンクに接続することで指揮所から直接、照準・射撃を行なうことができる。また自動装填装置を搭載しているので連続射撃が可能であり、複数の目標に同時に着弾させるTOT射撃も行なえる。

1997年より配備を開始し、2000年11月時点では独立機動砲兵第一連隊への配備を完了し、戦車第一師団機動砲兵第一連隊への配備が始まった。

深海「そして99式自走りゅう弾砲の帝國バージョンですか」

神楽「その通り。長砲身の主砲を装備して射程が向上している他、高度な射撃統制システムを搭載しているのが特徴」

荻原「データリンクですか」

神楽「それまでは観測手が目視確認した目標を口頭による報告に基づいて照準をしていたわけだけど、これからはデータを直接受け取って迅速かつ正確な射撃ができるようになる」

荻原「凄いですね」

ア式二〇糧自走砲

兵装…37口径203ミリ榴弾砲

射程…24 km（通常弾）／30 km（ロケット推進弾）

方面軍直轄の野戦重砲連隊に配備される自走砲。アメリカ陸軍のM110A2自走砲をライセンス生産したもの。

1960年代、日本陸軍は旧式化した各種野戦重砲の後継砲としてM110自走砲をアメリカから導入した。M110は、大戦中に開発されて日本にも貸与された203ミリ榴弾砲M2を自走化したものである。しかし、その射程は17キロ弱に過ぎず、70年代後半には技術の進歩により旧式化した。

そこで日本陸軍は、砲身を伸ばしてマズルブレーキを装着して射程を向上させた改良型のM110A2の導入を決定し、1983年より国内でライセンス生産が始まった。

2000年現在も陸軍最大の火炮として、MLRSとともに野戦重砲連隊の主力を担っている。

萩原「これが前に言っていた戦時中の203ミリ榴弾砲の末裔ですか？」

神楽「そう。いろいろと改良が加えられているけどね」

深海「ちなみに自衛隊にも配備されている。そろそろ退役時期だと思うけど、後継どうするのかな？」

神楽「純減じゃない？大砲も400まで減らすんでしょ」

深海「そうでしたorz」

登場兵器紹介 砲兵の兵器編2

―日本陸軍砲兵史―

―帝國の戦後編―

神楽「さて第二次世界大戦が終わり、東西冷戦の時代が始まった。対ソ再戦に備えて陸軍は砲兵の近代化を急ぐ」

深海「でも、設定では中国の内戦に手を突っ込んで泥沼化するんだろ？」

神楽「その通り。その為に例によって近代化が遅れるのだ。満州配備の軍はともなく、内地の部隊なんぞ寂しいものだったというのは、機甲兵の兵器編で話した通りだ。それでも近代化は進められた」

荻原「どんな風にですか？」

神楽「まずは戦前に計画していた師団砲兵の改編の実行だ」

荻原「10センチ榴弾砲と15センチ榴弾砲の混成にするって奴ですな」

神楽「その通り。10センチ榴弾砲の方は機動九一式榴弾砲もしくは105ミリ榴弾砲M2A1を充て、15センチ榴弾砲には155ミリ榴弾砲M1を充てることになった」

深海「九六式一五糎榴弾砲はお払い箱か。まあアメリカの支援を当てるにするなら独自規格じゃ拙いか」

神楽「日本の15センチ級火砲の口径は149ミリだからね。155ミリのアメリカ規格に合わせて、各種の149ミリ口径砲は前線の主力部隊から排除されて、内地の二線級部隊にまわされた。例外は射程の長い九六式一五糎加農砲くらいかな。樺太や台湾の澎湖諸島に要塞砲として長く配備された。見にいきたかったんだけどなあ」

深海「そういや“世紀末の帝國”冒頭で大砲見に台湾観光していたな。それは目当てか」

神楽「それだけじゃないよ。帝國世界の澎湖諸島には九六式24セ

ンチ榴弾砲とかいろいろな大砲が…」

荻原「うれしそうですね」

深海「ちなみに史実の台湾軍もアメリカから貸与された24センチ榴弾砲を配備していたりする」

神楽「気を取り直して。陸軍はさらに砲兵の組織改編を進める。FDCやGS大隊の導入ね」

深海「FDCは火力指揮所の事だ。大砲の射程が伸び、砲兵射撃は間接射撃が主流になった」

荻原「友軍部隊の誘導で大砲から直接見えない相手を攻撃するってヤツですね」

深海「その通りだ。誘導の為に砲兵隊は観測班を前線に派遣して照準を行っていた。それまでの日本軍砲兵隊は直属の観測班の指示によって射撃を行っていたが、このシステムには大きな弱点があった」
神楽「簡単に言えば直属の観測班が見ている目標しか攻撃できないってこと。例えばある砲兵隊の観測班が重大な目標を発見して、そこに砲兵火力を集中したくても使えるのは自分の砲兵隊だけ。別の砲兵隊が近くに居ても、その観測班が目標を捉えていなければ攻撃に加わることができない」

荻原「それは不便ですね」

深海「そこでアメリカ軍が導入したのがFDCだ。火力指揮所観測班の情報は砲兵部隊ではなく、その上のFDCに送られる。各地の観測班から送られる情報を基にFDCは射撃計画を建て、諸元を計算して隷下の砲兵部隊に指示を出すんだ」

神楽「FDCの優れたところは、従来の方式に比べて柔軟に様々な状況に対応できること。それぞれ別の目標を攻撃している各砲兵部隊の射撃を、特定の目標に迅速に集中できる。大砲の数が同じでも実戦における火力を倍増することができるの」

荻原「すごいですね。GS大隊の方はなんですか？」

深海「GSというのはジェネラル・サポート。つまり全般支援のことだ。大戦中のアメリカ軍の三単位歩兵師団を例にすると、砲兵連隊は4個大隊編制になっている。3個大隊がDS大隊で、1個大隊がGS大隊だ」

荻原「また新しい単語が出てきましたね。DS…」

神楽「DSはディレクト・サポート。つまり直接支援のことね。DS大隊は師団の基幹部隊、歩兵師団なら歩兵連隊に1個大隊ずつ付けられて、その基幹部隊の作戦を支援するのが任務。配属連隊と対峙している敵を攻撃したり」

深海「一方、GS大隊は特定の基幹部隊の支援ではなく、より幅広い支援を行う。前線部隊を攻撃する敵の砲兵部隊に対砲兵戦を仕掛けたり、敵前線の後方を攻撃して増援部隊や兵站部隊の活動を阻害したり、重要正面に配置されたDS大隊を増強することもありうる」

神楽「DS大隊とGS大隊には、それぞれ異なる任務が与えられていたわけ。そして師団砲兵には基幹部隊と同数のDS大隊、そしてそれに加えて1個大隊のGS大隊が配置される」

荻原「だから三単位師団だと、DS大隊が3個とGS大隊が1個、それで4個大隊になるんですね」

神楽「なおアメリカ軍では任務の違いから、DS大隊には機動力の高い105ミリ榴弾砲を、GS大隊には射程が長く大威力の155ミリ榴弾砲を配置していた」

深海「一方、旧日本陸軍の典型的な三単位師団の師団砲兵は3個大隊編制で、どの大隊も軽量級の75ミリ野砲もしくは105ミリ榴弾砲を装備していた」

荻原「つまりGS大隊を欠いていたと？　そういえば日本軍もアメリカ軍みたいに105ミリ榴弾砲と155ミリ榴弾砲の混成にするつもりだったんですね」

深海「それがGS大隊の創設を意味するのかは分からない。ともかくアメリカ軍はFDCとGS大隊の存在によって、柔軟かつ効率的な砲兵戦を行うことができたんだ」

神楽「日本軍とアメリカ軍の火力の違いは単純に数の問題だけじゃなくて、こういった組織の違いに拠るところも大きい」

荻原「劇中の日本軍もそうした組織編制を導入したんですね」

神楽「組織改編に並行して器材の近代化も続く。まず重砲不足を補う為に大戦末期に噴進弾ロケットを実用化したわけだけど、戦後も研究が続けられた」

深海「ロケット弾の量産性と機動性は確かに魅力的だからな」

神楽「重砲は相変わらず不足していたからね。だから陸軍のロケット開発は主に野戦で使う重火砲の代用兵器として開発が進行した。それで使い勝手のいい固形燃料型ロケットを中心。ここから余談……」

神楽「その頃、海軍は中国内戦の泥沼に嵌りこんだ陸軍を尻目に核兵器開発の主導権を握った。そして戦略兵器としてロケット開発を開始したの。重たい核弾頭を運ぶ為に大推力の液体燃料型ロケットを中心にして……」

深海「なんか嫌な予感が……」

神楽「かくして帝國世界における日本は宇宙開発は陸軍、東京帝國大学航空宇宙研究所、文部省ラインと海軍、商工省科学技術院、帝國宇宙開発事業団ラインの二重体制が……」

深海「なんでそういうところは史実と同じ道を辿るんだよ……」

神楽「ともかくロケット開発が進められた。開発は2つの方向性に分かれていた。1つはロケット兵器の軽便さを高める方向。主に自走化。まずは既存の二〇糎噴進砲や四〇糎噴進砲の自走化が行われた。トラックやハーフトラックの荷台に発射機を装着した車両が開発された」

深海「まあ難しいことではないだろうね」

神楽「そして決定版が登場する。新型の九式一三糎噴進弾が開発され、それを発射するための自走発射機も同時に正式された。チュー

ブ状の発射機を24本束ねてトラックに搭載したもので、愛称は“ポンプン砲”：」

深海「東宝特撮によく出てくるアレか」

神楽「九式噴進砲による独立噴進砲大隊が編制され、主に満州に配備された」

萩原「それで、もう1つの方向性ってのは？」

神楽「長射程化よ。ロケットを大型化して装薬を増やし、飛ぶ距離を増やすの」

深海「ロケット弾の利点である生産性、軽便性をかなぐり捨てることになるが、それでも長射程の重砲に比べれば軽いか」

神楽「というわけで四十糎噴進砲の長さを伸ばして射程を10キロ超まで増やしたロケット砲が開発された。八式四十糎噴進砲よ。だけど、射程が伸びる度に精度の低さの問題が大きくなった」

深海「まあ当然だな」

神楽「というわけで、2つの解決策が考えられた。1つは誘導装置を搭載してミサイル化。それは後で触れるとして、もう1つは弾頭の大威力化」

深海「それってつまり」

神楽「当たらなくても至近弾で吹き飛ばせるようにすればいい：核弾頭を搭載するのさ。というわけで1952年に核弾頭を装備する一二式六十糎噴進砲が開発されたが、射程は精々10キロ超程度であまり実用的とは言えなかった」

深海「太くなった割には射程が伸びないなあ。ペイロードに推力喰われたのか？」

神楽「そんなところ。というわけで、こちらの本命はアメリカからの貸与兵器になる。1950年代後半に貸与されたMGR-1オネスト・ジョンよ」

深海「『空の大怪獣ラドン』とかに出てたロケット弾だな。当時は在日米軍に配備されることになって大騒ぎになっていたらしい」

神楽「手ごろな核ミサイルとしてアメリカでも重用されたそうな。」

通常弾頭もあるし」

荻原「なんか凄い話になってきましたね」

深海「当時は西も東も核兵器狂いだからな。作者は祖父母宅で1960年代の百科事典を見る機会があったんだが、それによれば当時のアメリカ海軍の火力の60%は核兵器だったそうな」

神楽「話は逸れるけど、戦闘機については対地攻撃能力を重視した戦闘爆撃機と爆撃機を迎え撃つ迎撃戦闘機に大別されるという記述があったそうよ。アメリカ空軍がベトナムで苦戦した原因がよく分かるよね」

深海「ともかく陸軍も戦術核兵器を導入し始めたわけだな」

神楽「そして、1961年にはもう1つの対応策も実現する」

荻原「ミサイル化ですね」

神楽「その通り。二一式誘導噴進砲<菊花>が制式化された。ちなみに陸軍最初のミサイルよ」

深海「どんな性能なんだい？」

神楽「最大射程はおよそ100キロ。核弾頭と通常弾頭を装備可能で、個体燃料ロケットで推進する。誘導は慣性誘導」

荻原「慣性誘導？」

深海「簡単に言えば加速度から速力を算出して、速度と経過時間からどれだけの距離を進んだからを算出する装置だ」

神楽「それで目標の上空に達したら爆発するようにセットするわけ」

神楽「普通の大砲の近代化も並行して行われている。こちら自走化」

深海「前回、七式一〇糶自走砲と一〇式一五糶自走砲の存在が明らかにされていたね」

神楽「ええ。それらは五式中戦車の車体を利用した自走砲なの。まず105ミリ榴弾砲を装備する七式自走砲が開発された。砲のスペックは一式十糶自走砲と大きくは変わらないけど、チハを基礎とす

る一式と比べて車体が大きくなったから作業性と搭載できる砲弾の数が向上している」

深海「一〇式は同じ車体に155ミリ榴弾砲を装備したものか」

神楽「ええ。どちら装甲に覆われた密封式の戦闘室を持ち、ケースメイト式に主砲が装備されている。ちなみに一〇式の方には姉妹版として九二式十糎加農砲を装備する一〇式十糎自走砲も開発された」

深海「射程なら加農の方が長いだろうからね」

神楽「そして一番の変り種、一三式砲戦車が登場する」

荻原「砲戦車ということは機甲科の兵器なんですよ」

神楽「ええ。これは旧式になった九七式中戦車や一式中戦車の車体に、やはり旧式の三八式十五糎榴弾砲や四年式十五糎榴弾砲を搭載したもの」

深海「史実の四式自走砲みたいだな」

神楽「この砲戦車は中国内戦において市街地戦で使う為に開発された。建物に籠った敵を相当する為に建物ごと吹き飛ばすの」

荻原「世紀末の帝国の第3部その4に出てきた“三種の神器”の一つですね」

神楽「かくして60年代に進むわけだけど、火砲の面では特に進歩はないね。精々、前回紹介した203ミリ自走榴弾砲の配備が始まるくらい」

深海「核とミサイルの時代だからな。そっち方面が下火になるのは致し方ない」

神楽「そして70年代。この頃になると火砲の刷新が始まる」

深海「その1で出ていたのを上げると…三一式十五糎自走砲、三六式十糎榴弾砲、三九式十五糎榴弾砲。確かに一気に更新が進められたな」

神楽「そして、詳しくは後に譲るけど、噴進砲も更新が行われた。オネスト・ジョンの後継として三〇式四〇糎噴進砲が、九式噴進砲

の後継として三八式自走一三糎噴進砲が、＜菊花＞の後継として＜君影＞ミサイルが導入された」

深海「凄い変わりようだな」

神楽「ベトナム戦争を経て再び通常戦力の必要性が見直されるようになったからね。ただ70年代は石油危機やらニクソンショックやらデタントムードやらで、これらの兵器の更新のスピードは遅かった。本格的な陸軍の近代化は80年代の中曽根軍拡を待たなくちゃならない」

荻原「中曽根って中曽根首相のことですか」

深海「帝國世界は史実を辿っている部分もあるからね。自衛隊も80年代に随分、強化された。その時に導入された兵器が退役時期に入って、今は大変なことになっているけどorz」

神楽「砲兵隊にとってより重要なのは編制が変わったこと」

荻原「師団砲兵が15センチ榴弾砲に統一されたんですって？」

神楽「その通り。よく覚えていたね」

深海「それも自衛隊と同じだな。同じ榴弾砲でも10センチと15センチじゃ威力が段違いだからな」

神楽「装備を揃えればDS大隊とGS大隊の枠に縛られずに柔軟に作戦ができるしね。重量増は牽引車輛の高性能化と長射程化である程度の相殺できるし」

深海「自走砲なら機動力に大きな差はないし」

荻原「なるほど」

深海「そして80年代、軍拡の季節か」

神楽「まあ、砲兵に関しては新装備は少ないけど。まず203ミリ自走榴弾砲が射程伸ばした新型に更新された。そして四八式地对艦誘導弾が新時代の沿岸砲兵として導入された」

深海「四八式というのは88式地对艦ミサイルの帝國バージョンか」
神楽「それと軍拡の一環として、軍直轄の独立野戦重砲連隊に配備

されていた一三糎噴進砲が増強されて、各師団砲兵に配属された」

深海「各師団にロケット砲が羨ましいかぎりだ」

神楽「そして目玉は80年代末に導入されたMLRSだ」

荻原「MLRS？日韓大戦にも出てきましたっけ」

深海「多連装ロケットシステムだ。アメリカ軍が圧倒的なソ連の砲兵部隊を制圧するために開発したロケット砲の決定版さ。自衛隊も採用している」

神楽「湾岸戦争ではイラク軍相手に威力を発揮している」

荻原「そして90年代ですね」

神楽「90年代も新装備は少ない。MLRS用に新型ミサイルが導入されたくらい」

深海「ATACMSのことか？」

神楽「ええ。そして1997年に三一式自走砲の後継として五七式自走砲を導入したというのは前回、紹介したとおり」

深海「それに伴って砲兵のデジタル化も進んだわけか」

神楽「そういうこと」

荻原「そして舞台となった2000年になった」

―噴進砲・ミサイル―

神楽「というわけで、今さら解説はいらないよね」

深海「はいはい」

三〇式自走四〇糎噴進砲

兵装…連装400ミリロケット弾発射機

射程…30km（高性能榴弾・クラスター弾）、50km（長射程弾・核弾頭弾）

弾頭…高性能榴弾、クラスター弾、核弾頭

オネスト・ジョンの後継として導入されたロケット兵器。二六式装甲兵車を改造した発射機に各種ロケット兵器が搭載可能である。

通常兵器としては限定的な能力しか持たないオネスト・ジョンに対して柔軟な作戦行動が可能なのが特徴で、方面軍直轄の野戦重砲兵連隊に配備された。

近年、後継としてMLRSの配備が始まり、退役しつつある。

深海「自衛隊の67式30型ロケット弾みたいなものか」

神楽「またマイナーな装備をあげるね」

荻原「“オネスト・ジョンより柔軟な作戦行動”ってどういう意味ですか？」

神楽「通常弾頭のバリエーションが豊富だからね。特にクラスター弾の存在が重要」

深海「クラスター爆弾は、集束爆弾とも呼ぶが、幾つも小型爆弾を大量に搭載して目標の上空でばら撒く特殊爆弾だ」

荻原「おっかないですね」

神楽「小型爆弾一つ一つの威力は小さいけど、一度に広範囲の敵の攻撃できるのが特徴。命中精度が低いロケット弾にはもってこいだね」

三五式地对地誘導弾<君影>

射程…200km

弾頭…核弾頭、クラスター弾、高性能榴弾

日本陸軍が<菊花>ミサイルの後継として配備した短距離弾道弾。前線部隊に配備され、敵前線部隊後方の兵站拠点を主な攻撃目標と

している戦術兵器である。

個体燃料ロケットで推進し、牽引式の移動可能な発射機に装填されるので高い機動性、柔軟性を有している。

近年、後継としてMLRSに装填可能なATACMS戦術ミサイルの配備が始まり、退役しつつある。

深海「イメージ的には米軍のランス弾道ミサイルか？」

神楽「そんなところかな。ちなみに中距離以上の弾道ミサイルは空軍の管轄になります」

萩原「また核弾頭ですか」

三八式自走十三糎噴進砲

兵装…36連装130ミリロケット弾発射機

射程…18km（三八式噴進弾）、26km（四六式噴進弾）、32km（五八式噴進弾）

九式噴進砲の後継として配備された多連装ロケット砲。韓国陸軍との共同開発で、1輦あたりの装填数が増加し、射程が伸びた専用の新型ロケット弾も配備された。

日本陸軍では当初は方面軍直轄の独立噴進砲部隊に配備されていたが、中曽根軍拡の一環として各師団に配備されることになった。砲兵連隊の噴進砲大隊に24輦が配備されている。

搭載するロケット弾の性能向上も続けられ、現在は射程が30km以上の五八式の配備が始められた。

神楽「ちなみにモデルは韓国陸軍のトラック搭載型ロケット砲だそうだ」

深海「自衛隊だと近いのは75式多連装ロケット砲だね。キャタピ

ラ式の75式より量産性は良さそうだけど、トラック搭載型だから路外での機動性が問題だね」

神楽「でも全師団砲兵に配備済みなんだぜ」

深海「それは素直にうらやましい」

四八式地对艦誘導弾＜撫子^{なでしこ}＞

射程…200km

新時代の沿岸砲兵として開発された対艦ミサイルシステムで、海軍の開発した三九式空対艦誘導弾＜八手＞のバリエーションの1つである。

四八式ミサイルシステムは沿岸レーダー、レーダーと指揮統制装置を結ぶ中継器、射撃・指揮統制装置、発射機などから成り、全て車載化されている。また四八式誘導弾は地形追従飛行能力を持ち、沿岸レーダーの捉えた目標を内陸部から攻撃することが可能である。四八式の運用の為に新たに沿岸砲兵連隊が編制され、各地の方面軍直轄部隊として配置されている。

深海「もう88式地对艦ミサイルだね」

荻原「日韓大戦でも登場しましたよね。ところで地形追従飛行ってなんですか？」

神楽「簡単に言えば地形に沿って這うように飛ぶ能力かな。当然のことだけど地上は山あり谷ありで障害物だらけ。だけど、そうした障害物を避けて高空を飛ぶとすぐに相手のレーダーに捕まってしまう」

深海「そこで考案されたのが地形追従飛行だ。超低空を飛んで、障害物を避けながらジグザグな針路で進んだり、地形の起伏にあわせて高度を上下させて地面と常に一定の距離を保って飛行したり」

神楽「そうやってレーダー探知を避けるの。最近の巡航ミサイルや攻撃機には必須の能力だけど、普通は洋上を飛行する対艦ミサイルだと四八式（史実における88式）以外には例がないよね」

MLRS

兵装…12連装227ミリロケット弾発射機

射程…32km（M26ロケット弾）、50（＜桔梗＞ミサイル）、165km（ATACMS戦術ミサイルblock1）

アメリカがNATO各国とともに開発したロケット砲。12発の各種ロケット弾か2発のATACMSミサイルを搭載できる。

代表的なロケット弾であるM26は内部に644個の小型爆弾を搭載し、一撃で広範囲を制圧することが可能である。最大射程は32kmで、多くの野砲をアウトレンジすることが可能である。湾岸戦争時に初めて実戦に投入され、イラク軍から＜鉄の暴風＞として恐れられた。

さらに＜君影＞ミサイルの後継としてMLRSから発射可能なATACMS戦術ミサイルを導入した。同ミサイルは核弾頭型とクラスター弾頭型が存在しており、最大射程はBlock1型で165kmに達する。陸軍はさらに射程が300kmに達するBlock1A型の配備を開始した。

また日本が独自に開発された六〇式地对地誘導弾＜桔梗＞^{（ききょう）}を発射することも可能である。＜桔梗＞は射程は50キロでATACMSに劣るが、直径は通常のロケット弾と同じ227ミリで装填数は多い。誘導には慣性誘導を使い、弾頭は核弾頭、クラスター弾頭、それに高性能榴弾のどれかを選択できる。高性能榴弾にはレーザー誘導装置も付加されており、前線部隊の誘導により精密な攻撃が可能である。＜桔梗＞は＜向日葵＞の後継として配備が始まっている。

M L R Sは短砲身の二〇糎自走砲（203ミリ自走榴弾砲M110）や三〇式噴進砲の後継として方面軍直轄の野戦重砲連隊に配備が進められている。

荻原「これって確かクラスター爆弾全廃条約の為に使えなくなるんじゃないかったでしたっけ？」

深海「正確にはM26ロケット弾が使えなくなる。これからは単弾頭型のM31ロケット弾を新たに配備する」

荻原「それは劇中にも登場した奴ですよ」

神楽「日韓大戦で確かに使われていたね。GPSを使って精密に目標を攻撃する能力を持つ。命中精度の低さを子爆弾をばら撒くことで補うM26とは正反対の武器だね」

深海「さらにレーザー誘導を併用するものもある。これからはこういう武器が主力になっていくんだろう。ちなみに射程は120km以上とか」

荻原「凄いですね」

―支援車両―

荻原「支援車輛ですか」

深海「砲兵隊は大砲だけじゃ動かない。様々な裏方役が集まって、はじめて戦力を発揮できるんだ」

神楽「主なものを挙げれば挺進観測車、牽引車、弾薬補給車などがあるね」

四九式挺進観測車

兵装…12・7ミリ機関銃

四八式歩兵戦闘車を改造して開発された挺進観測車。観測員を乗せて前線部隊に随行し、砲兵部隊の攻撃を誘導する。かつては二八式軽装甲車を改造した三〇式挺進観測車を使用していたが、各種ハイク器材の発達に対応できなくなり、新たに四九式が開発された。その任務から観測用設備と無線設備が充実している。観測用設備は四九式重装甲車に準じており、赤外線暗視装置やレーザー測距装置を装備している。

機械化師団の各砲兵大隊や中隊の観測小隊に配備され、1個師団あたり64輜を装備している。さらにGPSや衛星通信器材、データリンクなどを搭載する改修が進められている。

荻原「挺進観測車？」

神楽「前にも言ったように現代の砲兵戦は間接射撃が普通。というわけで前線に観測要員を派遣して、目標を指示してもらわなくてはならない。その観測員が乗るための車輛ね」

深海「日本には同種の装備はないがアメリカにはM113装甲兵員輸送車やM2ブラッドリー歩兵戦闘車を改造した砲兵観測車が配備されている」

三九式六輪牽引車

三九式十五糎榴弾砲を牽引する為に開発された牽引用トラック。

陸軍は野砲の牽引はそれまで装軌式牽引車を使っていたが、自動車技術の発達と全国的に急速に進んだ道路網の発達を鑑みて、安価で整備が簡易な普通のトラックを改造した牽引車輛を導入することにした。それが三九式牽引車である。

原型は10t級の大型トラックである三四式大型六輪自動貨車で、牽引装置と砲弾の積み下ろしに使うクレーンが取り付けられた。砲

弾と人員を同時に運ぶことができる。

全国の牽引砲装備の砲兵連隊に配備されている。

深海「中砲けん引車の帝國バージョンか」

神楽「そんなところ」

三三式二〇屯牽引車

重量…19 t

大型の牽引式野戦重砲を牽引する為に開発された装軌式牽引車。

野戦重砲の自走砲化が進んだ為、＜君影＞ミサイルの発射機牽引用のものを除き退役している。また予備役部隊用に保管されている牽引野戦重砲の牽引用に一部の車輛が保管されている。

車体を流用した派生型が多い。

深海「これは73式けん引車の帝國バージョンか。自衛隊では退役済みだが」

神楽「帝國でもミサイル牽引用しか残ってないさ」

深海「派生型が多いと言うのも自衛隊の73式と共通だね」

荻原「どんな派生型があるんですか？」

神楽「例えば次」

五七式弾薬給弾車

三三式牽引車の車体を流用した派生型の1つで、五七式十五糎自走砲に随伴し砲弾を補給する為の特殊車輛。

それまで自走砲への砲弾の補給は普通のトラックを使用していた

が、中東戦争の教訓から戦場で不整地を頻繁に移動する自走砲には同等の機動力を持つ専用の装軌式給弾車の必要性が認められた。こうして開発されたのが五七式弾薬給弾車である。

約90発の155ミリ榴弾を運搬でき、ベルトコンベアにより自走砲に自動的に給弾することができる。

深海「99式弾薬給弾車の帝國バージョンか。そういえば87式砲側弾薬車はないのか？」

神楽「それについてはM548装軌貨物運搬車を輸入しました」

萩原「専用の給弾車ですか。どうしてこのようなものが必要なんですか？」

深海「現代の砲戦は大量の砲弾を消費するからね。大砲に迅速に砲弾を補給することは大変重要なんだ」

神楽「これは某ブログの受け売りだけど、第二次大戦中にアメリカ軍は自走砲より牽引砲の方を歓迎していた事があるらしい」

深海「従来までの弾薬の補給体制だと自走砲の機動力に追従できず、自走砲の利点を生かせないからね。どうせ同じなら牽引砲の方が安価だ。自走砲の機動力を生かす為にも補給部隊にも高い機動力が必要」

神楽「そして対砲兵レーダーが発達した現代では砲兵は一度射撃すれば、たちどころ居場所を突き止められてすぐさま反撃を受けることになる。だから自走砲は戦闘中、頻繁に陣地転換を繰り返すことになる」

深海「そして、そうした自走砲に十分な補給をするには、同等の機動力を持った給弾車輛が必要なわけだ」

萩原「なるほど。それでは、これで終わりですね。予想以上に長くなりました」

登場兵器紹介 砲兵の兵器編2（後書き）

先日の台風15号。あやうく名古屋駅で一晩過ごすことになりました。

神楽先生と編制を学ぼう 歩兵中隊編（前書き）

陸軍地位向上委員会も終わらないうちに新企画です。

神楽先生と編制を学ぼう 歩兵中隊編

神楽「というわけで神楽先生と編制を学ぼう！コーナーの始まり始まり」

深海「今度はなんだ？一体？」

荻原「また新しいコーナーみたいです」

神楽「ふっふっふ。このコーナーは帝國世界の陸軍編制を紹介しつつ、これから戦記ものを書こうという皆さんのために陸軍編制の基礎を紹介しようというコーナーさ」

荻原「なんか上から目線？」

――陸軍軽歩兵中隊編制――

深海「陸軍の基本は歩兵だ。戦車も砲兵も空軍も海軍も、1人でも多くの歩兵を1メートルでも先に前進させるためにあると言っても過言ではない」

神楽「というわけでまずは歩兵部隊。最初に基本として帝國陸軍の軽歩兵中隊の編制を見てみましょう」

荻原「軽歩兵ってなんですか？痩せた人しかいないんですか？」

深海「軽歩兵というのは、装甲車ではなく普通のトラックで移動して戦闘時には徒歩で戦う歩兵のこと。装甲車に乗って戦う機械化歩兵の対義語として使われる」

荻原「機械化歩兵だと人造人間とか居そうですね」

陸軍軽歩兵中隊

中隊本部

――第一小隊

――第二小隊本部（小隊長、小隊軍曹、通信手）

- ― 第一分隊（小銃分隊）
- ― 第二分隊（小銃分隊）
- ― 第三分隊（小銃分隊）
- ― 第四分隊（重火器分隊）
- ― 第二小隊（第一小隊と同）
- ― 第三小隊（第一小隊と同）
- ― 歩兵砲小隊（81ミリ軽迫撃砲×4）
- 「対戦車小隊（四七式対戦車誘導弾×4）」

神楽「こんな感じ」

荻原「こんな感じと言われても」

深海「中隊は陸軍部隊において1つの基本単位だ。特に無線や通信技術の進んでいない時代において中隊は1人の指揮官が実際に戦場で掌握できる部隊の上限だった」

神楽「英語ではカンパニー。一緒にパンを食む者達という意味で、カンパニー会社と語源は同じ」

深海「指揮官は一般的に大尉が勤めるけど、大尉は陸軍は英訳でキャプテン」

神楽「海軍は大佐がキャプテン。つまりは艦長のことね」

荻原「陸軍の中隊長は海軍の艦長と同じくらい重要だった、ということですか？」

深海「つまりそうだね。前線で直接部下を指揮する指揮官は陸軍では中隊長で…」

神楽「海軍では艦長だった」

深海「重要なのは今も同じ。なぜなら中隊は補給や整備を担当する自前の後方支援組織を持ち、上級部隊の支援がなくてもある程度は独立行動をすることができるからだ。だから軍隊は基本的に中隊単位で動く」

神楽「こうした部隊を管理自営部隊と呼ぶ。基本的に小隊以下の部隊は中隊に依存している」

萩原「なるほど」

小銃分隊

分隊長

小銃手×6

機関銃手（ミニミ軽機関銃）

無反動砲手（カールグスタフ無反動砲）

無反動砲弾薬手兼小銃手

＊二〇式軽機関銃装備部隊の場合、小銃手のうち1名は機関銃弾薬手兼小銃手、1名は狙撃手となる

重火器分隊

分隊長

擲弾筒手×3

擲弾筒弾薬手兼小銃手×6

機関銃手（二二式機関銃）

機関銃助手兼小銃手

機関銃弾薬手兼小銃手

深海「それでは下の方から解説してみよう、基本的に軍隊の最小単位は分隊だ。人数は十人前後で普通はベテランの軍曹が指揮する」
神楽「だけど実戦では分隊をさらに複数のチームに分けて運用することもある。組とか班とかいう形でね」

深海「それで複数の班が互いに支援しながら前進するんだ。一方の班が援護射撃をする間に他方の班が前進する。一定距離進んだら交替して、一方の班が前進する。分隊はこれを繰り返して前進するんだ。これが歩兵戦術の基本、ファイア・アンド・ムーブメントさ」
神楽「これは上位の部隊になっても同じ。例えば小隊なら分隊が交互に援護しながら前進し、中隊なら小隊単位で相互に援護しながら進む」

深海「それでは分隊を見て見よう。現在の歩兵分隊の基本装備はアサルトライフルだ。それに分隊支援火器一丁に携帯対戦車火器を保有するのが普通だ」

萩原「分隊支援火器とは何ですか？」

神楽「軽機関銃だと思えばいいよ。もともと機関銃は重くて大きいから、もっと上の部隊に配備されていた」

深海「旧日本軍だと重機関銃は大隊の機関銃中隊に集中配備されていたね」

神楽「第一次世界大戦の頃までは大部隊が密集体形で前進するのが普通だったからそれでもよかったんだけど、機関銃が戦争で本格的に使われるようになるという訳にもいかなかった」

深海「それまで小銃を主力兵器として銃剣突撃で勝負を決する歩兵戦法は機関銃を配備した塹壕陣地の前に完全に崩れ去った。突撃する歩兵部隊は機関銃の前には的でしかなかったからね」

―散開戦術と軽機関銃―

神楽「というわけで新しい状況にあわせて歩兵の戦闘法に大きな変化が生じた。それまでは密集体形の大部隊で銃剣突撃を仕掛けて正面から突破を図るのが普通だった。しかし機関銃の前に脆くも崩れ去った」

深海「そこで新たな戦法が考えられた。機関銃の射撃を浴びないように小部隊に分かれて地形や障害物に身を隠しながら接近し、敵の防御の弱点を見つけてそこから突破する方法だ。だが、この新戦術には1つ大きな問題を抱えていた」

神楽「小銃しか持たない歩兵部隊は少数ではあまりにも脆弱だった。そこで戦闘力を底上げする必要がある」

萩原「そこで軽機関銃ですね」

深海「その通り。軽機関銃は射程や連射性、精度を抑えて少人数で

運搬・使用できるようにした機関銃だ。それを歩兵の小部隊に配備して火力の底上げを図ったのさ」

神楽「最初にそれを取り入れたのはフランス軍で、日本軍はこれを戦闘群戦法と呼び、歩兵火力の中心は機関銃になった」

荻原「戦い方が大きく変わったんですね」

深海「そうだね。火器の威力と射程が向上するとともに、歩兵は攻撃を避けるために分散して戦うようになる傾向がある。そして小部隊でも戦闘ができるように、重火器で次々と強化された。中隊の編制を見ると、各部隊に支援火器部隊が置かれているだろ？」

神楽「劇中の陸軍の場合、歩兵小隊には重火器分隊が置かれている。50ミリ口径の小型迫撃砲である擲弾筒3門と7・7ミリ口径の汎用機関銃1丁が配備されている。ちなみに機関銃助手ってのは三脚を運んでいる」

深海「状況に応じて二脚と三脚を使い分けるんだね」

神楽「歩兵中隊には81ミリ迫撃砲装備の歩兵砲小隊、対戦車ミサイルもしくは無反動砲を装備する対戦車小隊が配備されている。こうして各部隊に支援重火器部隊を置いて単独でも十分な火力を発揮できるようにしているのね」

深海「自前に重火器を持っていれば砲兵の支援より密接かつ迅速な支援もできるしね」

神楽「こうした第一次大戦後の歩兵部隊の流れは日本陸軍も取り入れられている。日露戦争時とは変わらない白兵戦術に固執したとかよく言われるけどね」

深海「大戦間に日本軍歩兵部隊の火力は一気に強化されたからね。軽機関銃、擲弾筒、歩兵砲、連隊砲。旧日本陸軍を批判する人たちはこうした動きをちゃんと知った上で言っているのかね。なろうの架空戦記を見ても歩兵砲の活躍なんて見たことないしね」

―陸軍機械化歩兵中隊編制―

神楽「歩兵の兵器編でも見たように第二次大戦後、装甲兵員輸送車 歩兵戦闘車APCやIFVが登場した。装甲により砲撃や銃撃から守られ、強力な車載火器の援護を得られる装甲車搭乗歩兵は機械化歩兵と呼ばれる」

陸軍機械化歩兵中隊

中隊本部

―第一小隊

―一 小隊本部（小隊長、小隊軍曹、通信手、機関銃手、機関銃助手、機関銃弾薬手）

―一 第一分隊（小銃分隊）

―一 第二分隊（小銃分隊）

―一 第三分隊（小銃分隊）

―一 第四分隊（車両分隊）

―二 第二小隊（第一小隊と同）

―二 第三小隊（第一小隊と同）

―二 歩兵砲小隊（自走81ミリ軽迫撃砲×4）

＊二六式装甲兵車装備の中隊は三〇式自走対戦車誘導弾4輦装備の対戦車小隊を保有

小銃分隊

分隊長

小銃手×3

機関銃手（ミニミ軽機関銃）

無反動砲手（カールグスタフ無反動砲）

無反動砲弾薬手兼小銃手

車両分隊

分隊長兼小隊長車車長

歩兵戦闘車車長×3

操縦手×4

砲手×4

神楽「以上が帝国陸軍機械化歩兵中隊よ」

荻原「分隊の人数が減ってますね」

深海「少人数の方がフットワークが軽いからね。機動力を武器とする機械化部隊には利点だ。装甲車の乗車定員との兼ね合いもあるしね」

荻原「迫撃砲部隊も自走化されているんですか」

深海「機械化部隊に配備される戦闘車輛は基本的には全てキャタピラー装備の装軌車輛だ。戦車や歩兵戦闘車と一緒に行動できなければ意味が無いからね」

神楽「ちなみに対戦車ミサイル部隊が無いのは、四八式歩兵戦闘車に対戦車ミサイルを装備しているから。それ以前の装甲車は対戦車ミサイルを装備していないから、歩兵戦闘車を装備していない中隊は対戦車小隊を持ってる」

荻原「重火器分隊の代わりに装甲車の運転手の部隊が入ってるんですね」

深海「そうだね。装甲車と歩兵がそれぞれ独立した行動が可能だから、装甲車部隊が攻撃して敵の目を引きつけているうちに、歩兵部隊が迂回攻撃といった連携攻撃ができる」

――海軍陸戦隊歩兵中隊編制――

神楽「そして締めは兄貴らの属する海軍陸戦隊だ」

荻原「随分、小さい部隊なんですね。三個分隊しかないし、迫撃砲もない」

深海「陸軍軽歩兵小隊が46人、機械化歩兵小隊でも39人。それに対して1個小隊27人か」

海軍陸戦隊歩兵中隊

中隊本部

―第一小隊

―下小隊本部（小銃分隊、小隊軍曹、通信手）

―下第一分隊（分隊長、小銃手×3、機関銃手×2、無反動砲手×2）

―下第二分隊（第一分隊と同じ）

―「第三分隊（第一分隊と同じ）」

―第二小隊（第一小隊と同じ）

―第三小隊（第一小隊と同じ）

「対戦車小隊（四七式対戦車誘導弾×4）」

神楽「海軍陸戦隊は揚陸艦艇の大きさによる制限があるからね。それに少人数の方がフットワークが軽いから素早く動ける。強襲襲撃による迅速な揚陸作戦を指向するのが海軍陸戦隊」

深海「それに対して土地に張りついて粘り強く戦うのが陸軍ってか」

神楽「それに各分隊に機関銃と無反動砲がそれぞれ2つずつある。

前にも言ったように、分隊もさらに複数に分かれて互いに援護しながら戦うわけだけど・・・」

深海「海軍陸戦隊の分隊は分かれても、かなり独立した行動が可能ってわけか。それぞれ機関銃と無反動砲を持っているから」

神楽「そゆこと。小銃手2名、機関銃手1名、無反動砲手1名のチームを組んで戦うの」

荻原「そういえば大連での市街地戦でも4人のチームで行動するシーンがありましたね」

神楽「では次回はコラムを挟んで、大隊の編制に書こうと思います」

神楽先生と編制を学ぼう コラムその1

―編制と編成―

神楽「今回はコラムということだけど・・・まずはこれ。というわけで早速、編制と編成の違いって分かる？」

荻原「えっ？漢字が違う？なにが違うんですか？」

深海「簡単に言えば編制が基礎で、編成が応用って感じかな」

神楽「まず編制ってのは恒久的な部隊の組織。組織図とかに載っているようなものが編制。こうするって決めたら基本的には変わらない」
深海「前回に紹介したのも編制だね。あれが基本の組織だ」

神楽「一方、編成というのは状況によって組織を組み替えることを言う。例えば歩兵部隊に戦車部隊や砲兵部隊を配属して戦闘団を組織する。これが編成ね」

深海「編成はあくまで臨時的な措置だ。だから平時になれば基の編制に落ち着く。まあ例外というものは常にあるものだけだ」

荻原「ようするに基本となる部隊の組織が編制で、それを状況に応じて組み替える事を編成というってことですか？」

神楽「そんな感じかな」

―部隊番号の付け方―

荻原「部隊番号って第〇師団とか、第〇〇連隊とかの〇に入る数字のことですよね」

深海「そうだよ。その付け方にはちゃんとルールがあるんだ」

神楽「まず師団の部隊番号は陸軍を通じて通し番号が付与されているね。同じ陸軍の中に同じ番号の師団は基本的に存在しない」

深海「ただし違う兵科の師団の場合は番号が重複することもある」

荻原「違う兵科？」

神楽「単に第〇師団と言った場合は大抵は歩兵師団を示すけど、それとは別に機甲師団や空挺師団などの部隊を保有する場合があるでしょ。そういう場合には第一歩兵師団と第一機甲師団と第一空挺師団が同時に存在することがありうるわけ」

深海「自衛隊の場合は第7師団が機甲師団として編制されているけど、その他の師団と別系統になっているわけじゃないし、そもそも師団名に機甲と冠してもいない。まあ元々は他の師団と同じ歩兵師団から改編した部隊だしね」

神楽「旧軍の場合は、兵科別に別系統になってた。歩兵師団は第〇師団。機甲師団は戦車第〇師団って言う風だね。番号も重複する部分がある」

深海「アメリカ軍もその感じだね。第一歩兵師団と第一機甲師団、それに第一騎兵師団が存在している。ただし空挺師団は歩兵師団からの派生だから、歩兵師団と通し番号になっている」

荻原「つまり違う兵科の師団同士でも通し番号になってる場合もあると？」

神楽「欧州軍はその傾向があるかな。第二次大戦後のドイツ軍やフランス軍は違う兵科の師団同士でも通し番号になってる。冷戦中の西ドイツ軍だと第一装甲師団があって、その次は第二装甲擲弾兵師団、第三装甲師団、第四装甲擲弾兵師団と続いていた」

荻原「装甲擲弾兵師団？」

深海「機械化歩兵師団のことだね。国ごとに兵科の呼び方も変わるんだ」

神楽「次は連隊。連隊も全軍を通じて兵科ごとに通し番号がつけられている。だから同じ番号の連隊が複数存在することはない。第一師団第一歩兵連隊と第二師団第一歩兵連隊とかにはならないわけ」
深海「勿論、歩兵連隊と戦車連隊、砲兵連隊など兵科が違う連隊同士で番号が重複することはあるけどね。連隊の番号は各連隊固有のものだ」

萩原「次は大隊ですね」

神楽「ここからが少し複雑なの。まず大隊は各連隊ごとに数字が付けられている。第一連隊の第一大隊、第二大隊、第三大隊。そして第二連隊の第一大隊、第二大隊、第三大隊という風に」

萩原「通し番号じゃないんですか？」

深海「自衛隊の戦車大隊みたいに連隊に属さない独立大隊は全軍を通じて通し番号になっているけど、連隊に属する大隊はその連隊固有の部隊だからね。連隊内で番号が完結している」

神楽「そして、ややこしいのが中隊。中隊も大隊と同じように連隊ごとに付与されている。第一連隊の第一中隊、第二中隊、第三中隊って風にね。そして第二連隊も第一中隊から始める。欧米だと数字の代わりにアルファベットが使われることもあるね」

深海「注意して欲しいのはあくまでも“大隊ごとに”ではなく“連隊ごとに”であることだ。例えば三個中隊で一個大隊を編制する連隊があるでしょう。第一大隊の最初の中隊は当然ながら第一中隊。では第二大隊は？第二大隊第一中隊ではなく第四中隊なんだ」

萩原「連隊の中で通し番号ってことですか？」

神楽「そういうことだね。アメリカの戦争映画『バンド・オブ・ブラザーズ』で主人公達が所属していたのは第506パラシュート連隊第二大隊E中隊だけど、第二大隊の中にAからEまであるんじゃないって、第506連隊がAからIまでの九個中隊から成っていて、そのうちD、E、Fの三個中隊が第二大隊に所属するんだ」

深海「本来ならば中隊は連隊に隷属する部隊なんだろうね。ただ中隊の数が多いと指揮し切れないから中間司令部として大隊が誕生した」

神楽「小隊と分隊は大隊と同じ。小隊は中隊ごとに、分隊は小隊ごとに番号が与えられる」

深海「第一中隊の最初の小隊は第一小隊で、第二中隊でも同じく第一小隊。分隊も同じ」

まとめ

師団…全軍を通じての通し番号が付与される

連隊…全軍を通じての通し番号が付与される

大隊…各連隊ごとに第一大隊から番号が付与される

中隊…各連隊内で通し番号が付与される

小隊…各中隊ごとに第一小隊から番号が付与される

分隊…各小隊ごとに第一分隊から番号が付与される

深海「こうして見ると中隊と連隊が特別な単位だということが分かるね」

神楽「まさに陸軍部隊の基盤となるのがその2つなわけだ」

―各国ごとに違う師団の呼び方―

萩原「それにしても同じ機甲師団でも、日本は戦車師団で、ドイツは装甲師団と呼ぶんですか？」

深海「そうだね。国によって訳が変わるのが通例だね」

神楽「機甲師団、機械化歩兵師団を使うのはアメリカ、それにドイツを除くNATO諸国かな」

深海「機械化歩兵師団じゃなくて単に機械化師団とか名乗る場合もあるね。さらに言えば最近では師団の代わりに旅団を基本単位とする軍隊が多くなったけど。ドイツは装甲師団、装甲擲弾兵師団だね」
神楽「擲弾兵ってのは近世の頃に存在した手榴弾を使う専門の精鋭兵士を示すもので、ヒトラーが士気を鼓舞する為に歩兵師団を改名したんだ。まあそれまでの伝統を重視して歩兵と称した部隊も多かったみたいだけど」

荻原「で日本は全部、番号だけですか」

深海「陸上自衛隊はね。あと韓国軍なんかも全師団通しで、機甲師団と機械化歩兵師団を区別していないね」

神楽「旧軍だったら機甲師団は戦車師団だね。第〇戦車師団じゃなくて、戦車第〇師団というように兵科の後に番号がくるのがミソ」
深海「ソ連も戦車師団を使うね。そして機械化歩兵師団は自動車化狙撃師団と名乗る」

神楽「冷静に考えると意味が分からないよね。自動車化なら、装甲車じゃなくてトラックを使っているみたいだし、別に兵士が全員狙撃兵ってわけでもないし」

深海「まあ、伝統だからね」

神楽「イギリス軍はウィキペディアで見ると装甲師団になってるけど、資料によっては機甲師団なのよね」

深海「まあ、あくまでどう訳すかの問題だからね。これが絶対に正しいという答えはないだろう。他の国だってそうだ。ただ、そういう風に訳す傾向があるという話だね」

神楽「雰囲気の問題だよね」

荻原「それではまとめてみます」

機甲師団の訳例

アメリカ、フランス、イギリス…機甲師団

旧日本軍、ロシア…戦車師団

ドイツ…装甲師団

機械化歩兵師団の訳例

アメリカ…機械化歩兵師団

欧州…機械化師団

ロシア…自動車化狙撃師団

ドイツ…装甲擲弾兵師団

深海「繰り返すが、これはあくまで一例であって、これが正しいというわけじゃない」

平成24年度防衛予算概算要求紹介（前書き）

今年も防衛省のホームページに掲載されている予算要求の紹介をします。

平成24年度防衛予算概算要求紹介

深海「というわけで、今年もこの季節がやってきました」

神楽「9月30日に防衛省の来年度予算概算要求がようやく発表されたよ」

萩原「今年は例年より一ヶ月遅れですね」

1. 実効的な抑止及び対処

萩原「今年もこれが一番最初ですか。昨年と同じですね」

深海「まあ自衛隊の本分だしね」

萩原「最初は周辺海空域の安全確保となっています」

神楽「この項目が一番先に来るのは“海空重視の動的防衛力”の影響かな？」

深海「空海 of 安全確保は結構だけど、その為 to 陸がおろそかになるようなことにはなっ てほしくないのだが」

- ・護衛艦（DDH）、潜水艦（SS）の建造

- ・護衛艦の艦齡延伸

- ・艦艇等の情報共有能力の向上

- ・固定式警戒管制レーダーの整備

- ・高高度滞空型無人機の運用・維持・整備に係る海外調査

神楽「護衛艦は平成22年度概算要求紹介でも紹介した22DDHの同型艦のようだね」

深海「基準排水量19500tの多用途母艦か。潜水艦はくそうりゆう型の改良型のようだ」

神楽「あきづき型にも搭載されていた魚雷防衛システムを装備する

らしいね」

深海「魚雷防御システムとは自走式デゴイのことらしいね。ようは魚雷の目を艦から逸らす為の囹で、これまでは艦尾から引っ張る曳航式を使っていたけど、自分で動くデゴイにすれば艦の回避行動も容易になる」

荻原「それに並行して護衛艦の艦齢延伸ですか」

神楽「今の建艦ペースだと、バブル期に建造した艦艇の代替は難しいからね。はつゆき型1隻、あさぎり型4隻、あぶくま型2隻、はたかぜ型1隻に実施したいらしい」

深海「DDGにも波及か。次期イージスはしばらく無理ってことか」
荻原「艦艇等の情報共有能力の向上」というのは？」

神楽「現在の海軍艦隊は無線交信だけでなく、データリンクによってレーダーや各種センサーが捉えた目標のデータを直接やり取りしているわけだけど、だけど電波は直進しかしないから水平線より遠くにいる味方艦艇に直接電波を飛ばすことはできない」

深海「そこで海上自衛隊は通信衛星を介したデータリンクを開発するつもりのようなね」

神楽「それと“固定式警戒管制レーダーの整備”というのは、沖縄方面のレーダーサイトを新型に交換するということらしい」

深海「J/FPS-7なら新型レーダーが配備されるらしいが、詳細は不明だ」

荻原「そして、最後は無人偵察機ですか？」

神楽「海外から長時間活動できる無人偵察機を輸入するつもりかしら？」

荻原「次は島嶼部に対する攻撃への対応となっていますね」

- ・沿岸監視部隊の配置など
- ・那覇基地における早期警戒機（E-2C）の整備基盤を整備
- ・部隊練度の向上
- ・88式地对艦誘導弾システム（改）の取得

・那覇基地における戦闘機部隊の2個飛行隊化に向けた所要の施設整備の為の調査

深海「沿岸監視部隊というのは、おそらく北海道などに配置された陸上自衛隊の沿岸監視隊を沖縄に新設するということだろう。来年度予算では、その準備を始めるようだ」

神楽「レーダーや目視で近辺を航行する船舶を監視するのが任務ね」
深海「それにE-2C早期警戒機を沖縄に恒常的に配置しようとも考えているようだね」

神楽「飛行機はデリケートだからね。地上での整備の環境を整えないと、長期の運用は難しいからね」

荻原「部隊練度の向上というのは、アメリカ軍や陸海空自衛隊の合同訓練を行うことなのでしょうね」

深海「そして注目はこれだね。88式地対艦誘導弾システム（改）。概算要求には03式中距離地対空誘導弾を載せていたのと同じトラックに地対艦ミサイルを装備したものの写真が載っているね」

神楽「いろいろと調べて見ると、改良点は射程の伸長やコスト低減などが挙げられているけど、一番の目玉は垂直発射化だね」

荻原「垂直発射ですか？」

深海「従来型のミサイルだと発射機を目標に向け、ミサイルは目標へと一直線に向かう。一方、垂直発射式だと発射機は上に向けたままでミサイルも真上に発射されて、ミサイルが自ら方向を転換して目標を向かうんだ」

神楽「そうすることで行くらかの利点がある。まずはあらゆる方向に向けて即応できること。従来型だと全然違う方向にある敵を攻撃する場合、発射機の方角をまず変えないといけないからね」

深海「そしてもう1つは周りを障害物に囲まれた場所からでも発射できること。従来型だと横に飛んでいくから開けた場所からじゃないと発射できないから敵の攻撃を受けやすい。垂直発射式なら隠れた場所からでも上が開いていれば発射できる」

荻原「そして最後は・・・沖縄に戦闘機部隊を増やすんですか？」
深海「あくまでも準備だけだね。恒常的に2個飛行隊体制にするのか、有事の増援を想定したものかは分からないが」

神楽「まあ恒常的だとしても、どっかから引き抜いてくるだけで単純に増やすってことはないだろうね」

荻原「次は“防空能力の向上”ですね」

- ・次期戦闘機（F-X）の取得
- ・F-15のIRST搭載改修
- ・F-2の支援戦闘能力向上のための開発
- ・将来ミサイル警戒技術に関する研究

神楽「いよいよF-Xが来るね」

深海「候補はF-35ライトニングII、タイフーン、F/A-18Eスーパーホーネットの3機種に絞られたみたいだね。前からこの3機と言われていたけれど」

荻原「作者はF-15FX派でしたよね」

神楽「そうだね。候補の3機種はどれも長所短所があり、決定打に欠ける」

深海「単純に性能、将来性ならF-35一本なんだが、開発が遅延していてF-4戦闘機の退役に間に合わない可能性がある」

神楽「F/A-18Eは実績があるが、1970年代の戦闘機の発展型で基礎設計が古い上に、加速力と航続距離が弱く、広い日本の領空を守る迎撃機としては性能不足だ」

深海「タイフーンは設計こそ新しく、飛行能力そのものは大丈夫だと思うが、電子機器エレクトロニクスの能力に疑問符がつく。特に3機種の中で唯一、フェイズド・アレイ・レーダーを搭載した実績が無いのが問題だ。

開発こそ進められるが今後、搭載されるかは未知数だ」

荻原「フェイズド・アレイ・レーダーってイージス艦に搭載してあるレーダーですよね？」

神楽「その通り。瞬時に広範囲を搜索し、多目標の自動追尾も可能な優れたもの」

深海「少ない数で広い領空を守らなくてはならない自衛隊には是非とも欲しい装備だよね」

神楽「なんといってもF-22こそが最高の選択なんだけど・・・」

深海「はあ」

荻原「・・・次の話題に行きましょう」

深海「戦力維持のためのF-15やF-2の改修を引き続き行っていくんだね。そして新たに加わったのがF-15のIRST搭載」

神楽「IRSTってのは赤外線センサーのことだね。戦闘機のステルス化で搜索能力が相対的に低下するレーダーを補おうってわけだ」

深海「戦闘機用の高出力エンジンの排熱は隠すことは難しいだろうからね。それに自ら電波を発するレーダーと違って相手の放つ熱を一方的に受け取るだけで逆探知の可能性が無いのもステルス時代の空中戦では有利だ」

荻原「そして“F-2の支援戦闘能力向上のための開発”というのは・・・」

深海「廃棄するクラスター爆弾の代わりに新たに導入するレーザーJDAMの為のシステムを開発するということだが・・・作者はターゲットングポッドではないかと睨んでいる」

荻原「ターゲットングポッド？」

神楽「レーザーJDAMは精密誘導爆弾の一種でGPSによる誘導と、レーザーによる目標への誘導を併用する爆弾よ。後者の誘導システムはレーザーを目標に照射して、それを目印に目標へと突っ込んでいくの。レーザーの照射は地上の兵士か、空中の航空機によって行われる」

深海「自衛隊は既にF-2の機体外部に取り付ける赤外線センサーユニットのJ/A AQ-2を開発済みだ。夜間低空飛行をする上で不可欠な装備だが、困ったことにこれにはレーザー照射システムが搭載されていなかった。自衛隊にはレーザー誘導が可能な航空機が

存在しないんだ」

神楽「まあAAQ-2を開発していた当時は、まさかクラスター爆弾禁止条約ができる前だったからね」

深海「それで作者は今年度予算で開発するシステムはJ/A AQ-2にレーザー照射システムを搭載する改良型じゃないかと睨んでいるんだ」

荻原「そして最後は“将来ミサイル警戒技術に関する研究”ですが」
深海「これについては概算要求に書いてあること以上には特になにも言えないな」

荻原「次は“海上交通の安全確保”ですね」

神楽「各種ヘリコプターの導入、既存のSH-60Jの機齢延伸に加えて、注目はこれだね」

・潜水艦用新魚雷の開発

・可変深度ソナーシステムの研究

深海「魚雷の方は89式魚雷の後継だね。妨害技術の進歩への対抗、そして浅瀬での戦闘への対応が目的のようだね」

神楽「“世紀末の帝国”でも書いたように浅瀬だと音が海底に当たって乱反射するから、正確なソナー探知が難しくなるんだ」

荻原「そうした環境に対応した魚雷ってことですか。そしてソナー」
深海「可変深度ソナーも曳航式ソナーも既に自衛隊は装備しているが、イメージ図を見るとこれから開発するものはその2つを併用するもののようなだね。そして注目なのがマルチスタティックを活用することだ」

荻原「マルチスタティック？」

神楽「マルチスタティックソナーというのは音波を発する発信機と、相手にぶつかった音波を捉える複数の受信機から成るソナーのこと。発信機と受信機は離れた状態で使われる」

深海「通常のソナーは発信機と受信機が一体になってきて、発信し

た音波が相手にぶつかってまっすぐ跳ね返ってくるのを捉えるんだが、ステルス性を高めた艦だと音波をあらゆる方向に乱反射させてしまう。だからソナーの方向に返っていく音波はだいたい弱くなり探知しにくくなる」

神楽「そこで複数の受信機を送信機とは離れたところに置いて乱反射した音波を捉えて、それぞれの捉えたものを分析して敵を見つけようというのがマルチスタティックソナー」

深海「ちなみに同じ発想でステルス機を発見しようと開発されているのがマルチスタティックレーダーだ」

神楽「イメージ図を見ると、複数の艦がチームを組んで、それぞれ受信機と送信機を曳航してデータリンクで繋いで、ステルス性の優れた敵潜水艦を追跡しようとしているみたいね」

荻原「そして“サイバー攻撃等への対処”か」

深海「この前も防衛産業関連企業へのサイバー攻撃があったばかりだからね。サイバー攻撃対処にはますます力を入れていかななくてはならない」

荻原「次は“ゲリラや特殊部隊による攻撃への対応”ですね」

深海「10式戦車をはじめとする各種装備の取得、訓練の実施に加えて注目は次の項目だ」

- ・遠隔操縦式小型偵察システムの研究
- ・戦闘ヘリコプター（AH-64D）の取得
- ・多用途ガンの取得
- ・火力戦闘車の開発

神楽「一番上はようするに無人偵察機ね。小型ヘリコプターのような飛行型や福島原発の災害処理で活躍しているような自走ロボット型のイメージ図が掲載されているね」

深海「一時期話題になった防衛省技術研究本部が開発した丸いボール状の飛行物体もこうした開発の一環なんだろうね」

荻原「そしてAH-64D。また調達するんですね」

神楽「去年の予算は認められたみたい。とりあえず13機の調達を目指すらしいね」

深海「次は来年度予算案でもっとも謎の装備だ」

神楽「多用途・・・ガン？陸自らしからぬ名称だね」

深海「どうやらカールグスタフM3無反動砲のことらしいのだけど、7門調達で7000万円も使うらしい」

神楽「1門1000万円!？」

深海「ライセンス料込みじゃないかという噂もあるが、詳しくは不明だ」

荻原「そして最後は火力戦闘車ですね」

深海「フランスのカエサルや、世紀末の帝國に名前だけ登場した特殊機動砲のような装輪自走砲を開発するつものようだ」

神楽「この手の装輪自走砲は牽引砲よりも機動力が高く、陣地転換が素早くでき、かつ装軌自走砲よりも軽量で輸送機での輸送も簡単ということ注目浴びているね」

深海「自衛隊はこれで主力榴弾砲であるFH-70を更新するつものようだ。これは限定的に自走できるとはいえ、実質的には牽引砲だから凄い戦力強化になるね」

神楽「データリンクに接続することで精密な火力支援ができるようにするつものようだ」

深海「しかし、なにからなまでに装輪になるんだな。車体は88式地对艦誘導弾やO3式中SAMと同じで、重装輪回収車のシャーシを流用するようだ」

荻原「それから次は“大規模・特殊災害等への対応”ですね」

神楽「東日本大震災の後だしね。こうした取り組みは当然」

深海「ただ中身を見ると、他の目的のものと兼ねていたり、震災がなくても取得が勧められていただろうってのだったり、組織改編だったり注目すべきものは少ないね」

・陸上自衛官の実増員

・CBRN脅威評価システム技術の研究

萩原「CBRN？」

ケミカル バイオロジカル デイオロジカル ニュークリア

神楽「科学、生物、放射能及び核の略。そうした各種汚染の拡大状況を分析、シミュレーションするシステムを開発したいみたい」

深海「今回の震災でも放射性物質の拡散状況の情報提供にかなり混乱が生じたからね。それを教訓にしてのことだろう」

萩原「そして人員増ですか」

神楽「有事対応にしても、災害対応にしてもマンパワーが重要だからね。これは歓迎すべきことなんだけれども・・・」

深海「概算要求の後の方での記述を見ると、どうやら福島原発監視の為に必要な100人ちよつと人員程度を増やすだけのことらしい」

萩原「それは残念。その後は“弾道ミサイル攻撃への対応”ですね」

深海「＜こんごう＞型護衛艦の4隻に加えて、＜あたご＞型にも弾道弾迎撃能力が付与されるみたいだね」

萩原「ええと。これで“実効的な抑止及び対処”は終わりです」

2. アジア太平洋地域の安全保障環境の一層の安定化

深海「まあこれは友好国と関係を深めていきましようってことだね」

神楽「はい次」

萩原「早っ！」

3. グローバルな安全保障環境の改善

深海「これはPKOとかの海外派遣関係のものだね」

- ・特殊トラック（PLS付）の取得
- ・国外後方補給調査
- ・現地輸送調整機能の強化
- ・多国間の地図共有枠組みへの参加による地図調整態勢の強化

萩原「PLSってなんですか？」

深海「コンテナを積み下ろしするためのアームらしい。トラックに搭載して、簡単にコンテナを積み込めるようするってことだね」

神楽「車体の方はこれも重装輪回収車の流用らしい。大活躍だね。全体的に海外派兵時の兵站機能の強化を目指しているみたいだね」

5. 宇宙・情報関連事業

萩原「あれ？4が飛んでますよ？」

深海「4は“防衛力の実効性向上のための構造改革の推進”とあったが、とくにおもしろくなかったからな」

神楽「ほとんどが他の項目で取り上げたものの再掲だしね」

萩原「そうですか」

- ・Xバンド通信衛星の整備・運営事業
- ・新野外通信システムの取得

深海「まずXバンド通信衛星だが、ようするに今使っている衛星がそろそろ寿命だから新しい衛星に変えようというわけだ」

神楽「ちなみに自衛隊の衛星通信機能は民間の通信衛星SUPER BIRDを利用している。ちなみに所有者は衛星放送スカパー！の会社だね。防衛関連通信は別の会社みたいだけど」

深海「SUPER BIRDは自衛隊になくてはならないものだ。例えば海上自衛隊の指揮・管制システムであるMOFにおいても重要

な位置にある」

神楽「平成期に建造された護衛艦には大抵、SUPERBIRD用の通信アンテナを装備しているね」

荻原「それから新野外通信システム」

深海「新野外通信システムというのは、まあ陸上自衛隊が作戦で使う電話交換機みたいなもんだな。もしくはインターネット網。戦場での通信を司るものさ」

神楽「各部隊の通信隊に配備され、部隊内に通信網を構築するわけだ。現代の戦場において通信は極めて重要だからね。改善を怠ってはいけない」

深海「従来の野戦通信は方面隊電子交換システムと師団通信システムの2つを併用していた。これはその両方を更新するものだ」

6. 編成・機構関連事業

荻原「次は組織関連ですね」

- ・ 航空救難団の航空支援集団から航空総隊への隷属替え
- ・ 中央即応集団司令部の座間駐屯地（仮称）への移転
- ・ 第4師団の即応近代化改編
- ・ 第12旅団の即応近代化改編
- ・ 旅団の化学防護隊等の旅団直轄化
- ・ 第1戦車群の改編

荻原「いろいろとありますね」

神楽「航空救難団の航空総隊への隷属替えてのは、実戦部隊との連携強化ってことかな？」

深海「中央即応集団司令部の座間への移動は前から言われていたことだね、座間駐屯地というのは在日米軍のキャンプ座間のことだ」

神楽「座間には最近、アメリカ陸軍第一軍団の前方司令部が開設された。ようするにこの移動は在日米軍との連携強化を目的にしているわけだね」

荻原「第4師団と第12旅団の即応近代化というのは？」

深海「陸上自衛隊は2005年の中期防衛力整備計画で師団・旅団の編制について2つの方向性を掲げた。まず第一に対テロ・コマンド部隊攻撃などに備えて戦車などの重装備をコンパクト化して機動力、即応性を高めた即応近代化部隊。第二に対テロ・コマンド部隊攻撃から正規軍による着上陸戦まであらゆる状況に対応するためにバランスよく近代化が進められる総合近代化部隊」

神楽「ちなみに北海道の部隊は総合近代化部隊に、本州以南の部隊は即応近代化部隊にする方針」

荻原「それじゃあ、この度の改編というのは・・・」

深海「近代化の名を借りた軍縮になる可能性が高いな・・・」

神楽「なにしろ戦車400、大砲400だもんね」

深海「ただ第12旅団については空中機動化部隊という方針を諦めるという噂も聞く」

荻原「どういことですか？」

深海「日韓大戦にも書かれていたけれど、第12旅団は自衛隊初の空中機動部隊として、戦車部隊を廃止するなど重装備を減らして代わりにヘリコプターを増強することになった。だが、予算不足でヘリコプターが揃わず中途半端な状態になってしまった」

神楽「それを改めるってわけで、戦車中隊が復活するという話も聞く。まあ噂だけだ」

荻原「次は旅団化学防護隊の旅団直轄化とありますが」

深海「従来の自衛隊旅団の化学防護隊は旅団司令部付隊の配下にあった。それが旅団司令部の直轄になる。まあ地位を引き上げるってことだな」

神楽「NBCテロの脅威の高まりと、今回の原発事故に対応する為かな？」

萩原「それと第一戦車群の改編とありますが・・・」

深海「第一戦車群は北部方面隊の独立戦車部隊で、戦車削減の煽りを受けて平成26年までに廃止予定の筈だったが・・・」

萩原「廃止じゃなくて改編とありますね」

神楽「どういふことなのかしらねえ」

深海「その他にいろいろと項目あるけど省略。防衛省の概算要求はしめて4兆6906億円。今年の防衛費に比べて281億円増を要求している」

神楽「まああくまで防衛省の要求だからね。ぐっと減らされるだろうね」

萩原「今年度予算の場合、概算要求は4兆7123億円に対して、実際の防衛費は4兆6625億円ですからね」

深海「というか、いつのまに防衛費は4兆6000億円台まで下がっていたのか。防衛費はだいたい5兆円ってのが作者の感覚だったんだが」

萩原「確実に減らされていますね」

神楽「日本の防衛の未来は暗いね」

神楽先生と編制を学ぼう 大隊級部隊編

神楽「というわけで、第二段は大隊級部隊編だよ」

荻原「大隊じゃなくて大隊級部隊ですか・・・連隊も混じってますね。連隊って大隊より1つ上の部隊じゃありませんでしたっけ？」

神楽「日本陸軍やイギリス陸軍では伝統的に騎兵／搜索連隊や戦車連隊は数個中隊で編制される大隊級の規模の部隊なの」

深海「自衛隊やフランス軍みたいにアメリカ軍が1950年代に考案したペントミック編制を採用した国の連隊も数個中隊編制の大隊規模部隊だね」

荻原「ペントミック編制？」

神楽「詳しくは後で触れるとして、とりあえず編制例を・・・」

―陸軍軽歩兵大隊―

歩兵大隊

└大隊本部

―大隊行李

―狙撃班

―警備防空班

└歩兵中隊×3

└歩兵砲小隊(120ミリ重迫撃砲×4)

神楽「まず軽歩兵大隊の例」

荻原「本部にいろいろとついていきますね」

深海「大隊ともなると、小規模ながら参謀組織もついているからね。独立して幾らか複雑な作戦も実行できる。だから大隊以上が“戦術単位”と呼ばれる」

神楽「ちなみに戦前の日本軍の場合、九二式重機関銃などを装備する機関銃中隊と九二式歩兵砲、所謂“大隊砲”を装備する歩兵砲小隊が大隊に配置されていた」

深海「戦前の場合、小隊には擲弾筒分隊があるけど、中隊には支援火器が無かったからね。強力な重火器を持つ最小単位が大隊だったってわけだ」

神楽「そうした支援火器の存在も大隊が“戦術単位”と呼ばれる所^ゆ以^{えん}なのね」

荻原「大隊行李ってなんですか？」

深海「ようするに大隊が使う弾薬や物資を運ぶ輸送部隊だね」

神楽「警備防空班には12・7ミリ重機関銃M2や携帯式地对空誘導弾が配備されているぞ」

――陸軍機械化歩兵大隊――

歩兵大隊

└大隊本部

└大隊本部付中隊

└斥候小隊

└大隊行李

└警備防空班

└通信班

└衛生班

└作業班

└狙撃班

└歩兵中隊×4

└歩兵砲小隊（自走150ミリ迫撃砲×4）

※二六式歩兵戦車装備の大隊は四〇式自走対戦車誘導弾4輜装備の対戦車小隊を保有

神楽「次は機械化歩兵大隊だね」

萩原「さっきより本部が豪勢になっていませんか？」

深海「確かに」

神楽「軽歩兵師団の場合は師団―連隊―大隊という建制になっていて、大隊は特定の連隊に隷属しているから、後方支援については連隊の支援を受けるようになっていくけど、機械化師団の場合は師団―旅団―大隊になっていて・・・」

深海「一昔前のアメリカ陸軍みたいに固有の部隊を持たない旅団司令部に、必要に応じて独立大隊を臨機応変に配属するシステムになっているのかい？」

神楽「そういうこと。軽歩兵大隊みたいに固有の上級部隊を持たないから、代わりに大隊の後方支援機能が強化されているわけね」

萩原「いろいろな部隊があるんですね」

神楽「通信班は大隊内の通信を管理する。衛生班には軍医が所属していて戦場で救護所を開設するとともに、各部隊に衛生兵を派遣する。作業班は大隊直属の工兵部隊で、塹壕掘りなどを支援する。斥候小隊は大隊独自の偵察部隊」

深海「自衛隊の普通科連隊にある本部付中隊と似たような構成だね」

―海軍陸戦隊歩兵大隊―
歩兵大隊

―大隊本部

―大隊本部付小隊

―斥候小隊

―大隊行李

―警備防空班

―通信班

―衛生班

―作業班

―狙撃班

―歩兵中隊×3

「歩兵砲小隊（81ミリ迫撃砲×4）」

荻原「海軍陸戦隊大隊も陸軍機械化歩兵大隊に近い編制ですね」

神楽「海軍陸戦隊にも歩兵連隊が無いからね。大隊のすぐ上に陸軍の旅団に相当する特別陸戦隊司令部がある」

深海「海兵隊みたいな緊急展開部隊的な性格があるなら、独立性の高い大隊も納得できるね。非常時に備えて大隊単位で交代しながら待機して、事変が発生したら待機している大隊がひとまず出撃！といった運用もできるだろう」

荻原「陸軍だと中隊についている81ミリ迫撃砲が海軍陸戦隊の場合は大隊に配置されているんですね」

神楽「海軍陸戦隊は軽快さを求めて装備も身軽だからね」

―砲兵大隊―

砲兵大隊

―大隊本部

―大隊火力指揮所^{FDC}

―観測小隊（観測班×4）

―大隊段列

「野砲中隊×3

―中隊指揮班

―砲列小隊（野砲×3）×2

―観測小隊（観測班×4）

―中隊段列

萩原「次は砲兵大隊ですね」

神楽「砲兵の基本単位も中隊で、陣地構築も射撃も通常は中隊単位で行う。なぜだと思う？」

萩原「分かりません」

深海「中隊は砲撃をするのに必要な全ての要素を一通り揃えているからさ。大砲だけあっても砲撃はできないからね」

神楽「兵器紹介で述べたように近年の砲兵射撃は味方の指示に基づいて、砲兵部隊から直接見えない目標に向けて砲撃する間接射撃が主流。だからまず前線に出向いて目標を見つけて位置を観測する為の“観測”隊が必要」

深海「そして観測隊の報告を基に砲撃を指揮する“指揮”班がある。その指揮に基づいて“大砲”が砲撃をするわけ」

神楽「弾を撃ったら、攻撃を続ける為には砲弾を追加する必要がある。現代の火力戦は弾薬をしこたま消費するからね。つまり“補給”を行う段列が必要になる」

深海「これら砲撃を行うのに必要な4つの要素、“観測”“指揮”

“大砲”“補給”の各部隊が一まとめになっている最小の単位が中隊なんだ」

萩原「なるほど。確かに編制を見るとそうなっていますね。段列が補給部隊ですね」

神楽「勿論、あくまで基本であって必要に応じて中隊以下に分割することもあるけどね」

深海「1個中隊6門で、1個大隊18門か。戦前の日本陸軍だと4門中隊が3個で1個大隊が12門だったから増強されているわけだ」
神楽「軽歩兵師団だと牽引式155ミリ榴弾砲が、機械化師団だと155ミリ自走砲が配備されます。海軍陸戦隊はちと特殊で、105ミリ牽引砲装備の中隊3個と155ミリ牽引砲装備の中隊2個で1個大隊を編制するの」

深海「大隊の中で直接支援と全般支援に分かれているわけか」

神楽「海軍特別陸戦隊は旅団規模の部隊で、砲兵連隊を持たないからね」

荻原「そして大隊本部には兵器紹介でも触れた火力指揮所がありますね」

深海「戦闘時には前線の観測班が得た情報は全てFDCに集約されて、各中隊に射撃目標を割り振る。必要に応じて同じ目標に全ての中隊の射撃を集中させることもできる」

神楽「観測班を各中隊が4班、さらに大隊本部直轄の4班があるから、合計で16班。つまり大隊単独だと16の目標に対して射撃を加えることができるわけだ」

深海「さらに言えば射程圏内であれば、どの中隊も16の目標に対して攻撃を加えられる。兵器紹介で触れたようにFDC登場以前の各砲兵隊直属観測班にのみ頼るやり方だと、中隊は各自の観測班が捉えられる数だけ、つまり4つの目標にしか攻撃を加えることができない」

神楽「画期的なんだね」

深海「そして観測班の数が攻撃できる目標の数に直結するというのも憶えておこう」

神楽「実戦では師団の基幹となる連隊や旅団ごとに砲兵大隊が配属されるのが普通で、観測班はさらに下の単位に配属される。この編制図の場合は1個中隊につき観測班1個が配属される」

深海「ちなみに歩兵中隊は英語でカンパニーだと前に言ったが、砲兵中隊はバッテリーだ」

荻原「野球ですか？」

神楽「語源は同じだね。“打ったり”“叩いたり”という意味、さらに“一揃い”という意味があるらしい」

深海「砲兵中隊の正確がよく現れているね」

― 搜索連隊／大隊 ―

搜索連隊／大隊

― 連隊／大隊本部

― 戦車中隊（戦車×14）

― 装甲車中隊（偵察用装甲車×14）×2

― 歩兵中隊×2

萩原「搜索連隊っていうのは、ようするに偵察部隊ですよ」

深海「そうだね。主力部隊に先駆けて敵と接触し、情報を集めるのが主な任務だ。前衛部隊とも言われる」

神楽「敵と接触を保って情報を収集するのが任務だから、とにかく相手が動きに追従できる機動性が求められる」

深海「昔は騎兵が偵察任務を担っていたのも機動性が必要だったから。機械化も早かった」

神楽「そして機甲兵の兵器でも述べたように、敵に攻撃をしかけてそれに対する反撃の様子から相手の兵力や装備を探る威力偵察が実施されることもあるから、機関砲のような強力な武器を装備する装甲車輛が配備されるなど高い戦闘能力を持つ場合も多い」

深海「編制例や自衛隊の第7師団偵察隊、アメリカ軍の機甲騎兵のように戦車が配備されていることもあるね」

萩原「ええと、つまり偵察部隊は高い機動力と戦闘能力を持っているんですね」

神楽「かなり有力な戦力を持っている。だから偵察だけじゃなくて、敵の偵察部隊の排除したり、進撃する部隊が横から攻撃を受けないように側面を警戒したり、といった任務も与えられる」

深海「さらには機動打撃力として主力の戦車部隊のように使われたり。硫黄島の戦いで活躍した“バロン西”こと西竹一中佐率いる戦車第26連隊も元々は戦車第一師団搜索隊だもんね」

萩原「劇中だと、搜索第20連隊がまさにそのように使われていましたね。それで編制例ですが…」

神楽「劇中では陸軍師団は搜索“連隊”が配備されていて、機械化師団の場合は例のような戦車中隊込みの5個中隊、軽歩兵師団の場合には戦車中隊の抜けた4個中隊となっている」

深海「“世紀末の帝国”劇中の描写では機械化師団の搜索連隊歩兵中隊は歩兵戦闘車を装備しているね」

神楽「機械化師団は装甲車で完全に装甲化されている。軽歩兵師団ではトラック化歩兵に過ぎないけど。海軍陸戦隊は搜索“大隊”。

装甲車中隊と装甲化歩兵中隊の2個中隊編制」

萩原「陸軍に比べると小規模ですね」

深海「まあ旅団規模の部隊を基幹にしているんだから、当然といえば当然だけど」

神楽「ところで作者は編制例がどうもしっくりしていないらしい。歩兵隊の比率が高すぎるような気もするし、中隊単位で諸兵科連合にした方がそれっぽかったかな？とも思っている」

萩原「中隊単位で諸兵科連合？」

深海「編制例は歩兵、装甲車、戦車と中隊ごとに分かれているけど、それを装甲車小隊、歩兵小隊、戦車小隊から成る同一の編制の中隊複数にしたらどうだろうって話だな」

――改編例――

搜索連隊

└連隊本部

「搜索中隊×3

└戦車小隊

└装甲車小隊×2

「歩兵小隊

神楽「ちょっと前のアメリカ軍機甲騎兵もこんな感じだったらしい。諸兵科連合を最初から組んでおけば戦場で編成弄くる必要ないから時間を省略できるし、中隊単位で単独行動できるから使い勝手が良

さそうなんだよね」

深海「まあ偵察部隊は資料が少ないからね。歩兵とかに比べると悩むんだよね」

神楽「そして騎兵中隊は英語でスコードロン。空軍や海軍航空隊の飛行隊、海軍の戦隊もスコードロンだね」

深海「ネットで調べたところ語源は“四方”で、転じて“正方形に隊列を組むもの”ということらしい」

―戦車連隊／大隊―

戦車連隊／大隊

―連隊／大隊本部（戦車×2、装甲兵車×2）

「戦車中隊×4

―中隊本部（戦車×2、装甲兵車×1）

「戦車小隊（戦車×4）×3

荻原「次は戦車部隊ですね」

神楽「“世紀末の帝国”の劇中では陸軍が戦車連隊、海軍陸戦隊が戦車大隊ね」

深海「小隊4輜、中隊14輜、連隊58輜か。ちなみに日韓大戦の自衛隊も1個中隊14輜となっているな」

神楽「中隊以上は部隊によって変わる。機械化師団の戦車連隊は大抵4個中隊編制だけど、部隊によっては3個中隊や2個中隊編制の場合もある。ちなみに海軍陸戦隊戦車大隊は3個中隊編制」

深海「特に他に言うことはないか」

神楽「ないね」

荻原「ないですか」

神楽先生と編制を学ぼう 連隊編

萩原「次は連隊ですね」

深海「連隊は陸軍において特別な地位にある。通常は地域ごとに編制され、その土地に根付いている。独自の連隊旗が与えられ、部隊ごと古くからの伝統を維持し、将兵は連隊に帰属意識を持つ」

神楽「単なる部隊単位ではなく、兵士の心の拠り所でもあったのね。だから連隊には固有の番号が与えられ、独立心が強い。連隊長は海軍で言うと艦長に相当するような立場にある」

萩原「軍や将兵にとって思い入れが強いんですね」

深海「そうだね。部隊の解説の前に、それを示す事例を幾つかの事例を紹介しよう」

―アメリカ陸軍と連隊―

深海「実はイギリス軍とアメリカ軍には戦闘単位としての連隊というのはい部の例外を除いて存在しない」

神楽「イギリスの場合は歩兵連隊限定ね。戦車連隊や騎兵連隊などは普通に戦場に出てくる。まあ規模的には大隊級の部隊だからね」

深海「どちらも師団―旅団―大隊という編制になっているんだ」

萩原「それは分かりましたが、“戦闘単位として連隊”というのはどういう意味なんですか？」

神楽「イギリス軍は後にまわして、まずはアメリカ陸軍について紹介しましょう。アメリカ陸軍には連隊がありません。幾つかの独立大隊を束ねて旅団を編成するの」

深海「でも、なぜかアメリカ軍の独立大隊には“連隊”の名を冠している。第4騎兵連隊第一大隊とか、第66機甲連隊第二大隊とか、第442歩兵連隊第100大隊とか」

神楽「ちなみに最後のは、言わずと知れた日系人部隊だよ。今でもハワイ州兵の部隊として存続している」

荻原「連隊に所属していないのに、連隊を名乗っているんですか？」
深海「アメリカ陸軍では1950年代から1960年代にかけて“次なる戦争”に備えて師団編制を試行錯誤していた。ペントミックス師団、ROAD師団と変遷していくにつれて従来の連隊は存在が希薄化していき、ROAD師団において独立大隊が旅団に直接隷属するようになり、アメリカ陸軍から連隊が消えた」

神楽「ここで問題になったのは連隊という部隊の伝統と団結をどうやって維持するかということだった」

荻原「それで連隊が無くなった後も、連隊を冠している？」

深海「そういうことだね」

荻原「なんかよく分かりません」

神楽「軍隊は理屈だけじゃ理解できない部分というのが多々あるからね。連隊への拘りなんて、そのもつともたるものでしょう」

深海「ちなみに翻訳された海外の軍事小説を読んでいると時折、1／37機甲大隊とか、2／13歩兵部隊とかよく分からない部隊呼称が出てくるけど、これはそれぞれ第37機甲連隊第一大隊、第13歩兵連隊第二大隊という意味だろうね」

神楽「米軍では省略して1／37 Armor、2／13 Infantryなどと表記されることが多いから、それを直訳しちゃったんだね」

—イギリス陸軍と連隊—

深海「イギリス軍もまた独特だね。イギリス軍も師団—旅団—大隊という編制になっている。それも大戦前から」

神楽「珍しい軍隊だけど、これはイギリス陸軍が封建時代の伝統を特に色濃く受け継いでいることに関係する。連隊というのは王族や貴族といった有力者の所有物なんだ」

深海「ちなみにイギリス軍は海軍、空軍はRoyalを冠している。つまり王の軍隊だ。だが陸軍だけはBritishを冠している。つまり議会の議決のもとで有力者達が私物の戦力を提供して编制される軍隊ってことだ」

神楽「まあ、あくまで建前で現在は普通に国軍だけだね」

深海「そういう訳で連隊は実戦部隊を管理するための組織として存在している。そして、戦時には大隊単位で部隊を派遣して、野戦部隊を编制するわけだ」

荻原「それで戦闘組織としての連隊は存在しないけど、管理組織として連隊は存在していて、古くからの伝統を受け継いでいると？」

神楽「そう。だからイギリスの連隊は味気ない番号だけじゃなくて地名などを名前に使っている」

深海「戦車連隊や偵察連隊でもランサーズ槍騎兵とかドラゴン龍騎兵とかを名乗っている部隊もあるしね」

— 陸軍軽歩兵連隊 —

神楽「それでは“世紀末の帝国”劇中の歩兵連隊を見てみましょう」

深海「一般的に歩兵連隊は単一の兵科で编制される最大の単位と言われている。つまり歩兵連隊であれば、歩兵だけで编制されるってことだ。それ以上の部隊だと通常は複数の兵科から编制される」

神楽「勿論、一般的な話だから例外もある。冷戦末期のソ連軍の自動車化狙撃連隊や戦車連隊がその代表格だろうね」

深海「旧ソ連軍の自動車化狙撃連隊は他国で言う機械化歩兵連隊なんだけど、固有の戦車大隊や砲兵大隊が编制に含まれていた」

荻原「編成じゃなくて编制ですか？」

深海「そう。旧ソ連軍の連隊は小さな師団の如く平時から諸兵科連合部隊になっているんだ」

神楽「また管理自営部隊であり、自前の後方支援組織を持ち、ある

程度は上級部隊の支援を得ずに独自行動ができる」

歩兵連隊

└連隊本部

└連隊本部付中隊

└連隊通信隊

└斥候小隊

└衛生小隊

└作業小隊

└連隊行李

└警備防空班

└歩兵大隊×3

「対戦車中隊

「対戦車小隊（対戦車誘導弾発射機×4）×3

深海「本部付中隊は自衛隊連隊のものを参考にしたそうだ」

神楽「こうした後方支援組織の存在が連隊を管理自営部隊たらしめている」

深海「戦前の陸軍連隊には連隊に四一式山砲4門装備の連隊砲中隊と対戦車砲4門装備の速射砲中隊があったが、対戦車中隊が速射砲中隊の後任として、連隊砲はどうなった？」

神楽「連隊砲の任務は師団戦車隊が引き継ぐことになりました。装備は大隊歩兵砲隊に譲った」

深海「そして大隊砲は中隊へか」

神楽「ともかく、連隊にはこれで2600から3000人くらいの将兵が配置されている」

深海「自衛隊の旅団と同じくらいだねorz」

荻原「そういえば自衛隊の師団は他国に比べて小さいと聞きました、なぜですか？」

深海「それはね。自衛隊がペントミック師団を採用しているからだ

よ」

萩原「ペントミック？」

―ペントミック師団の連隊―

神楽「ペントミック師団は1950年代にアメリカ陸軍で考案された新しい師団編制だ。核戦争への対応を主眼としている」

深海「大規模な核攻撃に直面したら、どんなに強力な師団だって無力だからね。核攻撃を受けたときに被害を局限できるように編制を変えたのさ」

萩原「それがペントミック師団」

神楽「ペントミックは5と核兵器をかけあわせた造語ね。それまでの師団は3から4個の歩兵大隊から成る歩兵連隊をやはり3から4個持っているのが普通」

深海「だがペントミックでは大隊を廃止して、5個の歩兵中隊を直接指揮する歩兵連隊5個から編制されている」

萩原「だから5なんです」

神楽「そうね。どうしてこういう編制になったかという、同じ兵力でも1つ1つの戦闘単位を小さくして、単位そのものの数を増やそうとしたからなの」

深海「従来型の連隊の場合は3個くらい的大隊から編制されていて、その下に大隊あたり3つから4つの中隊があるわけだから、連隊だと9から12個の中隊があることになる」

萩原「ペントミック師団の連隊は5個中隊ですから、従来型の連隊の半分ですね」

神楽「だからその分だけ連隊あたりの兵員数が減って、代わりに普通の師団よりも多くの連隊があるわけ」

萩原「でも、そうするとどんないいことがあるんですか？」

深海「兵員数が減れば、その分だけ素早く移動することができる。」

トラックや装甲車は少数で済むし、一度散らばった兵士を集結させるのも短時間で済むしね。部隊としての機動力が上がるんだ」

神楽「一箇所に留まっていたら敵の核攻撃を受ける可能性が高まるからね。敵の標的にならないように移動し続ける為にも少人数なのはいいこと」

深海「そして連隊という部隊単位が増えることで師団の作戦の柔軟性がある。動かせる手駒が増えるわけだからね。それに1つ連隊を失っても、まだ手元には4つ残るからね」

荻原「なんだか凄い世界ですね」

神楽「少人数化による機動力の向上、そして限られた人数でも手駒を増やして柔軟性の向上。これがペントミックスの特徴。核戦争を戦う為にはそれが有利だと考えられたんだ」

深海「でも、アメリカ軍は結局やめちまったけどね」

荻原「なぜですか？」

神楽「指揮官への負担が大きくなるから。例えばペントミックス連隊には5個小銃中隊と迫撃砲中隊がある。連隊長は同時に6つの部隊に指示を出さなくてはならない」

深海「さらに戦時には戦車部隊や砲兵部隊も配属される。指揮する部隊が多すぎて、指揮官がついていけなかったんだ」

荻原「大変ですね」

神楽「かくしてアメリカ陸軍は前述したように1960年代には、固有の戦闘部隊を持たない旅団司令部に独立大隊を配属するROA D型師団に移行したわけだけど、世界にはペントミックス型師団をそのまま受け入れた軍隊が2つ存在する」

深海「フランス陸軍と日本の陸上自衛隊だ。フランス軍の場合、1950年代はアルジェリア戦争の真っ只中だったからね。機動力が高くて少人数でも手駒が多くなるペントミックス師団は神出鬼没のゲリラに対する掃討作戦に大変マッチしていたんだ」

神楽「そして陸上自衛隊は政治的に兵員数を制限されていたからね。しかも日本は狭い国だと思われがちだけど、周りの国がデカ過ぎる

だけで欧州列国に比べても面積は小さくないし、しかも南北に細長くて海岸線は非常に長い。守らなくてはいけない防衛線が大変長い。だからそれを守るには多くの部隊が必要」

荻原「少人数でもたくさんの方隊を持てるペントミックがぴったりというわけですね」

深海「そういうことだ。これが陸上自衛隊の標準的な普通科連隊の編制だ」

普通科連隊

―連隊本部―本部付中隊

―小銃中隊×3―4

―小銃小隊×3―4

―対戦車小隊（87式対戦車誘導弾etc）

―軽迫撃砲小隊（81ミリ迫撃砲）

―重迫撃砲中隊（120ミリ迫撃砲）

神楽「まあ、あくまで標準で、実際には近年の防衛予算と人員の削減で…」

深海「それ以上言うなあああ！」

荻原「…（苦笑）」

―砲兵連隊―

神楽「次は前回に引き続き砲兵隊を紹介するよ」

深海「砲兵連隊は複数の砲兵大隊から編制される。どこの国でも通常は基幹となる連隊の数に1つプラスした数の砲兵大隊を持っている」

荻原「兵器紹介砲兵の兵器編でもやっていましたね。基幹となる連隊というのは歩兵師団なら歩兵連隊、戦車師団なら戦車連隊でした

っけ？」

神楽「そうね。3個歩兵連隊から成る歩兵師団の場合、砲兵連隊は4個砲兵大隊から編制される。3個はそれぞれ担当の歩兵連隊を支援する直接支援大隊で、残りの1つがより広範な支援をする全般支援大隊」

深海「DS大隊は担当の歩兵連隊や戦車連隊が直面している敵前線部隊に対して砲撃し、味方の突破を支援したり敵の攻撃を阻止したり、また敵前線部隊の迫撃砲を制圧したりする」

神楽「一方、GS大隊は敵前線部隊の後方にある補給部隊や敵増援部隊、さらに味方を攻撃する敵砲兵部隊を攻撃する。必要なら重要な正面のDS大隊の増援に回るときもあるだろう」

荻原「大隊によって役割分担をしているわけですね」

深海「ただ、こうした区分けは曖昧になりつつある。無線やデータリンクのシステムが発達するにつれて砲兵はより柔軟に攻撃ができるようになるからね。十分な観測能力と無線通信ネットワークがあれば、DS・GS関係なくどの大砲も射程圏内にある限りあらゆる目標を狙える」

神楽「昔はDS大隊は機動力の高い軽量砲、GS大隊は射程の長い重砲と役割に応じて大砲を使い分けてたけど、今は師団砲兵は150ミリ前後の榴弾砲で統一するのが普通だし、必要なら1つの目標にすばやく師団砲兵全門を集中して攻撃することもできる」

荻原「役割分担をする必要は薄くなったということですか」

深海「まあある程度、分担を決めておいたほうが作戦は建てやすいのだろうけどね」

神楽「それでは“世紀末の帝国”劇中の師団砲兵連隊を見てみましょう」

砲兵連隊

―連隊本部

―連隊火力指揮所

―観測中隊（対砲兵レーダー）

―「連隊通信隊

」砲兵大隊（155ミリ榴弾砲装備）×4

「^{ロケット}噴進砲大隊

」噴進砲中隊（自走ロケット発射機×8）×3

神楽「というわけで、“世紀末版”帝國陸軍師団の砲兵火力は、155ミリ榴弾砲72門と自走ロケット発射機24輦でございます」

深海「史実の陸軍の標準的な師団砲兵火力が75ミリ野砲24門と105ミリ榴弾砲12門だから、まさに雲泥の差だな」

荻原「ところで対砲兵レーダーってなんですか？」

神楽「対砲兵レーダーってのは、敵の発射した砲弾の軌道を観測するレーダーだよ。軌道を追うことで敵の砲兵部隊がどこに布陣しているのが分かるの」

深海「現在の砲兵戦には無くてはならないアイテムだな」

荻原「なるほど。ところで自衛隊の砲兵隊もペントミック編制を採用しているんですか？」

深海「自衛隊では砲兵のことを特科と言って、各師団には特科連隊を配置しているが、これは連隊一大隊一中隊というように一般的な連隊の編制を採っている」

神楽「歩兵は縮小編制を採用する一方で、師団砲兵は諸外国の師団並みに整えているわけだ。自衛隊がいかに砲兵火力を重視していたか分かるね」

深海「“旅団に師団砲兵がついている”って揶揄されたりしたものだよ。まあ、それも今は昔だけどさ…」

荻原「大砲400門ですからね」

神楽「師団砲兵は大隊規模の特科隊ばかりになりそうな」

深海「もう放っておいてくれ」

神楽先生と編制を学ぼう コラムその2

―数字への拘り―

神楽「前回、連隊は陸軍将兵の伝統と団結の基幹だと説明したね」

深海「陸軍将兵は自分の所属する原隊への帰属意識は強い。今回はそれを如実に示すエピソードを紹介するよ」

荻原「数字ですか。それって部隊番号のことですか？」

神楽「ええ。第〇師団とか、第〇〇連隊とか、陸軍部隊に数字は欠かせない」

深海「それ故に所属する将兵にとっては、単なる数字以上のものがある。部隊番号こそ部隊の伝統と団結を背負うものなんだ」

神楽「たとえば陸上自衛隊の第11戦車大隊は旧軍の戦車第11連隊の伝統を受け継いでいる」

深海「戦車第11連隊は太平洋戦争末期に千島列島の占守島に布陣し、侵攻してきたソ連軍部隊相手に奮戦した部隊で、“土魂”という言葉を部隊の愛称として使っていた」

神楽「第11戦車大隊はそれも受け継いで“土魂戦車大隊”を名乗っている。所属する自衛官にとってはそれを受け継ぐことは大変名誉なことなのでしょうね」

深海「今回はそうした“数字”と“兵士”の繋がりを示すいくつかの事例を紹介しようとおもう」

1. アメリカ陸軍第7騎兵連隊の例

荻原「ええと、確か作者が“にじふあん”に投稿しているストライクウィッチーズの二次創作に登場する部隊ですね」

神楽「実際のベトナム戦争でも世界初のヘリコプター機動部隊である第1騎兵師団の所属部隊としてベトナム戦争に従軍し、イア・ドラン溪谷の戦いを戦っている。敵はネウロイではなくて北ベトナム

軍だけだね」

深海「その戦いの様子は映画『ワンス・アンド・フォーバー』や、その原作である当時の第7騎兵連隊第1大隊指揮官ハル・ムーア中佐の著作に詳しく描かれている。それにしても、どうして『私達は兵士だった、そして若かった』が『そして永遠に』になるんだ」

神楽「元々、ハル・ムーア中佐指揮する大隊は、ヘリコプター機動作戦を実証するための実験部隊である第11空中突撃師団の第23歩兵連隊第2大隊だったの。それがベトナム派遣にあわせて改編されたの」

深海「第1騎兵師団も、第7騎兵連隊も、アメリカ陸軍史にその名を残す伝統ある部隊だ。最初に師団の方が改名された」

神楽「第1騎兵師団は第二次世界大戦中には太平洋戦線を戦い、終戦後には日本の占領任務に参加。朝鮮戦争では韓国に派遣され、休戦後も韓国に駐留していた。それがベトナム戦争の頃になって一旦解隊されて、代わりに第11空中突撃師団が第1騎兵師団に改名された」

深海「余談だけど、北朝鮮の拉致被害者である曽我ひとみさんの夫であるチャールズ・ジェンキンス氏も韓国駐留時代の第1騎兵師団に所属していた。第1騎兵師団のベトナム派遣の噂も脱走の一因だったらしい。実際には派遣する頃には中身は別の部隊になっていたわけだけど」

神楽「そして師団の改名を聞いた師団第3旅団の指揮官が配下の部隊にも同じように伝統ある部隊の名を引き継がせようと考えたんだ」
荻原「それで第7騎兵連隊ですか。有名な部隊なんですか？」

深海「有名なのはリトルビッグホーンの戦いだね。カスター將軍率いる第7騎兵隊がインディアン連合軍に大敗した戦いだ」

神楽「負け戦であるが、アメリカ陸軍史においては重要な戦いだ。そして、歴史ある部隊である第7騎兵隊には多くの伝統がある。それが連隊歌“ゲイリー・オーウェン”だ」

荻原「それもストライクウィッチーズ1970に出てきましたね」

深海「“ゲイリー・オーウェン”は連隊旗にも刻まれているし、隊内の掛け声にもなっている。そうした伝統をハル・ムーア中佐の大隊も引き継いだ」

神楽「中佐の著作では“伝統も受け継ぐことにすると、隊員たちは両手を挙げて賛成した”（『ワンス・アンド・フォーエバー』（著：ハロルド・G・ムーア、ジョゼフ・L・ギャロウェイ／角川文庫）P70）という記述がある。伝統の部隊の名を引き継ぐことで将兵の士気と団結が高まったんだ」

2. アメリカ陸軍第442歩兵連隊第100大隊の例

深海「第7騎兵連隊は過去の伝統ある部隊の名を引き継いだ例だけど、今度は逆に部隊の伝統を守るために改名を拒否した事例だ」

神楽「日系人部隊として知られる第442連隊戦闘団は配下の歩兵大隊の番号が、第100大隊、第2大隊、第3大隊と変則的になっていた」

萩原「変ですね」

深海「元々、第100歩兵大隊は連隊に属さない独立大隊だったんだ。後に編制された第442連隊戦闘団に先駆けて欧州戦線に派遣され、多大な戦果を収めた」

神楽「そして第442連隊戦闘団も第100歩兵大隊に続いて欧州に派遣された。この時、第442連隊はアメリカ本土に第1大隊を訓練部隊として残っていた。つまり1個大隊を欠いていたんだ」

深海「本土に残った第1大隊は第171歩兵大隊に改名されている。そこで第100歩兵大隊を第442連隊の第1大隊として編入することになったんだ」

神楽「普通なら第100大隊は第442連隊第1大隊に改名することになるんだけど…」

深海「これまでの第100大隊の勇戦に報いるために、特別に第100歩兵大隊という部隊番号を名乗り続けることが認められたんだ」

萩原「なるほど」

神楽「現在もハワイ州兵の部隊として第442歩兵連隊第100大隊は存続している。第100大隊の激戦の記憶を部隊番号の形で後世に継承しているのね」

3. 韓国陸軍第15歩兵連隊の例

深海「これも第100歩兵大隊と似た例だね。韓国陸軍第15歩兵連隊は朝鮮戦争中、韓国陸軍第1師団の一員として戦った。有名なペク・ソニョップ將軍の部隊だね」

萩原「彼も独楽犬作品に時折名前が登場しますよね」

神楽「元々、韓国陸軍第1師団は第11、12、13歩兵連隊の3個連隊から編制されていた。しかし朝鮮戦争緒戦で大打撃を蒙ってしまったの」

深海「そこで増援部隊として派遣された第15歩兵連隊と特に損害が大きかった第13歩兵連隊を合併することになったんだ」

神楽「部隊番号は第13歩兵連隊になった。第1師団所属の連隊は本来、第13歩兵連隊だからね」

深海「納得いかないのは現場の将兵だった。連隊長をはじめ部隊の過半を超える将兵が元々第15歩兵連隊の兵士だったからな。第13歩兵連隊を名乗るには抵抗があった」

神楽「そこで連隊長は師団長であるペク將軍に第15歩兵連隊への改名を直談判したの。その様子は白將軍の著作である『若き將軍の朝鮮戦争』（草思社）でも触れられている」

深海「將軍は“連隊番号がどちらであろうと困ることはない。連隊番号を一五にして戦力を発揮できるというなら、そうすべきだ”（同書、P197）として受け入れ、それから第15歩兵連隊として戦うことになる」

神楽「ペク將軍はこのエピソードについて“平時の感覚では理解できないかもしれないが、しかし、これが戦場の実相なのである”（

同書、P197—198）と評している。いつ死ぬかも分からない戦場で戦う将兵にとって、部隊番号はまさに“心の拠り所”だったのね」

荻原「たかが番号、されど番号なんですネ」

4・英仏陸軍の例

深海「こうした例を見れば、軍人達がどうして軍縮に反対するか、その心情が理解できると思う」

神楽「勿論、実際の戦力、抑止力、影響力、さらには高級将校のポストといった実害への危機感というのものもあるのでしょうけど、部隊番号が消失することへの抵抗という要素も決して無視できない筈」
深海「1つの部隊が消えるということは、1つの伝統と歴史が消失することになるからね」

荻原「アメリカ陸軍の独特な部隊命名法もそれを守るのが目的ですからね」

神楽「そう。そういう風に部隊の歴史と伝統を少しでも後世に残していくこうと各国軍とも様々な努力をしている。特に冷戦終結以後、大規模な軍縮が進められようになったから尚更だ」

深海「たとえばフランス陸軍部隊の戦車部隊がその例として挙げられるだろう。フランス陸軍では冷戦終結後、多くの戦車部隊が統合された」

神楽「普通、2つの部隊が1つに合併されたら、どちらかの名前を継承するのが普通よね？たとえば第1連隊と第8連隊が合併したら、第1か第8のどちらかを名乗るもの」

深海「ところがフランス陸軍は両方の名を継承することにした。第6Ⅱ第12胸甲騎兵連隊とか、第501Ⅱ第503戦車連隊のよう
にね」

神楽「前者は第6胸甲騎兵連隊と第12胸甲騎兵連隊が、後者は第501戦車連隊と第503戦車連隊が合併した部隊ね」

萩原「くっつけちゃったんですか」

深海「くっつけちゃったんだ。そして、それを究極的に推し進めたのがイギリス陸軍だ」

神楽「イギリス陸軍の場合、連隊同士が統合した時には、統合した後の連隊番号は元の連隊番号を繋げたものになっている」
深海「ロイヤル・アングリアン連隊の場合、ウィキペディアによれば“第9、10、12、16、17、44、48、56、58連隊”だ」

萩原「はっ？」

深海「だから、第9、10、12、16、17、44、48、56、58連隊だ」

神楽「またロイヤル・スコットランド連隊の場合は“第1、21、25、42、71、72、73、74、75、78、79、91、92、93連隊”ね」

萩原「ええと。つまり、これまで併合したすべての連隊の番号を繋げているってことですよね」

深海「そういうことだ」

神楽「すごいでしょう？」

―三単位か四単位か、それとも二単位か―

深海「それでは実践的な話に入ろう」

萩原「単位ってなんの数ですか？」

神楽「ある部隊が配下に持つ下級部隊の数のことね。例えば歩兵師団があつて、その下にある歩兵連隊の数が4つであれば四単位師団、3つであれば三単位師団となるね。大抵の場合は三単位か四単位が普通」

深海「ちなみに自衛隊ではその昔、四単位師団を甲師団、三単位師団を乙師団と呼んでいた」

萩原「前に紹介されていたペントミック師団だと五単位になるんですよね？」

神楽「そうね。だけど、指揮する部隊の数が増えると指揮官の負担が大きくなる。ペントミックもそれで失敗したからね。だから普通は四単位くらいが上限になる」

深海「一方、部隊の数が減れば柔軟性が失われる。複雑な作戦を行うには手駒が多いほうがいい」

萩原「それで三単位か四単位に収斂していくわけですね」

神楽「それではある師団における連隊の数を具体例として、三単位と四単位の長所、短所を見ていきましょう」

1、同じ兵力の連隊で、三単位か四単位か

深海「まずは連隊の兵力を同じとした場合を考えてみよう。この場合、四単位師団の方が三単位師団に比べて連隊一個分だけ師団の兵力が多くなることになる」

神楽「つまり、その分だけ師団の戦力が単純に大きいということね。それにその分だけ損害にも強い」

萩原「どういうことですか？」

深海「例えば兵力2万人の師団と1万人の師団があったとしよう。それで戦闘で5000人の兵力が失われたとしたら？」

神楽「2万人の師団なら失われた兵力は全体の4分の1。25%ね。軽微とは言えないけど、決して埋められない損害ではないでしょう」

深海「一方、1万人の師団なら兵力が半減したことになる。同じ損害でも影響が違うんだ」

萩原「なるほど」

神楽「そして一番重要なのは柔軟性。戦闘を行う場合、いきなり全戦力を投入するということはそうそうない。大抵の場合、決定的なときに備えて予備兵力を確保して、残りの部隊を前線に配備する」

萩原「決定的な時とは？」

深海「例えば敵の攻撃を受けて味方の部隊が突破されそうになった時、そこへ予備部隊を増援に送り込んだ戦線を支えたりする。逆に敵の戦線が崩れそうな予兆が見えてきたら、そこに増援部隊を送り込んで決定打にするとか」

神楽「三単位師団なら2個連隊を前線に配置して、1個連隊を予備にするのが普通ね」

深海「さて、敵を攻撃するにしても正面から攻めるだけが能じゃない。前線の部隊で敵を引き止めつつ、別働隊を派遣して前線を迂回し、敵の後方にまわりこんで補給線を遮断したり、敵の側面から攻撃したり、といった搦め手を使うこともあるだろう」

神楽「三単位師団なら、そういう時には予備の連隊を使うことになるでしょう。でも、そうなる跟前線の部隊が敗れそうになった時に増援として送る部隊が無くなっちゃう」

深海「その点、四単位師団であれば前線に2個連隊を配置し、1個連隊を迂回攻撃に使ったとしても、さらに予備として1個連隊が手元に残る」

萩原「なるほど。なんか聞いていると三単位って利点が無いみたい」
に聞こえるんですが……」

神楽「勿論、そんなことはない三単位師団にも利点はあるよ」

深海「まず師団を構成する人数が少ないわけだから、その分だけ集結や展開が素早く出来る。移動に必要なトラックなども少なくてすむ。人数が少ない方が部隊としての機動力が高いんだ」

神楽「身軽なほうがフットワークが軽いつてわけね。そして利点はもう1つ。陸軍全体の総兵力を同じとした場合、一個師団あたりの兵力が少ない方が、より多くの師団を編制できる」

深海「日中戦争後に陸軍が四単位師団を三単位師団に改編して、余剰連隊をもって新たな師団を編制したのがその良い例だね。日本陸軍は兵力の増強を最小限にして師団を増やすことができたんだ」

神楽「三単位師団にすることで師団レベルでの柔軟性は低くなる。でも、その代わりに戦略レベルの柔軟性が増える。なにしろ陸軍上

層部が動かせる手駒が増えるわけだから」

萩原「手駒が増えれば柔軟性が高まる、ですね」

2、同じ兵力の師団で、三単位か四単位か

深海「それでは師団の兵力が同じな場合に、三単位と四単位でどのような違いがでるか考えてみよう」

萩原「つまり同じ人数の兵力を3つに分けるか、4つに分けるかということですね」

神楽「四単位の利点はさっきと同じね。作戦運用の柔軟性の向上。でもさっきと違って損害に対する耐性は変わらない」

深海「三単位だろうと四単位だろうと、師団の兵力は変わらないという想定だしね。逆に言えば連隊単位では三単位師団の方が兵力が多い」

萩原「つまり三単位師団の連隊の方が戦力が高く、損害に対する耐性に強いと」

神楽「そういうことになるわね」

深海「どちらを選ぶにしろ一長一短だな。だから各国の戦略、戦術、ドクトリン戦闘教義にあわせて、あった編制を選ぶんだ」

3、二単位という選択。アメリカ陸軍旅団戦闘団の事例

神楽「さて、大抵の陸軍は三単位か四単位と言ったけど、勿論、例外がある」

深海「具体的な例を出すと、アメリカ陸軍において師団にかわって戦闘の基本単位になりつつある旅団戦闘団がその例だろうね」

神楽「従来のアメリカ軍では師団の下に3つの旅団と1つの航空旅団があって、旅団には3個の歩兵大隊ないし戦車大隊が配置されるのが普通だった」

深海「それが新しく編制された歩兵旅団戦闘団ないし重旅団戦闘団

の場合は、基幹となる大隊の数は2個だけだ」

注、ストライカー旅団戦闘団は三単位編制です

神楽「他にも偵察部隊である騎兵大隊、砲兵大隊、後方支援部隊なども配置されているが、戦闘の主役となる部隊は2個大隊だけ」

萩原「つまり二単位編制ということですか？」

深海「そうなるね」

神楽「二単位編制の場合、三単位編制の長短をさらに強くすることになるね。つまり旅団の戦力、損害に対する耐性は四単位や三単位の編制に比べて落ちるし、また柔軟性も落ちる。二単位じゃ予備部隊の確保もなかなかむずかしくなる」

深海「一個大隊を前線に、一個大隊を予備にするって使い方もあるが、戦力の半分が予備にっちゃうのは流石にバランスが悪いね。予備の比率が高まるほど、その分だけ前線が弱くなっちゃうわけだし」
神楽「いくつかの中隊を大隊から分離して司令部直轄にするって方法もあるけど、それもまた面倒くさいことだ」

萩原「でも、アメリカ軍が二単位を採用したってことは、それなりに意味があるってことですよね」

深海「そうだね。当然ながら利点もある。まず部隊の機動力が上がることだね。そして旅団あたりの兵力を減らすことで、総兵力が同じなら三単位の場合より多くの旅団を編制できる」

萩原「つまり軍全体では柔軟性が上がるってことですよね」

神楽「その通り。アメリカ軍がそういう編制を採用した背景には、冷戦後の戦略状況の変化がある」

深海「冷戦中はヨーロッパやアジアでソ連正規軍の攻撃を撃退するのがアメリカ陸軍の任務だった。当然ながら陸軍師団はソ連陸軍に對抗できるように重厚な編制となった」

神楽「しかし、冷戦が終わって状況が変化した。敵はソ連から世界各地のテロリストや武装集団、ならず者国家に変わった。新たな敵にはソ連軍のような強力な機甲部隊はないけれど、世界各地の広い範囲に存在し、様々な捌め手を使いアメリカを悩ます」

深海「そうした敵に対抗するには素早く臨機応変に戦力を動かして対抗する必要がある。重厚さよりも機動力が重要になり、同時多発的に発生する危機にも柔軟に対応できるように多くの手駒が必要だ」
萩原「それで旅団戦闘団ですか」

神楽「そう。正規軍同士、機甲部隊同士の激突する大規模な会戦が発生する確率が劇的に下がり、テロのような新たな危機が台頭したからこそ、アメリカ軍は思い切った編制を採用するに至ったわけ」
深海「さらにいえば圧倒的な空海軍とハイテク兵器システムに裏打ちされた自信があつてこそ、正規戦での不利を承知で二単位を採用できたんだろうな」

神楽先生と編制を学ぼう コラムその2（後書き）

加筆修正

・登場兵器紹介 艦艇編その3、その4を加筆修正

神楽先生と編制を学ぼう 師団編

神楽「さて、次は師団について紹介しましょう」

深海「師団は最大の戦術単位である、最小の戦略単位と言われている。政府の戦争計画は師団単位で考案されるものだ。だから各国陸軍の戦力を計る単位として師団の数が主に使われる」

神楽「師団の特徴は諸兵科連合部隊であるということ」

荻原「諸兵科連合部隊？」

深海「つまりだね。これまでの部隊単位、例えば連隊とか大隊というものは普通は単一の兵科で編制される。歩兵連隊なら歩兵のみ、戦車大隊なら戦車部隊のみって風にね」

神楽「だけど、戦場では単一の兵科のみでは戦えない。歩兵だけ、戦車だけが戦場にいたって何の役にも立たない」

深海「多くの兵科が協力して一緒に戦わなくては戦争にならないんだ。砲兵部隊が敵を叩いて、戦車部隊が敵陣を突破、そして歩兵がそれを占領する。勿論、砲弾や食料を補給する兵站部隊も重要だね」

荻原「なるほど」

神楽「そして、そうした様々な兵科の部隊を組み合わせたのが諸兵科連合部隊。こうした部隊がなければ戦争はできない」

深海「その諸兵科連合部隊のもっとも基本的な単位が師団なんだ。独立行動が可能で、単体でも戦争に投入できる。それ故に戦略単位と呼ばれるわけだ」

―陸軍軽歩兵師団編制―

神楽「それでは“世紀末の帝国”劇中に登場する陸軍軽歩兵師団を例に師団の編制を見てみましょう」

師団司令部

- ―歩兵連隊×3～4
- ―砲兵連隊
- ―戦車連隊
- ―搜索連隊
- ―工兵連隊
- ―「工兵中隊×3～4
- ―輜重兵連隊
- ―師団防空隊
- ―「近接支援中隊（対空機関砲×12もしくは近距離地对空ミサイル×12）×3～4
- ―「全般支援中隊（短距離地对空ミサイル×12）×2
- ―師団飛行隊
- ―「観測中隊（観測ヘリコプター×8）
- ―「汎用中隊（多用途ヘリコプター×8）
- ―「整備中隊
- ―師団通信隊
- ―師団兵器勤務隊
- ―師団衛生隊
- ―師団化学防護隊
- ―野戦病院

深海「師団の火力は81ミリ軽迫撃砲108門、120ミリ重迫撃砲36門、155ミリ榴弾砲72門、自走ロケット砲24輜、近距離対空兵器36基、短距離地对空ミサイル24基だ」

神楽「戦車は戦車連隊の中隊数によるけど、標準的な4個中隊編制なら58輜。3個中隊編制なら44輜」

深海「見ての通り、戦場に必要な部隊がだいたい揃っている。師団の基幹となる部隊は歩兵師団であるから、3個ないし4個の歩兵連隊だ。他の部隊はこの歩兵連隊を支援する為に存在している」

神楽「工兵連隊は部隊の進撃路を作り、味方陣地を建築し敵陣地を

破壊する。輜重兵連隊は後方の拠点から物資、弾薬を補給して師団まで輸送する。防空隊は敵航空部隊の攻撃から友軍を守る」

深海「師団飛行隊はヘリコプターを装備し、観測中隊は偵察任務を行う。汎用中隊はUH-1イロコイやUH-60ブラックホークのような多用途ヘリコプターを装備しているが、物資の輸送や負傷者の後送、連絡といった様々な任務に投入されるのだろうか」

神楽「通信隊は師団内の通信網の開設、維持管理。兵器勤務隊は前線部隊が使う兵器の整備や修理を行う。衛生隊は戦場で負傷した兵士を收容し応急措置を施し、必要に応じて後方の野戦病院まで後送する」

深海「化学防護隊は敵部隊が毒ガスや細菌兵器を使うのに備える。

野戦病院は戦場から後送されてきた負傷者を治療する」

神楽「さて、当然だけど連隊などの部隊の下には複数的大隊や中隊があるわけだけど、その下級部隊の数は歩兵連隊の数＋ α であることが多いね」

荻原「砲兵連隊も歩兵連隊の数＋1個大隊でしたね。直接支援大隊が歩兵連隊の数と同じなんでしたっけ？」

深海「その通り。部隊の数を師団の基幹となる部隊、この場合は歩兵連隊と同じにしておけば部隊ごとに担当の連隊を決めて、その連隊の支援に専念できるからね。砲兵連隊以外にもそれは当てはまる」
神楽「工兵や防空隊、戦車連隊にもね。それに支援する連隊の数と部隊の数を同じにしておくと、歩兵連隊を師団本隊から独立して行動させる時にも便利だね」

深海「例えば1個歩兵連隊に砲兵、工兵部隊といった各種支援部隊を配属して戦闘団を編成するでしょう。3個歩兵連隊、3個砲兵大隊から成る砲兵連隊、6個小隊編制の2個工兵中隊から成る工兵大隊を持つ歩兵師団があったとする」

神楽「砲兵の方は簡単だね。3個大隊がそれぞれ担当の歩兵連隊を決めて支援しているわけだから、独立行動を命じられた連隊を担当する砲兵大隊をそのまま配属すればいい」

深海「問題は工兵の方だ。2個中隊のうち1個中隊を配属するとすれば、師団工兵の半分を1個歩兵連隊に振り分けることになる」

萩原「残りの2個歩兵連隊への支援が不足してしまいますね」

神楽「もし各歩兵連隊に均等した兵力の工兵を支援にまわすとした、1個連隊を独立行動させる時には工兵中隊を分割する必要があるね」

深海「つまり工兵大隊は全体で12個小隊の工兵小隊があるわけだから、1個連隊あたり4個小隊を当てることになる」

萩原「各中隊から2個小隊ずつ取り出して、独立行動する連隊に配属すれば勘定があいますね」

神楽「そうね。でもそうやって一々再編するのは大変」

深海「最初から4個小隊編制の中隊3個という編制にしておけば、1個中隊を引き抜いてそのまま配属すれば事足りるからね」

神楽「ただし基幹連隊に配属されたりすることなく独立行動が前提となる部隊は例外。例えば輜重兵連隊とか」

深海「陸軍の場合、補給は原則として下級部隊から上級部隊に取りに行くからね。師団の輜重兵部隊の仕事は、軍団や軍といった上級部隊の補給拠点から物資を受け取って師団の補給拠点まで運ぶこと。連隊や大隊は自前の補給部隊を師団の補給拠点まで送って物資を受け取るわけだから、輜重兵連隊の編制が下級部隊の編制に左右されることはない」

萩原「なるほど。ところで戦闘団ってなんですか？」

神楽「それは次回に」

―陸上自衛隊師団編制

深海「次は日韓大戦に登場するような自衛隊の師団について解説しよう」

神楽「でもまあ、こんな重厚な師団は陸上自衛隊からは姿を消しつ

つあるわけだが…」

深海「重厚たつて諸外国の旅団並だぞ。砲兵は厚いけど…」

神楽「戦車400輦、大砲400門だからね。戦車のうち300輦が北部方面隊に集中配備で、本州への割り当てが100輦という話を信じるなら本州以南の師団の戦車部隊はほとんど消滅するだろうね」

深海「言うな…」

神楽「大砲400門じゃ、特科連隊も維持できない。ほとんどの師団が大隊規模の特科隊に縮小を余儀なくされるだろうね」
深海「だから言わないで…」

師団司令部

└普通科連隊×3~4

└特科連隊

└「特科大隊×4~5

└後方支援連隊

└「第一整備大隊

└「第二整備大隊

└「補給隊

└「輸送隊

└「衛生隊

└戦車大隊

└高射特科大隊

└施設大隊

└通信大隊

└偵察隊

└飛行隊

└化学防護隊

└音楽隊

萩原「普通科連隊が基幹の部隊ですね。やっぱり3個か4個ですか」
神楽「普通科は歩兵部隊の言い換え。ちなみに砲兵は特科、高射砲兵は高射特科、工兵は施設科」

萩原「それじゃあ特科連隊が砲兵連隊ですね。やっぱり普通科連隊の数＋1ですね」

深海「自衛隊の編制は秘密な部分が多いので詳細は不明だが、ウィキペディアの記述を見ると1個中隊5門で、第4特科連隊（九州北部を守る第4師団の師団砲兵）だと16個中隊80門も持っているそうだ」

萩原「“世紀末の帝国”版陸軍よりもすごいんですね」

深海「しかし第6特科連隊（東北の第6師団師団砲兵）は3個大隊6個中隊しかない…」

神楽「すごい格差だね」

深海「施設大隊や戦車大隊の中隊数も普通科連隊の数が基準になっている、いや、いた」

神楽「戦車部隊は減らされる一方だからね」

深海「後方支援連隊は旧軍の輜重兵連隊、武器勤務隊、衛生隊、野戦病院をあわせたような部隊だ。第一整備大隊は担当の部隊を持たず師団全般の兵器の整備を行い、第二整備大隊はそれぞれ担当の部隊を持つ整備中隊を配下に収めて、もっぱら担当する部隊の兵器の整備に専念する」

萩原「第一大隊が砲兵で言うところのGS大隊で、第二大隊はDS大隊ってところなんですね」

神楽「そうだね。音楽隊はようするに軍楽隊だが、有事の際には戦闘要員として司令部や後方地帯の警備に投入されることも想定されているよね」

萩原「なるほど」

―戦前陸軍師団編制―

深海「最近、作者はあることに気がついたらしい」

荻原「なんですか？」

深海「もし、この“神楽先生と編制を学ぼう”シリーズを読んで編制について知りたいと考える物好きが居ても、そいつが求めているのはたぶん独楽犬の小説の劇中に登場する陸軍の編制ではなく、戦前の陸軍の師団編制だろうってことだ」

神楽「なろうの戦記小説の大半は太平洋戦争ものだからね」

深海「というわけで、戦前の日本陸軍の標準的な陸軍師団について解説しよう」

師団司令部

―歩兵団

―「歩兵連隊×3

―野砲兵連隊

―「砲兵大隊×3

―「砲兵中隊×3（野砲×4）

―搜索連隊

―「乗馬中隊

―「乗車中隊

―「装甲車中隊

―工兵連隊

―「工兵中隊×3

―輜重兵連隊

―師団通信隊

―師団衛生隊

―野戦病院×3～4

―師団武器勤務隊

―防疫給水部

神楽「標準的な三単位師団ね」

荻原「連隊の上に歩兵团と言う部隊がありますね」

深海「陸軍の基本は日中戦争の頃まで歩兵連隊4個から編制される四単位師団だったんだけど、その時には2個歩兵連隊ずつ一まとめにした歩兵旅団が編制されていた。そして2個歩兵旅団が師団の下に置かれる」

神楽「歩兵团は歩兵旅団の後継となる組織ね。三単位師団で3個の歩兵連隊全てを指揮下に置いている」

荻原「どうして旅団や歩兵团が置かれたんですか？」

深海「四単位師団だと歩兵連隊だけで4つあるからね。指揮する部隊が多いと指揮官の負担が大きくなる。だから師団と連隊の間に入る中間司令部として旅団があったのだろう」

神楽「それに歩兵旅団は師団の一部を分離して独立部隊として派遣する時の司令部として便利だった。歩兵旅団に砲兵隊や工兵隊を配属すれば小型師団のできあがり」

深海「こうして編制された混成旅団は師団を派遣するほどでもない小規模な事変に対処する兵力として重用された」

荻原「なるほど。でも、三単位化したなら指揮する部隊が減るんだから歩兵团はいらないんじゃない？」

神楽「確かにね。太平洋戦争後半に編制された師団には歩兵团が無い師団が多いし。四単位から三単位に移行する過渡期の編制と見るべきかな」

深海「それに独立部隊の司令部としての価値はまだあった。いわゆる“支隊”の司令部としてね」

神楽「例えばグアム攻略作戦やポートモレスビー攻略作戦の実行部隊である南海支隊は第55歩兵团司令部と歩兵第144連隊を基幹に編制された」

深海「支隊については次回以降に詳しく」

荻原「師団砲兵は36門ですか」

神楽「野砲兵連隊の場合、内約は1個大隊に75ミリ野砲中隊2個、

105ミリ榴弾砲中隊1個がだいたい標準的な編制だったようだね。
山砲兵連隊なら75ミリ山砲36門」

深海「105ミリ榴弾砲と150ミリ榴弾砲の混成編制を目指していたのは前述したとおり。どうやら105ミリ榴弾砲大隊3つと150ミリ榴弾砲大隊1つで砲兵連隊を編制したかったみたいだね」
荻原「なるほど」

神楽「ただ、あくまで一例に過ぎないということを忘れないように。部隊によって編制は異なる」

深海「例えばノモンハン事件の時の第23師団は105ミリ榴弾砲の代わりに三八式一二センチ榴弾砲を装備していたし、沖繩戦時の第24師団は四年式一五センチ榴弾砲12門、九一式105ミリ榴弾砲×16、九五式野砲×8と砲兵力が強化されていた」
神楽「では、歩兵連隊以下も見てみましょう」

連隊本部

- ―歩兵大隊×3
- ―歩兵中隊×3
- ―「歩兵小隊×3
- ―「小銃分隊（小銃×11、軽機関銃×1）
- ―「擲弾筒分隊（小銃×9、擲弾筒×3）
- ―「機関銃中隊（重機関銃×12）
- ―「歩兵砲小隊（大隊砲×2）
- ―歩兵砲中隊（連隊砲×4）
- ―速射砲中隊（速射砲×4）
- ―通信中隊

深海「ご覧のように各級部隊に各種の支援火器が配備されているのが分かるね。それは前にも書いたとおり」

神楽「分隊には十一年式、九六式、九九式といった軽機関銃が。小隊には50ミリ小型迫撃砲である八九式重擲弾筒が配備される」

深海「大隊には三年式もしくは九二式重機関銃を装備する機関銃中隊と“大隊砲”こと九二式歩兵砲を装備する歩兵砲小隊が置かれる。機関銃中隊は歩兵中隊ごとに分割して使用していたようだね」

神楽「そして連隊には対戦車砲である速射砲を装備する速射砲中隊と“連隊砲”こと四一年式山砲を装備する歩兵砲中隊があった」

深海「四一年式山砲は元々師団砲兵向けの大砲だからね。その威力は歩兵達には有難かったに違いない。対戦車榴弾を使って対戦車戦でもなかなか活躍したようだ」

神楽「速射砲の方は大抵は九四式37ミリ速射砲ね。一式47ミリ速射砲は独立部隊に主に配備されたみたい」

深海「というわけで標準的な帝国陸軍三単位歩兵師団の砲火力は…」

改造三八式75ミリ野砲×24

九一式105ミリ榴弾砲×12

四一年式75ミリ山砲（連隊砲）×12

九二式70ミリ歩兵砲（大隊砲）×18

九四式37ミリ速射砲×12

深海「こんなもんだね」

神楽「次回は諸兵科連合部隊編です」

神楽先生と編制を学ぼう 師団編（後書き）

登場兵器紹介航空機編を改訂しました。

登場兵器紹介 艦艇編5

神楽「ここでコーヒーブレイク」

深海「今度は兵器紹介か…」

神楽「本編未登場の駆逐艦、海防艦を紹介します」

松型駆逐艦

基準排水量…2300t

兵装

連装3インチ高角砲 Mk33×2

40ミリ機関砲×1（後に撤去）

ボフォース対潜ロケット×1

8連装アスロクランチャー Mk16×1

二〇式空中水雷発射筒×4

3連装短魚雷発射管×2

20ミリCIWSファランクス×1（40ミリ機関砲と換装）

昭和40年代に連合艦隊水雷部隊の主力艦として建造された対潜駆逐艦である。

第一次国防力整備計画では対潜ヘリコプターを搭載して索敵、指揮を行う大型駆逐艦1隻と攻撃を行うアスロク搭載の中型駆逐艦2隻で1つの対潜チームを編制することが計画され、本艦はアスロク搭載艦に該当する。

海軍で初めてアスロク対潜ミサイルを装備した艦であり、攻撃可能な範囲は従来艦に比べると大きく広がった。また＜萱＞以降の艦には変温層より下に隠れる潜水艦を探知できるVDS^{可変深度ソナー}を装備しており、索敵能力も向上している。

ヘリコプター搭載艦である夕雲型8隻とチームを組むために16隻の建造が計画されたが、オイルショックの影響により2隻削減され、不足分は旧式艦の近代化回収で補うことになった。

後に連合艦隊水雷部隊はアスロックとヘリコプターの双方を搭載する汎用駆逐艦を主力とする方針が決まり、昭和50年代後半から60年代にかけて後継艦が建造されると、松型は鎮守府艦隊に移籍して沿岸防衛部隊に配備されることになった。

与那国型海防艦の就役により退役しつつあるが、2000年1月時点でも9艦が海軍に配備されている。そのうち最終2艦は1980年代末に練習艦へと類別を変更した。

松	まつ	／	1965	／	1993年退役
竹	たけ	／	1966	／	1993年退役
梅	うめ	／	1966	／	1995年退役
桜	さくら	／	1967	／	1997年退役
杉	すぎ	／	1967	／	1999年退役
樅	もみ	／	1968	／	横須賀防備戦隊、2000年退
役予定	にれ	／	1968	／	横須賀防備戦隊、2000年退
楡	にれ	／	1968	／	横須賀防備戦隊、2000年退
檉	かし	／	1969	／	横須賀防備戦隊
萱	かや	／	1970	／	舞鶴防備戦隊
檣	なら	／	1971	／	舞鶴防備戦隊
檣	ひのき	／	1973	／	舞鶴防備戦隊
檣	けやき	／	1975	／	舞鶴防備戦隊
楠	くすのき	／	1976	／	練習艦に類別変更
楡	にれ	／	1979	／	練習艦に類別変更

深海「スペック的には海上自衛隊の＜やまぐも＞型あたりに近いのかな？対艦ミサイルを載せているけど」

神楽「後述の山雲型とハイロー・ミックスで運用される予定だったが、結局は汎用駆逐艦に主力艦の座を奪われて、鎮守府艦隊落ち」
萩原「でも山雲型より長生きですね」

神楽「鎮守府艦隊よりも主力艦隊の方が重視されがちだからね」

山雲型駆逐艦

排水量（基準／満載）…3000t／4500t

兵装

八九式12.7センチ単装高角砲×1

40ミリ単装機関砲×2（後に撤去）

ボフォース対潜ロケット（後に撤去）

3連装短魚雷発射管×2

二〇式空中水雷発射筒×4（後に撤去）

対潜ヘリコプター×1

8連装シースパロー対空ミサイル発射機（近代化改修時に装備）

20ミリCIWSファランクス×2（近代化改修時に装備）

ハーブーン四連装発射筒×2（近代化改修時に装備）

1960年代、海軍は日米同盟締結と兵部省設置にともなう陸海空軍の統合計画たる第一次国防力整備計画により従来までの対米戦重視から対ソへ転換した。そして主要目標をアメリカ水上艦隊から質量ともに増強をしつづけるソ連潜水艦隊としたのである。

海軍は連合艦隊の対潜海軍化を図り、強力な対潜掃討グループの編制を考案した。それは支那内戦後の予算増を抑制された中で数量を揃えるためにハイローミックスによる作戦グループであった。ハイにあたるのはヘリコプターと高性能ソナーを装備した大型駆逐艦で作戦グループの目であり対潜作戦の司令塔となる。ローはアスロック対潜ミサイルを装備した中型駆逐艦で攻撃を担当する。山雲型

はそのハイに相当する艦として建造された。

特徴は駆逐艦クラスとして始めてヘリコプターを搭載したことがある。カナダ海軍のサン・ローラン級駆逐艦を見本にしており、同国のベアトラップ着艦拘束装置も導入された。艦後部にT1S^{SH-3}-Qシーキングを1収納できる格納庫と飛行甲板を装備し、海軍の艦載ヘリコプター運用の先鞭をつけた。

艦首大型ソナーの他、艦尾にVDS^{可変深度ソナー}を装備しており、変温層より下に隠れている敵潜水艦も探知できる。

1980年代には近代化改修が実施されてボフォース対潜ロケットと40ミリ機関砲、二〇式空雷発射筒を撤去し、代わりに個艦防空用シースパロー短SAM、20ミリCIWSフアランクス、ハーブーン対艦ミサイルを装備した。またVDSはTACTAS^{戦術曳航ソナー}に換装している。

夕霧型駆逐艦とともに艦隊の主力を担っていたが、後継の五月雨型駆逐艦と交代して退役が進んでいる。

山雲	／1970	／1998年退役、タイ海軍に輸出
巻雲	／1971	／1998年退役、タイ海軍に輸出
秋雲	／1972	／1999年退役
峯雲	／1973	／1999年退役
夕雲	／1974	／1995年、練習艦に類別変更
東雲	／1975	／第三駆逐隊
群雲	／1976	／第一駆逐隊
雨雲	／1977	／第三駆逐隊

神楽「で、こちらがハイローのハイ」

深海「立ち位置的には海自のDDHなんだろうけど、船体そのものは汎用護衛艦からアスロックを下ろしたみたいな感じだね」

神楽「まあ帝國海軍は空母持つてるから、駆逐艦に3機とか無茶なことはしなくてもいいんだね」

深海「羨ましいかぎりだ」

黒潮型ミサイル駆逐艦

基準排水量…3100t

兵装

九八式10センチ連装高角砲×2

二六式連装SAM発射機×1（雛菊×30 or 石楠花×30）

八連装アスロクランチャー×1

四〇耗機関砲×2

三連装短魚雷発射筒×2

黒潮は日本海軍が初めて保有した本格的ミサイル駆逐艦である。

既に秋月級駆逐艦や防空巡洋艦の一部が＜奮龍＞改型対空ミサイルを装備していたが、限定的な能力しか有していなかった。そこで1960年代に米国のチャールズ・F・アダムス級を模範とした本格的防空ミサイル艦の開発が始まった。かくして日本初の本格的艦載防空ミサイルである二六式＜雛菊＞が装備した黒潮は、1966年に進水、1967年に就役した。

二六式艦対空誘導弾は＜奮龍＞と同様にビームライディング方式を採用している。これは電子ビームを目標へと照射し、ミサイルのセンサーがビームを感知してミサイルをそれに沿って飛行させるというものである。構造は簡単であるが、遠距離の目標に対する命中率が低いという欠点があった。

その後、レーダー波を目標に照射して反射を捉えて追尾するセミ・アクティブセンサー方式を採用した高性能な防空ミサイル＜石楠花＞が登場した。その為に＜石楠花＞システムと搭載する新型艦を開発することになったが、統合戦闘システムやオールドガスタービンなど様々な新機軸を採用したこともあり開発が遅れ、中継ぎとして＜石楠花＞を装備した改黒潮型が追加建造され、また＜雛菊＞搭載

艦も順次、石楠花に換装された。

黒潮	／1967	／1989退役、韓国海軍
へ売却、元山		
親潮	／1968	／1989退役、韓国海軍
へ売却、南浦		
灘潮	／1969	／1997退役、2000
年3月除籍		
巻潮	／1970	／1998退役
渦潮	／1971	／1999退役
満潮	／1972	／1995年に練習艦へ類
別変更		
鳴潮	／1973	／1996年に練習艦へ類
別変更		
後期型		
雨露	／1975	／2000／3退役
朝露	／1977	／第5艦隊
白露	／1978	／第56駆逐隊
霞	／1978	／第1艦隊
霞	／1979	／第1艦隊

神楽「帝國海軍第一世代ミサイル防空駆逐艦なり」

深海「登場が遅い気がするが。自衛隊のくあまつかぜが1966年就役だっと思うが」

神楽「そりゃ米英に比べれば遅いけど、フランスのシュフラン級と同年で、ドイツよりは早い」

深海「ドイツは陸軍国だけだな」

菅島型海防艦

全長…95メートル

基準排水量…1500t

機関…ディーゼル×4

兵装

連装3インチ高角砲 Mk 33×1

40ミリ機関砲×1

8連装アスロクランチャー×1

3連装短魚雷発射筒×2

菅島型海防艦は1970年代に建造された対潜艦艇である。新型海防艦が就役したのは実に25年ぶりのことであった。

1500tの小型艦でありながらアスロク対潜ミサイルやV D ソナー Sを装備するなど充実した対潜能力を誇る。

当初は20隻程度の建造を予定していたが、石油危機に伴う経済危機により建造数を削減され、最終的には10隻が就役した。

西暦2000年現在、退役時期が迫っており、新型海防艦に代替されることになるであろう。

菅島	／1973	／佐世保防備戦隊
竹島	／1974	／佐世保防備戦隊
青島	／1974	／佐世保防備戦隊
初島	／1975	／佐世保防備戦隊
篠島	／1975	／横須賀防備戦隊
角島	／1976	／横須賀防備戦隊
沼島	／1977	／横須賀防備戦隊
向島	／1978	／横須賀防備戦隊
柱島	／1979	／呉防備戦隊
姫島	／1979	／呉防備戦隊

深海「最後は沿岸防衛用の海防艦か。モデルはくちくご型護衛艦？」

神楽「そんなところ」

荻原「今日は旧式艦ばかりですね」

深海「船が長く使うからね。下手すると40年くらい」

神楽「発展途上国だと、ちょっと前まで第二次大戦時の艦が現役だったりしたからね」

深海「台湾のギアリング級とか気合の入った改装をしていたものさ」

神楽「自衛隊も予算が減らされる方針の中で隻数維持のために寿命延長をしていく方針だからね」

深海「艦齢30年オーバーばかりになりそうだ」

荻原「大変なんですね」

登場兵器紹介 艦艇編5 (後書き)

これで劇中の帝國海軍が保有する大型水上戦闘艦はコンプリート

神楽先生と編制を学ぼう 諸兵科連合部隊編

神楽「さて、今回は師団までを紹介したね」

萩原「ええと、次は諸兵科連合部隊編となっていますが…師団のことですよね？」

深海「確かにそう説明したね。戦闘は1つの兵科だけじゃできない。幾つもの兵科が協力して行うものだ」

神楽「そして、複数の兵科から編制されるのが師団なわけだけど…師団は大きな部隊よね？」

深海「国によるけど1万から2万人くらいの兵員から編制されるのが普通かな？」

萩原「確かに。すごい人が多いですね」

神楽「人が多いと、その分だけ部隊全体の動きが鈍くなる。小規模な部隊の方が素早く動けるもの。それに事態によっては師団ほどの兵力は必要ないということもあるでしょうね」

深海「戦場によっては何万人もの部隊を展開する余地が無い場合もあるだろう。というわけで、昔から各国軍で必要に応じて師団より小規模な諸兵科連合部隊を編成することが多々あった」

1. 混成旅団、支隊、戦闘団

神楽「よく行われていたのは1つの歩兵連隊や戦車連隊に砲兵大隊や工兵隊なんかの支援部隊を配属して、臨時に諸兵科連合部隊を編成するパターン」

カンブフラグルツペ

深海「有名なのはドイツ軍の戦闘団だね。旧日本軍も歩兵旅団や歩兵団を基幹にして諸兵科連合部隊にすることをよくしていた」

神楽「混成旅団や支隊などと呼ばれていたわ」

萩原「日韓大戦でも自衛隊がやっていましたね」

深海「そうだね。自衛隊は必要に応じて普通科連隊や戦車連隊を中心に連隊戦闘団を編成することを想定している」

神楽「日本の場合、大陸に比べると平地がそれほど広くないからね。師団そのままより戦闘団の方が使いやすいのかも」

深海「というわけで編成例として陸上自衛隊の普通科連隊を基幹とした連隊戦闘団を考えてみよう」

普通科連隊戦闘団

普通科連隊本部

└普通科中隊×3┐4

└重迫撃砲中隊

└特科大隊（配属）

└戦車中隊（配属）

└施設中隊（配属）

「そのほかの部隊

萩原「普通科連隊に様々な部隊を配属して諸兵科連合部隊にするんですね」

深海「その通り。ただ戦闘団のシステムには重大な欠点があった」

神楽「基幹となる部隊の司令部がそのまま戦闘団の司令部を兼ねてしまうことよ。陸上自衛隊の普通科連隊の指揮官は平時には4つから5つの部隊を指揮するのだけど、戦闘団を組むと指揮下の部隊が倍近くに増える」

萩原「指揮する部隊が倍になるんですか。すごい負担になりますね」

深海「あくまでも臨時に編成される部隊だからね。どうしても指揮官に想定以上の負担がかかる」

神楽「そこでアメリカ軍が第二次世界大戦中に新たな編制を考案した」

2. コンバットコマンド

神楽「1942年、アメリカ陸軍は機甲師団の組織を改編して新たな編制を採り入れたの」

深海「それがコンバットコマンドだ」

1943年型アメリカ陸軍機甲師団

師団司令部

└コンバットコマンドA

└コンバットコマンドB

└コンバットコマンドR

└戦車大隊×3

└機械化歩兵大隊×3

└師団砲兵司令部

└「砲兵大隊×3

└そのほかの部隊

神楽「コンバットコマンドというのは配下に固有の部隊を持たない司令部よ。戦場では戦車大隊や機械化歩兵大隊、砲兵大隊などを配属して戦闘団を編成する」

深海「師団砲兵が砲兵連隊ではなくて、砲兵司令部なのも配下の砲兵大隊を戦闘団に配属することを前提にしているからなのかな？ 師団砲兵の司令部と砲兵大隊の繋がりがそれほど強くない」

神楽「この編制の優れている点は2つ。まずコンバットコマンドは、あくまで臨時の応急措置に過ぎないカンパフグループと違って、諸兵科連合部隊を編成することを前提にした司令部だから、組織が充実していて指揮官の負担も小さいこと」

深海「カンパフグループと違って他の部隊の指揮官を兼ねているわけでもないしね」

萩原「もう1つの利点は？」

神楽「もう1つは戦況の変化に柔軟に対応できること。カンフグ
ルッペは基幹となる部隊に支援部隊を配属する方式だから、歩兵連
隊を基幹にしたなら歩兵中心の戦闘団しか編成できないし、戦車連
隊なら戦車中心の部隊しか編成できない」

深海「それに比べるとコンバットコマンドは司令部の下に自由に部
隊を配属できるからね。上の編制例なら戦車大隊1個と機械化歩兵
大隊1個ずつを配備する均質な編成の戦闘団を3つ用意できるし、
もしくは強力な敵を突破する為に1つの戦闘団に戦車部隊を集中す
ることもできる」

神楽「状況に応じて編成を自由に組み替えられるから、刻々と変化
する戦況に柔軟に対応できるの」

深海「こうした編制はアメリカ軍に高く評価されて、大戦以後もア
メリカ陸軍に採用され続けた」

3. アメリカ陸軍86年型師団

神楽「第二次世界大戦後、アメリカ陸軍は歩兵師団の編制としてペ
ントミック師団編制を採用したことは前に話したわね？」

荻原「指揮官の負担が重くて止めたんですよ」

深海「そうだね。それからペントミックに代わってROAD師団が
採用された。ROAD師団では歩兵師団は師団司令部の下に3個の
歩兵旅団司令部があつて、そこに8個歩兵大隊、1個機械化歩兵大
隊、1個戦車大隊を組み合わせて配属して戦闘部隊を編成すること
になっていた」

神楽「つまり第二次世界大戦時の機甲師団のコンバットコマンドシ
ステムが一般の歩兵師団にも採用されたってわけ」

深海「そして1980年代、新たなドクトリンに対応するために新
しい師団編制が採用された」

荻原「新たなドクトリン？」

神楽「エア・ランド・バトルね。ソ連軍の強大な機甲部隊に対抗するために編み出された新戦術。そして、それに対応するための新型師団が86年型師団」

深海「世紀末の帝國にこれから出てくるアメリカ陸軍の師団は主にこんな編制になっているから紹介しよう」

86年型師団

師団司令部

└旅団司令部×3

└戦車大隊×6(5)

└機械化歩兵大隊×4(5)

└師団砲兵司令部

└一砲兵大隊×3

└「MLRS大隊

└航空旅団

└一騎兵大隊

└一航空大隊

└「攻撃ヘリ大隊

└師団支援コマンド

「その他の部隊

神楽「特徴はまあコンバットコマンドやROADと同じで、師団司令部の下に3つの旅団司令部があって、そこに数個ずつ戦車大隊や機械化歩兵大隊、砲兵大隊、その他の支援部隊を組み合わせ配属して戦闘部隊を編成する」

深海「ちなみに機甲師団は6個戦車大隊と4個機械化歩兵大隊、機械化歩兵師団なら5個戦車大隊と5個機械化歩兵大隊から編制されている」

荻原「どちらもあまり変わりませんね」

神楽「そうね。だからアメリカ陸軍の場合は部隊の名前が歩兵師団

だからって舐めちゃいけないよ」

深海「西側欧米陸軍には大抵当てはまるよね。イギリス軍も西ドイツ軍も機械化歩兵師団と言いつつ…」

神楽「ソ連軍もそうだよな」

深海「それに比べて自衛隊は…」

神楽「ええと…もう1つ、際立った特徴は航空旅団の存在が挙げられるわね」

荻原「ええと、航空旅団ですけど、編制図を見ると場違いな部隊の名前が…」

深海「騎兵大隊のことかい？」

荻原「はい。現在のアメリカ軍では偵察部隊のことを指すんですけど？」

神楽「ええ。航空旅団の騎兵大隊は師団の偵察隊よ。戦車、装甲車から編制される機甲騎兵中隊と偵察ヘリコプターを装備する空中騎兵中隊から成っていて、師団の目として敵を搜索するわけ」

深海「師団の偵察部隊と機動力の高いヘリコプター部隊を組み合わせた航空旅団は、師団の主力に先駆けて戦場に進出し、敵と接触して主力が到着するまで阻止するという任務を帯びているのだろうね」

4. 陸軍重機械化師団

神楽「そして、コンバットコマンドのシステムは“世紀末の帝国”劇中の日本陸軍にも採り入れられている」

深海「劇中にもそれをうかがわせる描写があるね」

神楽「大戦中の日本軍の支隊は歩兵団や歩兵旅団の司令部の下に歩兵連隊みたいな基幹部隊と支援部隊を配属する形をよく使っていたから、専用の司令部に部隊を配属するコンバットコマンド方式にも馴染みやすかったのかもね」

深海「確かに」

神楽「そして、これが陸軍戦車師団並びに機械化歩兵師団の編制図」

師団司令部

└旅団司令部×3

└「旅団搜索中隊（中隊本部＋装甲車小隊＋歩兵小隊）」

└機械化歩兵大隊×4（6）

└戦車大隊×6（4）

└砲兵連隊

└└砲兵大隊×4

└「ロケット砲大隊

└搜索連隊

└工兵連隊

└「工兵中隊×3

└輜重兵連隊

└師団防空隊

└└近接支援中隊（自走対空機関砲×12）×3

└「全般支援中隊（自走短距離対空誘導弾発射機×12）」

└師団飛行隊

└師団兵器勤務隊

└師団通信隊

└師団衛生隊

└師団化学防護隊

└野戦病院

深海「アメリカ陸軍と同じように3つの旅団司令部に戦車連隊や機械化歩兵大隊、支援部隊を組み合わせて戦闘部隊を編成するんだね」
神楽「ええ。ちなみに戦車師団は6個戦車連隊と4個機械化歩兵大隊、機械化歩兵師団は4個戦車連隊と6個機械化歩兵大隊から編制される」

荻原「なるほど」

3. ソ連軍戦車連隊、自動車化狙撃連隊

神楽「さて。アメリカ陸軍のコンバットコマンドについてはだいた
い分かったと思う。それに対してソ連軍は諸兵科連合部隊についてま
ったく逆方向のアプローチを行っていた」

深海「ドイツのカンプフルツペにしても、アメリカのコンバット
コマンドにしても、平時には兵科ごとに分かれた“編制”になっ
て、戦時に諸兵科連合部隊を“編成”するという点は変わらない。
そこでソ連軍は考えた」

神楽「最初から“編制”にしとけばいいんじゃない？って」

ソ連陸軍自動車化狙撃連隊

連隊本部

―自動車化狙撃大隊×3

―戦車大隊

―砲兵大隊

―偵察中隊

―高射中隊

―工兵中隊

―その他

ソ連陸軍戦車連隊

連隊本部

―戦車大隊×3

―自動車化狙撃中隊

―偵察中隊

―高射中隊

―工兵中隊

「その他

萩原「ええと、つまり、戦時に様々な部隊が集まって戦闘団をつくるんじゃないくて、平時から戦闘団になっているということですか？」
深海「その通り。3個戦車連隊と1個自動車化狙撃連隊で戦車師団、3個自動車化狙撃連隊と1個戦車連隊で自動車化狙撃師団が編制される」

神楽「こうした場合の利点がいくつかある。まず普段から同じ面々と組んでいるわけだから、それだけ連携が取りやすい。コンバットコマンドだと、その時の組み合わせ次第で組む相手が異なることもありえるからね」

深海「西側に比べると錬度が低いとされるソ連軍が戦力を維持するには有利だ」

神楽「もう1つは素早く作戦を実行できること。コンバットコマンドは作戦や状況に応じて部隊を組み替えて柔軟に対応できるのが利点だけど、逆に言えば部隊を組みかえて戦場に投入するまで幾らか時間がかかる」

深海「それに対してソ連軍の連隊は編制は固定で、最初から戦場に投入できる状態だからね。素早く戦場に投入できる」

神楽「勿論、それ故に柔軟性が低くなるのが欠点だ。前方に強力な敵部隊が居るからと言って、自動車化狙撃連隊に戦車大隊を配属して素早く戦車連隊に組み替えるなんてマネは難しい。固定化した編制が基本だからね」

4. 旅団戦闘団

萩原「アメリカとソ連で、考え方が真逆なんですな」

深海「強大なソ連地上軍の攻撃を食い止めるべく臨機応変な機動防御を目指すアメリカ軍と、速攻によりNATO軍撃破を目指すソ連

軍。そういう違いかな」

神楽「そして冷戦が終わり、新しい時代が到来するとアメリカ軍もソ連軍と同じ速攻を思考するようになります」

重旅団戦闘団

旅団司令部

└諸兵科連合大隊×2

└戦車中隊×2

└「機械化歩兵中隊×2

└砲兵大隊

└偵察騎兵大隊

「旅団支援大隊

ストライカー旅団戦闘団

旅団司令部

└ストライカー大隊×3

└砲兵大隊

└騎兵大隊

「旅団支援大隊

歩兵旅団戦闘団

└歩兵大隊×2

└砲兵大隊

└騎兵大隊

「旅団支援大隊

神楽「21世紀はじめに行われた米軍再編による再編によって、陸軍の作戦の基本単位は師団から旅団に変わった」

深海「これまで師団に従属する存在だった旅団だけど、配下の部隊を固定化して、さらに独自の後方支援組織を持つことで師団の支援

なしに単独で作戦行動が行えるようになった」

荻原「配下の部隊を固定化してことは、編成が編制になったってことですか？」

神楽「その通りね」

荻原「でも、どうしてこういう編制に？」

深海「前にアメリカ軍の旅団戦闘団について二単位制をとっているということを説明したと思うけど、それと同じだよ。戦場に素早く進出できることだ」

神楽「部隊の規模が小さいほうが素早く動ける。輸送に必要な船や輸送機の数も少なくて済むからね」

荻原「それに編制を固定化しておけば、戦時に改めて編成をする必要が無いから、すぐに戦場に向かうことが出来る。でも、柔軟性は下がるんですよ」

深海「それには部隊そのものを増やすことで、対応している。二単位編制について説明したときにも言ったけど、部隊の規模を小さくすれば、同じ兵力でも沢山の部隊を編制できる」

神楽「米軍再編では二単位化で師団の下の旅団数を3から4に増やしている。そして作戦の基本単位という立ち位置を師団から旅団に移している」

深海「つまり単純計算でアメリカ陸軍が戦場に投入できる作戦の基本単位が米軍再編前から4倍に増えたわけだ。まあ実際には総兵力そのものが削減されているから、そんな単純な話ではないのだけだね」

神楽「手駒が多ければ、その分だけ状況の変化に柔軟に対応できる」

荻原「つまり前線部隊での柔軟性は下がっても、アメリカ陸軍全体で見れば柔軟性は高まっていて、それで補うというわけですか？」

深海「そういうこと」

荻原「その時代の状況やらなにやらで編制も随分変わるんですね」
神楽「その通り。そこが編制のおもしろさなのよ」

神楽先生と編制を学ぼう 諸兵科連合部隊編（後書き）

本文中では偉そうなことを書いている私ですが、内容は他者の受け売りが多いです。編制（固定化した戦闘団、部隊あたりの兵力を減らして部隊数を増やす）からアメリカ軍のソ連化が進んでいるという主張を聞いたときには目から鱗でした。私も編制からいろいろと読み取れる人間になりたいです。

感想欄でいただいた宿題である増強連隊と連隊戦闘団の違いですが、私の手には余ります。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0070f/>

萌えない神楽学校

2012年1月10日01時47分発行